

学位請求論文

戦前期日本の沿岸捕鯨の実態解明と文化的影響
—1890-1940年代の近代沿岸捕鯨—

2020

宇仁義和

目次

序章 本論の問題意識と構成

- 1 節 問題意識と本論の目的・・・1
- 2 節 課題の設定と記述の構成・・・2
- 3 節 用語の定義・・・3
- 4 節 調査対象・・・7

1 章 現在の捕鯨認識と課題

- 1 節 公的な「捕鯨物語」の形成と問題点・・・9
- 2 節 空白の1910-1940年代・・・14
- 3 節 東洋捕鯨と事業場長必携・・・19

図表・・・23

2 章 近代沿岸捕鯨の事業場の拡大過程とその設備

- 1 節 ノルウェー人砲手が写した日本海捕鯨・・・27
- 2 節 北と外地へ展開した捕鯨根拠地・・・36
- 3 節 捕鯨事業場の設備と特徴、住民の鯨体験・・・44

図表・・・51

3 章 日本の近代沿岸捕鯨で着業した捕鯨船と砲手

- 1 節 沿岸捕鯨船の特徴と総数・・・69
- 2 節 ノルウェー人砲手から日本人砲手へ・・・74
- 3 節 捕獲状況・・・80

図表・・・89

4 章 鯨肉食は食の近代化のなかで普及した

- 1 節 近世の料理書に現れる鯨料理と使用部位・・・101

2 節 鯨肉食は近代和風惣菜として普及した・・・109

3 節 捕鯨会社の鯨肉製品とその販売努力・・・115

図表・・・133

5 章 沿岸捕鯨が近代鯨類学を導いた

1 節 近世の鯨類知識によるナガスクジラ属の分類・・・141

2 節 東洋捕鯨が定着させた鯨類和名・・・146

3 節 アンドリュースの鯨類調査の再評価・・・151

4 節 日本における近代鯨類学の形成とアンドリュース・・・158

図表・・・165

6 章 近代沿岸捕鯨の遺産と歴史的意義

1 節 公認された捕鯨遺産・・・171

2 節 近代沿岸捕鯨の遺構と保存状態・・・173

3 節 鯨骨鳥居は西欧の鯨骨門から転化した・・・177

図表・・・185

終章 戦前の沿岸捕鯨が現在の鯨に関する常識の多くを形成した・・・191

付録

付録1 東洋捕鯨事業場長必携の内容・・・195

付録2 R.C. アンドリュースの日本と朝鮮での行動・・・203

付録3 近世鯨類学から近代鯨類学へ・・・212

図表・・・219

謝辞・・・223

引用文献・・・225

Summary・・・239

Abstract・・・245

図表一覧

図

- 図1-1 鯨を特集した農林水産省広報紙『aff [あふ]』2016年7月号・・・23
- 図1-2 『本邦の諾威式捕鯨誌』（明石編 1910）・・・23
- 図1-3 中央アジア探検の途中、モンゴルのゴビ砂漠でポーズをとるロイ・チャプマン・アンドリュース（1928年）・・・23
- 図1-4 笠原（1950）が掲載した日本の近代沿岸捕鯨の根拠地位置図・・・24
- 図1-5 東洋捕鯨事業場長必携が見つかった事業場の位置・・・25
- 図1-6 「写」のゴム印が押された蔚山事業場長必携の表紙・・・26
- 図2-1 20世紀初めに存在した朝鮮半島のロシア捕鯨の捕鯨根拠地・・・51
- 図2-2 金剛山が見える長箭湾に碇泊する漁船・・・52
- 図2-3 長箭湾と金剛山周辺の地図・・・52
- 図2-4 絵葉書「韓国長承浦ニ於ケル長崎捕鯨会社ノ全景＊東洋軒発行」・・・53
- 図2-5 東洋捕鯨蔚山事業場の場所と長崎捕鯨合資会社長生浦事業場の推定位置・・・53
- 図2-6 ロシア太平洋漁業会社が大韓帝国と交わした1899（光武3）年4月29日付け書類の陸上基地の絵地図・・・53
- 図2-7 ロシア太平洋漁業会社の長生浦事業場の位置図・・・53
- 図2-8 稼働中の三菱造船所小菅修船場・・・54
- 図2-9 現在の三菱造船所小菅修船場・・・54
- 図2-10 「実地探検捕鯨船」（江見 1907）に掲載されたH.G.メルソムの次女 Sigrid [シグリー]・・・55
- 図2-11 「釜山港突堤ヨリ市街ヲ望ム」と記された写真・・・55
- 図2-12 1910年までの記録が得られた沿岸捕鯨の根拠地・・・56
- 図2-13 太平洋戦争中（1941-1945年）に存在した沿岸捕鯨の根拠地・・・58
- 図2-14 1900-1945年に記録が得られた沿岸捕鯨の根拠地・・・60

- 図2-15 大黒山島事業場の平面図・・・63
- 図2-16 大黒山島事業場の引揚棧橋の設計図・・・63
- 図2-17 1910年の東洋捕鯨根拠地設置許可願いに添付された鮎川根拠地の平面図・・・65
- 図2-18 東洋捕鯨根拠地設置許可願い添付の鮎川事業場付近図に記された鯨肉製肥場・・・66
- 図2-19 大日本水産が提出した根拠地設置願に記された、鮎川と西隣の十八浜 [くぐなり] などの5つ捕鯨事業場の位置・・・66
- 図2-20 1937年以降に作成された日本水産株式会社捕鯨部斜古丹事業場平面図・・・67
- 図3-1 レックス丸の船体図・・・90
- 図3-2 主要な事業場に在籍した砲手の実人数に対するノルウェー人砲手の年度ごとの割合・・・93
- 図3-3 スコントルプ砲手の離日を伝える新聞・・・96
- 図3-4 事業場の記録開始から1945年度までの累積捕獲頭数が概ね千頭以上の12事業場の種別捕獲数・・・97
- 図3-5 黄海の長須鯨の捕獲数の変遷・・・98
- 図3-6 三陸の長須鯨の捕獲数の変遷・・・98
- 図3-7 東洋捕鯨鮎川事業場の種別捕獲数の年次変化・・・99
- 図4-1 東洋漁業の鯨肉広告（河北新報 1906.5.31）・・・137
- 図4-2 東洋漁業の鯨肉を販売する塩釜の海産物問屋の広告（河北新報 1906.9.18）・・・137
- 図4-3 東洋漁業株式会社が1907（明治40）年3-7月に開催された東京勸業博覧会に特設出品飲食館を出店したときのパンフレット「鯨肉料理法」・・・138
- 図4-4 東洋捕鯨の鯨肉廉売広告（東京朝日新聞1919.7.30）・・・139
- 図4-5 1922（大正11）年頃に東洋捕鯨が発行した小冊子「鯨とは」・・・139
- 図4-6 東洋捕鯨の期別の捕獲頭数、販売頭数と1頭平均価格、鯨肉および副製品の売上金額・・・140
- 図5-1 東洋捕鯨が発行した小冊子「鯨とは」の鯨種解説・・・165

- 図5-2 アンドリュース (1911a) によって *Phocoenoides truei* と新種記載されたリクゼンイルカのタイプ標本 (アメリカ自然史博物館蔵) . . . 169
- 図5-3 現在もスミソニアン機構国立自然史博物館で常設展示されているに蔚山で採集されたコククジラの全身骨格標本 USNM 199527 . . . 169
- 図5-4 かつてのアメリカ自然史博物館海洋展示室 . . . 170
- 図6-1 北海道東部の浜中町に残る日東捕鯨霧多布事業場の斜路 . . . 185
- 図6-2 宮城県石巻市の東洋捕鯨鮎川事業場の跡地 . . . 185
- 図6-3 東洋捕鯨 [紀伊] 大島事業場の跡地に建つ1940 (昭和15) 年に建立された皇紀2600年記念の鯨供養碑 . . . 186
- 図6-4 東洋捕鯨 [土佐] 清水事業場の跡地 . . . 186
- 図6-5 戦後、ソ連時代に撮影された斜古丹捕鯨事業場 . . . 186
- 図6-6 戦後、ソ連時代に撮影された新知島とされる捕鯨事業場 . . . 187
- 図6-7 サハリン州旧札塔事業場付近の現状 . . . 187
- 図6-8 大韓民国蔚山広域市に位置した日本時代の捕鯨事業場の場所 . . . 187
- 図6-9 鯨公園として整備されている東洋捕鯨大黒山島事業場跡 (大韓民国黒山島) . . . 188
- 図6-10 濟州島西帰浦に現存する東洋捕鯨の電気丸 [いなづままる] の「遭難追悼之碑」 . . . 188
- 図6-11 台湾南端の南湾に残る引揚げ栈橋の跡 . . . 188
- 図6-12 捕鯨母船第三日新丸で解剖作業員が用いた鯨体の部分名称を記した図 . . . 189
- 図6-13 色丹島に存在した斜古丹神社の鯨骨鳥居 . . . 189
- 図6-14 台湾の鵝鑾鼻神社に存在した鯨骨鳥居 . . . 189
- 図6-15 樺太は札塔の恵比寿神社にあった鯨骨鳥居 . . . 189
- 図6-16 和歌山県太地の恵比寿神社の鯨骨鳥居 . . . 190
- 図6-17 長崎県有川の海童神社の鯨骨鳥居 . . . 190
- 図6-20 1900-1910年代の鯨骨門や1920-1930年代の神社に見られる鯨骨鳥居 . . . 190

図6-21	1970-1980年代に建てられた鯨骨鳥居・・・	190
図付-1	アンドリュースの手紙や報告書、調査日誌や写真などから復元した1909-1910年の日本周 辺での行程・・・	219
図付-2	アメリカ自然史博物館に常設展示されている「キヌ」の写真・・・	222
図付-3	アンドリュースの朝鮮半島探検の行程・・・	222
表		
表1-1	東洋捕鯨事業場長必携が見つかった事業場一覧・・・	25
表1-2	事業場長必携の項目（一部字句を省略）・・・	26
表2-1	1910年までの記録が得られた沿岸捕鯨の根拠地一覧・・・	56
表2-2	太平洋戦争中（1941-1945年）に存在した沿岸捕鯨の根拠地一覧・・・	57
表2-3	1900-1945年に記録が得られた近代沿岸捕鯨の根拠地・・・	59
表2-4	営業報告による1910-1933年における東洋捕鯨根拠地の分布変化・・・	61
表2-5	大黒山島事業場設備一覧・・・	63
表2-6	1910年の鮎川事業場設備一覧・・・	64
表3-1	1945年までに就業した沿岸捕鯨船・・・	89
表3-2	東洋捕鯨鮎川事業場に1914-1931年度に在籍した捕鯨船・・・	91
表3-3	東洋捕鯨鮎川事業場に1918年度に在籍した捕鯨船の日数と期間・・・	91
表3-4	文書や文献から得られたノルウェー人砲手の名前と出現年・・・	92
表3-5	東洋捕鯨蔚山事業場の1914-1931年の砲手とノルウェー人の割合・・・	94
表3-6	東洋捕鯨鮎川事業場の1914-1931年のノルウェー人砲手の割合・・・	94
表3-7	捕鯨船レックス丸の1921-1932年度の着業地・・・	95
表3-8	事業場の記録開始から1945年度までの累積捕獲頭数が概ね千頭以上12事業場の種別捕獲 数・・・	97
表3-9	伊豆川（1943）から作成した大東捕鯨の年別事業場別捕獲数・・・	99

表3-10	大東捕鯨の推定捕獲数を加えた1907-1916年の日本全体でのシロナガスクジラの推定捕獲数・・・100
表4-1	近世の料理書に現れた鯨料理と素材の部位・・・133
表4-2	明治大正期の料理書に現れた鯨料理と素材の部位・・・134
表4-3	東洋捕鯨第1期鯨肉類販売月別表（1909.5.7-1910.4.30）・・・135
表4-4	東洋捕鯨の期別の捕獲頭数と1頭平均価格、鯨肉および副製品の売上・・・140
表5-1	東洋捕鯨および前身会社が営業報告で用いた鯨類呼称・・・165
表5-2	アンドリュースが紀伊大島と鮎川で調査した鯨類の個体一覧・・・166
表5-3	アンドリュースが朝鮮の蔚山で調査した鯨類の個体一覧・・・167
表5-4	アンドリュースが1910-1912年に日本と朝鮮で収集した鯨類標本とその現状・・・168
表6-1	捕鯨に関する指定文化財等・・・185
表付-1	「ドラゴンハンター」（ガレンキャンプ 2006）の記述の誤りと訂正結果・・・219
	写真
写真2-1	捕鯨船ギョルギー・・・51
写真2-2	捕鯨船ギョルギーと乗組員・・・51
写真2-3	おそらく捕鯨船ニコライと乗組員・・・52
写真2-4	解剖船・・・52
写真2-5	解剖船・・・52
写真2-6	金剛山と長箭湾・・・52
写真2-7	長崎捕鯨合資会社の長生浦捕鯨事業場・・・53
写真2-8	ノルウェーの国旗を掲げる捕鯨船メイン号・・・54
写真2-9	三菱合資会社三菱造船所小菅修船場で塗装工事中とおもわれるメイン号・・・54
写真2-10	第二東郷丸と思われる捕鯨船・・・54
写真2-11	メルソム砲手の次女 Sigrid [シグリ]・・・55
写真2-12	多数の日の丸が翻る釜山港・・・55

- 写真2-13 1910年の〔紀伊〕大島事業場や1912年の蔚山事業場ではボックス式解剖だった・・・62
- 写真2-14 鮎川事業場では1910年にボックス式と斜路式が併用されていた・・・62
- 写真2-15 串本の紀伊水産の事業場では1910年で斜路式が用いられていた・・・62
- 写真2-16 東洋捕鯨鮎川事業場の鯨骨門・・・65
- 写真2-17 背後の丘から見た東洋捕鯨鮎川事業場・・・65
- 写真2-18 捕鯨事業場に隣接した地元経営の鯨肉製肥場・・・66
- 写真2-19 海から見た東洋捕鯨斜古丹事業場・・・67
- 写真2-20 背後から見た東洋捕鯨斜古丹事業場・・・67
- 写真2-21 日本捕鯨斜古丹事業場・・・68
- 写真2-22 東洋捕鯨単冠事業場・・・68
- 写真2-23 鯨の解剖の見物に多くの人たちが訪れた東洋捕鯨鮎川捕鯨事業場・・・68
- 写真3-1 鮎川事業場の捕鯨船アイランド丸・・・90
- 写真3-2 鮎川事業場のノルウェー人砲手と家族・・・96
- 写真6-1 アンドリュース撮影の〔紀伊〕大島事業場の骨置場・・・186
- 写真6-2 アンドリュース撮影の〔土佐〕清水事業場・・・186
- 写真付-1 瀬戸内海を西進し備讃海峡で撮影された鍋島灯台・・・220
- 写真付-2 関門海峡で安芸丸に横付けされた石炭運搬船・・・220
- 写真付-3 台湾最南端の南湾で竹製のいかだに乗って査察に来た日本の役人・・・220
- 写真付-4 背後の山から撮影された東洋捕鯨土佐清水事業場・・・220
- 写真付-5 来島海峡で撮影された中渡島潮流信号所と灯台・・・221
- 写真付-6 おそらく串本で撮影された東洋捕鯨大島事業場長を務めた池田英太郎と妻・・・221
- 写真付-7 紀伊大島の水谷漁港・・・221
- 写真付-8 「東洋捕鯨株式会社御定宿」の札が掲げられた塩釜ホテル・・・222

序章 書き下ろし

1 章 本論の問題意識と構成

1-2 節 書き下ろし

3 節 宇仁義和. 2016a. 社内文書に見る東洋捕鯨の事業場. 下関鯨類研究室報告, 4: 12-35.

2 章 近代沿岸捕鯨の事業場の拡大過程とその設備

1 節 宇仁義和. 2017. ノルウェーに保存されていた20世紀初頭の朝鮮半島沿岸の捕鯨の写真. 日本セトロロジー研究, 27: 9-16.

2-3 節 宇仁義和. 2018. 戦前 1899-1945 年の近代沿岸捕鯨の事業場と捕鯨船. 下関鯨類研究室報告, 6: 36-49.

宇仁義和. 2017. 千島の近代捕鯨—択捉島と色丹島を中心に. 根室市歴史と自然の資料館紀要, 29: 31-44.

宇仁義和・加藤幸治編. 2017. ロイ・チャップ「マン・アンドリュースの鯨類調査—鮎川1910年. 東北学院大学論集歴史と文化, 55: 43-179.

3 章 日本の近代沿岸捕鯨で着業した捕鯨船と砲手

1-2 節 宇仁義和. 2018.、宇仁義和. 2016a.

3 節 2016.6.26 黄海のナガスクジラ: 回遊と個体群状態の推定. 日本セトロロジー研究会第27回大会. 寺泊. 口頭発表.

4 章 鯨肉食は近代沿岸捕鯨によって大正期に普及した

1-3 節 宇仁義和. 2018. 近世近代の鯨肉料理の使用部位と近代日本における鯨肉食の普及過程. 日本セトロロジー研究, 28: 1-25.

5 章 沿岸捕鯨が近代鯨類学を導いた

1-2、4 節 宇仁義和. 2016b. 日本の近代鯨類学草創期における東洋捕鯨とアンドリュースの影響. 日本セトロロジー研究, 26: 17-25.

宇仁義和. 2012. アイヌの鯨類認識と捕獲鯨種. 北海道民族学, 8: 16-26.

3 節 宇仁義和・ロバート=ブラウネル・櫻井敬人. 2014. ロイ・チャップマン・アンドリュースの日本と朝鮮での鯨類調査と1909-1910年の日本周辺での行程. 日本セトロロジー研究, 24: 33-61.

6 章 近代沿岸捕鯨の遺産と歴史的意義

1-2 節 2016.10.2 捕鯨の記憶の現代化. 日本民俗学会第68回年会. 千葉. 口頭発表.

3 節 宇仁義和. 2019. 「鯨骨鳥居」は西欧の鯨骨門から転化した. 日本セトロロジー研究, 29: 15-20.

終章 書き下ろし

付録1 宇仁義和. 2016a

付録2 宇仁義和・ロバート=ブラウネル・櫻井敬人. 2014.

付録3 宇仁義和. 2016b

論文の要旨

現在の日本では捕鯨はナショナリズムを刺激する特別な存在となっている。そして捕鯨に関する言説は、反捕鯨と反・反捕鯨の意見表明や政治的言説ばかりが目立つ一方、明治から終戦に至る日本の近代沿岸捕鯨の研究は少ない。航海日誌や契約書類を資料とする18-19世紀のアメリカ捕鯨、鯨組の私文書を使用した近世西海の網捕り捕鯨、初めから農林省の監督官が乗り合わせていた南極海捕鯨に比べ、戦前の沿岸捕鯨の研究は一次資料に恵まれず実証的な研究が困難な状態が続いていた。現在のところ、戦前の沿岸捕鯨については国内の捕鯨船の許可数の8割を独占した東洋捕鯨株式会社の設立記念誌『本邦の諾威式捕鯨誌』（明石編 1910）に全面的に依拠した状態であり、同書の記述の検討や1910年以降の沿岸捕鯨の展開は不明となっている。このような状況のなか、本論では既知の文書や報告を精査することに加え、新たに研究利用が可能となった社内文書や海外所蔵写真を用い、これまで不問のまま放置されてきた1890-1940年代の日本の沿岸捕鯨業の展開過程とその文化的な影響を明らかにすることを目指した。

1章では、本論の問題意識を詳しく述べた。農林水産省の広報誌に掲載された捕鯨特集を捕鯨に対する政府の公式見解と捉え、その内容は網捕り捕鯨操業地の経験を基盤にしており、戦後の飢餓を経験した世代など特定の地域や世代の経験の比重が高く、都合のよい事実を寄せ集めた一種の物語になっていると指摘した。次いで本論の中心資料である社内文書「東洋捕鯨事業場長必携」（以下、「場長必携」）について重要性を解説した。日本の近代捕鯨の始まりは、捕鯨企業として初めての成功をみた日本遠洋漁業株式会社の創立年である1899年とするのが一般的であり、東洋捕鯨はその後継会社で1909年に当時の大手捕鯨会社が合同したものである。「場長必携」は本論が用いる便宜的な名称であるが、重要事項を27項目に分類した統一内容で作成された重要事項資料集である。海外領土を含む40事業所から得られ、年別種別の捕獲記録のほか砲手の名前や捕鯨船の名称など、従来知られていなかった操業の具体的な記述に富み、記述も1910年前後から終戦まで、事業場によっては戦後も継続して加筆された沿岸捕鯨業の操業を伝える重要な一次資料であることを示した。

2章は、極東での近代捕鯨がロシアから日本に移行した経過、そして捕鯨事業場の設置場所の拡大過程と設備を取り上げた。2016年に所蔵が明らかとなったノルウェー人砲手が1900年代初めに撮

影した沿岸捕鯨の写真は、撮影場所については朝鮮半島やその沿岸が多かったが操業はロシア企業と日本の長崎の捕鯨会社の両方が含まれており、これまで文字記録でのみ知られていたロシア捕鯨の捕鯨船や多国籍の乗組員、解剖風景などについての視覚的な証明ができた。また、雑誌記事や韓国に保存されていた文書から現在の大韓民国蔚山広域市にあったロシア企業の捕鯨事業場の位置を特定し、日露戦争後には長崎の捕鯨会社が使用していたこと、写真からは備船で参加した捕鯨船はノルウェー国旗を掲げたまま日本企業で操業していたことなど、極東での近代捕鯨がロシアから日本の企業に移行した具体的な様子を明らかにした。次に「場長必携」と公文書、1910年と1950年前後の報告から捕鯨根拠地の設置地域の年代的变化と捕鯨事業場を詳述し、日本水産が所蔵する捕鯨事業場の図面や北海道大学総合博物館水産科学館が所蔵する疋田豊治乾板写真およびアメリカ人研究者ロイ・チャップマン・アンドリュースが撮影した写真も利用して、捕鯨事業場について設備と配置を解説した。1910年までの捕鯨根拠地は網捕り捕鯨やロシア捕鯨などが操業した既知の漁場に設置されていたが、東洋捕鯨は1916年の第二次合併以降になると積極的に黄海や千島など捕鯨実績がない海域に根拠地を置くようになったこと、また同社は合併によって重複事業場を廃止し設備を移設するなど、操業の合理化を実現したことを文書から明らかにした。事業場の設備では、食用鯨肉を冷却する設備を図示するとともに、解剖のための引揚げ斜路が木製からコンクリート製へと転換した事例などから、事業場は仮設的な設備から次第に永久的な設備への転換していったことを指摘した。

3章では、砲手と捕鯨船、大型ヒゲ鯨の捕獲数を取り上げた。初期の砲手はノルウェー人が務めたことは知られていたが、人数や着業地などは不明であった。場長必携の記述やアンドリュースの調査日誌、そして既存の報告からノルウェー人砲手の名前を数えると最低でも59人にのぼったこと、着業地は朝鮮北部や千島などでの割合が高い一方、本州や北海道では少なく後年には遠隔地での労働力として用いられたこと、東洋捕鯨での就業は1932年の1名が最後であることを明らかにした。これは年代的には大恐慌の影響が捕鯨会社に及び、東洋捕鯨では操業自体が縮小した時期にあたる。沿岸捕鯨船は船舶の公式登録台帳である『日本船名録』から46隻、そこに掲載されない外国船籍の備船2隻を含めた48隻が確認でき、110-130トンクラスの初期型と200トン前後の後期型に分けられること、初期型はノルウェー製が多数を占めたこと、後期型は中部千島のマッコウクジラ漁に用いられたことを明らかにした。大型ヒゲ鯨の捕獲数ではザトウクジラが近代捕鯨開始当初から

捕獲が少ないことを新たに指摘したほか、場長必携の記録から黄海や三陸の事業場でのナガスクジラの捕獲数が激減したことも確認できた。また、事業場レベルでの主要捕獲種の交代はナガスクジラやシロナガスクジラという大型ナガスクジラ属から当時認識されていなかったニタリクジラやイワシクジラといった中型ナガスクジラ属やマッコウクジラへの移行が見られた。

4章は、近世から戦前の料理書や食関連雑誌の記事、そして新聞記事や東洋捕鯨や前身会社の営業報告を用いて東洋捕鯨や前身会社の捕獲数や利益の変遷を明らかにし、さらに同社の出版物も用いて日本における鯨肉食の普及過程について考察した。近世と近代の料理書の料理法や保存方法を精査したところ、「鯨」という食材は白肉を指すこと、「鯨肉」という表記も白肉と注記されることがあり、脂皮を含むことが明らかとなった。料理書が取り上げるのは行事食などが中心であることから、格式ある料理に用いられた鯨由来の食材は近世から明治大正期はほとんどが白皮であったこと、1910年代までは鯨の赤肉は客人に振る舞うには不向きな下品な食材としての認識が強かったことがわかった。ところが1920年代の料理書では、ステーキやシチューなどの洋食、あるいはすき焼きのような醤油と砂糖を用いた近代に生まれた和風惣菜すなわち「近代和食」として赤肉料理が一般向けに紹介されるようになっていた。一方、東洋捕鯨の前身会社は鯨赤肉の消費拡大のために東京での試食会や宮城県鮎川の事業場の近郊で販売店を設置し販路開拓に努めたが、それが新聞記事からも確認できること、1910年代後半には貨車での冷蔵輸送が実現して夏季の操業では肥料用であった赤肉が食用とされるようになったこと、東洋捕鯨の捕獲数や利益は1920年前後に最大となり、1919年には農林省の鯨肉消費拡大キャンペーンもおこなわれており、赤肉を用いた鯨肉料理が西日本や東京、捕鯨根拠地周辺では1920年代に普及したことが示唆された。1920年代から始まる鯨赤肉を洋食や近代和食として食した体験が1950年代の学校給食をとおした国民的な鯨肉食受容の下敷きとなったと結論した。

5章は、近代鯨類学の科学史を取り上げた。沿岸捕鯨が盛んであった近世では紀州や北九州で鯨図説が作成されたが、近世の鯨類呼称は同一の生物学的種でも地域によって異なる名称を用いたことや成長段階によって呼び名が異なることが知られており、いわば産物名であった。また、近世では未整理だったナガスクジラとシロナガスクジラの呼称の整理は『本邦の諾威式捕鯨誌』の頃におこなわれたことがわかっていて。そこで、日本産鯨類に学名を与える試みの発達と正しく学名与えた論文の作成過程、そして現在通用している鯨類名称の固定と普及に関する捕鯨企業の役割を考察

した。明治になっても日本の学界では大型鯨類の生物学的種の決定に近世文献の比較検討から考察する状態であった。とりわけ問題だったのは長須鯨で、長門や北九州ではナガスクジラを、土佐や紀州ではシロナガスクジラを意味していたことから両者の記述や学名は混乱した状態であった。他方、捕鯨企業では、東洋捕鯨はその直前の前身会社の東洋漁業では、1908年までにナガスクジラとシロナガスクジラの呼称を今日の用法で固定して用いていたことが判明した。これは近世の鯨組やそれ以前の近代捕鯨会社では操業海域が限定されていたため地方名を用いることでも問題が生じなかったが、東洋漁業は日本海と太平洋の両方で操業したため全国で共通して使用可能な統一呼称を必要としたためと推定した。日本産鯨類について広く生物学的種を同定した、すなわち学名を特定した論文は1915年に大中型鯨類、イルカ類は1916年に出版されたが、著者の永澤六郎は論文作成のためにアンドリュースに意見を求める手紙を書き、その返事を参考に作成されたことを明らかにした。鯨類呼称の普及については、東洋捕鯨が鯨肉料理の普及のために作成した展示会や小冊子が、結果的に役立った可能性を指摘した。また、日本の鯨類学の指導的立場にあった大村秀雄は、日本の鯨類学の開祖はヒゲ鯨ではアンドリュース、歯鯨では小川鼎三としたが、アンドリュースは日本産のマッコウクジラやツチクジラ、複数のマイルカ科とネズミイルカ科の鯨類を正しく同定して標本として博物館に収蔵しており、歯鯨もアンドリュースが開祖といえると結論した。

6章では、捕鯨の文化財としての認知状況を課題にした。捕鯨に関連した国や地方公共団体の指定文化財のほとんどは近世捕鯨の関連物件であり、近代の物件は少なく、しかも沿岸捕鯨では小型捕鯨に限られることを明らかにした。このことは近代捕鯨が文化あるいは文化財として公認されていないことを示すと指摘した。加えて、文化の由来を近世に求める事例として大型鯨類の下顎骨を一对立てたいわゆる「鯨骨鳥居」を取り上げ考察した。和歌山県太地の鯨骨鳥居は井原西鶴の小説に着想を得て1985年に新たに設置されたものであるが、インターネットの個人ブログなどでは鯨骨鳥居が実際に近世に由来するという理解が広がりを見せている。しかし、戦前に存在したのは樺太と千島や色丹島、そして台湾であって本土からは知られていないこと、ノルウェーやその沿岸捕鯨進出地でも下顎骨をアーチにした鯨骨門が存在すること、日本の領域で最初に現れるのは捕鯨事業場や博覧会での鯨骨門であることから、いわゆる鯨骨鳥居は西洋の鯨骨門が和風化されたものと結論し、近代においても新たな日本文化が形成された事例と考察した。また、日本の沿岸捕鯨の遺構は韓国やロシア、台湾などにも存在するが日本時代との関係が知られずにあること、他方、ノルウ

エー人砲手の子孫には日本で活躍した先祖の足跡を誇りとし、なかには来日してその足跡をたどるという家族史として伝えられていることを指摘した。

以上のとおり、日本の戦前期1890–1940年代の沿岸捕鯨は、日本国内に閉じた捕鯨物語とは反対に、ノルウェーやロシア、朝鮮など海外との関係を持って発達し、現在通用している鯨類呼称の固定や鯨肉食の普及など新たな習慣も生み出し、日本の文化として定着させた。反面、大型ヒゲ鯨の資源を減耗させたことは現在にまで影響が残っている。伝統文化として公的な認知を得た近世の網捕り捕鯨や戦後に脚光を浴びた南極海捕鯨に比べ、戦前期の沿岸捕鯨は地味でこれまで十分に取り上げられてこなかったが、現在の鯨に関する知識や鯨肉食などの文化はこの時期に生まれたものが大きく、東洋捕鯨を中心とする戦前の沿岸捕鯨が現在の鯨に関する常識の多くを形成したのである。

生物産業学という視点で捕鯨を見れば、それは鯨類の野生個体群の消費的利用である。鯨類の保護が支配的な国際環境のなか商業捕鯨を再開した現在、捕鯨を続けるには反対派への説明、そして賛成派には納得が不可欠となる。本論は、説明するにも納得するにも事実記載が不足していた戦前期の近代沿岸捕鯨の実態と文化的影響について一定程度明らかにしてきた。捕鯨という特殊な産業について、日本固有の伝統文化に正統性を求める視点に対し、具体的な事実発掘から近代の捕鯨について再評価する材料は提供できたといえる。それは捕鯨についての賛否を問わず、捕鯨産業の実態と現在におよぶ影響についてより深い理解をもたらすものと考えている。

序章 本論の問題意識と構成

1 節 問題意識と本論の目的

2 節 課題の設定と記述の構成

3 節 用語の定義

4 節 調査対象

1 節 問題意識と本論の目的

本論の目的は、これまで論考が少なかった戦前期の沿岸捕鯨の展開について、文書や写真に基づいて実像を描き、その文化的影響を明らかにすることである。対象とする期間は、明治中期から太平洋戦争に至る1890–1940年代の半世紀であり、地域は現在の日本国とかつての日本の統治地域に加え、ロシア企業が近代捕鯨をおこなったロシア極東地域を含む。

現在の日本では捕鯨はナショナリズムを刺激する特別な存在である。そして捕鯨に関する言説は、反捕鯨と反・反捕鯨の意見表明や政治的言説ばかりが目立つ一方、明治から敗戦に至る沿岸捕鯨の研究は少なく、航海日誌や契約書類を資料とする18–19世紀のアメリカ捕鯨、鯨組の私文書を使用した近世西海の網捕り捕鯨、初めから農林省の監督官が乗り合わせていた南極海捕鯨に比べ、一次資料に恵まれず実証的な研究が困難な状態が続いていた。戦前の沿岸捕鯨の文書や統計は少ないうえに信頼性に欠けることは、研究者に「統計不正確にして数字を挙げるも無意味なるゆえ省略す」（馬場 1942: 77）と言わせるほどであった。このような状況のなか本論では、数少ない資料を探り可能な限りの考察を加え、戦前の沿岸捕鯨の実像とその文化的な影響を資料から読み解くことを目指している。

日本における近代捕鯨の始まりは、日本遠洋漁業株式会社が設立された1899（明治32）年とするのが一般的である。明治も後期のできごとで、捕鯨に関する単行本も数多く刊行されていることから、戦前の沿岸捕鯨の歴史は自明であると考えられる向きもあるかも知れない。しかし実際には、平成年間に発行された書籍でも、戦前の沿岸捕鯨の展開については『本邦の諾威式捕鯨誌』（明石編 1910）を引用するばかりで独自の研究成果はわずかである。そして出版年から明らかなおり同書

には1910年以降のできごととは記されず、次に捕鯨の歴史として記されるのは1934（昭和9）年の南極海での母船式捕鯨の出漁である。捕鯨に関する一般的な知識は1910年から1934年までの四半世紀はほぼ空白となっている状況にある。日本捕鯨協会のウェブページ「捕鯨の歴史」でも、戦前の日本の沿岸捕鯨の記されるのは1899（明治32）年のノルウェー式捕鯨の開始と1906（明治39）年の鮎川に近代的な捕鯨基地の完成の2つに限られる（<https://www.whaling.jp/history.html> 2020.1.8 閲覧）。

近代沿岸捕鯨は日本の各地に根拠地を置き、近世捕鯨や南極海捕鯨に比べて、直接間接に関わった人や地域が多く、それぞれの場所で捕鯨の見聞や鯨食の経験を生んできた。捕獲したのは日本の近海に回遊してきた個体群であり、日本の野生動物の将来を考えるうえでも近代沿岸捕鯨は詳しく知る必要がある。近代捕鯨をめぐる外国との関わり、捕鯨根拠地の広がり、鯨類資源の変化、鯨食の変遷、科学的な理解、捕鯨の遺構などについては実像が不明な部分が多く残されている。

2 節 課題の設定と記述の構成

本論の課題は、戦前期の沿岸捕鯨に関するノルウェーを中心とした外国との関わり、捕鯨根拠地の設備と設置地点の広がり、沿岸捕鯨船の特徴とノルウェー人砲の動向、初期の捕鯨で目立った捕獲状況の状況、近世から近代初期の鯨食の変化、捕鯨企業が提供した科学調査と知識の普及、現代に残る近代沿岸捕鯨の遺構とその価値の評価、これらを社内文書や写真など同時代の資料を用いて実証的に描くことである。

記述は章ごとに次のような構成となっている。

1 章では、本論の問題意識を詳しく述べる。題材に現在の政府の公式見解ともいえる農林水産省が喧伝する捕鯨物語を取り上げ、その形成の構造を考察し問題点を指摘するとともに、既存の近代沿岸捕鯨研究の課題を抽出する。また、本論を作成するきっかけとなった社内文書「東洋捕鯨事業場長必携」について解題した。本論の問題意識を掘り下げた部分である。

2 章は、沿岸捕鯨の事業場を取り上げる。2016年に所蔵が明らかとなったノルウェー人砲手が

1900年代初めに撮影した朝鮮や日本の沿岸捕鯨や関連の写真を解説し、東アジア最初期の近代捕鯨を視覚的に読み解く。次に東洋捕鯨事業場長必携と公文書、そしてアメリカ人研究者が撮影した1910年の捕鯨関連写真を用い、捕鯨根拠地の広がりや年代的变化と捕鯨事業場の設備を見る。

3章では、捕鯨船と砲手を取り上げる。日本の近代捕鯨はノルウェーから設備と捕鯨船を購入し、砲手もノルウェー人が務めた。日本で就業したノルウェー人砲手の数、年代や地域での違いを明らかにするとともに、沿岸捕鯨船の一覧を作成して特徴を指摘した。加えて日本の近代捕鯨の初期に減少を見た大型ヒゲ鯨の捕獲状況について考察する。

4章は、近代前期における鯨肉食の普及過程について考察する。近世と近代の料理書の分析から、文献に現れる「鯨」や「鯨肉」の部位を特定するとともに、鯨肉食の普及と西洋から導入された肉食文化や近代に普及した新しい和食との関係を分析した。また「鯨肉」と「鯨肉食」との区別についても考察する。あわせて捕鯨会社の製品と販売実績、営業努力なども具体的に述べる。

5章は、近代鯨類学の科学史である。鯨類名称の産物名から生物学的種名称への変化、そして現在通用している鯨類名称の固定に関する捕鯨企業の役割を考察した。個体や標本の観察による学名の比定という近代鯨類学の形成に関する捕鯨企業とアメリカ人研究者の役割についても考察する。

6章では、国や地方公共団体の指定文化財など、いわば公認された捕鯨遺産の特徴、そして旧外地を含めた近代沿岸捕鯨の遺構の現存状況を明らかにする。そして「鯨骨鳥居」を事例に、近代に導入された習慣が和風化された様子を明らかにする。

生物産業という視点で鯨を見ると、捕鯨では食品生産に加え鯨油の製造と薬品の原料供給があり、捕鯨以外の産業としてホエールウオッチングといった観察事業、特殊な例として野生個体を利用した漁労活動など多くの関係がある。このうち本論が対象とする捕鯨は、天然資源を消費的に利用する産業であり、生産される商品としては食品が中心となる。

3節 用語の定義

最後に本論の対象や用語について定義しておく。本論では捕鯨と捕鯨業の区分については法令に従う。現在の日本の法令で捕鯨業は、「漁業法第52条第1項の指定漁業を定める政令」（昭和38年1

月22日政令第6号、平成14年1月17日政令第1号)により、大型捕鯨業、小型捕鯨業、母船式捕鯨業の3つに区分されている。このうち本論が対象とするのは沿岸で操業されていた「大型捕鯨業」であるが、母船式捕鯨と明確に区別するために本論では「大型捕鯨業」を「沿岸捕鯨」と呼ぶ。この用法は捕鯨業界でも見られ、日本捕鯨協会が戦後の大型捕鯨業の捕獲記録を「沿岸捕鯨統計」と呼んでいるように捕鯨業界では一般的な用法である。網捕り捕鯨など近世から沿岸でおこなわれていた捕鯨は捕獲方式による呼称を用いる。メディアや人文学が好んで使う「小形沿岸捕鯨」という用語は法令には存在しない。業界団体「地域捕鯨推進協会」の名称も以前は小型捕鯨協会であった。小型捕鯨業に母船式は存在しないので「小型捕鯨」の語のなかに沿岸捕鯨であることを含んでいる。なお、2019年からの商業捕鯨再開以降の母船式捕鯨を「沖合捕鯨」という用法が見られるが、本論の対象外である。

近代捕鯨は、現在の漁業法令による「捕鯨」と同義である。別名をノルウェー式捕鯨という。本論が日本の近代沿岸捕鯨をノルウェー式捕鯨と叫ばないのは、日本の捕鯨では鯨体からの製造内容はノルウェーとは異なり、網取り捕鯨と同様に鯨肉中心であったこと、解剖方法は、当初はアメリカ捕鯨をまねた解剖船を用いる水中解剖であったことによる。近代に始まる日本の捕鯨は、解剖や製造を含めて考えれば純粋なノルウェー式とはいえず、捕獲はノルウェー、解剖はアメリカ、製造は日本の方法を踏襲したものであることから本論では、近代に始まるノルウェー式の捕獲方法を用いた日本の捕鯨について「近代捕鯨」の語を用いる。ただし他の捕獲方法と明確に区別する場合にはノルウェー式と言う。反対に、明治以降の操業であっても網取り式やアメリカ式の捕獲方法を用いる捕鯨は、近代捕鯨とは呼ばずに、網取り式捕鯨、アメリカ式捕鯨と呼ぶ。このほか石川県小木や京都府伊根などでおこなわれて定置網捕鯨や仕切り網捕鯨もそのように呼ぶ。なお、「捕鯨」の語には鯨類の捕獲に加え、陸上設備での解剖や製造を含めて考えることがあり、鯨を捕獲する行為そのものを指すときは「捕獲」と明記する。

近代については、明治以降に西欧から導入された技術や習慣、法令やシステムの意味で用いる。近代の代わりに、西欧あるいは西洋技術でも可能であるが、西欧や西洋の技術導入によって、近世以前からの事物や事象の変化変形や、日本独自の事象も発生するので、近代や近代的を用いる。近

代を明治維新から敗戦までと年代を区切った用法があるが、その意味では使わない。

本論が対象とした時期は、ロシア企業が日本海で捕鯨をおこなった1890年代から1945（昭和20）年の敗戦までである。明石編（1910）に記述のとおり、最初期の日本の近代捕鯨は経営主体や操業形態が多様であり、砲手もノルウェー人が占めロシアによる捕鯨事業との連続性や共通性が高いため、記述の一部はロシア捕鯨から始める。記述の終わりを敗戦とするのは、太平洋戦争

（1941-1945）で多くの捕鯨船が徴用され大半が沈没や航行不能となったこと、千島や外地の根拠地を失い大きく操業形態が変化したこと、敗戦後は占領軍によって捕鯨が全面的に禁止されたことなどにより、捕鯨の歴史に断絶が生じたことによる。

対象とした地域は、戦前の日本の統治地域の全体、すなわち樺太、千島、日本列島、関東州、朝鮮半島、台湾、そして戦時中の一時期の青島である。このうち朝鮮半島についてはロシア企業の操業がおこなわれた大韓帝国であった時期も含める。地域の呼称については、現在の日本の国土と千島列島全域を除いた地域、すなわち樺太、朝鮮、関東州、台湾をまとめて「外地」と表現する。樺太が内地に編入されたのは1943（昭和18）年1月20日の閣議決定「樺太の内地編入措置要綱」であり、すでに沿岸捕鯨が終了していた時期であるので本論では外地として扱う。なお、千島は北海道根室市に属していたので内地であるが現在施政権が及んでいないため、独立の地域区分とする。また、内容によってはノルウェーやカナダなど外国の事例も参考として扱う。

解剖や製造を行なう陸上設備は戦前最大の規模を誇った東洋捕鯨株式会社の表記にならい「事業場」とする。「根拠地」は事業場が置かれた地域の意味で用いる。鮎川のような有力漁場に恵まれた根拠地では複数の事業場が設置されたが、逆に鯨類の回遊が少ない場所や遠隔地では1根拠地に1事業場という例が多かった。

鯨類名称の表記は次のように使用している。近代生物学が普及する以前も対象とするため、産物名と生物学的種との区別を明確にするため、名称が明らかに生物学的種として使用されている場合は「種」、それ以外の用法は「種類」として区別した。直接引用する場合は原文のままとしたが、内容を要約して記述する場合、明確に生物学的種を表すには標準和名をカタカナで用い、産物名や

資料での便宜的な表現と判断した場合は原文のままとし、混乱の無いように適宜注記した。学名は属名と種小名のみで表し、命名者名は特別な理由がない限り省略した。ただし比較考察のため原文に忠実である場合もある。なおツノシマクジラとカツオクジラの記載は商業捕鯨終了後15年のことであり、本論が課題とする戦前の沿岸捕鯨ではまったく認識されてこなかったため、この2種はニタリクジラとして議論を進める。

引用文では、原則として旧字体を新字体に、種名や固有名詞以外のカタカナや接続詞など一部の漢字をひらがなに置き換えたほか、現在の表記への変更や句読点をおぎなった部分がある。引用部分において原文にはない筆者による注記や原文中のふりがなは、法律での編者注や翻訳書の訳注を示す記号の慣例にならない [] 角括弧で示した。

捕鯨に関連した文化の語については、次のように用いている。捕鯨事業そのもの、つまり捕獲や解剖に関する事象は技術とし、文化は波及的影響といった意味で使用する。本論がおもに取り上げるのは、鯨の食料としての消費や科学知識に関する事象であり、祭や儀式に言及する部分は少ない。

図版については、「図」は絵や図、絵葉書や出版物から転載した写真や著者撮影のものについて用いた。古い文献資料のコピーや写真をそのまま掲載した場合も「図」とした。他方、歴史的資料として本論の対象年代に撮影されたネガやオリジナルプリントから複写した資料は「写真」として区別した。

注は原則として用いず、すべて本文のなかで議論した。ただし、資料として用いた手紙やウェブページを示す場合には後注として項目の直後に置いている。

文書資料の欠損部分は「□」、フォントがない文字は「■」で代用した。

書籍や雑誌などの印刷物や版本のタイトルは『 』で示し、稿本や論文記事は「 」で示した。また、単行本や特に引用箇所を明記する必要がある場合は、本文で引用文献の該当 ページ数を示した。

4 節 調査対象

本論でおこなった現地調査の訪問地、資料調査の利用機関については次のとおりである。海外の機関については訪問年月も付した。

国内調査

捕鯨事業場の跡地や関連施設の状況調査で訪問したのは次の地域である。北海道（網走市、根室市、浜中町、室蘭市）、青森県（八戸市）、岩手県（釜石市）、宮城県（仙台市、女川町、石巻市）、千葉県（銚子市）、三重県（尾鷲市、熊野市、御浜町）、和歌山県（新宮市、那智勝浦町、太地町、串本町）、徳島県（海陽町）、高知県（東洋町、室戸市、土佐清水市）、佐賀県（唐津市）、長崎県（長崎市、平戸市、新上五島町、五島市）。

資料調査で利用したのは次ぎの機関である。北海道立図書館、北海道大学附属図書館、網走市立図書館、根室市立図書館、根室市図書館、根室市歴史と自然の資料館、市立室蘭図書館、千島歯舞諸島居住者連盟、北海道大学総合博物館水産科学館、東京農業大学オホーツク学術情報センター（以上、北海道）、青森県立図書館、八戸市立図書館（以上、青森県）、岩手県立図書館、釜石市立図書館（以上、岩手県）、宮城県立図書館、宮城県公文書館、仙台市民図書館、石巻市牡鹿総合支所（以上、宮城県）、国立国会図書館、東京海洋大学附属図書館（品川）、勇魚文庫（以上、東京都）、水産研究・教育機構中央水産研究所図書資料室（神奈川県）、熊野市立図書館（三重県）、和歌山県立図書館、新宮市立図書館、太地町歴史資料室、太地町立くじらの博物館（和歌山県）、大阪府立中之島図書館、大阪市立中央図書館、国立民族学博物館図書室、ケンショク「食」資料室（以上、大阪府）、高知県立図書館、室戸市立市民図書館（以上、高知県）、山口県文書館、下関海洋科学アカデミー鯨類研究室（以上、山口県）、ニッスイパイオニア館、福岡市総合図書館、福岡市博物館（以上、福岡県）、佐賀県立名護屋城博物館（佐賀県）、長崎県立長崎図書館、長崎歴史文化博物館、三菱城工業株式会社長崎造船所史料館、鯨賓館ミュージアム（以上、長崎県）、宮崎県立図書館（宮崎県）、鹿児島県立図書館、鹿児島県立奄美図書館（鹿児島県）。

国外調査

アメリカ合衆国 アメリカ自然史博物館（American Museum of Natural History: AMNH）の哺

乳類研究部図書文書室 (the Mammalogy Departmental Library & Archives: DLA) および同館の研究図書館貴重資料室 (the Special Collections of the Research Library)、収蔵庫、そして館外のブルックリン収蔵庫 (Brooklyn storage warehouse)。訪問は、2011年10月、2013年2月、2014年1月の3回実施した。補足調査として、2014年1月にスミソニアン機構アーカイブ (Smithsonian Institution Archives) と合衆国国立自然史博物館 (National Museum of Natural History: NMNH) を訪問した。

ノルウェー王国 2016年11月にベストフォル県アーカイブ (Vestfoldarkivet) およびサンネフォル (サンデフィヨルド) 市 (Sandefjord) の捕鯨博物館 (Hvalfangstmuseet) を訪問した。

ロシア連邦共和国 2016年7月にサハリン州郷土博物館の研究員の協力を得て東洋捕鯨樺太事業場の跡地の現地調査を実施し、同博物館の展示資料から捕鯨関連のものを撮影した。

韓国 2016年2月に黒山島の現地調査、同年3月に蔚山の長生浦鯨博物館で資料調査と聞き取り、同年10月に済州島での現地調査および聞き取りを実施したほか、ソウル大学校奎章閣韓国学研究院の文書を利用した。

台湾 2016年2月に東洋捕鯨台湾事業場の跡地およびアメリカ人研究者R.C.アンドリュースの訪問場所の特定のための現地調査を実施した。

1 章 現在の捕鯨認識と課題

1 節 公的な「捕鯨物語」の形成と問題点

2 節 空白の1910-1940年代

3 節 東洋捕鯨と事業場長必携

1 節 公的な「捕鯨物語」の形成と問題点

国威発揚に使われる捕鯨

現在の日本では、捕鯨はナショナリズムを刺激する特別な存在となっている。2017年6月には「商業捕鯨の実施等のための鯨類科学調査の実施に関する法律」（通称：鯨類科学調査実施法、調査捕鯨新法）が衆参両院でほぼ全会一致で成立した。この法律は、国際捕鯨取締条約 International Convention for the Regulation of Whaling (ICRW) 第8条に基づき実施してきた南極海での捕獲調査、メディアのいう調査捕鯨が2010年にオーストラリアにより違法行為であるとして国際司法裁判所 International Court of Justice (ICJ) に提訴され、2014年に下された判決で日本の全面敗訴に近いものとなったことを受けて制定されたものである。形式的には民間団体がおこなっていた調査捕鯨を「国の責務」として実施することを目的にしたもので、調査捕鯨新法の制定によって捕鯨は文字通り日本の国策となった。ところが翌2018年12月26日、日本政府は国際捕鯨取締条約 (ICRW) からの脱退を通告、翌2019（令和1）年6月に脱退となった（国際捕鯨取締条約及び同条約の議定書からの脱退についての通告 | 外務省 https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press4_006938.html 2019.12.26 閲覧）。日本は南極海を含む公海での「調査捕鯨」を取りやめる代わりに、200海里専管水域内での商業捕鯨を再開することを選択し、2019年7月1日から小型捕鯨によるミンククジラの捕獲、母船式捕鯨によるミンク、ニタリ、イワシの3種の捕獲が再開された（水産庁プレスリリース「商業捕鯨の再開について」 <http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/kokusai/190701.html> 2019.9.13閲覧）。この決定は前年に成立した調査捕鯨新法と矛盾する行動であるが、国際世論をものともしない商業捕鯨の再開はナショナリズム発揚の極地といえる。

商業捕鯨の再開は優勢な国際世論に反した決定である。日本の国民は、現在の捕鯨やその歴史について外国人から質問を受けることが増えることが見込まれる。それに答えられる国民的な理解や回答は用意されているだろうか。現状はそれとはかけ離れ、日本政府は特定の利害関係者、近世の網捕り捕鯨の操業地域から見た捕鯨の物語を喧伝しているように見える。

姿を現した公的な「捕鯨物語」

現在の日本で捕鯨に関する言説は近世の網捕り捕鯨と現在の小型捕鯨に集中する傾向が見られる。テレビや新聞などのマスメディア、地方の博物館が伝える捕鯨の歴史（高知県立歴史民俗資料館 1992、四日市市立博物館 1993、福岡市博物館 2011、東北歴史博物館 2016）は、近世の網取り捕鯨と現在も操業中の小型捕鯨に集中している。これは現在の捕鯨問題の論評など時事問題を除いた人文学の単行本でも同様である（小島編 2009、中園・安永 2009、岸上編 2012、森・宮崎 2016）。これは、地方博物館やメディアだけに見られるものではなく、農林水産省が描く捕鯨物語と共通する見方である。これまで同省の捕鯨に対する考えは捕鯨担当者の発言などから伺い知るだけであったが、同省の広報紙『aff [あふ]』の2016年7月号「特集1鯨」（pp4-13）によって端的に著された（図1-1、http://www.maff.go.jp/j/pr/aff/1607/pdf/1607_all.pdf 2019.3.29閲覧）。

以下、広報紙『aff [あふ]』2016年7月号「特集1鯨」に沿って考察する。「特集1鯨」は見開きの写真付き読み物で構成され、巻頭は「日本人と鯨」である。この項目のリードは「有史以前から日本人は鯨と独特の関係を築いてきました。日本人と鯨の奥深い世界をご案内しましょう」という文章で始まり、鯨や捕鯨を描いた錦絵、古式捕鯨を題材にした祭、そして髭板を用いる文楽人形を写真で紹介する。弥生時代の出土品に触れたあとは江戸時代に飛び、獣肉が忌避されたなかで鯨は内臓や脂肪を含め貴重は栄養源になったこと、鯨油もその他の部位も含め徹底した活用が図られたこと、鯨の骨を御神体とする神社があり、鯨に戒名を付けた法要や過去帳を持つ寺が存在することが紹介される。ただし「鯨の骨を御神体とする神社」の実例は示されていない。他方、近代捕鯨については、末尾の「捕鯨の近代化と環境保護主義の台頭」で示されるわずか2行で触れるにすぎない。曰く「1899年、汽船に搭載した砲で網のついた銚を発射するノルウェー式捕鯨が導入され、日本でも近代捕鯨が始まります。第二次世界大戦後に、食料難に苦しんでいた日本人を救ってくれ

たのが南極海の鯨でした」。近代捕鯨の歴史の扱いは少なく、沿岸捕鯨はその言葉さえ現れない。見開きの短い文章であるが、現在の捕鯨言説において沿岸捕鯨がほとんどかえりみられない状況を端的に表している。

次項は「鯨ゆかりの地を巡ってみよう 全国「鯨」マップ」で、網走、函館、鮎川、和田浦、太地の小型捕鯨の陸揚げ場所を示すとともに、シロナガスクジラの全身模型や全身骨格レプリカの展示、先史時代の遺跡や網取り捕鯨に関する祭や文化財、神社と供養費などが写真で示される。大きく取り扱われているのは千葉県和田のツチクジラ捕鯨である。それに対し、近代の沿岸捕鯨に関する事物は一切捨象されている。以下の見開きは「鯨をおいしく頂く」、「多様性」が切り開く捕鯨の未来」、「調査捕鯨で何がわかるの?」と続く。日本の捕鯨を語る題材の選択は、現在の農林水産省が重要と見なす日本人と鯨の関係を表すものといえる。「調査捕鯨で何が分かるの?」では、調査捕鯨の正統性に加え水産庁が公的に描く鯨と漁業が競合する食物網の図式を掲載している。本紙の表紙は伊藤若冲「象と鯨図屏風」であり(図1-1)、これも現在の捕鯨に近世の捕鯨を接合する意図と見ることができる。余談であるが、森下丈二氏のインタビューでは「1960年代には大規模な母船式捕鯨を展開して乱獲状態となり」(p10)としているが、1960年代初めには主要国が捕鯨から撤退し、1964/65年漁期以降の南極海捕鯨は日本とロシア、そしてノルウェーの3か国だけになっていた。この言い方では乱獲の主役が日本になってしまうため、乱獲の年代を1960年代とするのは政府広報紙としては疑問である。

この広報紙に端的に見られる捕鯨の描き方は、歴史的な視点で見ると次のような問題を有している。ひとつは、長く多様な捕鯨の歴史を現在の水産行政の視点と価値観で整理省略していること。ふたつ目は、日本の捕鯨が日本人や日本国内で完結してしまっていることである。「日本人と鯨」の項で「ノルウェー式捕鯨が導入され」という文言があるが、この表現では後述するように多くのノルウェー人砲手が参加し、沿岸捕鯨船の大半がノルウェー製であったことは想像するのが難しい。そもそも日本近海で近代捕鯨を始めたのがロシアであり、その成功を見て日本企業が着手したこと、そして最初の主要な漁場が大韓帝国の沿岸であったこと、また砲手や捕鯨船の一部はカナダ大西洋岸での捕鯨事業の衰退から日本に来たことなどがまるごと抜け落ち、外国からの影響や外

地との関係が無かったかのような書きぶりである。国外からの影響への言及は、アムール川や樺太に起源を持つ外来のオホーツク文化の遺跡「モヨロ貝塚」に限られており、近代沿岸捕鯨の時代に存在した漁場の広がりや人的交流を意識することができない。農林水産省の広報紙『aff（あふ）』が描く日本の捕鯨は日本国内に閉じており、日本で独自発展を見せた近世捕鯨から南極海捕鯨へとジャンプするのである。そして戦後の飢餓を捕鯨が救ったという特定世代の経験を押しつける。農水省が描く捕鯨物語は、実際の歴史は異なり現在の日本の国土で完結する捕鯨認識となっている。ちなみに南極海でおこなわれていた調査捕鯨は無寄港航海で、内航、つまり国内航路の扱いであった。

一部地域の見方を国民的認識として流布する公的な捕鯨物語

この公的な捕鯨物語はどのように形成されたのか。それは近世の網捕り捕鯨の操業地域、すなわち近世捕鯨の後裔の捕鯨認識をそのまま国家の物語へと拡大したことによる。大企業による近代沿岸捕鯨に触れない捕鯨の歴史記述は、たとえば『熊野太地浦捕鯨史』（熊野太地浦捕鯨史編纂委員会 1969）の構成がそうである。太地町は土佐や再開に捕鯨の技術を伝えた網捕り捕鯨の発祥の地であるが、鯨捕りたちが次に活躍したのは南極海捕鯨であった。近代沿岸捕鯨は、太地町に隣接した紀伊大島（現・串本町）では長期間にわたり操業されたが、太地町では1900年代初頭で終わっている。町史としての捕鯨の記述に近代沿岸捕鯨が出てこないことは理解できる。この見方が日本国の見解としてあることは、太地町と国政との強い関係がもたらすものなのかも知れない。

別の手がかりは、網捕り捕鯨操業地域に起源を持つ近代捕鯨企業の歴史にある。このような企業には「土佐の三捕鯨会社」（明石編 1910: 265）と呼ばれた大東漁業株式会社、土佐捕鯨合名会社、丸三製材株式会社捕鯨部など高知県に設立された捕鯨会社のほか、和歌山県串本の商人を中心に設立された紀伊水産（串本町 1924: 355-369、復刻版：串本町 1978）、宮城県鮎川の肥料会社から派生した鮎川捕鯨（牡鹿町誌編纂委員会 2005: 228-234）などであり、いずれも地元の資本家によって設立された企業であった。このうち「公式捕鯨認識」の屋台骨となる歴史を持つのが大東捕鯨と土佐捕鯨である。大東漁業は本社こそ高知市に置かれたが、役員には網捕り捕鯨の根拠地だった浮津や津呂の出身者が加わり、土佐捕鯨は本社が室戸に近い奈半利村に置かれ出資者は浮津で

固められた（伊豆川 1943: 625-626）。土佐系3社は、東洋捕鯨や後継企業の日本捕鯨や日本水産とは合流せず、下関に設立された林兼商店、後の大洋漁業の捕鯨部門となる企業である。土佐の捕鯨会社は、大会社に吸収されながらも最大手の東洋捕鯨には合流せず、自主独立の気概を保つ高知県出身者によって南極海捕鯨を実現した。近代沿岸捕鯨では東洋捕鯨が捕鯨船の8割を占めるなか土佐系捕鯨会社は捕鯨船1-2隻で生き延びてきたが、南極海捕鯨では日本水産と大洋漁業は肩を並べるまでになった。近世の鯨組が近代化して捕鯨会社となり、ついには南極海捕鯨に乗り出した成功の歴史が公的な捕鯨物語の骨格を形作っている。

このことは企業ではなく、個人の物語としてより強く意識される。9千頭以上の鯨を仕留め、不世出の名砲手として知られる泉井守一（1904-2002）は、室戸市の生まれで、はじめ沿岸捕鯨の砲手として活躍し、日本の南極海捕鯨に参加、漁獲割り当てがなく漁獲上限頭数までは早い者勝ちで捕獲した捕鯨オリンピックで華々しく活躍した（柴 1986）。おなじ室戸出身者の「柳原勝紀は、日本に近代捕鯨が導入されて間もなく、古式捕鯨からの伝統ある捕鯨の町、室戸で生まれ、一介の捕鯨労働者から刻苦勉励して、使用人に甘んじることなく、小型捕鯨の経営者として身を起こし、やがて大型捕鯨へと発展させて日東捕鯨株式会社を立ち上げて、日本の近代捕鯨の発展に大きく寄与し、“土佐の鯨男”として称えられる偉大な存在であった」（柳原・大隅 2011: 220）とされる。さらに、土佐の三捕鯨会社を先導した志野徳助は、1936（昭和11）年の大洋漁業第1回南極海捕鯨を船団長として率いたが、その航海の途中で客死する。彼らの一生は、現実に土佐の鯨取りが南極海で大成した物語であり、公的な捕鯨物語はそれを代弁している。彼らにとっての沿岸捕鯨は苦労した下積み時代であった。

農水省の捕鯨物語は、外国の技術を導入し、国外との人的交流も盛んであった多様な戦前の沿岸捕鯨の歴史を消し去っており、捨象した部分が大きすぎる。沿岸捕鯨が登場しないことは、日本の捕鯨の歴史から朝鮮や樺太千島など大日本帝国の周縁部での営みを積極的に忘却することでもある。個人的な体験や地方の一自治体の歴史が共感を得て国民の物語になることもあるだろう。戦後の飢餓を鯨が救った経験は強烈であり、体験した年代は人口的にも多いのかも知れない。しかし現在、捕鯨は国際的な対立を招く議題となり、それは一企業や一地方自治体の歴史観で対応可能な問

題ではない。外国や海外の人々との対話には、国民レベルで了解可能な事実に基づく理解が必要である。それには近世の網捕り捕鯨や南極海捕鯨、現在まで継続してきた小型捕鯨とともに、日本や戦前の統治地域で操業した近代の沿岸捕鯨の歴史を明らかにすることが必要である。

2節 空白の1910-1940年代

研究が少ない近代沿岸捕鯨

日本の近代沿岸捕鯨の研究は少ない。これは、網捕り捕鯨は北九州の西海捕鯨を中心に台帳などから詳しい経営分析がなされ（多田 1978、鳥巢 1999、末田 2004）、南極海捕鯨では最初から農林省の監督官が乗船して写真を含む報告が出版されてきたこと（大村ら 1942、山田 1950、前田・寺岡 1952、西脇 1990、大村 2000）、そして小型捕鯨では文化人類学の蓄積が今も進んでいること（Boreal Institute for Northern Studies 1988、フリーマン編 1989、小島 2012、菊池 2004、福岡 2014）とは対照的ですからある。それらに比べると近代の沿岸捕鯨の研究、とりわけ明治から戦時中の半世紀の研究はきわめて少ないことに気付く。

学術雑誌でも捕鯨をテーマにした研究は少ない。CiNii でフリーワード「近代捕鯨」で検索すると17件が抽出されたが、大半が同一著者による連載読み物であり、研究報告は3件だけであった（神長 2002、竹内 2000、柏谷 1997）。日本の沿岸捕鯨を扱ったのは竹内（2000）だけで、北海道の事業場の経過を示す一般向けの短いものであった。神長（2002）は、ロシア語文献を駆使したロシア企業による極東捕鯨を分析しており、本論付属のノルウェー人砲手が撮影した写真の理解を助ける。柏谷（1997）は環境倫理の理論研究であった。一方、「沿岸捕鯨」では12件が抽出された。図書紹介が2件、報道記事が1件あるが、残り9件はすべて研究報告である。しかしながら、本論が扱う明治から終戦に至る時期の沿岸捕鯨を対象にしたものは見られなかった。「近海捕鯨」では4件で、内訳は戦後の母船式1、戦後の沿岸1、沿岸漁村1、戦前の沿岸捕鯨1件であった。このうち不破・花田（2011）は本論とおなじ資料を用いた1事業場についての水産学的な事例研究であった。その視点からすれば本論は不破・花田（2011）による事例研究の全国版ともいえる。笠原（1952）は先にあげた笠原（1950）の補遺といえる内容の捕獲記録であった。これらとは別に日本施政下の

朝鮮における捕鯨を取り上げた歴史研究に森田（1999, 2000）があるが日本列島の事例は扱っていない。

『本邦の諾威式捕鯨誌』に依拠して描く近代沿岸捕鯨の問題点

日本の近代沿岸捕鯨の初期の状態を知るに欠かせない報告が『本邦の諾威式捕鯨誌』（明石編 1910）である（図1-2）。これは研究書ではなく後に日本の沿岸捕鯨船の8割を独占する東洋捕鯨の設立記念誌として、設立の翌年に刊行されたものである。幅狭の新書本を少しスリムにした三六判と小形ながら初版本は表紙に装飾を凝らした豪華な装丁で、その時点での同社の成功を誇示する内容となっている。背表紙に「くじら」と記されているので、古い著作では書名を「くじら」や「鯨」として引用している場合がある（永澤 1915など）。内容は多岐にわたり、最初に東洋捕鯨社長の岡十郎の講演録としてノルウェー式捕鯨の仕組み、日本への導入過程と東洋捕鯨の設立、将来の捕鯨業が述べられる。次いで鯨の各部の利用法と伝統的な料理方法に話が飛び、再び捕鯨に戻ってアメリカとノルウェーの捕鯨船に乗り込み研鑽を積んだ人物による鯨談義、鯨の解剖、近年の鯨肉調理法、鯨髭工芸品、欧米の捕鯨事情、そして日本のノルウェー式捕鯨事情としてロシアによる日本海捕鯨と長崎での鯨肉輸入、乱立した捕鯨会社の状況、そして東洋捕鯨の設立経緯となっており、付録に捕鯨業関連の法規や特許文書が巻末にある。写真の収録も多く、捕鯨船や事業場、日本人とノルウェー人の砲手、社長と役員、ヒゲ板の製品や社屋の外観などを含み捕鯨の視覚的な理解を助けている。反面、古風な表現に活字が小さいために読みにくく、誤植や事実誤認なども一部に見られる（神長 2002）。歴史資料として用いるには傍証資料が必要であり、沿岸捕鯨の1910年以降の歩みについては当然ながら記述がない。

現在、多くの概説書が近代沿岸捕鯨については、明石編（1910）に依拠した記述をおこなっている。そのため近代沿岸捕鯨の歴史は1910年で終わり、その後は資料が得やすい1934（昭和9）年からの南極海捕鯨に一足飛びに移ってしまう（福本 1960、原 1990、北原編 1996、小松編 2001、小島編 2009、岸上編 2012）。なお、『日本漁民史』第1部「捕鯨における資本主義の発達」のうち70ページを越える近代捕鯨の概説（石田 1978: 38-104）は、文章をそのまま抜き書きした個所以外では典拠が示されていないが『本邦の諾威式捕鯨誌』の内容と同一である。

欧米で日本の近代沿岸捕鯨の記述として引用されているのは、21世紀に至るまで明石編（1910）とアメリカ自然史博物館の学芸員だったロイ・チャップマン・アンドリュース（Roy Chapman Andrews 1884–1960、図1-3）が撮影した写真である。たとえばノルウェーで発行された近代捕鯨の歴史を世界規模で記した最初期の単行本『Av Hvalfangsetens Historie』（Risting 1922）、近代捕鯨の全般的記述として著名な『Den Moderne hvalfangsts Historie 2』（Tønnessen 1967）やその抄訳『The History of Modern Whaling』（Tønnessen and Johnsen 1982）などで用いられている。アンドリュースの鯨類調査については5章で述べる。

ノルウェーにおける『本邦の諾威式捕鯨誌』の引用はこれに留まらない。日本とノルウェーの交流100年を記念して出版された『Towards Friendship Therelationship between Norway and Japan, 1905–2005』（E. I. Mageli 2006）は、全8章のうちの第5章を「捕鯨の関係 Whaling Relations 1905–2005」とし11ページ（pp105–115）をあてた沿岸捕鯨は Tønnessen (1967) を参考にしており、結局は100年前に出版された『本邦の諾威式捕鯨誌』が典拠になっている。

英語の報告で知る日本の近代沿岸捕鯨

1890–1940年代の日本の近代沿岸捕鯨の事業場や捕鯨船について具体的様相を直に取材して伝えられた報告は、新聞記事を除けば当時の流行作家のルポルタージュ『実地探検捕鯨船』（江見 1907）が知られる程度である。じつは、明治期の日本の近代沿岸捕鯨に関する最も詳しいルポルタージュは英文で発表されている。アンドリュースが1910年と1912年に東洋捕鯨の事業場でおこなった鯨類調査による一連の著作である（Andrews 1911b, 1914, 1916a, 1916b）。彼の主著『Whale Hunting with Gun and Camera』〔砲とカメラで鯨を追う〕（Andrews 1916b、以下『砲とカメラ』）は、ナショナル・ジオグラフィック誌の記事（Andrews 1911b）を充実させた読み物で、東洋捕鯨の事業場での仕事や鯨肉の消費、彼自身の異文化体験までを含み、しかも現在まで読み続けられている。さらに、両者ともに北米の捕鯨を含んだ報告で、明治末期の日本の沿岸捕鯨の様子を世界規模で比較する内容にもなっている。また、鯨類調査の報告（Andrews 1914, 1916a）でも付随する写真が事業場の様子を伝えている。

ところで欧米の捕鯨史の研究書は、上述の世界規模な叙述のものでも、操業海域や年代が限られ

た捕鯨事業を対象にしたものでも、地図や図版、イラストや写真が豊富に使われた単行本が見られる (Bockstoece 1995、Dickinson and 2005。逆にいえば、日本の出版物は図や写真の使用が少ない。本論では、欧米の文献に掲載された捕鯨船や事業場の図と比較可能な具体的な図を作成している。

1950年を最後に途切れる総合的報告

日本の近代沿岸捕鯨に関して、東洋捕鯨設立以降の状況を伝えるまとまった著作は戦時中に少数ながら現れる。戦時体制下、国内資源の総動員が求められたことから沿岸捕鯨を含めた捕鯨業の全般的な調査がおこなわれており (日本捕鯨業水産組合 1940, 1943)、その成果を活かした普及書として農林省水産局の捕鯨監督官が戦時中に出版した『鯨 その科学と捕鯨の実際』 (大村ら 1942) や『鯨』 (松浦 1944)、そして日本水産の南水洋捕鯨船団長による『捕鯨』 (馬場 1942) などが刊行された。現在のように捕鯨に文化的意味を見出すのではなく、食料や工業資源を供給する産業としての価値が高まった時代であり、著作には年別種類別捕獲記録や捕鯨会社の所有捕鯨船数を掲載、また捕鯨船や漁具、捕獲、処理、製油、製品については図を収録する。戦後に出版された『捕鯨 附日本の遠洋漁業』 (前田・寺岡 1952) もおなじ性格を持つ農林省の監督官による著作で、近代における鯨肉の消費動向が簡単ながら記されている (pp170-177)。時代状況から粗悪な紙質や印刷ながら沿岸捕鯨船や捕鯨事業場の図を掲載していることは貴重である。ただしそれらの図は概念図であり、具体性を欠いている。

1910-1940年代を含む近代沿岸捕鯨の総括的研究は、戦後占領下の1950 (昭和25) 年に2本出版されている。ひとつは英文によるGHQの報告書『Japanese whaling industry prior to 1946: Natural Resources Section Report no. 126』 (Terry 1950) で、戦時中の調査報告 (日本捕鯨業水産組合 1940, 1943) の成果も採り入れ、南極海捕鯨を含めた日本の近代捕鯨の歩みをまとめている。おなじ年に戦前の沿岸捕鯨に関するもっとも包括的で広範な研究「日本近海の捕鯨業とその資源」 (笠原 1950) が発表された。笠原 (1950) は捕鯨企業の研究者が社内や業界団体の捕獲記録から作成した1911-1949年の捕獲統計は唯一無二のもので、鯨類資源の回遊や資源状態の考察も加えている。この笠原 (1950) と Terry (1950) には1950年までの沿岸捕鯨の根拠地の位置図を示

しており（図1-4）、これ以降に捕鯨根拠地を集成した新たな図は刊行されていないと思われる。翌1951年、秘密事項を含めた1940年の日本の漁業の状況をまとめた「一九四〇年の漁業実績―特別委員会報告書―」（日本海洋漁業協議会 1951）が刊行され、沿岸捕鯨も「根拠地鯨漁業」として収録されている。この報告は千島や外地での漁業に詳しく、これらの地域の捕鯨について Terry (1950) や笠原 (1950) では得られない情報を含んでいる。日本の近代沿岸捕鯨の事業場や捕獲に関する統計的事項は、ここで一応の集大成がなされた。これら3つの著作は日本全体をひとつの対象とした見方であり、事業場別の捕獲数や着業した捕鯨船名など個別事例を取り出すことができない。また企業の事業展開といった歴史的な視点も描かれておらず、これらの個別的記載や歴史の記述が本論に残された課題と受け止めている。

日本統治時代の事実関係が知られていない隣国

朝鮮半島沿岸は日本近海で最初に近代捕鯨がおこなわれ、その後は1945年に至る40年間は日本企業の捕鯨事業場が置かれた地域である。『韓半島沿海捕鯨史（増補版）』（朴 1995）は、日本語と朝鮮語の両方の資料を用いて朝鮮半島や日本の周辺の近代沿岸捕鯨を約100ページにわたり詳述し（pp191-287）、現在の日本語出版物には見られない東洋捕鯨の社内文書を拾い上げており資料としても貴重である。同書は韓国の捕鯨について全般的かつ個別の事例を収集しているが、執筆時の資料的制約のためか1910-1940年代の朝鮮の沿岸捕鯨については記述が少ない。現在の韓国では、蔚山広域市南区にある長生浦鯨博物館を代表に、戦後も継続した捕鯨根拠地が鯨類全体を対象にした公園や施設整備の計画を持つことがある。そのような場合、日本統治時代の捕鯨に関する情報は歓迎される（장생포고래박물관 2015）。

これはロシアでも同様であり、千島列島や色丹島の捕鯨事業場は太平洋戦争の後にはソビエト連邦が引き続き使用しており、サハリン州の主要産業であった水産業で重要な位置を占めていた。そのため、日本の地方出版物であっても千島の捕鯨の論考はロシア語に訳して出版されることがある（Уни 2017）。隣国の歴史的情報の空白を埋める意味でも沿岸捕鯨の研究は重要と考える。

以上、先行研究の検討から明らかなことは、日本の近代沿岸捕鯨の知識は、日本でも海外でも未だに『本邦の諾威式捕鯨誌』（明石編 1910）の記述に依拠していること、欧米ではアンドリュー

スの著作が今でも広く読まれ写真の引用が続いていることの2つである。日本の近代沿岸捕鯨の姿は日本を含む世界中で1910年の状況を基に理解されている。また沿岸捕鯨の事業場の分布や捕獲数については笠原（1950）やTerry（1950）の後には総合的な著作がない。つまり日本の近代沿岸捕鯨の知識は歴史的記述や写真は1910年で、事業の全体的様子や捕獲記録は1950年の報告から更新が停止したままである。

3節 東洋捕鯨と事業場長必携

日本の近代沿岸捕鯨の産業史が十分に描かれてこなかった原因のひとつが文書資料の不足である。捕鯨に関する文字資料は、利用可能な一次資料が少なく、雑誌記事や自治体史などの二次資料を使うことが多かったが、それらのなかには典拠が不明なものも多かった。文書に加え、近代捕鯨を記録した写実的な図面や絵図、写真が不足していた。そのため捕鯨の歴史研究は近世捕鯨を含めて文学作品や美術的作品に依拠する部分が多いといえる。しかしそれだけでは事実記載は困難である。本論では、新たに研究利用が可能となった東洋捕鯨の社内文書、捕鯨会社の営業報告、ノルウェー人砲手や外国人研究者による写真など従来の研究ではほとんど使用されてこなかった資料によって捕鯨の歴史を記述することを目指している。用いた資料は多岐にわたるため、個別の資料は各章で紹介解題するが、本論の屋台骨を支える資料、東洋捕鯨事業場長必携については簡単な解題をしておく。詳しい内容は付録とした。

東洋捕鯨事業場長必携

東洋捕鯨事業場長必携（以下、場長必携）は同社の事業場長が代々引き継いできた、操業記録と地域関係の手引きからなる冊子である。日誌や伝票、社内文書を編集した累年的な冊子であるが、幹部職員用の内部資料という性格から記載内容に脚色は少ないと考えられ、一次資料といえる内容を持つ。記録期間も長く、鮎川では1909–1950年度の40年、紀伊大島では1909–1965年度の半世紀以上にわたる記録の集成である。この資料は東洋捕鯨の捕鯨事業場や操業、経済状況やその他の事情が具体的に記されており、捕鯨産業史にとってきわめて重要な資料と考える。なお、「東洋捕鯨事業場長必携」は、これらの文書群の総称として筆者が便宜的に用いてきた名称である。現在まで

に場長必携の簿冊が見つまっている事業場は、樺太1、千島5、北海道4、本州8、九州12、朝鮮7、その他3となる40事業場である（表1-1、図1-5）。北海道以北と九州や朝鮮に多く、本州が少なく、四国のものは見られない。場長必携の記述は「例言」から始まる27項目である（表1-2）。なお、場長必携には表紙に「写」の文字が押印されたものがあるが（図1-6）、そうでない冊子と同等に扱った。

近代沿岸捕鯨で東洋捕鯨の占める割合

本論の多くの記述は場長必携や営業報告など東洋捕鯨株式会社の資料に依拠している。日本の近代沿岸捕鯨を課題とした研究に1社のみの分析で十分かという疑問が持ち上がることを念頭に、東洋捕鯨と同社が日本の近代沿岸捕鯨に占めた位置について述べる。東洋捕鯨は山口県人の岡十郎が中心となって1899（明治32）年に設立した日本で初めてノルウェー式捕鯨を成功させた日本遠洋漁業株式会社を起源とする。同社は1904年に日露戦争で拿捕した捕鯨船や工船の払い下げを受けるために国会議員を中心に発足した日韓捕鯨株式会社を合同して東洋漁業株式会社となった。同社の成功を見て、1907-1908年頃は国内には捕鯨会社が10社以上乱立する状況となり鯨体価格の下落の利益が低下を招いたため、1909（明治42）年5月に国内大手4社の捕鯨会社、すなわち東洋漁業株式会社（山口県下関：本社所在地、以下同じ）、長崎捕鯨株式会社（長崎）、大日本捕鯨株式会社（東京）、帝国水産株式会社（神戸）が合併して成立したのが東洋捕鯨株式会社である。東洋捕鯨は新たに設立された企業であるが、実質的には東洋漁業の後継会社であった。同年末には加えて東海漁業株式会社（千葉県館山）の捕鯨部門、太平洋漁業の設備を譲り受けた東京岩谷商会捕鯨部（東京）の2社を吸収、1916年にはさらに内外水産（大阪）、紀伊水産（和歌山県串本）、大日本水産（東京）、長門捕鯨（山口県仙崎）の4社を合併し、国内の捕鯨事業の大半を独占した（明石1910、宇田川・上原監修 2011: 24-29）。

東洋捕鯨が日本の沿岸捕鯨に占めた位置は捕鯨船の数が表している。東洋捕鯨の設立の半年後1909年10月に鯨漁取締規則が施行され、同時に捕鯨船の数については鯨漁汽船数制限令により30隻以内と定められた（明石編 1910: 付録1-5）。当時稼働していた28隻のうち東洋捕鯨は1909-1915年は20隻（71.4%）、1916年以降は24隻（85.7%）と設立時で7割、1916年の第二次合併以降は

85%を占めた（笠原 1950）。また、ほぼすべての捕鯨根拠地に事業場を有していた。つまり、東洋捕鯨1社の動向で日本の沿岸捕鯨業全体の7-8割を代表し、他の捕鯨会社の事業場だけが存在する根拠地で際立った捕獲数を見た場所がないことから、東洋捕鯨1社を対象にした分析で日本の沿岸捕鯨を記述した場合でも、国内全体の動向から大きく外れることはない。

なお、東洋捕鯨に合流しなかった捕鯨会社の多くを買収吸収した大洋漁業の記述については、元社員がまとめた自費出版書籍 『大洋漁業 捕鯨事業の歴史』（徳山編 1992）を補助的に使用している。この他の具体的な資料名や特徴については実際に資料を持っていた章で解説する。

1章 現在の捕鯨認識と課題



図1-1 鯨を特集した農林水産省広報紙『aff [あふ]』2016年7月号。表紙の絵は伊藤若冲「象と鯨図屏風」(1795)を用いている



図1-2 『本邦の諾威式捕鯨誌』(明石編 1910)。左から、表紙、「くじら」としてされた背表紙、裏表紙



図1-3 中央アジア探検の途中、モンゴルのゴビ砂漠でポーズをとるロイ・チャプマン・アンドリュース (1928年) #338695 American Museum of Natural History Library

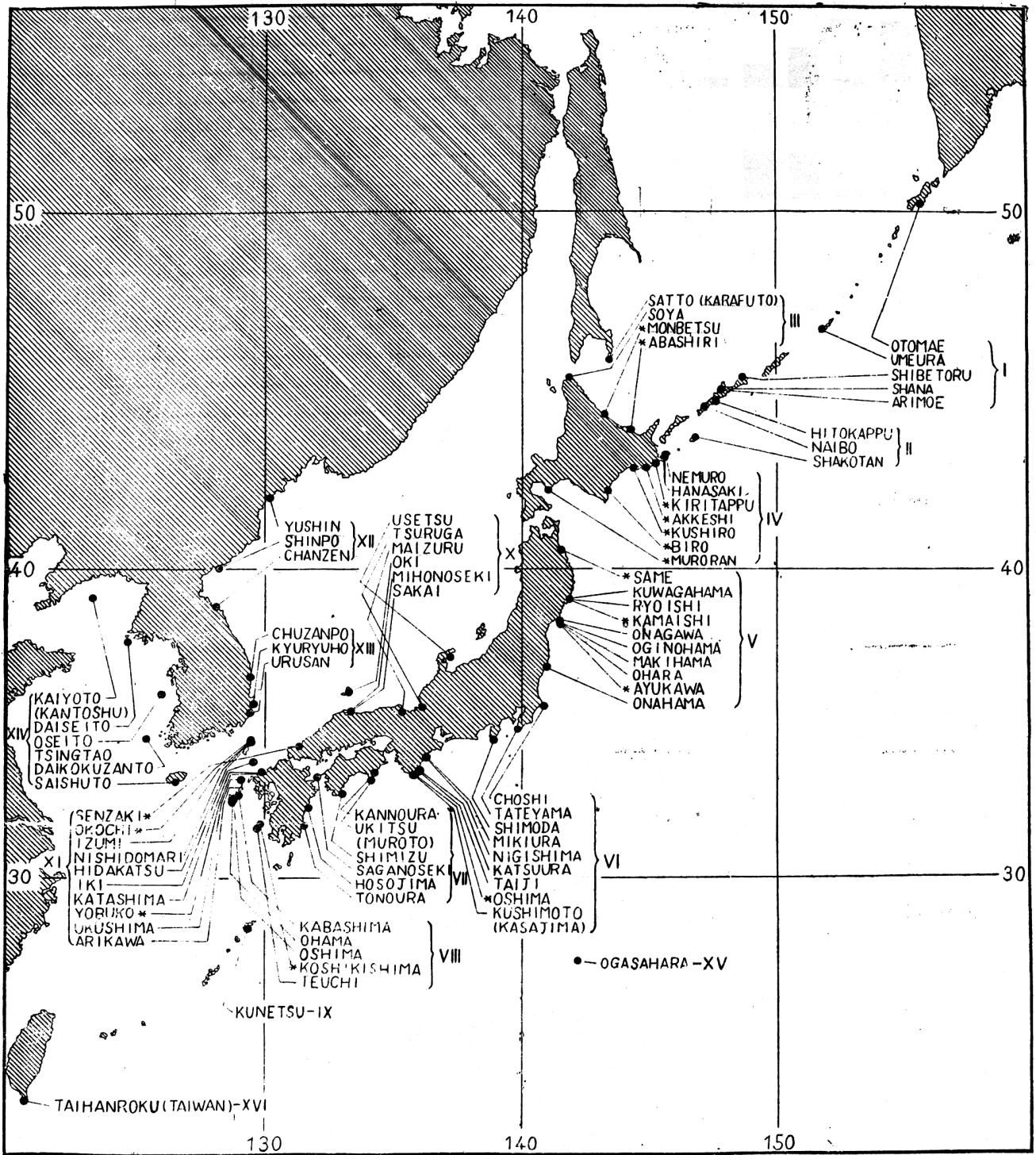


図1-4 笠原 (1950) が掲載した日本の近代沿岸捕鯨の根拠地位置図。1911-1949年に一度でも操業した場所を集成したとする。ローマ数字は16に分けられた海区。根拠地の名称はローマ字で漢字名称は本文中にもない

表1-1 東洋捕鯨事業場長必携が見つかった事業場一覧

No.* 笠原海区**	名称	捕獲記録***	備考	No.	笠原海区	名称	操業期間	備考
1 I 北千島	北千島 [幌筵島]	1941	捕獲記録1年	21 VIII 西海	黄島	1909-1915, 1919-25, 1927, 1929		
2 I 北千島	梅浦 [新知島]	1943-1944	捕獲記録2年	22 VIII 西海	富江	1956-1960	本論は不使用	
3 I 北千島	紗那 [択捉島]	1928-1945		23 VIII 西海	甑島	1944-1948		
4 II 南千島	単冠 [択捉島]	1918-1944		24 IX 琉球	久根津	1912-1921, 1934-1935		
5 II 南千島	斜古丹 [色丹島]	1917-1944		25 XI 対馬	仙崎	1945-1947	捕獲記録3年	
6 III オホツク	樺太 [札塔]	1920-1930, 1936-1937, 1943		26 XI 対馬	大河内	1921-37, 1939-41, 44, 46, 48		
7 III オホツク	網走	1915-19, 1931-35, 1940-45		27 XI 対馬	比田勝	1909-1920	大河内に合冊	
8 IV 北海	霧多布	1926-1948		28 XI 対馬	壱岐	1930-1932	捕獲記録3年	
9 IV 北海	広尾	捕獲記録なし	1947年に操業	29 XI 対馬	呼子	1934-1941		
10 IV 北海	室蘭	1912-1930, 1946-1948		30 XI 対馬	有川	1934-1936	捕獲記録3年	
11 V 東北	鮫	1911-1933, 1946-1948		31 XII 北朝鮮	楡津	1920-1928, 1930		
12 V 東北	桑浜	1916-1917	釜石に記載	32 XII 北朝鮮	長箭	1909-26, 33-34, 40, 42-44		
13 V 東北	釜石	1917-33, 1935, 1939-41, 1946-48	(戦後のため)	33 XIII 南朝鮮	九龍浦	1943	捕獲記録1年	
14 V 東北	女川	1950-	捕獲記録見ず	34 XIII 南朝鮮	蔚山	1909-1944		
15 V 東北	鮎川	1909-1942, 1944, 1946-1950		35 XIV 黄海	関東州 [海洋島]	1915-1932, 1934-1940, 1944		
16 VI 東海	[紀伊] 大島	1909-1956, 1958-1964		36 XIV 黄海	大青島	1918-1932, 1935, 1940, 1942-44		
17 VI 東海	串本	1916-1932		37 XIV 黄海	大黒山島	1916-1944		
18 VII 南海	細島	1912-1929, 1933		38 XIV 黄海	濟州島 [西帰浦]	1926-1941		
19 VII 南海	外の浦	1936-1941		39 XV 小笠原	小笠原	1923-1944		
20 VIII 西海	梶島	1944-1947		40 XVI 台湾	台湾 [恒春]	1920-1942		

*No.は著者による。**笠原海区は笠原（1950）付図6による。***場長必携の記載範囲のみで暦年 宇仁（2016a）を改訂

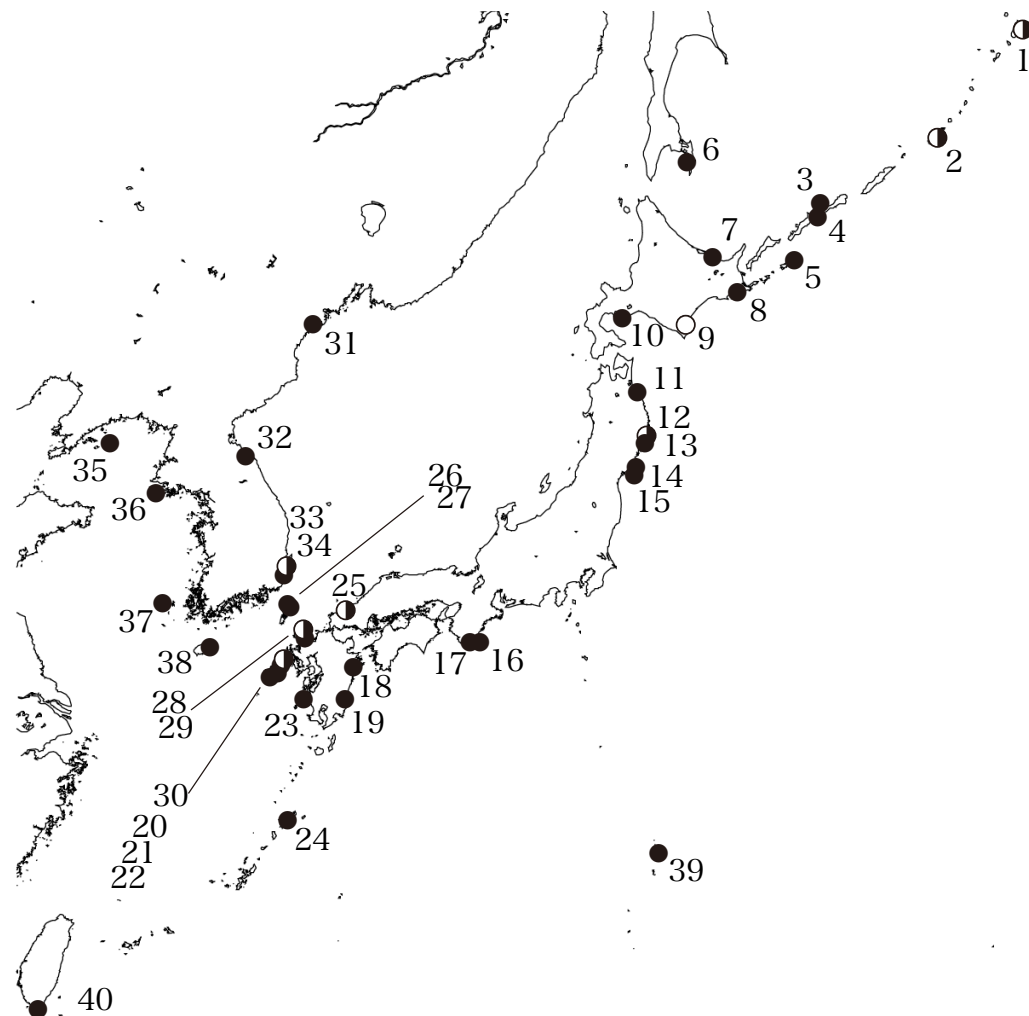


図1-5 東洋捕鯨事業場長必携が見つかった事業場の位置。黒丸は捕獲記録が4年以上見られた事業場、白丸は捕獲記録のない事業場、半分白丸は捕獲記録1-3年の事業場。番号は表1-1に対応する。宇仁（2016a）より

表1-2 事業場長必携の項目（一部字句を省略）

1. 沿革略
2. 事業場許可年月日並ニ期間
3. 操業区域並ニ其ノ期間
4. 税金割賦金及負担金
5. 対地元、漁業組合等トノ報酬条件及ビ摘要
6. 公有水面使用面積、料金及許可年月日期間
7. 汽機汽缶、検査期日有効期間及取扱主任者
8. 敷地及建物貸借関係
9. 設置ニ関シ尽力セシ先方
10. 開業当時ノ披露列席者氏名
11. 每期開始ニ際スル披露
12. 每期引揚ケニ際シ挨拶
13. 每期ノ開始及引揚ケ月日
14. 期別、月別、種類別等ノ捕獲
15. 社長若クハ重役出張ノ際ニ於ケル事業場員
事業夫船員及地方有志者ニ対スル振合
16. 特ニ連絡ヲ採ルヘキ官公吏及有志者
17. 定例の寄附
18. 臨時の寄附
19. 事業引揚ケノ際謝礼先
20. 変事
21. 歴代ノ場長及場員
22. 配属ノ船名及上級船員
23. 配属ノ事業夫及常雇ノ延人員
24. 官公衙ヘノ重ナル願、届、報告、及陳情
25. 県令、法規又ハ規約ノ大要並ニ改廃ノ概要
26. 漁場ノ移動（漁場ノ変異移転ノ詳細ナル状況）
27. 其他参考トナルヘキ事項

宇仁（2015b）より

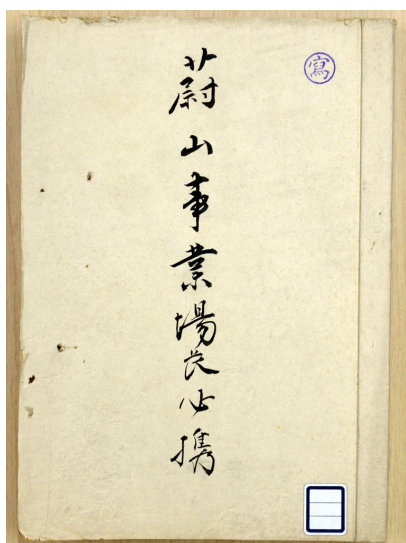


図1-6 「写」のゴム印が押された蔚山事業場長必携の表紙（日本水産蔵）

2章 近代沿岸捕鯨の事業場の拡大過程とその設備

1節 ノルウェー人砲手が写した日本海捕鯨

2節 北と外地へ展開した捕鯨根拠地

3節 捕鯨事業場の設備と特徴、住民の鯨体験

1節 ノルウェー人砲手が写した日本海捕鯨

はじめに

北東アジアの近代捕鯨は、ロシア極東から朝鮮半島にかけての日本海沿岸でロシアの企業によって1890年代初頭に開始された。最初に朝鮮沿岸で近代捕鯨をおこなったのは海軍出身のディディモフ (Akim Grigor'evich Dydymov Аким Григорьевич Дыдымов 1856?-1891) であり1889-1890 (明治22-33) 年に操業した。この成功を引き継いだのがケイゼルリンク (Heinrich Keyserling¹ 1866-1944) の太平洋漁業会社である。同社の創業年は明石編 (1910) では1891年とするが、崎浦訳 (1956: 10) や朴 (1995: 184) は1894 (明治27) 年としており、ロシア側の資料や研究からも1894年の方が有力という (神長 2002)。「韓海捕鯨」 (朝鮮漁業協会 1900) として注目されたロシア捕鯨は、船長こそロシア人であったが、操業はノルウェー人砲手が指揮し、水夫の多くが朝鮮人で炊事夫は中国人であり (朝鮮漁業協会 1900)、このことが近代捕鯨の多民族性あるいは多国籍性を示すものと指摘されている (森田 2000、渡邊 2006: 34-41)。このようにロシア極東における近代捕鯨は同時代の水産雑誌が報じ、その捕鯨船や解剖手法、乗組員などの特徴が伝えられ、長崎に輸入された鯨肉と相まって日本企業が近代捕鯨に取り組む呼び水になった。しかし、今日に至るまでロシア捕鯨の情報は、そのほとんどが文字情報だけに限られており、また同時代の報告は少数であり、しかも相互に検証する方法を欠いていたため齟齬する情報も少なくない。日露戦争後にロシアに代わって朝鮮で捕鯨を始めた日本企業についても同様に、20世紀初頭の朝鮮半島沿岸での捕鯨に関する視覚資料は、捕鯨船乗船ルポルタージュ「実地探検捕鯨船」 (江見 1907) の口絵写真や絵葉書など少数に留まり、印刷画質も不十分なものであった。

ところが、2016年になってノルウェーに1900年代初めの朝鮮半島沿岸でおこなわれた近代捕鯨の

写真が博物館に保存されていることが筆者の照会により明らかとなった。それまでは博物館の受け入れ担当者が知るのみで目録未掲載の資料ということであった。この写真は、乗組員の構成や寄港地など文字情報の検証資料となるだけでなく、文献資料では得られない事業場の立地や設備、関係船舶や船舶名称など捕鯨産業の具体的様子、周辺の集落や景観など、当時の捕鯨を取り巻く環境について視覚的に明らかとする。撮影場所の特定は産業遺産の保存と活用に直接役立つ知見である。

本節では、これを用いて写真の撮影地や被写体、撮影年代などをできる限り特定し、当時の捕鯨を読み解く。

*1 姓の表記は家族ウェブサイト <http://keyserlingk.info/index.asp> では Keyserlingk と表記

1) 資料と解題

本章で用いた資料は、ノルウェー王国ベストフォル県 (Vestfold Fylkeskommune) テンシュベル市 (Tønsberg kommune) にある城山博物館 (Slottsfjellsmuseet、旧ベストフォル県博物館 Vestfold Fylkesmuseum) に寄贈されたガラスネガ (ガラス乾板) で、撮影者は東洋捕鯨などの日本企業でも砲手として活躍したヘンリック・メルソム (Henrik Govenius Melsom 1870-1944) である。彼は、捕鯨砲を発明したスベン・フォインの捕鯨事業に参加したあと、1897年にウラジオストックに移りケイゼルリング伯爵の捕鯨会社で砲手として働き、7年を過ごした。日露戦争時に一時帰国したが、自ら捕鯨船を購入して再び朝鮮半島沿岸の捕鯨に従事し、1912年にノルウェーに帰国した (SKIPSREDER H. G. MELSOM [船主メルソム] <http://www.lardex.net/larvikmelsom/hgmelsom.htm> 2019/7.29 閲覧)。日本企業への就業は、後述のとおり1906 (明治39) 年からである。

写真の原所有者は、メルソムの次女で長崎生まれのシグリ (Sigrid Govenius Melsom 1903-2001) である。撮影者と原所有者のほかは、ネガへの注記や撮影に関する情報は皆無であった。なお、日本語文献では、Melsom の名前を「メルソン」や「Melson」と誤記したものが目立つので注意したい (明石編 1910、神長 2002、宇仁ら 2014など)。ベストフォル県は、捕鯨砲を開発したスベン・フォインの故郷であるテンシュベル市、捕鯨博物館で有名なサンネフヨル (サンデフィヨルド Sandefjord) 市などが存在するノルウェーの大型捕鯨の中心地である。ネガの存在は、筆者が2016年9月にベストフォルアーカイブ (Vestfoldarkivet) に対し、1900-1930年代の日本の近代

捕鯨に関連した写真の所蔵について照会したことへの回答の形で示され、その時点では受入担当者だけが知る資料だった（ベストフォルアーカイブの Lone Kirchhoff 氏2016.9.20私信）。筆者は、2016年11月に同アーカイブを訪問してネガを実見、約190枚を複写したほか、これとは別の写真のデジタルデータを複写との重複を含め47枚分を得た。ネガには、シグリが長年住んだ家、ノルウェー国内の風景や捕鯨船、イタリアのポンペイ、インドなどの写真も含まれ、日本を含めた極東地域に関連すると判断した写真は52枚であった。この52枚について、文書や文献、関連する絵葉書や写真、さらには撮影地を訪問することなどにより、被写体情報の特定を可能な範囲で行なった。結果は、写真の解説レポートとしてアーカイブに送付し、現在ウェブサイトで公開されている（HJELP FRA JAPAN - GAMLE FOTOGRAFIER IDENTIFISERT [日本からの助力—古い写真の同定] <http://www.vestfoldarkivet.no/hjelp-fra-japan-gamle-fotografier-identifisert/> 2019.7.29 確認）。

本節は、H. G. メルソム撮影のガラスネガ極東関係分52枚のなかから、捕鯨や捕鯨船に関係した写真12枚について、詳しい説明を加えたものである。写真には、撮影地や被写体が特定できなかったものもあるが、他では得られない貴重な記録として収録した。捕鯨船の名称では日本船籍と確認されたものは丸、日本企業の傭船であるが外国船籍と思われるものは号、外国企業の場合は船名のみとした。聞き慣れない地名が多い朝鮮半島に関しては地図を作成した（図2-1）。読み仮名は、日本語での呼称である。ロシアの捕鯨会社の名称はケイゼルリンクのものは最初「太平洋漁業会社」と称し、1899年4月に「ケイゼルリンク伯爵太平洋捕鯨漁業株式会社」に改組されたという（神長2002）。正式名称が長く改称もされていることから、本論ではケイゼルリンクの捕鯨会社は正式名称が必要な場合以外は便宜的に「ロシア太平洋捕鯨会社」と記す。なお、ディディモフのものは崎浦訳（1956）も神長（2002）でも会社名が示されていない。

2) 写真と解説

ロシア企業の捕鯨船と乗組員

ロシアの捕鯨会社の捕鯨船の写真は、ギョルギー号のものが残されている（写真2-1）。撮影場所は不明であるが、背景に写る丘陵の植生が貧弱なことから朝鮮半島沿岸と判断している。船名は不鮮明ながら前マスト下部に記され ГЕОРГИИ [ギョルギー] と読める（写真2-1右拡大写真）。この

船について神長（2002）はゲオルギイとしているが、本論では『日本船名録』に従い「ギョルギー」とする。明石編（1910）も「ギョルギー」である。『日本船名録 明治41年版』（逓信省管船局編 1908）に現れる同船の船名は「ギョルギー丸」、船体番号10328で、スクーター型の帆を備えた蒸気船として登録され、総トン数137トン、長さ95.2尺 [約29メートル] とあり、翌年には内外水産の所有となった（逓信省管船局編 1909: 132）。ギョルギー号は、艦橋と煙突の船尾側の甲板で写した集合写真も残されている。この写真にはメルソム砲手が写り、アジア人も多数含まれることから乗組員の写真と判断する（写真2-2）。ここに写る人物は12名で、後列左から3人目の犬を抱えているのがメルソム砲手である。同時代の水産雑誌の記事には、ギョルギー号の乗組員について1899-1900年は13人、1901年は12人で、ロシア人船長、ノルウェー人砲手、ロシア人機関長、朝鮮人水夫8人、中国人炊事係1人（1899-1900年は2人）と記されており（朝鮮漁業協会 1900、森田 2000、渡邊 2006: 34-35）、写真の人物が1901年のとおりだとすると、ロシア人船長が後列中央であり、炊事係は乗組員のなかで最も地位が低いので甲板に座った前列右端の人物かも知れない。中央に座る男性はキリンビールの瓶を手をしている。この写真での船名は人物の背後上部にある救命浮輪の文字 ГЕОРГИИ がはっきりと読み取れる。I の文字は現代のロシア語では用いられないが、1918年まで使われていた（黒田 1998: 83-87）。人物背後中央の銘板の文字は AKERS MEK. VÆRKSTED（アカース機械製造所）と記され、下部の文字で見えているのは一部であるが、ノルウェー独立以前のオスロの名称 KRISTIANIA（クリスチャニア）と刻まれている。ギョルギー号の名は、Tønnessen（1967: 187, 188, 210）にも現れ、ウラジオストク近郊の捕鯨基地ガイダマークに到着したのは1895年という（神長 2002: 60）。撮影年は、ギョルギー号の到着からロシア太平洋捕鯨会社が日露戦争によって操業停止に至るまでの1895-1904年のうちである。なお、ノルウェーのスウェーデンからの独立は1905年であるので、メルソムが日本海に来たのはスウェーデンの統治下の時代となる。

同社のもう一方の捕鯨船ニコライと乗組員と思われる写真もある（写真2-3）。写真では船名は不明だが、鯨の解剖に使用するクレーンが見えないことから捕鯨船と判断し、同社の捕鯨船は2隻であることからニコライと推定した。ニコライの乗組員は、1899-1900年はロシア人船長、ノルウェー

一人砲手、ロシア人機関長、朝鮮人水夫8人、中国人炊事係2人の13人、1901年は12人で中国人炊事係が1名と記録されている（朝鮮漁業協会 1900、森田 2000、渡邊 2006: 34-35）。写真に写る人物は14名で、記事とは人数が異なるが、欧州人が後列左側の3人であれば、この部分は合致する。ネクタイをした後列中央の男性がノルウェー人砲手かも知れない。撮影場所は、甲板が末端に向かって高くなっていること、高い手すりと舷牆（ブルワーク）の鯨吊穴から上甲板船首部とわかる。撮影年は、写真2-2と同様に1895-1904年である。なお、東洋捕鯨の岡十郎も当時の捕鯨船の乗組員は14人と述べており（明石編 1910: 3）、ニコライ丸の乗員も標準的な人数であった。

解剖船

船名は不明であるが、解剖船での鯨を解剖する写真がある（写真2-4、2-5）。複数の吊り具が見えることから解剖船であり、複数の作業が同時に進行していることがわかる。撮影場所は、背景の植生から朝鮮半島沿岸と推定する。陸上設備に横付けせずに解剖していることから、日本の捕鯨ではなくロシア太平洋捕鯨会社の写真と判断した。理由は、ロシア企業による朝鮮半島沿岸の捕鯨も事業場を欠いた状態で始められたこと、日本の捕鯨会社も1900年代初めまでは解剖船を使用していたが事業場に横付けする形で作業をするのが通例だったこと、撮影者のメルソムがその時期に契約関係のない日本の解剖船で撮影することは考えにくいことによる。撮影年は、ロシア太平洋捕鯨会社が裁割地を確保する1899年以前かも知れないが、裁割地の地上設備が整備された時期は不明であり、撮影年は1895-1904年としておく。鯨は大きさやウネの白色と幅からナガスクジラと思われる。解剖船での解剖作業を船の外からではなく、作業中の甲板上から撮影した写真はめずらしい。

鯨の解剖作業を解剖船から写した写真は珍しく、日本も近代捕鯨の導入期には同様の方法を採用しており、当時の日解剖作業を知る参考資料となる。この当時の解剖船の作業は『実地探検捕鯨船』（江見 1907: 58-67）が活写しており、本章で紹介した写真は同書の記述の理解を助ける。

ロシア捕鯨の根拠地

1899年、ロシア太平洋捕鯨会社が裁割場として大韓帝国から許可を得たのが、新浦 [しんぽ、新甫とも] 沿岸の馬養島 [まようとう]、長箭 [ちゃんぜん、長箭津とも]、そして蔚山の対岸にある長生浦 [ちゃんせんぽ、長承浦とも] であった（朝鮮漁業協会 1900）。

写真2-6は海岸近く切り立った岩山が連なる金剛山と長箭湾である。写真の右に見える船は、捕鯨砲と見張台から捕鯨船と確認できる。場所の特定に用いた資料は大洋漁業八十年史編纂委員会(1960: 267)に収録された戦前の写真(図2-2)、そして戦前の地形図である(図2-3、改造社編1930: 82より)。図2-3中の矢印は、Google Earthも用いて撮影場所から写真2-6の撮影方向を推定したものである。金剛山は山の連なりの総称で、写真中央の頂きは千佛山に比定できる。撮影年に関する手がかりはないので、メルソムが極東に到着してから帰国するまでの間の1895-1912年としておく。なお、金剛山は日本統治時代から景勝地として知られており、現在も韓国と北朝鮮との合同での観光開発事業が試行されるなど観光地として有望な場所として知られる。

日本の捕鯨企業の事業場

ここからは日本の捕鯨会社に関する写真である。写真2-7は朝鮮半島南東部、現在の蔚山広域市の南部にあった長崎捕鯨合資会社の長生浦捕鯨事業場である。2枚の写真をつなぎあわせた。陸地には右端に倉庫のような建物が見え、中央右に鯨の下顎骨でできた門のような飾り「鯨骨門」が見える。鯨骨門は6章で取り上げる。クジラを吊り下げる解剖設備の支柱「ボック」や引揚棧橋(引揚げ斜路、スロープ)が見えないことから、解剖は解剖船によって行われていたことがわかる。背景は、地形から現在は長生浦鯨博物館などがある長生浦の集落である。場所の特定は、勇魚文庫蔵が所蔵する発行年不明の絵葉書「韓国長承浦ニ於ケル長崎捕鯨会社ノ全景*東洋軒発行」(図2-4)によった。事業場の建物の形状や配置、建物に描かれた尾びれの図や横三本線の印、背景の民家の並びなどが一致する。写真2-7は、この絵葉書に比べて事業場の建物が少なく、より早い時期の撮影であろう。

長崎捕鯨合資会社の社章について言及した資料は見つかっていないが、略称は「三〇[さんまる]会社」であるので(渋谷 1967: 20-21)、横三本線の印が社章であってもおかしくない。長生浦の漢字表記は、絵葉書のような「長承浦」も使われたが、当時から長生浦の使用は普通であり、本論では現在の表記に従った。絵葉書の「長崎捕鯨会社」というキャプションは、蔚山に事業場を有した長崎捕鯨組またはその後継で1904(明治37)年に設立された長崎捕鯨合資会社(渋谷 1967: 20-23)のどちらを指すのか判然としないが、長崎捕鯨組が日本遠洋漁業から租借地の一部を無償

で譲り受けたことで改組して長崎捕鯨合資会社を設立したという記述から（明石編 1910: 239-240）、長崎捕鯨合資会社と判断した。写真2-7に写る中央右の黒い帆船の船尾には「妙見丸」の文字があり、手前横向きの弁財船は2本マストで縦帆を備えた和洋折衷船である。

長崎捕鯨の事業場の場所は、岬状の地形、対岸の近さや北東方向の見通しから、戦前の地形図に「捕鯨会社」と記された東洋捕鯨の事業場の場所（図2-5、水色三角印）ではなく、そこから北東にある突端のように見える（図2-5、橙色三角印）。ソウル大学にある奎章閣が保管するケイゼルリンクが大韓帝国と交わした1899（光武3）年4月29日の日付がある書類には、陸上基地の絵地図が添付されている（奎章閣蔵「蔚山九井浦剖鯨基地」奎23284）。この図には、中央水色の入江の上にある蔚山郡外岬面九井里が現在の長生浦、入江の下部、逆さの帆船の右にある三角形が土地には長さが記載され租借地と思われる（図2-6）。この図では場所が判然としないが、長生浦洞の民家が対岸にはっきり見える場所であることがわかる。また、朝鮮漁業協会（1900: 6）に挿入された図では、太平洋捕鯨会社の使用地ははっきりと明示されていないが、形状、そして船との位置関係から「ウリソウ港」南岸入口付近と突端と思われる（図2-7、矢印）。

長崎捕鯨の事業場の写真（写真2-7）は、この雑誌が伝えるロシア太平洋捕鯨会社の裁割地の土地に位置や形状が似ており、長崎捕鯨合資会社は、その施設をそのまま利用したものかも知れない。蔚山事業場長必携の沿革には「蔚山には元東洋漁業株式会社、長崎捕鯨合資会社および日韓捕鯨合資会社の3会社事業場並立する」とあり、長崎捕鯨と東洋漁業の事業場は別の場所であったことが伺える。従来知られていた書類や雑誌記事では不明であったロシア太平洋捕鯨会社の裁割地の場所が、メルソム砲手の写真によって特定でき、その場所を長崎捕鯨が引き継いだことがほぼ証明できたと考える。

なお、現在の長崎捕鯨と東洋漁業の事業場の場所は港湾開発で埋め立てられ元の地形がわからなくなっている。長生浦鯨博物館は東洋捕鯨や長崎捕鯨の事業場の向かい側になる（図2-5）。

撮影年は、長崎捕鯨合資会社が朝鮮での捕鯨特許を受け継いだ1904年から（渋谷 1967: 22-23、明石編 1910: 239）、同社が東洋捕鯨の設立に参加し会社が消滅した1909年まで、つまり1904-1909（明治37-42）年である。

捕鯨船メイン号

写真2-8に写るのはノルウェーの国旗を掲げる捕鯨船メイン号である。船名はマストのあたりの舷側上部にはっきり見えている。マストに掲げられた旗は、写真2-7で長崎捕鯨合資会社のものと推定した横三本の印と同一である。メイン号は1906（明治39）年に長崎捕鯨に備船され（明石編 1910: 252）、10月におそらく長崎に到着した（渋谷 1967: 23）。煙突の印（ファンネルマーク funnel mark）は、日本の捕鯨会社で合致するものは見えず、おそらくノルウェーの会社のものと思われる。撮影場所は不明だが、マストの旗が長崎捕鯨合資会社の旗とすれば、同社の漁場であった九州北部から朝鮮半島沿岸の可能性が高い。撮影年は、長崎捕鯨合資会社のチャーター開始から同社が東洋捕鯨に合流するまでの1906-1909年である。この写真のメイン号はノルウェー船籍である。その後もメイン号が『日本船名録』に一度も現れないことは、日本船籍にはならずノルウェー船籍のまま日本の捕鯨会社で備船操業したことを示唆している。

三菱造船所小菅修船場

写真2-9は、三菱合資会社三菱造船所小菅修船場のメイン号で、おそらく塗装工事中である。小菅修船場は当時の設備の一部が現存しており、1969（昭和44）年に「小菅修船場跡」として国指定史跡に指定され、2015年7月には世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の一つに登録された。撮影地を特定した根拠は、地形や背景の段々畑の様子がよく一致する長崎県立長崎図書館が所蔵する写真（図2-8）、そして土地利用は異なるが同様の地形と線路が残る同地の2017年3月の現地調査による（図2-9）。この写真は、小菅修船場が稼働中のもっとも鮮明な写真と思われ、世界遺産の資料としても貴重と考える。撮影年は写真2-8と同様に1906-1909年である。

捕鯨船第二東郷丸

長崎捕鯨の捕鯨船はもう1隻、おそらく第二東郷丸と判断される船が写されている（写真2-10）。煙突の印は長崎捕鯨であることから同社の社有船と思われる。船名部分を拡大しても被写体ブレのため判読不能だが、漢字5文字の船名であることは確認できる。同社が所有した捕鯨船のうち漢字5文字の捕鯨船は、第一東郷丸と第二東郷丸の2隻であり、写真の船名の右から2文字目は一よりも二であるように見える。このことから第二東郷丸と判断した。第二東郷丸はノルウェーで

建造され、カナダ大西洋岸でノルウェー人が経営する捕鯨会社で Humber として活躍した

(Dickinson and Sanger 2005: 51)。長崎捕鯨が購入したのは1906(明治39)年で、改名してこの名になった(渋谷 1967: 23)。明石編(1910: 252)では1907年の購入としている。撮影場所は不明だが、同社の漁場であった九州北部や朝鮮半島近海の可能性が高い。撮影年は、購入から東洋捕鯨に合併吸収されるまでの1906-1909年である。

メルソムの娘で写真の原所有者のシグリ

少女の写真(写真2-11)は、蔚山の捕鯨船同乗記『実地探検捕鯨船』(江見 1907)の口絵にある「砲手メルソン氏の愛児」とキャプションが添えられた写真(図2-10)と一致し、両者は同一のネガから作成されたものである。メルソムの子どもは娘5人で、写真の少女に該当するのは、生まれ年から1903年に長崎で生まれた次女シグリ(Sigrid Govenius Melsom 1903-2001、Krohn-Holm 1972: 67-69)と判定できる。シグリは本報告の写真の原所有者であり、本論では掲載しないがメルソム撮影の写真にしばしば登場する住宅に晩年まで住んでいた。撮影年は出生年と江見(1907)の出版年から、1904-1907年と考える。

釜山港

捕鯨とは直接関係ないが、釜山港の写真があった(写真2-12)。釜山港と判断した根拠は、写真帖「千葉県水産試験場開場式挙行記」(国立研究開発法人水産研究・教育機構中央水産研究所蔵)に集録された「釜山港突堤ヨリ市街ヲ望ム」と記された多数の日の丸が翻る写真で(図2-11)、中央部の高い寄棟の建物とその右下の長い切妻の倉庫状の建物が一致する。撮影年は手がかりがないためメルソムが朝鮮半島沿岸の捕鯨に従事していた期間全体の1895-1912年のうちである。

以上がノルウェーのアーカイブが保存する、ヘンリク・メルソムが撮影した20世紀初頭の朝鮮半島沿岸での捕鯨の写真の核心部分である。ロシア企業が朝鮮半島沿岸でおこなった近代捕鯨は、日本が直接の手本とした操業であった。ここで紹介した写真によって、これまで文献資料でのみ理解されていた事象が視覚的に裏書きされた。また、長崎の世界遺産「小菅修船場」の稼働状況や捕鯨史上の意味、乗組員の年齢や服装などこれまで文書では十分に伝えられずにいた事象も視覚情報として議論可能になったと考える。メルソムが撮影した写真のなかには、朝鮮の伝統的な民家、ノル

ウェー人砲手の家族と朝鮮人、ノルウェー人と日本人の船上記念写真、福岡の日蓮聖人銅像、九州と思われる松林のなかの病院、日本人看護婦、神社や寺院など、日本や朝鮮に関連の深い写真が数十点含まれている。捕鯨でまちづくりを進める韓国の蔚山広域市や長生浦鯨博物館、長崎県や下関市にとっても有益な資料になるとと思われる。

2節 北と外地へ展開した捕鯨根拠地

捕鯨の事業は捕獲部門と解剖部門に大別される。網取り捕鯨では捕獲担当の捕鯨船団を沖場、解剖と鯨油や鯨肉の製造部門は納屋場と呼んだ。近代捕鯨も例外ではない。設備としては捕鯨船と陸上の事業場が二大設備である。後述のとおり、初期の近代捕鯨会社では製造部門や販売部門は大きくなく、赤肉などの製品は事業場に買付に来た卸売り会社に販売しており、肥料にする場合でも自社製造ではなく事業場で隣接した肥料製造会社に肉や臓物などを販売していた。本節では根拠地となった地方の全体的な傾向と変遷の概略を記してみたい。

近代沿岸捕鯨の事業場は当初から設置や廃止が相次ぎ、計画中や許可を取得しただけの場所やごく短期間で廃止された場所などがある。時系列にそった記述を目指して詳細を述べると繁雑となり、全体の把握がかえって困難になる。そこで事業場については、東洋捕鯨が設立された1910（明治43）年以前に操業した事業場、太平洋戦争の期間中の1941-1945（昭和16-20）年に存在した事業場、そして対象期間に存在した事業場の3つに絞って述べる。戦前の捕鯨根拠地を図示した報告は複数あり、1910年当時の東洋捕鯨の事業は『本邦の諾威式捕鯨誌』（明石編 1910）、戦時中の事業場は「捕鯨資料 第八輯ノ（一） 日本沿岸捕鯨業」（日本捕鯨業水産組合 1940）や「捕鯨便覧第一編」（日本捕鯨業水産組合 1943）、戦前の根拠地の全体については序章の図1-4で紹介した「日本近海の捕鯨業とその資源」（笠原 1950）やGHQの報告書（Terry 1950）が掲載している。大枠はこれら既存の報告が示すとおりだが改良点が残されている。それはすべてを網羅した漢字名称の一覧が報告されていないこと、そして細かな部分で誤記や未記載の部分であり、加えて古い時代の記録であり現在必要な解説を加えることである。根拠地の位置の変遷については笠原（1950: 16）は歴史的な考察は加えていない。なお、笠原（1950）は根拠地を図示する基準として「一度で

も操業した」ことを採用しているが、本章では操業記録があるいは設備整備の記録が得られた根拠地を「存在した」、それらの証拠がなく名称の記載だけの場合は「記録が得られた」と表現している。また、操業や設備整備に疑問があるものやその証拠がない根拠地はその旨注記した。

1) 既知の漁場に展開した近代捕鯨初期1899-1909年

最初の根拠地は朝鮮だった

日本で最初に近代捕鯨の事業化に成功したのは、1899年に設立、山口県の長門に本社を置いた日本遠洋漁業株式会社である。同社の捕鯨事業は、捕鯨船が捕獲した鯨を簡易的な陸上基地に横付けした解剖船で解剖して運搬船で製品を搬出するものであった。同社の営業報告（山口県文書館蔵）に捕獲記録が表として現れるのは第3回（期におなじ）以降であるが、いずれも捕鯨船ごとに集計されている。これは事業場の役割が重要ではなく、捕鯨船と解剖船の組み合わせが捕鯨事業の単位になっていたことを示している。陸上基地とした場所は、第1回（1899.7-1890.5）が朝鮮南部の釜山と蔚山、第2回（1900.6-1901.5）は鹿児島県種子島沖の操業のための薩摩半島山川港、朝鮮北部の元山と元山新甫、第3回（1901.6-1902.5）および5回（1903.6-1904.5、第4回は所蔵せず）ならびに第6回（1904.6-1905.5）は朝鮮南部の蔚山のみ。このうち種子島は失敗と総括しているので（明石編 1910: 211-215）、同社の実質的な操業海域は朝鮮半島沿岸の日本海沿岸に限られていた。つまり日本遠洋漁業の操業海域はロシア太平洋捕鯨会社が見つけた漁場に限られていた。

日本では、日本遠洋漁業の成功を見て近代捕鯨を手掛ける会社が続出するなか、日露戦争の勃発によってロシアの捕鯨船や工船が拿捕される。戦争は日本の勝利で終わり、拿捕した捕鯨船と工船は政府から民間企業に払い下げられることになった。同様に、朝鮮半島でロシアが大韓帝国から許可を得ていた陸上基地を日本が引き継ぐことにもつながった。日本遠洋漁業は1904年に「韓国捕鯨特許約款」（奎章閣蔵 奎23104、明石 1910: 付録7-13）を大韓帝国から受け取り、自社の根拠地として使用することに成功している。そのようななか、操業実績がないまま衆議院議員の有志が日韓捕鯨株式会社の発起人としてロシア船の払い下げを政府に要請した。それに対して農商務省貸下げ先を捕鯨会社合同の団体にしたいとの意向を示し、日本遠洋漁業は捕鯨会社の合併を画策するが成功せず、日韓捕鯨と合併という形で新たに東洋漁業株式会社を設立して払い下げを受けてい

る。同時に本社所在地を仙崎から下関に移している（明石編 1910: 231-235）。

20世紀初頭には太平洋沿岸に事業場が展開した

払い下げによって捕鯨船を増強した東洋漁業は、四国や本州の太平洋沿岸での事業に着手する。まず漁獲試験を始め、1906（明治39）年4月に房総方面、5月に金華山方面で試験操業をおこなった。朝鮮では蔚山を主力根拠地に定め、年度内に海面埋立てをおこない設備を整備、長箭は予備の根拠地とした（第2期報告書 1905.8-1906.7）。同社が太平洋側で最初に操業を始めた根拠地は、1906年4月の千葉県銚子で直営の解剖設備を置き（同社東京出張所第1期事業報告 1906.4-7）、同年8月に宮城県鮎川、11月に和歌山県紀伊大島、12月に高知県甲浦で試験操業を始めたが、地元村民からの反対運動を受け、土地も狭いため隣接する徳島県穴喰に移転することが進められた（同社東京支店第2期事業報告 1906.8-1907.7）。1907/08年の操業年度の事業場は、蔚山、〔土佐〕清水、穴喰、大島、銚子、鮎川の6か所であった（第2〔ママ〕期報告書 1908.8-1909.7〔第4期の誤りか〕）。東洋漁業東京支店が所轄する事業場は土佐や紀州の網捕り捕鯨以来の漁場が中心で、そこに関沢明清らの調査がおこなわれた本州太平洋岸の漁場を加えている。いずれも既知の捕鯨漁場に事業場を置いたことがわかる。

なお、東洋漁業の東京の出先機関の事業報告は、出張所として設置した期を第1期とし、支店に改組しても期の番号は継続させていると読める。また、会社全体の報告書の期とは一致しない。さらに会社全体の報告書の期については「第2期」と題するものが年違いで2つ存在し、後のものは第4期であるものが誤って第2期と印字されたものとする。

1910年までに使用された根拠地

1909年、東洋漁業が中心となり国内大手の捕鯨会社4社の合併により東洋捕鯨が設立される（明石編 1910: 268-280）。1910年に東洋捕鯨が所有していた事業場は明石編（1910）付録の地図に示されている21事業場から許可申請中の台湾を除いた20事業場20根拠地であった。能登半島の事業場は能登と小木の2か所を合わせて1か所と数えている。これらすべてで操業実績があったのかどうかはわからない。しかし、この地図をもって1910年当時の近代捕鯨事業場の分布というには不足がある。なぜならここには不記載の根拠地があり、それは同年までに閉鎖された事業場だけが存在し

た根拠地、東洋捕鯨の設立に加わらなかった捕鯨会社の事業場だけが存在した根拠地、この2つの場合である。それらに該当する根拠地として、内外水産の北海道様似（様似町史編さん委員会編 1992: 777）、大東漁業の岩手県両石（伊豆川 1943: 645-646）、内外水産の同県桑浜（釜石事業場長必携）、紀伊水産の和歌山県串本（明石編 1910: 263-264、串本町 1924: 368-369）、大東漁業の高知県浮津（伊豆川 1943: 645-646）、長門捕鯨の山口県仙崎、長崎県対馬の泉、東洋捕鯨の設立に参加した大日本捕鯨が短期間操業した佐賀県呼子（明石編 1910: 257-260）と長崎県対馬の西泊（日野 1978）、そして佐賀県小川島とそれが1910年1月に移転した加部島（安永 2011）の11か所が見つかった。これらを合わせると、1910年までに近代捕鯨の根拠地は北海道1か所、青森1か所、岩手2か所、宮城2か所、千葉1か所、三重1か所、和歌山1か所、山口1か所、徳島1か所、高知3か所、佐賀3か所、長崎5か所、宮崎1か所、鹿児島1か所、朝鮮4か所の31個所となる（表2-1、図2-12）。表2-1の「第二次合併」は、東洋捕鯨が1916（大正5）年に内外水産、紀伊水産、大日本捕鯨、長門捕鯨を吸収合併したものを指している。様似については、地元の旧家が1910年に内外水産の捕鯨船をチャーターした操業で1月半に大鯨27頭に捕獲したという記録があり（様似町史編さん委員会編 1992）、東洋捕鯨単冠事業場長必携の沿革には、同事業場の設備の一部は内外水産の様似事業場から移設したと記述されており（宇仁 2015: 22）、実際に操業したと思われる。

1910年までに存在した根拠地は、朝鮮半島東岸、北九州、高知、紀伊半島などに多く、本州東部では日本海に能登の1か所（実際には能登と小木の2個所）、太平洋側では青森から千葉にかけてであった。北海道にはごく短期間に終わったが様似が存在した。これらの根拠地のほとんどは紀州や土佐、西海など西日本の網取り捕鯨の漁場、そしてロシア太平洋捕鯨会社が漁場とした朝鮮半島東側の日本海沿岸に分布していた。それ以外の事業場の場所も定置網捕鯨やアメリカ捕鯨の実績がある場所が多く、過去に捕鯨の実績が見られない根拠地は青森県鮫と北海道様似の2か所だけだった。日本の近代捕鯨導入期である1899-1910年の漁場は、近世捕鯨やロシア捕鯨、アメリカ捕鯨による既知の漁場で操業したことが明らかである。ただし、捕獲対象となった鯨類はナガスクジラとシロナガスクジラが中心で、近世にはほぼ利用されなかった資源であった。

2) 太平洋戦争1941-1945の根拠地

次に本論が対象とする期間の終末期である太平洋戦争の期間中の沿岸捕鯨の根拠地を見てみたい。太平洋戦争の後半になると潜水艦や機雷を避けるため操業停止となった事業場があった一方、それらの代替地として新たな設置があった（徳山 1995: 139-166）。また、1911年に締結された鯨豚獣保護条約により民間人の立ち入りが禁じられていた中部千島沿岸は、1942年になって農林省の監督下で民間事業者による捕鯨を操業させるなど（日本海洋漁業協議会 1951: 219-221）、1941年以前とは異なる条件により事業場の移転や新設がおこなわれた。戦争中の根拠地の分布は特定の年度で代表させることは無理があり、太平洋戦争の期間中をとおして見ることが旧式の捕鯨船で操業した近代沿岸捕鯨の根拠地の最終的な分布を知るには適している。

戦時体制下の日本では国内資源の総動員という視点から捕鯨の調査がなされ「捕鯨資料 第八輯ノ（一） 日本沿岸捕鯨業」（日本捕鯨業水産組合 1940）と南極海を含めた「捕鯨便覧第一編」（日本捕鯨業水産組合 1943）の2つの報告書が出版された。著者の日本捕鯨業水産組合は東洋捕鯨の設立に先立ち結成された捕鯨企業で作る組合であり、水産局から見れば捕鯨会社を統率する窓口ともいえる。戦時中に新たに設置された事業場として、1943年に中部千島の新知島（シムシル島）の梅浦に日本海洋漁業統制株式会社（日本水産系）と西大洋漁業統制株式会社（大洋漁業系）の事業場（日本捕鯨業水産組合 1943）、朝鮮日本海側の九龍浦に前者の事業場が新設され（日本海洋漁業協議会 1951）、1945年には朝鮮の半島西岸の於青島 [おせいとう] および中国の青島の2根拠地で後者による事業場設置があった（徳山 1995）。千島列島新知島の梅浦と朝鮮半島日本海側の九龍浦の2か所の操業は場長必携からも確かめられる。これらを合わせた根拠地と事業場数、すなわち1940-1945年に存在したことがある沿岸捕鯨の基地は32根拠地（千島7か所、内地14か所、外地11か所）、46事業場（日本水産26、林兼商店 [大洋漁業] 12、遠洋捕鯨6、鮎川捕鯨4）となる（表2-2、図2-13）。日本捕鯨業水産組合（1944, 1943）の2つの報告書に記載がある幌筵島の加熊別は実際には開業せず（宇仁 2016b）、1943年の室蘭は（かっこ）に入った記載で従業員数も3名と少数で1941-1950（昭和16-25）1943年は操業していないことから（室蘭事業場長必携）、表2-2には記載していない。

1940-1945年に操業した捕鯨根拠地の地域を詳しく見ると、千島7、北海道3、本州4、九州5、奄

美1、小笠原1、樺太1、朝鮮7、関東州1、青島1、台湾1となり、内地14か所のうち2か所は奄美と小笠原であり、日本の主要4島の根拠地は12か所で四国には無く、網捕り捕鯨の操業地域は太地、紀伊大島、呼子、大河内、壱岐、有川の6か所と少なく、このうち主要な事業場は紀伊大島だけとなっていた。太平洋戦争の期間中に操業した根拠地は32か所のうち、戦後に失った根拠地は千島と外地を合わせた18か所と半数を超える。網取り捕鯨時代からの漁場が不振となるなか、近代捕鯨はその根拠地を新たな漁場を求めて三陸地方や北海道、朝鮮や黄海、千島に求め、1930年代前半には捕獲数では千島が日本全体の3-4割（宇仁 2017b）を占めるまでになり、大洋漁業の社員によると年代は不明だが千島列島への出漁不能は夏季の漁獲量の50%減少を意味したという（徳山 1995: 149）。当時の日本の統治地域の遠方にまで拡大した近代捕鯨であったが、敗戦によって黄海や朝鮮そして千島の有力漁場を失った。

3) 1899-1945年に記録が得られた沿岸捕鯨の根拠地

最後に1899-1945年に記録が得られた根拠地の一覧を作成してみたい。上述のとおりすでに「日本の捕鯨業とその資源」（笠原 1950）やTerry (1950) の報告があるが、少数の欠落が存在すること、根拠地がローマ字表記であるので、欠落を補い漢字表記による改良版を示したい。作図するにあたり、笠原（1950）に図示された根拠地は記載どおり一度でも操業した根拠地として扱い、特記事項があれば注記した。笠原（1950）に欠けている根拠地は、前述した様似や巨済島のほか、場長必携からは幌筵島の北千島、東洋捕鯨の営業報告からは徳島県穴喰（現・海陽町）、大日本水産が短期間操業した樺太の内音（ないおん）（日本捕鯨業水産組合1912、岡田 1913）と張碓（北海道庁 1914: 538）など計6箇所である。青島については、名前は示されているが、地点が地図上に示されていない。Terry (1950) は笠原より多い82事業場を示しているが、朝鮮の巨済島の位置が誤っており、樺太の内音、北海道の張碓と様似、秋田県戸賀、和歌山県勝浦、そして佐賀県小川島の計6か所が欠けている。

以上から、本論が対象とする明治から終戦、1890年代から1945年に至る約半世紀の間に記録が得られた近代沿岸捕鯨の根拠地は、当時の日本の統治地域の全域にわたる88か所となった（表2-3、図2-14）。図2-14はTerry (1950: 23) のFig.1 を追記改訂したもの、表2-3は得られた漢字表記とした

ものである。なお、朝鮮南東部の丑山浦 [ちゅうざんぼ] については、本論の調査では操業も設備の記録も得られなかった。千島の根拠地名の読みは『写真集懐かしの千島』（写真集懐かしの千島編纂委員会 1981）を参考にした。

4) 近代沿岸捕鯨の安定期1910-1933年における東洋捕鯨根拠地の分布変化

捕鯨会社の根拠地の変遷を記した文書が少ないなか、東洋捕鯨に関しては営業報告が設立の年から日本捕鯨に改組された後の第2期1934.11-1935.4までが入手できた（日本水産蔵の複写版を利用）。つまり東洋捕鯨の存続期間をとおした事業場の変遷を追うことができ、場長必携とあわせることで新規の根拠地設置の経過を見ることができる。出発点となる第1期（1909.5-1910.4）の営業報告に記された事業場は22個所であった。個別名を示すと鮫、鮎川、荻浜、銚子、二木島、太地、大島、宍喰、甲浦、清水、細島、甑島、五島、有川、比田勝、宇出津、小木、蔚山、巨濟島、長箭、新甫、恒春 [台湾] である（表2-4）。なお、表2-4では第2期以降の表示に合わせ宇出津と小木をまとめて1か所としている。営業報告によると、このうち操業したのは夏季（5-7月）5個所、冬季（初秋-晩春）9個所と述べているが操業した事業場の具体名は列記されていないため、本文中からそれとわかるものだけを操業した事業場とした。新設された事業場は明記されていないが、宇出津は「今期新たに開始」とあるので新設と判断した。

なお、東洋捕鯨の営業期は東洋漁業からの継続ではなく、設立年を1期として新たに設定されている。また、第3期は1911.5-1912.1の9か月間、第4-9期は2-7月または8-1月の半年間である。そのため第5期以降は設立からの経年と期の年数が一致しない（表4-4）。

東洋捕鯨が設立から1916年の第二次合併までに新設した事業所には室蘭（北海道）、戸賀（秋田県）、佐渡（新潟県）、下田（静岡県）、三国（福井県）、美保および隠岐（島根県）と新設場所は日本海と太平洋の両方で広がりを見た。このうち美保には近世捕鯨の記録があり（三代 2011）、隠岐の事業場もおなじ漁場を想定したものと思われる。下田は関澤明清による伊豆大島海捕鯨試験（農商務省水産試験所 1893: 19-23）の海域、室蘭は内外水産の操業実績がある様似の漁場に近い。他方、戸賀と佐渡では先行する捕鯨の記録は得られなかった。東洋捕鯨は、過去の数少ない捕鯨実績を参考にした事業場の設置に加え、捕鯨の実績がないと思われる場所にまで根拠地を

新設していた。なお、この1916年までの営業報告には戸賀と佐渡では操業記録が見られないので、操業せずと判断した。また、東洋捕鯨が明治末までに置いた事業場のうち、本州の日本海側や静岡県のもは操業記録が得られる年がわずかで、短期間で廃止された場所が目立つ。営業報告には廃止の理由は具体的には記されていないが、これら操業しなかった事業場や短期間で廃止された事業場は成績が悪かったと想像する。

東洋捕鯨は第11期（1916.2-1917.1）の第二次合併では紀伊水産、大日本水産、内外水産、長門捕鯨の4社を吸収する。第二次合併で得た事業場について明石編（1910: 262-268）や様似町史編さん委員会編（1992: 775-779）、東洋捕鯨事業場長必携の「沿革」（宇仁 2016）から、東洋捕鯨が第二次合併によって新たに得た捕鯨事業場と旧会社名は、北海道の根室（紀伊水産）と様似（内外水産）、岩手県の桑浜（内外水産）、宮城県の荻浜（内外水産）、和歌山県の串本（紀伊水産）、山口県の仙崎（長門捕鯨）の6個所であることがわかった。これらのうち多くは同じ場所または隣接場所に事業場を既に有しており、合併による新規根拠地の確保は根室と様似に限られる。後に根室は後に西に約50km離れた霧多布（霧多布場長必携）に、様似は操業の記録が得られないまま択捉島の単冠に設備を移設している（単冠場長必携）、合併のメリットのひとつは事業場の設備の取得だったといえる。逆に合併の年に廃止された事業場は、営業報告の記載によれば朝鮮南部の巨済島1個所である。

東洋捕鯨が第二次合併の後に新設した事業場のうち、大黒山島と大青島、関東州の3個所は黄海にあり、近世でも近代でも捕鯨の記録は知られていない。既知の捕鯨漁場ではなく東洋捕鯨が独自の判断で設置したものである。設置の経緯の一端は「大黒山島根拠地出願及許可一件綴」（日本水産蔵）に記されている。ここに収録された手紙や稟議書類によれば、1916年8月に同島の概況を収集、同島の捕鯨根拠地の適否について、大黒山島と於青島そして大青島とを比較協議し、大黒山島がよいとの結論を出したことがわかる。場所は全羅南道務安郡黒山面曳里、面積は沿岸1919坪となっている。また、添付書類として大黒山事業場の仮設計書と図面、事業船の減少と根拠地の変更願に関する理由が添えられており、理由書（写し）には東洋捕鯨の岡十郎社長と日韓捕鯨の藤田守正代表社員がこの順で連名押印し、朝鮮総督府からの変更許可は同年10月3日付けで発行されている。

捕獲実績は後述するが、東洋捕鯨の第二次合併による直接の捕獲数の増加は、1915年から1916年の増加が300頭だったのに対し、1920年には千島での事業場の新設などによって東洋捕鯨として最高の3,546頭を捕獲している。つまり第二次合併による既存事業場の確保による捕獲頭数の増加は少なく、その後に設置された千島の根拠地での捕獲数増加が大きかった。このことは第二次合併の規模拡大の効果は既存事業場の確保よりも捕鯨船の増大にあったことを示している。捕鯨船の増大によって新たな漁場での捕獲に対応できたこと、さらに千島の事業場の漁期は既存の多くの事業場とは異なる夏季であったことで捕獲数が大きく増加したといえる。

一方、東洋捕鯨は山陰から東北地方の日本海側にも相当数の根拠地を有していたが成績が悪く、設置直後の操業の後は本格的には操業しないまま廃止された場所も多い。本格的な操業をしたかどうかは別にして根拠地は樺太や北千島から台湾南端、日本が第一次世界大戦によりドイツから得た青島、そして関東州まで大日本帝国の版図の広がりや隅々にまで及んだ（図2-14）。

以上、場長必携が残る東洋捕鯨の事業場の分布について会社設立時と比較すると、明石編（1910）ではまったく事業場が見られなかった北海道や千島、樺太、そして黄海に事業場が新設され、逆に本州中西部から四国、九州南部の事業場は減少したことがわかる。これは、1）近世捕鯨の漁場の資源が枯渇してきたこと、2）設立時の事業場は近世捕鯨やロシア捕鯨の漁場を対象にしたため冬期の操業が多かった反面、夏期に操業可能な事業場が少なく、捕鯨船の効率的な利用のため夏期に操業する北方の事業場を求めたこと、などが理由として考えられる。東洋捕鯨は、もともと優良だった漁場に第二次合併によって複数の事業場を得ることになったが、それ以上に南千島と黄海に新規漁場を自ら開拓したこと、合併で得た捕鯨船を効率的に用いたことが捕獲実績を上げた要因といえる。

3節 捕鯨事業場の設備と特徴、住民の鯨体験

本節では文書や写真を用いて捕鯨事業場の設備の特徴を見ていきたい。捕鯨事業場は初期の頃ほど木造の設備が多く、建物や設備を他の事業場に移設することがしばしばおこなわれている。たとえば長崎県対馬の比田勝は当初は竹簧の冷肉場だけだったものが、1909年以降に徳島県の宍喰から

建物やウインチなどを、蔚山から事務所と塩蔵桶などを移設して拡張した。そして1921年度には比田勝を廃止して対馬上島の反対側の大河内へその全部を移設している。北海道の根室事業場は釧路地方の霧多布に移転増改築し1926年度に霧多布へ全部移設、根室事業場の旧紀伊水産分は1917年度に色丹島の斜古丹へ全部移設、同年はまた岩手県の桑浜事業場を廃止して釜石へ全部移転、朝鮮の新浦の建物は1920年度におなじ朝鮮の楡津へ、択捉島の内保は1928年度に紗那へ全部移設、宮崎県の細島は1934年度に廃止し、同県の外の浦へ、そして外の浦も1943年度に廃止され朝鮮の九龍浦へ全部移設されている。

施設の移設の理由には、事業の廃止やより漁場に近い場所への移設があり、これ以外にも東洋捕鯨の第二次合併によって重複した事業場の一方を移設することが見られた。1917年の根室の旧紀伊水産の施設を斜古丹に移したものがこのケースである。合併による規模拡大のメリットのひとつであったと考える。

以下に事業場の施設について公文書に収録された図面や写真から見て行きたい。

解剖方式：ボックス式と斜路式

日本の近代沿岸捕鯨で用いられた解剖方法として明石編（1910: 114）は、海中でおこなう解剖船によるもの、栈橋に2本の支柱を立てて吊り下げ水中解剖をおこなうボックス（支柱）式栈橋によるもの、曳揚げ栈橋によるものの3つをあげている。いずれの方式も鯨体を引き上げるためにウインチを用いる。当時のウインチは蒸気機関で駆動した。同書ではボックス式を詳しく述べており（同: 114-117）では、当時の東洋捕鯨はボックス式の利点を認めていたことが示唆される。曳揚げ栈橋は、スロープないしは斜路とおなじ意味であるので、本論では斜路式と呼ぶ。ノルウェー式捕鯨の導入時期には第1章で見たような解剖船を用いて鯨体を海中に浮かせたままおこなうアメリカ捕鯨式の解剖方法が用いられていた。場長必携から東洋捕鯨の解剖方式の変遷を場長必携でたどると解剖船やボックス式から斜路式に変化してきたことがわかる。長崎県対馬の比田勝では1910年度に解剖船による水中解剖から斜路式に、蔚山では1914（大正3）年度にボックス式から、細島では1924年度に解剖船から、そして済州島では1939（昭和14）年度に解剖船からそれぞれ斜路式に変更されている。つまり解剖方式は、日本遠洋漁業の時期は解剖船、東洋捕鯨設立時期にはボックス式が主流となり、その

後約30年をかけて斜路式が事業場全体に行き渡ったといえる（宇仁 2016b）。そのためか今日では、ボックス式が遅れた旧式、斜路式が効率的な新方式という見方がある。ところがボックス式を観察したアンドリュースは、日本での解剖方式についてノルウェーから学んだ斜路式もあるが、より普及しているのはボックス式で日本が独自に採用した風変わりな解剖方式としつつ（Andrews 1911: 418, 1916: 79）、その作業は効率的と描写している（Andrews 1916: 79-84）。彼はボックス式が遅れた旧式の解剖方式とは見ていない。アンドリュースが、1910（明治43）年の紀伊大島（写真2-13 左）や1912年の蔚山（写真2-13 右）でボックス式解剖を何枚も撮影しているのは、効率のよいすぐれた方式と見なしてのことかも知れない。東洋捕鯨鮎川事業場では、ボックスと斜路を併用した同時進行の解剖を写真で記録している（写真2-14）。

アンドリュースがいうとおり斜路式の解剖は、ノルウェーやカナダのニューファンドランドでは19世紀末から用いられていたことが写真でも確かめられる（Johnsen 1959: 347-356、Dickinson and Sanger 2005: 29-39）。アンドリュースの写真からは、東洋捕鯨鮎川事業場や紀伊水産申本事業場では少なくとも1910年には斜路式が使われていることがわかる（写真2-15）。東洋漁業鮎川事業場は日本で初めて斜路式を採用したとされるが（加藤・宇仁 2017: 82）、評価すべきは、むしろ斜路式とボックス式との併用による効率的な解剖作業法を実践していた点かも知れない。なお、網捕り捕鯨の解剖は磯浜に陸揚げすることが普通であり、鯨体を地面に横たえる点はおなじである。逆に近世の日本では吊り下げ式の解剖は知られていない。

ボックス式の起源や名前の由来は現在のところ不明である。岡十郎はボックスに起重柱という漢字をあて「マストを強大に改造」したものと説明している（明石編 1910: 5）。「ボックス船」という言い方が現在も散見され、やはりクレーンの意味で使われている（青空エクスプレス「国の避難港整備事業の遅延に、室戸市民が早期完工を陳情」

<https://blog.goo.ne.jp/aozora110/e/f00e064dba40c38ecc553e8f8bf01cbe> 2018.10.28閲覧）。

ここからもボックスは、吊り下げ装置、あるいはクレーンと理解できる。海外でも類似の解剖設備が存在し、1874年に出版された単行本にカリフォルニアのカーメル（Carmel）湾の陸上基地を描いた図に同様の吊り下げ式クレーンが見える（Scammon 1874: Plate XXVII、図）。吊り下げ式の解剖

は海外でも事例があり、ボックス解剖の独自性は吊り下げ式ウインチを用いる点といえる。

大黒山島と鮎川事業場の事例

沿岸捕鯨の事業場の設備を具体的事例から描いた図は既存の報告には見当たらない。概念図であれば馬場（1942: 199）に掲載されているが、単純化されており具体的な事例ではない。本論では東洋捕鯨の実際の図面を用いて事業場の設備を見てみたい。黄海南部の大黒山島に事業場を設置するときの文書をまとめた東洋捕鯨「大黒山島根拠地出願及許可一件綴」には、1916（大正5）年9月20日付けで日韓捕鯨合資会社から寺内正毅朝鮮総督伯爵あてに提出された捕鯨根拠地変更願とその添付書類、そして捕鯨根拠地設備平面図が含まれている。書類や平面図に記されていた設備は、荷役棧橋、引揚棧橋、裁割場、小切場、冷肉棧橋、石炭棧橋、製油場、骨置場、氷蔵室、塩蔵場、機関室、ウキンチ場、浴場、事務所、税関宿舎、倉庫、貯炭場、鍛冶場、事業夫宿舎、炊事場、貯水場、便所であった。棧橋の多くは板張、冷肉棧橋のみ竹簧〔たけす〕張、建物は平屋、屋根は亜鉛葺き〔トタン屋根〕が主体で、一部に杉皮や苫葺きが見られた（表2-5、図2-15）。設備からは捕獲した鯨を加工して得られる製品が、食肉や塩蔵肉のほか、油があったことがわかる。文書に含まれていた坪数計算表によると海面上にある棧橋を除いた捕鯨根拠地の面積は、1,691坪〔5,580m²〕となっている。主要設備に関する説明文からは、引揚棧橋は3尺毎に5-6寸の松丸太を海底に打ち込んでいること、引揚棧橋は1927（昭和2）年頃に木造板張からセメントで固めた石畳に改築することが記されていた（図2-16、昭和2年10月19日付け鯨体引揚棧橋改築許可願）。これは1927年11月25日付けで石鎮衡全羅南道知事から許可されている。捕鯨事業場は、すべてが木造の状態から次第にコンクリートを用いた恒久的な事業場へと変化していったことが伺える。

本州の事例では、アンドリュースが滞在した東洋捕鯨鮎川事業場の設備を記した文書が現存する。宮城県文書館が所蔵する「明治43年 2-0149農商工」という簿冊に、東洋捕鯨が明治43

（1910）年1月27日付けで農商務大臣宛に提出した捕鯨根拠地設置許可願があり、鮎川事業場の設備について記され（表2-6）、平面図が添付されている（図2-17）。これを見ると事業場には鯨体を解剖する設備に引揚解剖（斜路、スロープ）と巻揚解剖（ボックス）の2つがあり、それぞれにウインチが備えられていたこと、鯨肉用に海水を散布して温度を下げ血液を滴下させる冷却場があるこ

と、製造場所として鯨肉の裁割場や塩蔵場のほか、缶詰を製造し、また缶自体を製造していたこと、採油設備があったことなどがわかる。平面図にはボックスが示されていないが、アンドリュースの写真から筆者がその位置を書き込んだ（三角印）。従業員用の宿舎は2つあり事業夫用と事務員用に分かれていたこと、沢水を引いた簡易的な水道設備も用意されていた。印象的な鯨骨門（写真2-16）は図示されていないが、事業場全体での位置や写真との照合から、矢印で示した事業夫宿舎と裁割場の間と考えられる（図2-17、写真2-17）。ボックスの滑車を動かしていたウインチは（図2-17中の11）、ずいぶん遠い場所に置かれた印象である。

この簿冊には事業場の位置図も添付されており、これには岡田源太郎鯨肉製肥場や西村惣四郎鯨肉製肥場の名前が見える（図2-18）。写真2-18に見える天日干しの風景は、東洋捕鯨とは別の会社だったことがわかる。同館の「大正元年 1-0076農工商」には、明治45年1月17日付けで大日本水産が農商務大臣に提出した設置願いがあり、事業場付近図が含まれている。これには、鮎川と十八成浜 [くぐなりはま] に存在また計画された5事業場が示されており、捕鯨各社が競うように牡鹿半島に事業場を設けた様子が示されている（図2-19）。

冷凍工場を備えた色丹島斜古丹と択捉島単冠の事例

時代が下がって昭和初期、1930年代の事業場については色丹島の「日本水産株式会社捕鯨部斜古丹事業場平面図」（図2-20）が残されている。これによると事業場の設備の配置は、海から見て引揚斜路の右側に骨場や骨油場など骨処理設備、左側に冷肉場や裁割場、塩蔵場など鯨肉処理設備、そして敷地奥には倉庫類を配している。特徴的なのは、冷凍室や冷凍庫、冷凍機関室などおそらく冷凍肉関係の設備の存在、そして海から見て右手に鯨肉用の缶詰工場が設けられていることである。缶詰工場には女工宿舎が付属している。斜古丹場長必携には設備の変遷が記されており、1935年度に製品倉庫を新築、1936年度に伊佐奈商会を日本水産に合併するとともに、旧事務所を取り除き社宅を新築、1937年に旧作業員宿舎を取り壊して新築、1939年は缶詰工場汽缶場新築竣工などとある。関連した記述は択捉島の「単冠事業場長必携」にもある。同書中の「その他参考事項」に、昭和5（1930）年度からは「冷凍原料肉採取の施設をなし冷凍缶入りとせるものを冷蔵して斜古丹へ輸送し、同場にて冷凍のこととなれる」と記されており、1930年頃から択捉島単冠事業場と

一体的に運用のうえ鯨肉の冷凍肉や缶詰を製造していたものと想像される。「斜古丹事業場平面図」には作成の日付は記されていないが、日本水産と記されていることから1937年以降の作図であり、場長必携の記述から1930年以降の作成と考える。

斜古丹事業場については写真も現存する。北海道大学総合博物館水産科学館所蔵の「疋田豊治乾板写真」の写真番号1381「千島斜古丹島」[ママ]として1932年8月9-10日撮影の写真3枚のうち2枚が事業場の外観を伝えている(写真2-19、2-20)。「斜古丹事業場平面図」(図2-20)を用いて写真2-19を読み解くと、事業場の建物は中央部に写る黒い一群であり、左右の灰色の建物は事業場とは別の建物である。事業場の右にある明るい灰色の建物には、東洋捕鯨から原料を得て鯨肉や肥料の販売をしていた伊佐奈商会を示すイの印が見える。「平面図」に描かれた缶詰工場らしき建物群は見えないので、伊佐奈商会の場所が後に缶詰工場となったと推測する。写真中央の白い建物は出来て間もない冷凍工場であり、その右手前、「平面図」で社宅された場所にある屋根飾り付きの建物は事務所であろう。中央左の白いマストが見える部分は引揚げ斜路がある場所で、斜路は写真でも一部が確認できる。右手の印のある建物は骨場、左の印は貯水庫である。写真2-20は事業場後方の高台から撮影したものであり、中央に広がる三角屋根は鯨肉を整形する裁割場や製油場であり、中央やや右に見える4本の煙突も製油場のものである。手前中央の片屋根で細い煙突が3本見えるのは作業員宿舎と思われる。左端の大きな煙突はウインチの動力である蒸気機関のボイラーのもので、その右手に日本独自の鯨体吊上機「ボック」のような2本の支柱が見えている。時期は下がるが1936年の撮影とされる日本捕鯨時代の斜古丹事業場の写真もあり、マークからもそれとわかる。事業場の奥にある冷凍工場の白い建物も確認できる(写真2-21)。

択捉島の事業場では東洋捕鯨単冠事業場の写真が「疋田豊治乾板写真」(北海道大学総合博物館水産科学館蔵)にある。1932年8月の撮影と記された写真番号1382「鯨、択捉島年萌捕鯨場」の4枚、そして1383「年萌港捕鯨船」の2枚である。今村・持田(2008: 31)では写真1382の一部を掲載し「サハリンで撮影」と説明しているが、東洋捕鯨樺太事業場の写真(樺太庁 1936: 59)と比べると建物の配置や背景、引揚げ斜路の構造が異なること、札幌事業場長必携では鯨の捕獲記録が1921年と1930年に限られること、1932年には操業していないことなどから、この写真は写真台帳

の記載のとおり択捉島年萌にあった東洋捕鯨単冠事業場のものと判断する。疋田の写真には、抱えるような大きさの玉石を利用した引揚げ斜路などが見える（写真2-22）。手前の大きな玉石に丸太のような材木と組み合わせた設備は「平面図」から船引揚場と思われる。なお、田中・大野（1940）は、この写真と同一と見える写真を収録し、撮影者を荻野行雄としており、実際の撮影者についてはわからない。

択捉島のマッコウクジラを専門に処理した紗那事業場の図「日本水産株式会社捕鯨部紗那事業場平面図」（掲載せず）の設備の配置は、骨場や骨油場など骨処理設備は引揚げ斜路の両側の海側、裁割場など肉処理設備は中央、そして敷地奥には倉庫類を配している。鯨肉の塩蔵や冷凍冷蔵の設備はない。マッコウクジラは採油目的であったことを示している。択捉島では事業場によって陸揚げされる鯨種が異なり、3章で見るように鯨油生産を目的にマッコウクジラの処理事業場が複数設置され、また隣接する色丹島の事業場と一体運用をおこなうなど効率的な事業場の運営が見られる近代沿岸捕鯨の中心地のひとつであった。

住民の鯨体験

捕鯨事業場は一般の人々が鯨を見たり触れたりする貴重な場所にもなっていた。具体的な様子を伝える資料は少ないが、捕鯨事業場に多くの人が集まり解剖の様子を見学する姿はアンドリュースの写真でも確かめられ（写真2-23）、網走では捕鯨事業場に隣接する肥料工場の関係者が記した野坂勇吉が新聞連載記事「大正網走懐旧記」（網走市立図書館蔵）で、毎日おおぜいの人が見学に訪れ、遊郭から旦那衆が芸者を連れて来ることや近隣の町から学校や青年団が見学に来ることもあり、鯨のわかガイドとなったことを記している（菊池 2004: 109-113）。科学的な書物は映像などがなかった時代であり、大型鯨類の姿を知る貴重な機会であり、捕鯨根拠地では付近の住民に鯨の形やその他の知識が一定程度普及したと思われる。

2章 近代沿岸捕鯨の事業場の拡大過程とその設備



図2-1 20世紀初めに存在した朝鮮半島のロシア捕鯨の捕鯨根拠地(■)と主要都市(★)。新浦[しんぽ]、馬養島[まようとう]、長箭[ちゃんぜん]、長生浦[ちゃんせんぽ]。宇仁(2017a)に「長生浦」を加筆

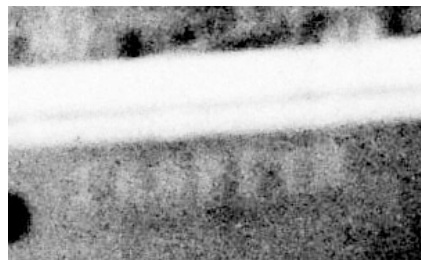


写真2-1 左：捕鯨船ギョルギー、右：マスト下部を拡大すると舷側の文字がかるうじて読める



写真2-2 左：捕鯨船ギョルギーと乗組員。①メルソム砲手、②ロシア人船長と考える人物、③中国人火夫と考える人物、④救命浮輪にギョルギー、⑤アカース造船所のプレート、⑥中央の男性が手に持つのはキリンビールの瓶。右上：救命浮輪を拡大するとГЕОРГИИの船名が確認できる。右下：中央の男性が持つ瓶を拡大するとキリンビールのラベルがはっきり見える Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene



写真2-3 おそらく捕鯨船ニコライと乗組員 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene



写真2-4 (左) 2-5 (右) いずれも解剖船 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene

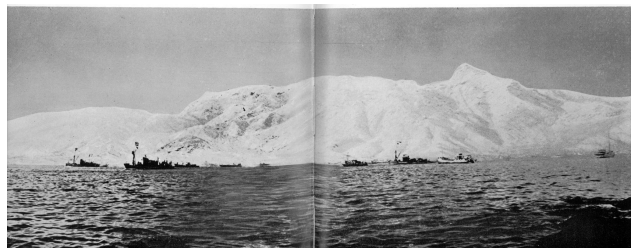


写真2-6 金剛山と長箭湾。右手の船は船主に捕鯨砲、マストに探鯨場所が見え捕鯨船である Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene

右上：図2-2 金剛山が見える長箭湾に碇泊する漁船、戦前の撮影大洋漁業八十年史編纂委員会 (1960: 267)

右下：図2-3 長箭湾と金剛山周辺の地図、矢印は写真2-6の撮影方向 (改造社編 1930: 82に加筆)。宇仁 (2017a) より



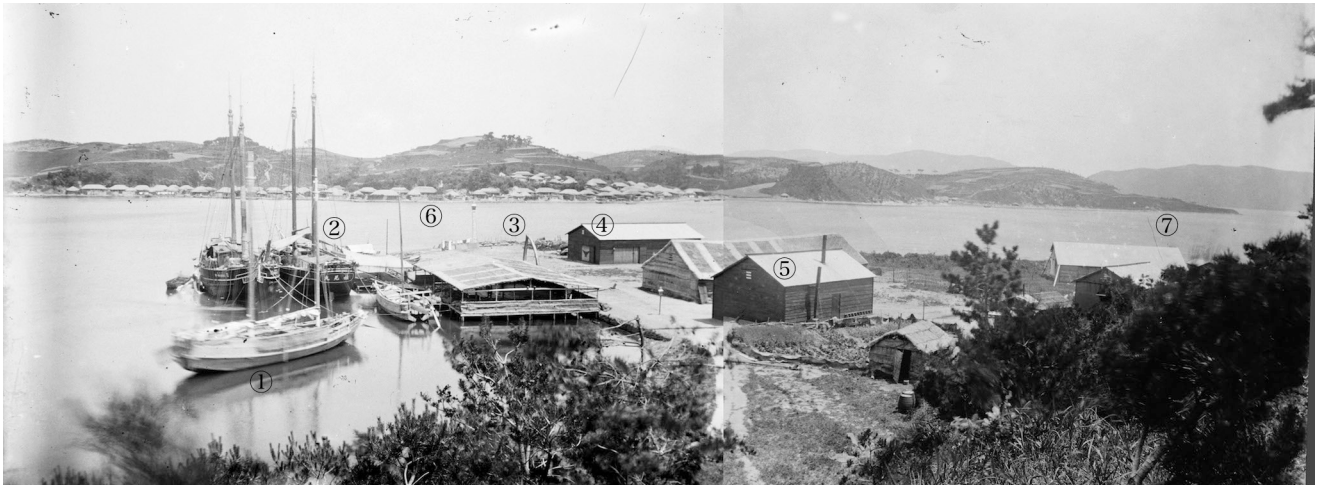
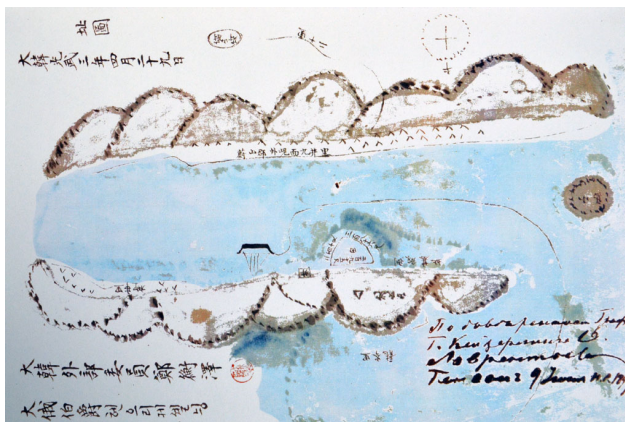


写真2-7 長崎捕鯨合資会社の長生浦捕鯨事業場。①舢舨船に2本のマストの取り付けられた和洋折衷船、②黒い帆船は船尾に妙見丸、③鯨骨門、④壁に長崎捕鯨の印、戸に鯨の尾びれの絵、⑤建物の壁面に長崎捕鯨の印、⑥対岸は長生浦の集落、⑦現在の長生浦鯨博物館の位置。2枚の写真を連結 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene



上：図2-4 絵葉書「韓国長承浦ニ於ケル長崎捕鯨会社ノ全景*東洋軒発行」発行年不詳（勇魚文庫蔵）

左：図2-5 東洋捕鯨蔚山事業場の場所（水色三角印）と長崎捕鯨合資会社長生浦事業場の推定位置（橙色三角印）。5万分の1図「長生浦」（大正3年測図、昭和11年修正測量、同17年陸地測量部印刷発行 岐阜県図書館蔵）とGoogleMapに三角印と矢印を記入。宇仁（2015b）に長崎捕鯨事業場を加筆



左：図2-6 ロシア太平洋漁業会社が大韓帝国と交わした1899（光武3）年4月29日付け書類の陸上基地の絵地図（「蔚山九井浦剖鯨基地」奎23284）

右：図2-7 ロシア太平洋漁業会社の長生浦事業場の位置図、矢印は図2-5で記した長生浦事業場に相当すると判断した突端で、左下は90度回転したその拡大図（朝鮮漁業協会 1900: 6）に矢印を加筆

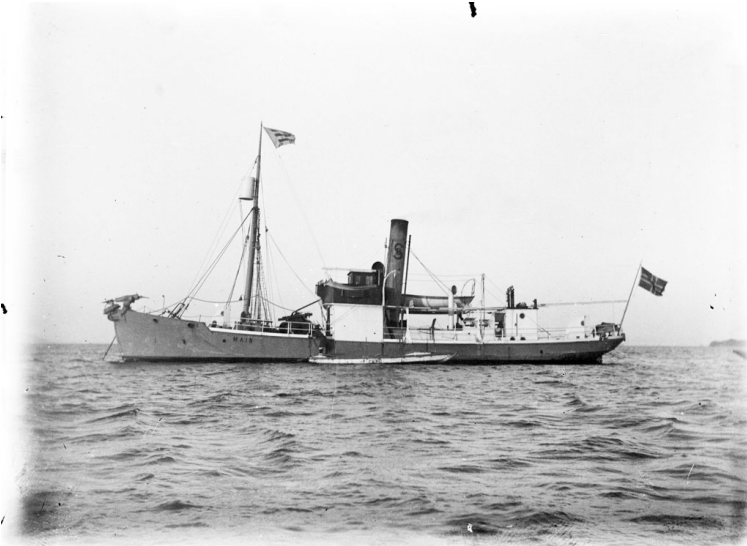
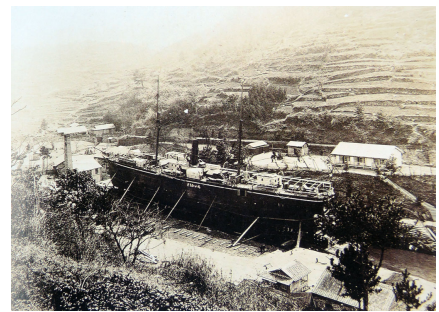


写真2-8 ノルウェーの国旗を掲げる捕鯨船
メイン号。煙突の印（ファンネルマーク
funnel mark）は、日本の捕鯨会社で合致す
るものは見えず、ノルウェーの会社のもの
と思われる Henrik Govenius Melsom /
Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene



左：写真2-9 三菱合資会社三菱造船所小菅修船場で塗装工事中とおもわれるメイン号 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene

右上：図2-8 稼働中の三菱造船所小菅修船場（岡林ら編 1995: 95、長崎県立長崎図書館蔵）

右下：図2-9 現在の三菱造船所小菅修船場



写真2-10 第二東郷丸と思われる捕鯨船。煙突には長崎捕鯨の印。拡大するとぶれているが右から2番目の文字は一より二に見える Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene



左：写真2-11 メルソム砲手の次女 Sigrid [シグリ]。『実地探検捕鯨船』(江見 1907) の口絵写真と一致する Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene
 右：図2-10 「実地探検捕鯨船」(江見 1907) に掲載されたH.G.メルソムの次女 Sigrid [シグリ]



上：写真2-12 多数の日の丸が翻る釜山港 Henrik Govenius Melsom / Slottsfjellsmuseet / Vestfoldmuseene
 下：図2-11 「釜山港突堤ヨリ市街ヲ望ム」と記された写真。写真帖「千葉県水産試験場開場式挙行記」(国立研究開発法人水産研究・教育機構中央水産研究所蔵)より

表2-1 1910年までの記録が得られた沿岸捕鯨の根拠地一覧

地域	事業場名	所在地（現在の自治体名）	東洋捕鯨設立参加会社	第二次合併参加会社	大洋漁業系または独立系
北海道	様似	北海道様似郡様似町		内外水産*2	
本州	鮫	青森県八戸市	大日本捕鯨		
	桑浜	岩手県釜石市		内外水産*3	
	両石	岩手県釜石市			大東捕鯨*5
	鮎川	宮城県石巻市	東洋漁業	紀伊水産、長門捕鯨、大日本水産	土佐捕鯨*6
	荻浜	宮城県石巻市	帝国水産	内外水産	藤村捕鯨*6
	銚子	千葉県銚子市	東洋漁業、大日本捕鯨、東京岩谷商会		大東捕鯨*5
	能登	石川県鳳珠郡能登町	東洋捕鯨*1		
	二木島	三重県熊野市二木島町	大日本捕鯨		
	太地	和歌山県東牟婁郡太地町	帝国水産		大東捕鯨*5
	大島	和歌山県東牟婁郡串本町	東洋漁業、長門捕鯨	大日本水産	
	串本	和歌山県東牟婁郡串本町	太平洋漁業*3	紀伊水産*4、内外水産、大日本水産*4	
	仙崎	山口県長門市仙崎		長門捕鯨	
	四国	穴喰	徳島県海部郡海陽町	東洋漁業	
甲浦		高知県安芸郡東洋町	東洋漁業、長崎捕鯨、大日本捕鯨		
浮津		高知県室戸市		内外水産	大東漁業*5、土佐捕鯨、丸三製材
清水		高知県土佐清水町	東洋漁業、長崎捕鯨、帝国水産	内外水産	
九州	呼子	佐賀県唐津市呼子町	大日本捕鯨	大日本水産・小川島捕鯨	大東捕鯨*5
	小川島	佐賀県唐津市呼子町			小川島捕鯨*8
	加部島	佐賀県唐津市呼子町			小川島捕鯨*8
	比田勝	長崎県対馬市上対馬町	長崎捕鯨		
	西泊	長崎県対馬市上対馬町	大日本捕鯨*7	長門捕鯨*7	
	泉	長崎県対馬市上対馬町		内外水産*7	
	有川	長崎県南松浦郡新上五島町	東洋漁業		
	黄島	長崎県南松浦郡新上五島町	長崎捕鯨		
	細島	宮崎県日向市	大日本捕鯨		
	甕島	鹿児島県薩摩川内市	東洋捕鯨*1		
	朝鮮	新甫	北朝鮮咸鏡南道新甫市	東洋捕鯨*1	
長箭		北朝鮮江原道高城郡長箭邑	東洋漁業、長崎捕鯨		
蔚山		大韓民国蔚山広域市南区	東洋漁業、長崎捕鯨、日韓捕鯨		
巨済島		大韓民国慶尚南道巨済市	東洋捕鯨*1 *9		

設置者の典拠：無印は明石編 1910: 241-268、*1 明石編 1910の地図、*2 様似町史編さん委員会 1992: 777、*3 釜石事業場長必携、*4 串本町 1924: 368-369, 374-375、*5 伊豆川 1943: 645-646、表、*6 牡鹿町誌編纂委員会 2005: 218-225、*7 日野 1978、*8 安永 2011、*9 朴 1995: 265-266

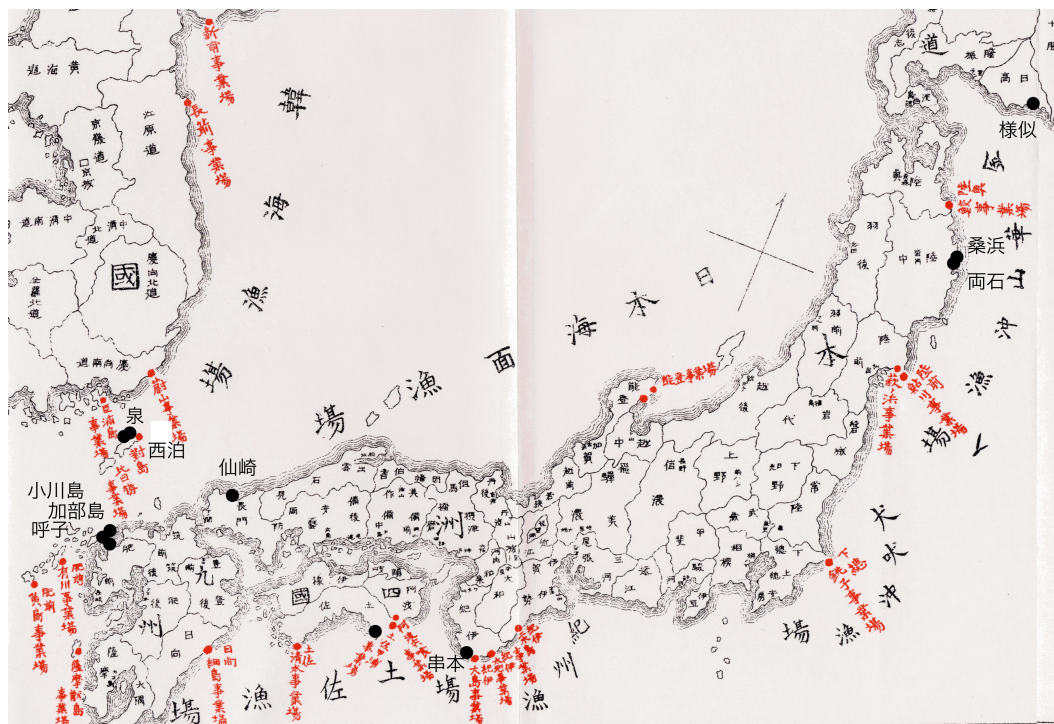


図2-12 1910年までの記録が得られた沿岸捕鯨の根拠地。明石編（1910）に未記載根拠地を加筆（黒色文字と丸印）

表2-2 太平洋戦争中（1941-1945年）に存在した沿岸捕鯨の根拠地一覧

地域	根拠地名	所在地（当時の住所）	日本水産	大洋漁業	遠洋捕鯨	鮎川捕鯨	備考	
千島	北千島	北海道幌筵島播鉢	◎					
	乙前	北海道幌筵島乙前		◎				
	梅浦	北海道新知島梅浦	*	★			日本海洋漁業協議会（1951）にあり	
	薬取	〃 薬取郡薬取村幌琴				○	択捉島	
	紗那	〃 紗那郡紗那村内岡	○				択捉島	
		〃 紗那郡紗那村有萌		●	○		択捉島	
	单冠	〃 択捉郡留別村年萌	○				択捉島	
	斜古丹	〃 北色丹郡色丹村シヤコタン	○				色丹島	
内地		網走	〃 網走郡網走町	○	●			
		霧多布	〃 厚岸郡浜中村	○				
		厚岸	〃 厚岸郡厚岸町		●	○		
		釜石	岩手県上閉伊郡釜石町	○	●	○	◎	
		鮎川	宮城県牡鹿郡鮎川村	○	○	○	○	
		小笠原	東京府小笠原島兄島滝ノ浦	○				日本捕鯨業水産組合（1940）では父島
			〃 母島北村		●	○		
		太地	和歌山県東牟婁郡太地町		○			
		[紀伊] 大島	〃 大島村	○		○	○	
		呼子	佐賀県東松浦郡呼子町	●	◎			
		大河内	長崎県上県郡豊崎村	○				対馬島
		壱岐	〃 壱岐郡田河村	○				
		有川	〃 南松浦郡有川村	○				中通島
	外ノ浦	宮崎県南那珂郡南郷村	○					
	久根津	鹿児島県大島郡東方村	○				奄美大島	
外地		樺太	樺太大泊郡知床村札塔	○				日本捕鯨業水産組合（1940）では事業場名札塔
		長箭	朝鮮江原道高城郡長箭里	○				
		九龍浦	〃 慶尚北道迎日郡九龍浦邑柄浦里	*				日本海洋漁業協議会（1951）にあり
		蔚山	〃 慶尚南道蔚山郡長生浦	○				
		济州島	〃 全羅南道济州郡济州島西帰浦	○				
		大黒山島	〃 〃 務安郡大黒山島曳里	○				
		大青島	〃 黄海道長湍郡白翎面大青島里	○				
		於青島	〃 全羅南道沢溝郡米面於青島里		★			
		関東州	関東州海洋島会湾西一八〇	◎				海洋島、租借地
		青島	中华民国山东省青島市荷沢路		★			戦時特別措置の許可
	台湾	台湾高雄州恒春庄ガランピ	○				日本捕鯨業水産組合（1940）では大板埸	

典拠：●日本捕鯨業水産組合（1940）、○同（1940、1943）、◎同（1943）、*東洋捕鯨事業場長必携、
 ★徳山（1995）。所在地は日本海洋漁業協議会（1951）に従った。大板埸の読みは「たいはんらつ」
 日本水産の加熊別は操業記録がなく、室蘭は（かっこ）入りのため設備のみ保有と判断して表には載せなかった
 宇仁（2017b）を改訂

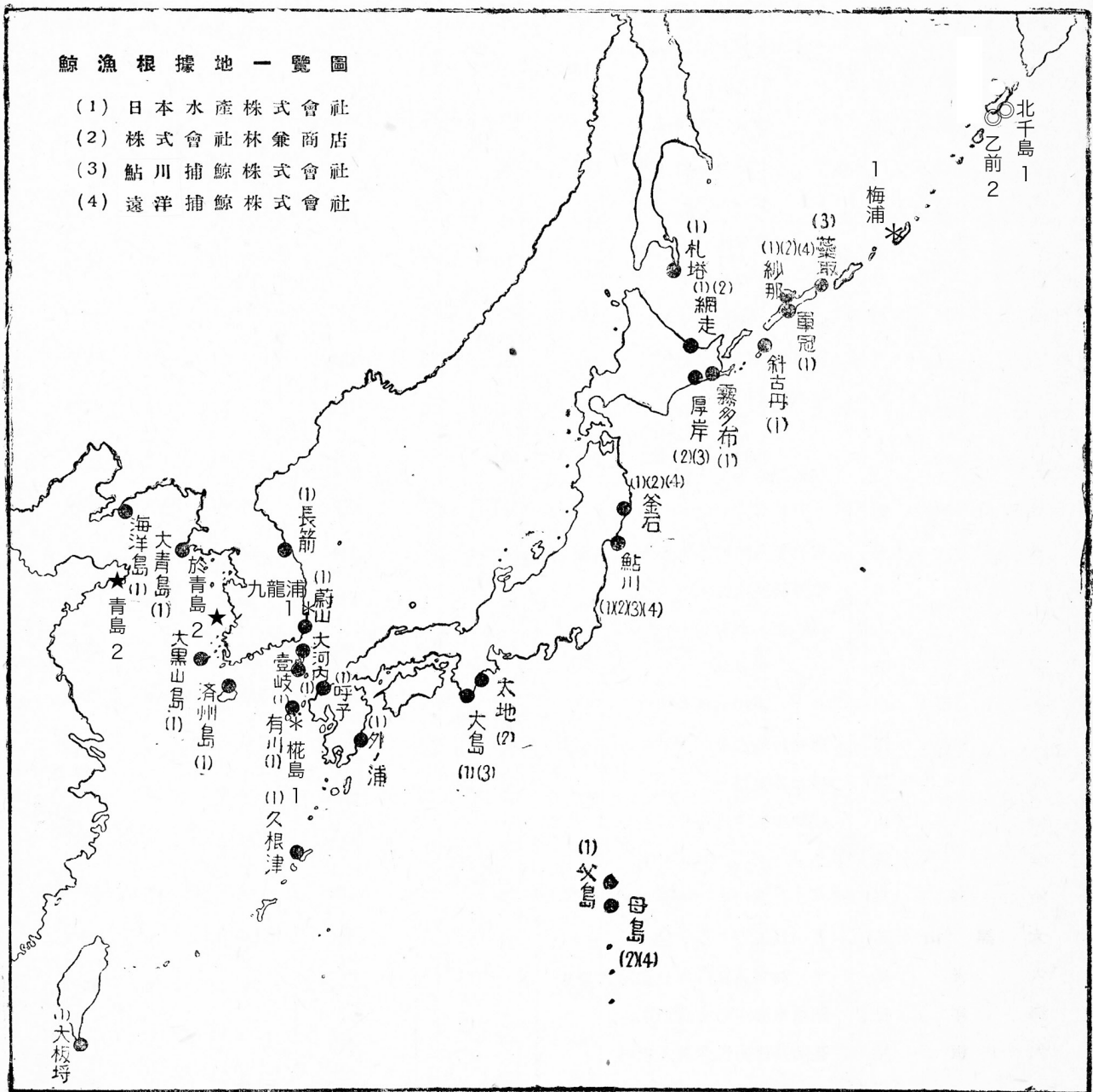


図2-13 太平洋戦争中（1941-1945年）に存在した沿岸捕鯨の根拠地。日本捕鯨業水産組合（1940）に未記載の根拠地を加筆。記号は表2-2に同じ。◎：日本捕鯨業水産組合1943、*：東洋捕鯨事業場長必携、★：徳山（1995）。宇仁（2017b）を改訂

表2-3 1900–1945年に記録が得られた近代沿岸捕鯨の根拠地

海区	番号	根拠地名	海区	番号	根拠地名	海区	番号	根拠地名
1	1	加熊別 ^{*1}	5	21	鮫	7	41	浮津
1	2	乙前／北千島	5	22	桑浜	7	42	土佐清水
1	3	梅浦	5	23	両石	7	43	佐賀関
3	4	札塔 (樺太) ^{*2}	5	24	釜石	7	44	細島
1	5	藁取 [しべとろ]	5	25	牧浜	7	45	外浦 [とのうら]
1	6	有萌 [ありもえ]	5	26	女川	8	46	手打
1	7	紗那 [しゃな] ^{*3}	5	27	荻浜	8	47	甕島
2	8	単冠 [ひとかつぶ] ^{*4}	5	28	大原	8	48	大浜
2	9	内保 [ないぼ]	5	29	鮎川	8	49	黄島
3	10	宗谷	5	30	女川	8	50	樺島
3	11	紋別	6	31	銚子	11	51	有川
3	12	網走	6	32	館山	11	52	宇久島
2	13	斜古丹 [しゃこたん]	6	33	下田	11	53	西帰浦 (濟州島)
4	14	根室	6	34	二木島	11	54	呼子
4	15	花咲	6	35	太地	11	55	片島 [加部島] ^{*5}
4	16	霧多布	6	36	串本	11	56	壱岐
4	17	厚岸	6	37	紀伊大島	11	57	比田勝
4	18	釧路	7	38	穴喰 [ししくい]	11	58	西泊
4	19	広尾	7	39	甲浦 [かんのうら]	11	59	泉
4	20	室蘭	7	40	室戸	11	60	大河内
						11	61	仙崎
6	83	勝浦 ^{*8}	4	84	様似 ^{*9}	3	85	内音 [ないおん] ^{*10}
10	87	佐渡 ^{*12}	10	88	戸賀 ^{*12}	10	89	張碓 [はりうす] ^{*13}

*1 下線は操業記録が得られなかった根拠地、*2 () は場長必携の事業場名 (宇仁 2016)、*3 字名から内岡 [なよか] とも呼ばれた

*4 年萌 [としもえ] とも呼ばれた、*5 佐賀県立名護屋城博物館編 2006、*6 松本 1906、*7 父島 (後に兄島に移転) と母島 (徳山 1992: 40–41)

*8 笠原 1950、*9 様似町史編さん委員会 1992、*10 岡田 1913、*11 安永 2011、*12 東洋捕鯨営業報告に記録あり、*13 北海道庁 1914

海区は笠原 1950、番号はTerry 1950による。[] は読み仮名。83–89は原図 (Terry 1950) に記載がない事業場

COASTAL AND COLONIAL WHALING STATIONS 1900-45

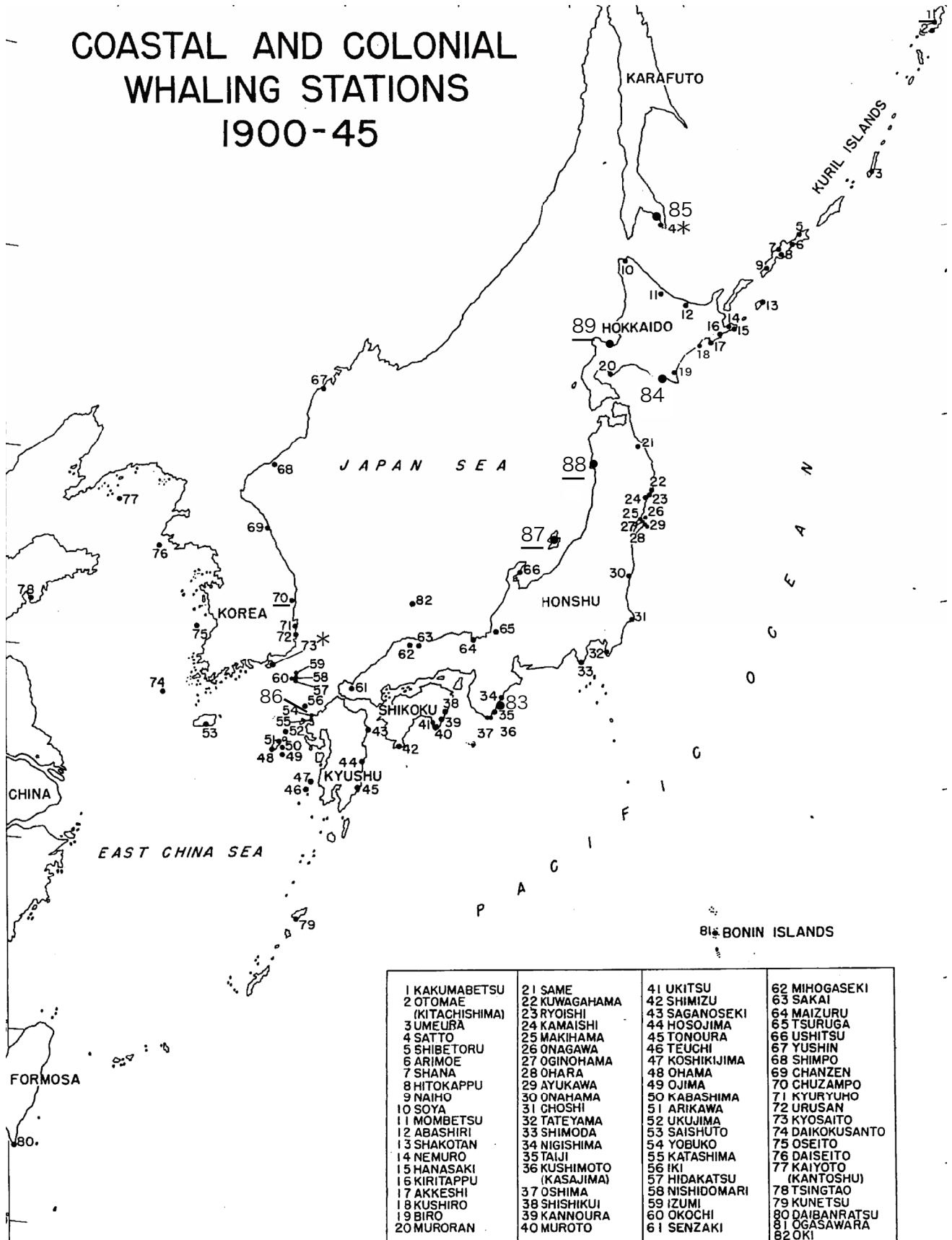


図2-14 1900-1945年に記録が得られた沿岸捕鯨の根拠地。Terry (1950) Fig. 11 に未記載の根拠地を加筆し (大文字)、場所の誤りを訂正した (*)。87佐渡の詳しい位置はわからなかった。番号は表2-3におなじ

表2-4 営業報告による1910-1933年における東洋捕鯨根拠地の分布変化

期 年	1910		1916										1920										1930				1933	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
記載事業場数	21	26	27	25	26	27	27	27	25	29	34	35	36	32	32	32	32	33	33	33	30	30	31	33	33	33	33	34
操業事業場数	3	9	3	3	11	15	14	14	13	15	19	20	20	23	26	21	22	23	22	23	23	25	24	24	24	22	21	21
樺太	樺太																											
千島	村上湾/23期からは加熊別																											
	单冠																											
	内保																											
	紗那																											
	斜古丹																											
北海道	網走																											
	根室																											
	霧多布																											
	白糖																											
	様似																											
	室蘭																											
本州	鯨																											
釜石 (11期は桑浜)																												
	鮎川																											
	荻浜																											
	小名浜																											
	銚子																											
	館山																											
	下田																											
	戸賀																											
	佐渡																											
宇出津・1期は小木も																												
三国/舞鶴/敦賀																												
	美保																											
	隠岐																											
	二木島																											
	太地																											
[紀伊]	大島																											
	串本																											
	仙崎																											
	小笠原																											
四国	穴喰																											
	甲浦																											
	清水																											
九州	細島																											
	甕島																											
	五島/2期から黄島																											
	有川/宇久島/有川																											
	壹岐																											
比田勝/16期-大河内																												
	久根津																											
朝鮮	巨济島																											
	蔚山																											
	長箭																											
	新甫																											
	楡津																											
	大黒山島																											
	大青島																											
	济州島																											
	関東州																											
	青島																											
台湾	恒春/大板埒																											

0 営業報告に現れるか操業の記載なし、1 営業報告に現れ操業と記載あり、? 営業報告の文中に見えず廃止とも記されない
6期以降について下線は夏季操業、斜体は冬季操業



写真2-13 1910年の〔紀伊〕大島事業場（左）や1912年の蔚山事業場（右）ではボックス式解剖だった
#27058, 218405 American Museum of Natural History Library



写真2-14 鮎川事業場では1910年にボックス式と斜路式が併用されていた #27142 American Museum of Natural History Library



写真2-15 串本の紀伊水産の事業場では1910年で斜路式が用いられていた。中央左、遠くに橋杭岩が見える
#27053 American Museum of Natural History Library

表2-6 1910年の鮎川事業場設備一覧

建物名	摘要	間数	坪数	
1 事務所	木造曾木葺	4.5x4	18	事務室応接所、食堂寝室など付属
2 宿舎	木造曾木葺	4x6.5	26	事業夫用
3 宿舎	木造曾木葺	4x2.5	10	事務員用
4 炊事場	木造杉皮葺	5x2.5	12.5	
5 引揚解剖場	松丸太打込杉材張	4-5x16		鯨体引揚げ解剖用
6 裁割場	木造杉皮葺	3x6		海水注入により冷却
7 裁割場	木造鉄力板葺	2.5x7.5		海水注入により冷却
8 冷却場	木造杉皮葺	4.5x8		海水散布で血液滴下冷却
9 棧橋	松丸太打込杉材張	3-4x28.5		径6分スチールワイヤー300尺2台、鯨体解剖用
10 引揚解剖ウインチ場	木造杉皮葺	2.17x3		鯨体引上げ用
11 巻揚解剖ウインチ場	木造杉皮葺	2.3x2.75		水中解剖用
12 貯水桶				径5尺高さ6尺桶3本、捕鯨船運搬船への給水
13 貯水池		3.67x2.5		深さ7尺、機缶および缶詰製造用、沢水使用
14 貯水槽				機関室内5尺立方角形2個
15 塩蔵場	木造杉皮葺	7x11	77	鯨肉塩蔵用
16 倉庫	木造杉皮葺板囲い	4x11.5	46	製油その他用
17 倉庫	木造杉皮葺板囲い	2x5.5	11	一般需用品用
18 採油場	木造杉皮葺板囲い	3x7	21	製油平釜10面
19 採油場	木造杉皮葺板囲い	3.5x7	24	製油平釜7面、原図に番号なし
20 機缶室	木造杉皮葺板囲い	4x8	32	ウインチおよび缶詰製造用、原図に番号なし
21 缶詰製造場	木造杉皮葺	8x8.5	68	
22 製缶場	木造杉皮葺壁または板囲	4x10	40	図では28
23 倉庫	木造杉皮葺板囲い	3x5	15	缶詰材料および製品用
24 処理場	松丸太打込松板張	3.75x5		
25 運搬用レール		48		缶詰原料鯨肉運搬用
26 鍛冶工場	木造杉皮葺板囲い	2.5x4	10	捕鯨銚の打直し他
27 貯炭場	杉板敷詰	5x7		100-300トン蓄積
28 事業船碇泊場				原図に番号なし
29 蒸釜	軟鋼製径3.5尺深4尺	2個		缶詰製造用
30 二重釜	軟鋼内部2.5部外部3部板	4枚		缶詰製造用
31 横置式陸用汽機		1台		缶詰製造用
32 横置式陸用汽機		1台		缶詰製造用

原文は縦書き漢数字、一部旧字体。宮城県公文書館蔵「明治43年 2-0149農商工 明治43年1月27日付け捕鯨根拠地設置願」より作成。宇仁（2016a）より



図2-17 1910年の東洋捕鯨根拠地設置許可願いに添付された鮎川根拠地平面図。番号は設備一覧におなじ。番号は打ち直した。矢印は鯨骨門、三角印はボックスの推定位置（宮城県公文書館蔵「明治43年 2-0149農商工」）。宇仁・加藤編（2017）に三角印を加筆



写真2-16 東洋捕鯨鮎川事業場の鯨骨門。頂部の肩甲骨に日本遠洋漁業から用いてきたイチマル印が見える #27363 American Museum of Natural History

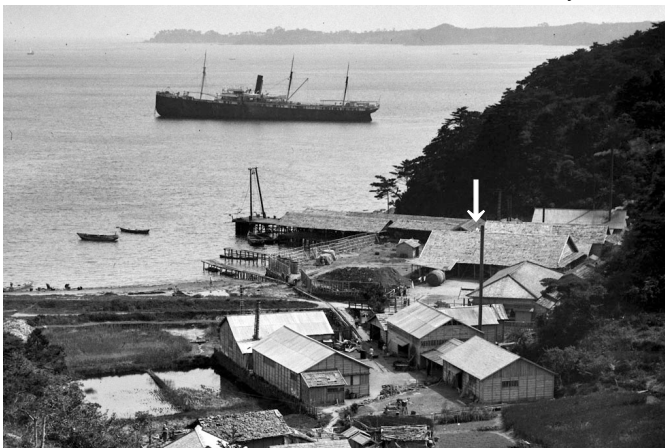


写真2-17 背後の丘から見た東洋捕鯨鮎川事業場。白矢印は鯨骨門。門上部の肩甲骨が白く見えている #27357 American Museum of Natural History Library

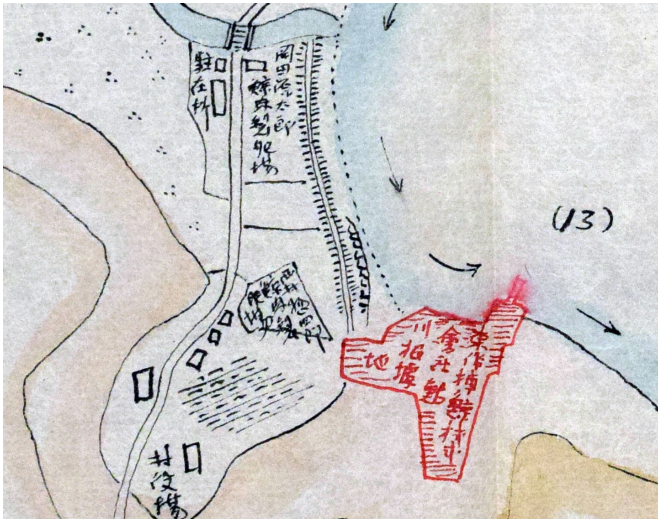


図2-18 東洋捕鯨根拠地設置許可願い添付の鮎川事業場付近図に記された鯨肉製肥場（宮城県公文書館蔵「明治43年 2-0149農商工」）。宇仁・加藤編（2017）より



写真2-18 捕鯨事業場に隣接した地元経営の鯨肉製肥場 #27353 American Museum of Natural History Library

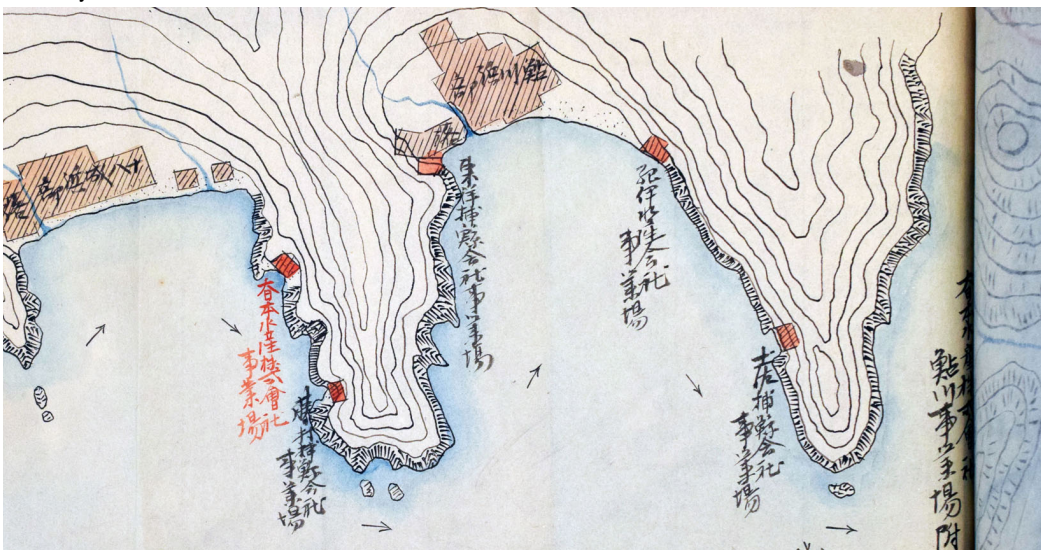


図2-19 大日本水産が提出した根拠地設置願に記された、鮎川と西隣の十八浜 [くぐなり] などの5つ捕鯨事業場の位置（宮城県公文書館蔵「大正元年 1-0076農工商」）。宇仁・加藤編（2017）より

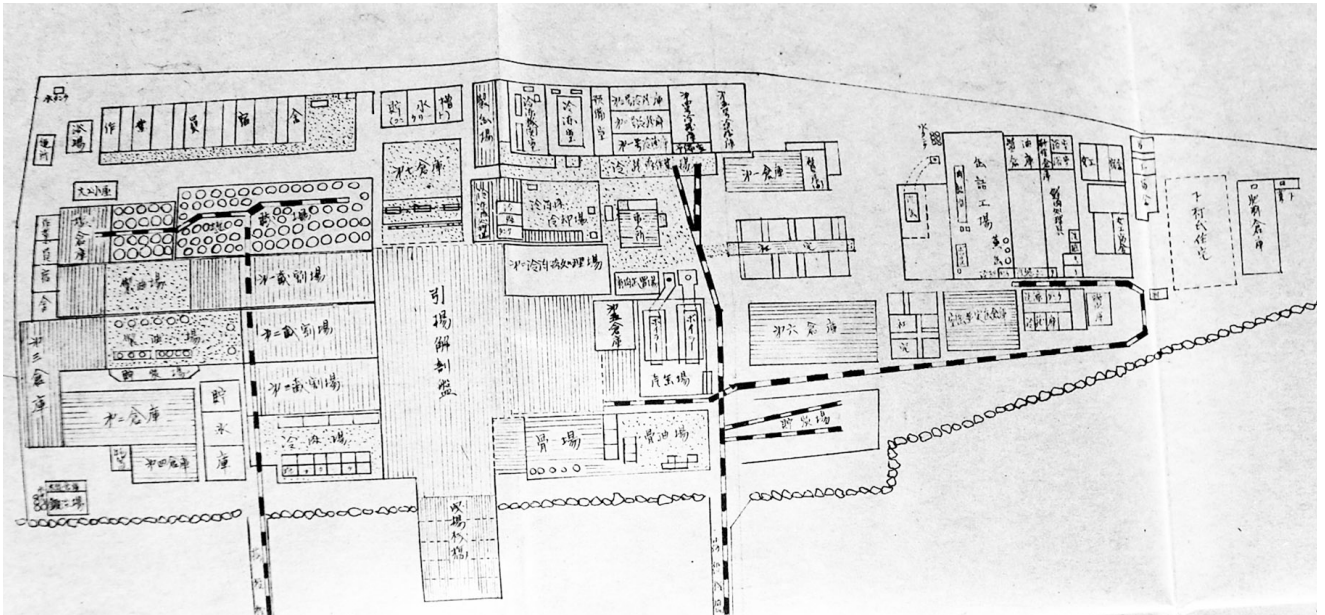


図2-20 1937年以降に作成された日本水産株式会社捕鯨部斜古丹事業場平面図（日本水産蔵）



写真2-19 海から見た東洋捕鯨斜古丹事業場。事業場は中央の黒い建物群とその奥の真っ白な建物。左右の灰色の建物は別施設。右側の明るい灰色の建物はイの印から伊佐奈商会、中央の白い建物は冷凍工場、屋根飾り付きの建物は事務所と思われる。「疋田豊治乾板写真」1932年8月9-10日撮影写真番号1381千島斜古丹島より（北海道大学総合博物館水産科学館蔵）



写真2-20 背後から見た東洋捕鯨斜古丹事業場。ウインチを動かす蒸気機関の煙突や「ボック」のような支柱が確認できる。「疋田豊治乾板写真」1932年8月9-10日撮影写真番号1381千島斜古丹島より（北海道大学総合博物館水産科学館蔵）

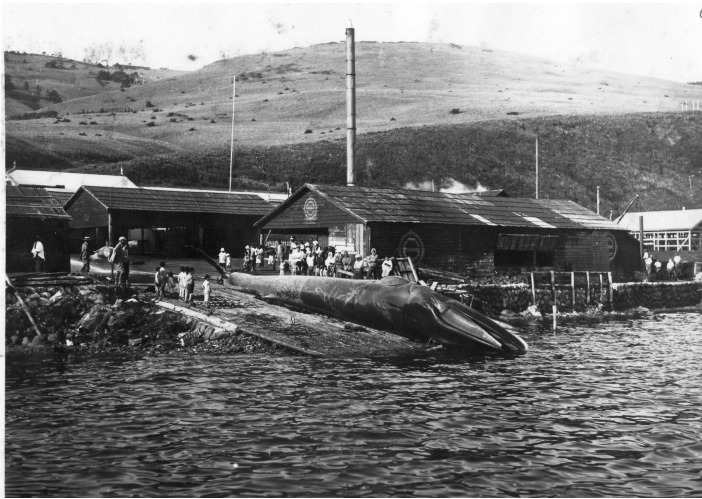


写真2-21 日本捕鯨斜古丹事業場。1936年の撮影とされる。建物の印も同社のものが確認できる。写真の注記ではイワシクジラと説明されている。中央左の白い建物は冷凍工場。千島歯舞諸島居住者連盟提供



写真2-22 東洋捕鯨単冠事業場。引揚げ斜路にイワシクジラが横たわる。手前は船引揚げ場。「疋田豊治乾板写真」1932年8月撮影写真番号1382鯨、択捉島年萌捕鯨場より（北海道大学総合博物館水産科学館蔵）



写真2-23 鯨の解剖の見物に多くの人たちが訪れた東洋捕鯨鮎川捕鯨事業場 #26856 American Museum of Natural History Library

3章 日本の近代沿岸捕鯨で着業した捕鯨船と砲手

1節 沿岸捕鯨船の特徴と総数

2節 ノルウェー人砲手から日本人砲手へ

3節 捕獲状況

1節 沿岸捕鯨船の特徴と総数

事業場の次は網捕り捕鯨では沖場と呼ばれた捕獲部門、捕鯨船と砲手を一望しておきたい。近代捕鯨の導入当初はノルウェー製の捕鯨船とノルウェー人砲手が活躍したが、全体像や個別具体的な姿は十分にわかっていない。ノルウェー製の捕鯨船の来歴、砲手ではノルウェー人と日本人の割合の変化、地域での違いなども見ていきたい。

明治から終戦までに日本の近代捕鯨で操業した沿岸捕鯨船について、その総数を明らかにすることを目的に文献から捕鯨船名を収集した。明石編（1910: 215-231）が述べているとおり、近代捕鯨初期の捕鯨船には備船のものが含まれている。これらの文献記録から得られた近代沿岸捕鯨船は日本船籍46隻、外国備船2隻とあわせ48隻であり（表3-1）、船体サイズから2つに分けた。ひとつは、1910年建造の第二神功丸までの捕鯨船で、そのほとんどが総トン数110-130トン、全長28-30mであり、例外は1907年に日本で建造された第三東郷丸の152トン33mの1例であった。第三東郷丸は、当時土佐紀州方面の捕獲はシロナガスクジラが多く従来の捕鯨船では能力不足であったため大型にしたものという（渋谷 1967: 24）。同船を除いた捕鯨船は、ノルウェー製は110t前後、国内製造のものは130t程度で一定している。2つ目は、1912（大正元）年建造の極洋捕鯨の鯨洋丸に始まる200トン級の大型船である。その後の新造船は196-222トン32-34mであった。本論では、1910年までに建造された36隻を「初期型」とし、1912年以降終戦までに建造された捕鯨船を「後期型」と呼ぶ。『日本船名録』の記載では、初期型の捕鯨船の多くは帆を備えた動力船で、帆船の形式であるスクーターやスプール、カッターとして登録されていた。初期型のうち木造船の浦島丸は78トン、鋼船の第五東郷丸は82トンととくに小形であった（表3-1）。以降の記述は断りのない限り初期型の捕鯨船についてのものである。

初期型の捕鯨船の来歴と特徴

近代沿岸捕鯨船の建造地は、初期型36隻のうち国産は8隻であり、残り28隻はノルウェー製であった。国内で建造された沿岸捕鯨船は1899年までに4隻、1907年に4隻、1909年と1910年に1隻の初期型では計9隻で、後期型は1925年と1926年に各1隻の計2隻であった。山下（2004: 175）は「日本での捕鯨船の建造は1907年から本格化し」と記すが、国産の捕鯨船が量産されたのは試験的な最初期、南極海捕鯨に向けた大型の捕鯨船であり、沿岸捕鯨船の建造数は少なく終戦に至るまで数からすればノルウェー製が圧倒していた。また、日本船名録の初出年は明治41-42年に集中し、とくに明治41（1909）年に17隻と最多を記録、捕鯨会社の乱立と呼ばれた様子を示している。初期型の捕鯨船の多くは太平洋戦争まで使用され、太平洋戦争での大破や沈没を免れ、戦後まで操業を続けたものが知られている。なかでも諏訪丸は1960年頃まで使われた（柳原・大隅 2011: 111-120）。近代沿岸捕鯨の捕獲部門は1890年代から1940年代まで半世紀にわたり基本におなじ捕鯨船を使い続けたのである。乗組員についても同様で、1935（昭和10）年頃の100トンクラスの捕鯨船の乗員は、定員が14名、その構成は船長兼砲手1、機関長1、運転士1、機関士1、水夫長1、火夫長1、水夫3、火夫3、賄長1、給仕1であり（徳山 1992: 89）、1章で紹介した1890年代後半のロシア太平洋捕鯨会社と変わらない。

捕鯨船の来歴を見ると主力であったノルウェー製28隻の捕鯨船のうち、日本の捕鯨会社が発注した新造船は8隻、中古船として日本の捕鯨会社が購入したものが20隻で約7割を占めた。中古船にはノルウェー本国で使用されていた船のほか、現在のカナダ北東部、大西洋岸の英領ニューファンドランドで操業していた捕鯨船を購入した例が、Humber、Neptun、Falcon（Vikingから改名）、Avalon、Baccalieu、Finの6隻があり（Dickinson and Sanger 2005: 157-158）、ノルウェー製捕鯨船の2割にあたる。これらの日本での呼び名は『日本船名録』のカタカナ名称から同定でき、日本での名称と旧名は、第二東郷丸 Humber、第一太平丸 Neptun、第二太平丸 Falcon（Vikingから改名）、アヴァロン丸 Avalon、第二大東丸 Baccalieであった。なおノルウェー製捕鯨船のうちFin号は、Avalonとともに帝国水産が購入したが回航中の紅海で座礁難破したため、代船として諏訪丸が建造された（明石編 1910: 254-255、渋谷 1967: 128）。

ニューファンドランドと日本の捕鯨の関係は、1899年に岡十郎がノルウェーに捕鯨視察をおこなった帰路に立ち寄ったことに始まる。岡の訪問地について『本邦の諾威式捕鯨誌』では「合衆国東北海岸の捕鯨業を巡視」と記しているが（明石編 1910: 205）、これは英領ニューファンドランドだったと考える。理由は、明石編（1910）に多くを依拠し掲載された写真からオリジナルプリントを入手したと思われる『Den Moderne Hvalfangsts Historie Bind 2: Verdensfangsten 1883-1924』（Tønnessen 1967: 196）やその英語抄訳本『The History of Modern Whaling』

（Tønnessen and Johnsen 1982: 136）ではニューファンドランドと記していること、そして当時の北米で沿岸捕鯨が操業していたのは同地に限られることなどによる。ニューファンドランドの捕鯨は1904年をピークに衰退し始めたが、それは日本遠洋漁業が東洋漁業に改組した年にあたり、日本の捕鯨が発展を見せた時期と一致する。岡のニューファンドランド訪問は、その後の同地からの捕鯨船の購入や後述する砲手の移住につながった（サンガー・ディッキンソン 2010）。カナダ大西洋岸の沿岸捕鯨は、日本の近代捕鯨と深い結びつきがあったのである。

初期型の捕鯨船のなかには、外国船籍のまま備船での操業を継続したものもある。明石編（1910: 225-231）では日本の近代捕鯨の黎明期に「備船時代」があったと時代区分として使用する一方、東洋捕鯨でもメイン号が備船で操業していたことを記している（明石編 1910: 22）。2章で見たとおりメイン号はロシア企業による朝鮮半島沿岸捕鯨に従事した捕鯨船である。同船の名前は、朝鮮の蔚山と長箭の両事業の場長必携に現れ、1915（大正4）年が確認できる最も遅い年である。しかしながら同船は『日本船名録』には一度も登場しない。よってメイン号は日本船籍になることがなく、ずっと外国船籍のまま備船として日本企業の捕鯨事業に参加していたと推測される（表3-1）。また、レギナ号は日本遠洋漁業や東洋漁業が備船したが1905（明治38）年に蔚山沖で沈没しており（明石編 1910: 224-228, 236, 241）、それ以上の具体的な記述は得られなかった。

捕鯨船の構造とファンネルマーク

ノルウェー製の初期型捕鯨船には船体図が残るものがあり、ノルウェー海洋博物館 Norsk Maritimt Museum には少なくとも第二東郷丸、諏訪丸、レックス丸、レギナ丸、曙丸の5隻分が所蔵されている（Torstein Sjøvold 氏私信 2016年11月17日）。このうちおなじスループ型の帆を持

つレックス丸のものを掲げておく（図3-1）。船体図からは、当時の捕鯨船は捕鯨砲を備える船首部の高さが現在の捕鯨船に比べて低かったことがわかる。見張台は描かれていない。船室については、上級船員用は船尾、下級乗組員は船首に配備されている。本論の掲載図では文字が判読不能だが、元図を見ると船長室は船尾右舷の前側にあり引出付きのベッドが備えられ、左舷側向かいがサロンになっている。サロンの後側にも広い1人部屋がある。船首側は、乗組員の居室で2人部屋が5室、右舷後側の1室は1人部屋となっている。

日捕鯨会社の社章あるいは船舶の煙突に見える印（ファンネルマーク）は、会社の識別に役立ち、既知のマークであれば撮影年代の特定が可能な場合がある。これまで日本の捕鯨船のファンネルマークは収録された断片的に記載されるだけであった。日本遠洋漁業と東洋捕鯨については明石編（1910）収録の写真、大正末期に存在した東洋捕鯨、大東漁業、土佐捕鯨、藤村捕鯨、遠洋捕鯨、そして鮎川捕鯨については大友亮氏の資料から近藤（2001: 301）がまとめ、これと一部重複するが土佐捕鯨、丸三製材、大東漁業など、大洋漁業系列の捕鯨会社のものは徳山（1992: 7-9）がまとめている。このほか、日野（1978）が長門捕鯨と東洋漁業を、宇仁（2017）が写真から長崎捕鯨のものを示している。そしてアンドリュースが鮎川で撮影した写真から内外水産のものが明らかになっている（加藤・宇仁 2017: 89、写真3-1）。写真3-1で手前に写るのは、ノルウェー製の初期型捕鯨船アイランド丸である。

後期型の沿岸捕鯨船

本論が後期型と呼ぶ200トンクラスの沿岸捕鯨船は、1923（大正12）年に100海里以遠の沖合でマッコウクジラ専門捕鯨船として許可が出されたことに伴って建造されたものという（近藤 2001: 319-322）。笠原（1950: 15）は近海捕鯨に大型高能率の捕鯨船が現れるのを1937-1938年頃としているが、遠洋捕鯨が1912年建造の中古船を鯨洋丸として事業を開始したのが1924年（近藤 2001: 300）、鮎川捕鯨が鮎川丸で操業を開始したのが1927年であり（牡鹿町誌編纂委員会 2005: 230）、大型の捕鯨船つまり後期型は1920年代中頃に登場している。後期型の捕鯨船の着業状況を場長必携から見ると、マッコウクジラを専門に捕獲した択捉島の東洋捕鯨紗那事業所（第1期は1928年）では、第3-4次に第二昭和丸の1隻、第5次は第二昭和丸と元日丸が就業し6月上旬から9月

上旬の2か月は後期型2隻体制、第6次では6月上旬から9月中旬までの3か月にわたり昭和丸と第二昭和丸そして元日丸という後期型捕鯨船3隻が所属していた。以下、捕鯨船名は省略するが第7次は6月上旬から8月中旬まで所属捕鯨船4隻のうち後期型は3隻で常駐し、1隻あった初期型の捕鯨船の着業は5月30日から6月9日の11日間に限られた。第9次は6月中下旬に後期型4隻が在籍したが、色丹丸は6月29日に新知島で座礁したためこの年の操業はそこで終わっている。翌年は復帰。年間着業捕鯨船3隻のうち2隻を後期型が占めた。択捉島ではマッコウクジラを専門に捕獲する事業場を鮎川捕鯨が薬取に（日本捕鯨業水産組合 1940）、遠洋捕鯨が紗那事業場を設置（徳山 1995: 36）、そして林兼商店も有萌に置き（徳山 1995: 87）、4社に集約されつつあった沿岸捕鯨企業はともに後期型の大型沿岸捕鯨船で中部千島を漁場にマッコウクジラを捕獲していたことになる。

事業場あたりの捕鯨船数

東洋捕鯨鮎川事業場を例に捕鯨船の在籍数を見る。捕鯨船については、事業場長必携には1932（昭和7）年度から3年分の記録がないので、1914-1931年度分を見てみたい。期間中に鮎川に1日でも在籍していた捕鯨船は年度あたり5-12隻であった。10年前後続けて在籍した捕鯨船がある一方、飛び飛びで着業する船や10年以上間隔を置いて来航する場合など、捕鯨船の着業状況はさまざまである（表3-2）。樺太から台湾まで事業場を抱える東洋捕鯨では、捕鯨船は漁期にあわせて回航していたので、このような状況になっていたのだろう。なお、当初から操業していたアヴァロン丸が1924年度以降見られなくなるのは、最初の日本人砲手の夏目市太郎と共に前年度に行方不明になったためである。1916年度以降は、東洋捕鯨の第二次合併により、内外水産や大日本水産、紀伊水産の捕鯨船が合流している。年度あたり最高の捕獲数を記録した1918年度について旬ごとに詳しく見ると、最も長く操業していたのは第一博運丸で3月末から12月初めにわたる250日間の在籍、短い船では1月未満だったことがわかる。天富丸は盛夏をはさんで1年に2回来港している。同時に在籍していた隻数は4-6隻の月が多く、最大同時在籍数は6隻で11月のことだった（表3-3）。この年の鮎川事業場で捕獲頭数が最も多かったのは83頭を記録した6月であり、11月は36頭とむしろ少ない月にあたる。ここでの月別の捕鯨船在籍隻数は1日でも記録があれば在籍としたので、捕獲頭数との比例関係は必ずしも明瞭ではない。

2節 ノルウェー人砲手から日本人砲手へ

合併当初の東洋捕鯨には高給で雇われたノルウェー人砲手が数多く在籍し、8-9割を占めたという(明石編 1910: 103-105)。その実情について事業場長必携や写真、その他の資料から具体的な報告を試みる。

ノルウェー人砲手の名前と人数

まず日本企業で働いたノルウェー人砲手の人数を推定した。用いた資料は明石編(1910)や場長必携、アンドリュースの調査日誌や論文、Bergman(1931)、渋谷(1967)、柴(1986)、徳山(1992)などである。

アンドリュースの調査日誌でノルウェー人砲手の名前は日本版(Andrews Journal Vol. 3)の鮎川のメモに現れる。その名前は、Gundersen, A. Kitterson, Melsom, M. Hansen, H. Hansen, O. Bogen, N. Skontorf, H. Ellefsen, F. Olsen, A.E. Hurum, Reidar Jacobsen, M. Jacobsen, N. Bogen, J. Jorgensen, S. Samuelsen, C. Larsen, Y.E. Andersen, F. Gjertsen, A. Augustine, Neilsen など20名である。アンドリュースのメモは他の捕鯨会社の砲手が含まれる可能性はあるが1910年当時は鮎川でも砲手の主体はノルウェー人だったといえる。他方、蔚山では調査日誌(Andrews Journal Vol. 4)に砲手の名前が見えないが、コククジラのモノグラフでは前出のメイン号 Main のメルソム Melsom、捕鯨船ではほかにオルガ丸 Olga の名前を謝辞に記している(Andrews 1914)。明石編(1910)では本文のほか出版当時に働いていたと思われるノルウェー人砲手の肖像写真とそのアルファベット名を掲載している。砲手のアルファベット表記が得られたのは、これら明石編(1910)の写真キャプションとアンドリュースの調査日誌、そして Bergman(1931)であった。それ以外の砲手については、アルファベット表記はカタカナを元にノルウェー人砲手「スヨーボルト」を祖父に持つ Torstein Sjøvold 元ストックホルム大学教授と筆者とで推定した。

これらの資料から収集したノルウェー人砲手の名前は59人となった(表3-4)。砲手の名前がカタカナ書きの場合、表記が不統一なため実際の人数を確定するのは困難であるが、本論ではカタカナ表記でもアルファベットでも姓と名(ファーストネーム)の両方が異なれば別人、同一姓でも名が

異なる別人物、姓のみの場合に別に名を表記した砲手がいれば便宜的にそのうちの1つとして扱った。またカタカナ表記の清音と濁音の違い、長音記号の有無その他の細かなゆらぎは同一人物とし、別表記は表中の [] に記した。このような操作をおこなったが、重複している場合があるかも知れない。場長必携の記録からは、同一年度に東洋捕鯨で働いていたノルウェー人砲手の人数は1914-1929年の16年間うち1925年以外の15年間は10人以上で、最大人数は1920年の18人だった(表3-4)。ただし年度の開始終了は事業場ごとに異なっているので、厳密に言えば最大同時着業人数とは断定できない。

次に東洋捕鯨を対象にノルウェー人砲手が占めた割合の年次変化について、長期間の記録が得られる東洋捕鯨の室蘭、鮫、釜石、鮎川、紀伊大島と串本、蔚山、大青島、大黒山島の事業場で見ると、算出の方法は、年度あたりに1日でも現れた砲手の名前を数え年度あたりの砲手数とし、このうちカタカナ書きのものをノルウェー人とした。紀伊大島と串本は一体的に運用されていたため、両事業場をひとつにまとめて調べたが、砲手の出現状況は紀伊大島単独の場合と同一だった。記録の期間は最大1914-1931年度の18年間である。結果は、室蘭では1914-1931年度の記録があり、年度あたりの砲手は2-9人で、そのうちノルウェー人は0-4人で割合は1921年度まではばらつきが大きく0-100%であったが、1922年度以降は最大でも33%となった。鮫では1915-1931年度の記録があり、年度あたり砲手は2-9人、ノルウェー人は1-8人、割合は1927年度までは50-100%であったが、1928年度以降は最大でも33%となった。以降同様に、釜石では、1916-1931年に砲手は2-7人、ノルウェー人1-2人、割合は1916年度が67%、1921年が100%の他は最大でも50%だった。鮎川は、1914-1931年度に砲手は6-13人、ノルウェー人は最大で54%、1925年以降は最大13% (宇仁 2015)。紀伊大島では、1914-1931年度に砲手は3-10人、ノルウェー人は1-5人で最大で54%、1925年以降は最大でも13%と減少した。

朝鮮の状況を見ると、蔚山では、1914-1931年度に砲手は6-13人、ノルウェー人は3-9人、1929年度までの割合は60-100%であったが、1930-1931年度は36-38%に低下した。長箭では1913-1931年に砲手は1-7人、ノルウェー人1-6人、割合は0-100%だが1924年度を除くと50%以上だった。黄海の事業場での比率は、関東州では1915-1931年度の砲手は1-4人と少なく、割合はゼロの2

年間を除くと33-100%、大青島では1918-1931年度に砲手は2-7人、割合は1929年度までは40-100%だった。大黒山島では1920-1931年度に砲手は3-10人、割合は1927年度と1931年度の2年間を除き半分以上だった。また、長箭では、1913-1917年度の日本人砲手は0-1人で、1913年度と1916年度は全員がノルウェー人だった。全体的な傾向として、ノルウェー人砲手の割合は1927年から低くなること、黄海や朝鮮の事業場では比較した事業場の平均より高く、逆に北海道や本州では平均よりも低かったことがわかる（図3-2）。長箭場長必携によると、1914年度のメイン号では上級船員（砲手、船長、機関長）全員がノルウェー人と記されており、朝鮮北部の事業場では日本が近代捕鯨を導入した当時の操業形態が1910年代後半まで存在していたといえる。1930（昭和5）年夏に千島列島を縦断したスウェーデンの探検家ステン・ベルクマン（Sten Bergman 1895-1975）は、東洋捕鯨の紗那事業場（択捉島）と斜古丹事業場（色丹島）で働くノルウェー人砲手の仕事と家庭のレポートを残している（Bergman 1931: 195-215, 289-303）。登場するのは紗那事業場の Hans Hurum、そして斜古丹事業場の Ludvig Larsen と Arne Ellefsen の合わせて3人である。彼らはもっとも遅い時期まで日本で就業していたグループである。なお、ドイツ語版からの抄訳であるベルクマン（1961: 110-127）は択捉島部分のみの抄訳で砲手の写真は収録していない。

このように日本の近代沿岸捕鯨で働いたノルウェー人砲手は遠隔地での着業が多かった。この理由を記した文書は見つかっていないが、朝鮮北部や択捉島など遠隔地の事業場には日本人砲手はなかなか行きたがらず、その穴埋めとしてノルウェー人砲手が用いられたのかも知れない。

続いてノルウェー人砲手の人数と割合の変化について、東洋捕鯨の主要事業場である鮎川と蔚山の場長必携で比較する。蔚山の場合、1914-1926（大正3-15）年度では、砲手の年度あたりの実数は7-13人で、そのうちノルウェー人砲手の割合は60-100%、年度平均で77%だった。一方、日本人砲手は計11人が従事し、そのイニシャル（姓・名の順）は出現順にM.Y., K.G., F.T., K.S., N.T., K.S., T.K., A.R., O.K., A.T., F.S.である。ノルウェー人砲手は、昭和初期（1930年前後）でもその割合は高く、1927-29年度には年度あたりの砲手9-10人中の78-60%を占めていた。1930-1931（昭和5-6）年度は11-8人中36-38%と比率が下がり、1932年度以降はまったく見られない（表3-5）。一方、鮎川事業場ではノルウェー人砲手の割合が高かったのは1914-1924（大正3-13）年度

であり、年度あたりの砲手の実数は6-13人、うちノルウェー人は1-7人で、割合は14-50%であり、蔚山に比べてかなり低い。鮎川におけるノルウェー人砲手の割合は、1925（大正14）年以降さらに低くなり、0-13%であった（表3-6）。東洋捕鯨の主要事業場の鮎川と蔚山の比較でも、朝鮮の蔚山にノルウェー人砲手の割合が多かった。

砲手の育成方法

1910年頃までは圧倒的にノルウェー人が多かった砲手も、その後は日本人の割合が増加し、1933年以降は日本人だけとなる。砲手の育成方法については、水産伝習所（旧・東京水産大学、現・東京海洋大学）が砲手育成用に捕鯨船ニコライ丸を借り上げて講習したという記事（無署名 1907）が知られている。別の情報が場長必携にある。「22）配属ノ船名及上級船員」の項目には、見習い砲手や練習砲手が乗船していたことを示す書き込みが稀に見られる。この書き込みが見られる捕鯨船の船長は、日本人砲手が兼務したものに限られていた。東洋捕鯨では日本人砲手は船長を兼務していたが、砲手がノルウェー人の場合は、別に日本人が船長として必ず乗り合わせている。つまりノルウェー人が砲手を勤める場合、乗組員がひとり余分に必要であり、経営効率上は悪かった。逆に日本人砲手の場合は、見習い砲手を乗船させることも可能であった。砲手の養成という面でも、日本人砲手の方が都合よかったことが伺える。場長必携には、見習いや練習砲手の出現は非常に少なく、記載されないことの方が多かったのかも知れない。また、日本人砲手とノルウェー人砲手との成績の違い、砲手個々人の捕獲実績についての記述は得られなかった。

場長必携の記載では、ノルウェー人砲手は1930年代になると少なくなり、記録が得られた最終年は1932（昭和7）年で、台湾事業場に1932年1月6日から翌1933年4月10日まで在籍していたハンセンに限られた。捕鯨業界は、1929年に始まる世界恐慌の影響で鯨油価格が暴落し経営が悪化したといい、東洋捕鯨でも1930-1931年は純益金を計上していない（表4-4、図4-6）。すでに日本人砲手も多くなっており、給与が高額なこと（明石編 1910: 103-105）、意思疎通の問題や見習い砲手の育成の都合上、ノルウェー人砲手が先に解雇されたのかも知れない。現在のところノルウェー人砲手を廃止した理由に関する記録は得られていない。

砲手と捕鯨船の関係

場長必携の記載から砲手と捕鯨船の組み合わせはある程度決まっていたことが窺える。その組み合わせは、東洋捕鯨では合併前のものが維持される傾向にあった。たとえば、日本人最初の砲手とされる夏目市太郎が乗り込んだ捕鯨船は、一貫してアヴァロン丸であった。記録に現れる着業地は、樺太1923（大正12）年度、釜石1922年度、鮎川1914–1923年度、紀伊大島1914–1920年度、串本1916–1920年度で、ほとんどの年を鮎川と紀伊大島や串本で操業した。なお、彼は1923年度に鮎川を出航後に船ともども行方不明のままとなり（渋谷 1967: 126）、場長必携には鮎川での捜索の経過が記されている。大島事業場では、他にもデビットセンが1920–1922, 1924–1925年度に神功丸で、スヨーボルトが1919–1922, 1924年度に千鳥丸で、日本人砲手Kjが1916–1917, 1920–1922, 1925, 1927, 1929年度に第二博運で継続して操業している。

他方、砲手が固定しなかった捕鯨船も存在する。代表的な例としてレックス丸がある。レックス丸に乗船した砲手は一定せず、ノルウェー人12人、日本人3人、計15人の名前が見える。一方、1912–1932年の21年間に乗船した船長はHn、S、Hk、K、Mj、Dの5人に限られ、このうちKとDは日本人砲手が兼務した船長である。Mjは1921–1932年の12年間にわたりノルウェー人砲手とともに船長を務めた。少数の船長が長期間にわたり勤める捕鯨船であった。東洋捕鯨の場合、ノルウェー人砲手は船長を兼ねないため、レックス丸の保守管理や状態についてはこの船を熟知する船長が把握していた。レックス丸は性能が悪かったらしく、アンドリュースが砲手オルセンにあてた手紙にもレックス丸は古いので新しい船に移れてよかったと書いている¹⁾。

レックス丸の名前は他の捕鯨船に比べて多くの地域で出現し、少なくとも網走や鮫、久根津、蔚山などで着業した。レックス丸がノルウェー人砲手の在籍記録がある1912–1932（明治45–昭和7）年度の21年間に着業した事業場は、少なくとも、紗那、単冠、斜古丹、網走、霧多布、室蘭、鮫、釜石、鮎川、紀伊大島、串本、細島、黄島、久根津、大河内、比田勝、長箭、楡津、蔚山、関東州、大青島、大黒山島、濟州島、台湾の24個所にのぼる。1914年以降は、ほぼ毎年3–5事業場を回航していたことがわかる。1921年度以降は、事業場の着業と離脱について年月日入りの記録が多くなり、回航の様子を連続的に描けるようになった。これによると1921年度以降にレックス丸が単年度中に着業した事業場は毎年4–6個所であり、当初は冬期間を黄海や蔚山で操業、初夏から秋の間は

東北から北海道の太平洋で過ごし、再び朝鮮に戻っていたが、1925年度以降は、前年末から台湾に入り4月まで在籍、夏は東北や北海道、秋以降は朝鮮で操業という形態を繰り返している（表3-7）。記録では日付が大きく空いた移動が見られるが、これは修理や点検のほか記録の欠損あるいは著者の見落としの可能性もあるかも知れない。移動する距離も大きく、1932年度には台湾南端の恒春から択捉島単冠まで、1920年度も朝鮮半島北部の楡津から恒春まで回航している。性能が悪かったとすれば、他の主要捕鯨船の補佐的役割として各地を転々としていたのかも知れない。

*1 April 24, 1911 RCA to Dear Captain Olsen

砲手と家族、地域との関係

ノルウェー人砲手は、近代捕鯨導入当時において捕鯨の技術を有する唯一の人材であり、企業の利益を生み出し、彼らなしでは操業自体が成り立たなかった。待遇面では非常な優遇を受けていたことがよく知られている（明石編 1910: 103-105）。彼らの社内での態度や地域での振る舞いについては、技術を隠して横柄であるとか横暴であったという記述が見られるが（板橋 1989: 110-113、徳山 1992: 35）、これらは後の時代に記されたもので、著者の体験や経験者からの聞き取りでなく根拠も示されていない。居住地でノルウェー人砲手と実際に接した人たちの思い出は、むしろおおらかで好意的なものが目立つ。仙台の医師が鮎川での少年期の思い出を綴った『遙かなる鮎川』（伊吹 1977: 7）では、叱られて泣いている時にノルウェー人に林檎をもらったこと、家によくノルウェー人が遊びに来たこと、家で角力をしてわざと負けてくれたことなどを記している。

『室戸町誌』（室戸町誌編纂委員会 1962）は甲浦の住民の話として「ノルウェー人は身体は大きい、頗る軽快に立ちふるまい、マスト登りも猿のように身軽で上手でありました」「ノルウェー人の砲手は、暇な時にはよく町を散歩していました。時々私の家へ来て一解剖長！沖行くよろしい？天気いかが？と上手に日本語で話しかけて来ました」（pp372-373）などという和やかな様子を伝える。鹿児島県奄美大島瀬戸内町の郷土史「わきやあ島久根津」（豊 1988）では「捕鯨船乗組砲手はノルウェー人（セコントロールさん）で白い肌に金髪、青い目の西洋人にお目にかかるのは当時初めての事だったと思う。彼は古仁屋にも出かけたが、村の子供達ともよく遊び言葉が通じないので、一銭二銭の小金等を投げて拾う様を見て喜んでいたという」（59p）との伝聞を紹介してい

る。なお、久根津事業場長必携には類似する砲手は見えないが、次に紹介する「スコントルプ」の転訛したものかも知れない。宮城県鮎川で子ども時代を過ごした医師は、ノルウェー人砲手の思い出をと記し悪い印象は語っていない。ノルウェー人砲手のなかでは最後の時期まで30年にわたり東洋捕鯨で働いたスコントルプが帰国する際には下関で盛大な宴会が開催され、そのことが宮城県の地方新聞で報道されており（河北新報 1930.4.28、図3-3）、彼は地方での著名人になっていたと思われる。

妻を伴って来日した砲手としては、H. G. メルソムは妻とともに長崎に滞在しており、そこで1章で紹介したとおり次女のシグリが生まれている。アンドリュースが撮影した写真のうちノルウェー人砲手の妻と思われる女性が写っているのは1枚1人に限られるので（写真3-2）、妻や家族を伴っての日本への赴任は稀な例と思われる。

3節 捕獲状況

本章の最後は近代沿岸捕鯨の初期の捕獲状況と捕獲数から見た東洋捕鯨の主要事業場について述べる。場長必携の捕獲記録は種別月別の集計表があるだけで、体長や性別、性成熟や成長の状態、妊娠や泌乳の有無などの捕獲個体の生物学的情報は記されていない。そのため捕獲記録から回遊や個体群状態を議論することはほぼ不可能という条件であるが、東洋捕鯨の主要事業場の捕獲状況、三陸と黄海のナガスクジラの捕獲、シロナガスクジラの記録などの3点について考察する。

なお、場長必携の捕獲記録で鯨種は漢字で表記されている。具体的には鯨の文字を省略した、背美、白長須、長須、座頭、抹香、鯨や鯨または鯨、克の7種であった。捕獲記録については記載どおりに記す。これは生物学的種の識別についての根拠がないためで、とくに鯨や鯨そして鯨はニタリクジラを含んでいることによる。イワシクジラの漢字表記は必要がない限り、今後は出現が多かった鯨で統一する。

東洋捕鯨の主要事業場と捕獲構成

場長必携に記された1945年度までの累積捕獲数が概ね1000頭に達した事業場は12箇所あり、多い順に鮎川、蔚山、紗那、斜古丹、釜石、単冠、鯨、紀伊大島、小笠原、大黒山島、霧多布、関東

州であった（表3-8、図3-4）。ここに示した12事業所の累積捕獲数の総計は、脊美71、白長須546、長須8,327、座頭1,021、抹香6,855、鯨7,295、克1,029、合計26,649頭である。捕獲種の構成は、鮎川と釜石では抹香と鯨が大半を占め長須が少し、蔚山では長須が2/3と克が1/3、紗那ではほとんどが抹香で、1939（昭和14）年度に捕獲された310頭の内305頭が抹香で7月に137頭を捕獲した。斜古丹と単冠はほとんどが鯨と長須で抹香がわずか、鯨では長須が2/3と鯨が1/3、紀伊大島は独自の構成で鯨が半数以上だったが白長須も相当数捕獲された。霧多布では鯨と抹香、長須が概ね1/3、黄海の大黒山島と関東州はほとんどが長須だった。このように、東洋捕鯨が捕獲した鯨種は海域、場合によっては隣接した事業場でも異なっていたことがわかる。

事業場の全体を見たときの捕獲種の年次変化は、本州北東部の太平洋側や千島列島の事業場では、はじめはナガスクジラが主体だったが、次第にイワシクジラやマッコウクジラの数が増え、最後はマッコウクジラの漁場と変化した一方、オホーツク海や朝鮮半島東岸の日本海、そして黄海ではナガスクジラが最後まで主体であった。本州中部から四国、九州にかけての太平洋側では当初はシロナガスクジラが多かったが、すぐに減少し、鯨、おそらくニタリクジラが主体となった。

特徴的なのは、多くの事業場でナガスクジラが主要な捕獲対象であったなか、択捉島の紗那は抹香がほぼ全数を占め、紀伊大島ではシロナガスクジラが相当数捕獲されていたこと、そして日本と朝鮮近海の全域でザトウクジラの捕獲が少ないことである。ザトウクジラの捕獲は、紗那ではセミクジラとほぼ同数、単冠ではセミクジラよりも少なかった。2001-2012年の12年間に日本の主要四島周辺で記録されたザトウクジラの座礁や漂着、迷入や目視などの記録は92件に上り（石川ら編2013）、21世紀の日本ではザトウクジラはミンククジラについて観察が多いヒゲ鯨となっているのとは対照的である。戦前の沿岸捕鯨では小笠原や台湾、奄美大島では捕獲された一方、本土での捕獲が少なかった理由には、漁場が回遊経路から外れていたことや捕獲に消極的だった可能性もあるが、実際に個体数が少なかったとすれば本種の減少は日本の近代捕鯨導入以前に生じていたことになる。一般には持続的な資源利用が続いたとされる近世捕鯨の捕獲実態の解明が待たれる。以下、近代沿岸捕鯨の初期に捕獲が減少したナガスクジラとシロナガスクジラについて、過去の報告を検討するとともに本論で得た資料から考察する。

ナガスクジラの捕獲状況

ナガスクジラの捕獲状況については松浦（1935a）の報告がある。この報告では、日本近海でナガスクジラを捕獲した根拠地を北海区、東北海区、南西海区、対馬海区、黄海区の5海区に分けて議論し、論文発表前の10年間、1924–1933年の捕獲統計からナガスクジラについて日本近海では逐年的減少が著しいのは東北海区であり、関東州を除く黄海や対馬海区ではさほど著しくはなく、北海区は漸増の傾向にあると結論している。ここでの北海区とは北海道のオホーツク海から南千島そして太平洋の沖合、東北海区は東北地方の太平洋沖、西南海区は紀伊半島から四国の太平洋沖、黄海区は大青島と小青島〔於青島と思われる。場所は図示されていない〕の2事業場を指している。おなじ黄海北部にある海洋島の事業場は関東州として別に扱い、捕獲数は1924年の42頭から1932年5頭へと変化し1933年は操業しなかったのか数値なしとなっており、捕獲数の減少が明白であるが論文の中では議論されていない。なお、濟州島事業場の操業は1929（昭和4）年からで松浦（1935a）では事業場が記されておらず議論に含まれていない。

一方、笠原（1950: 表10）で黄海区は関東州を含めた1916年以降の記録を記しており、これを見れば1917–1918年は1920年代の概ね100頭余りの倍となる200頭を超える捕獲があり、また1930年代中頃から捕獲数は急激に減少している。松浦（1935a）が黄海や対馬海峡でのナガスクジラの捕獲の減少は著しくないと結論したのは、捕獲数が多かった1910年代の数値を用いなかったこと、設定した分析の期間1924–1933年が安定した捕獲数だったこと、捕獲数の減少が著しかった関東州の記録を用いなかったという3つの要因による。

場長必携の捕獲記録は笠原（1950）の統計とほぼ一致する（図3-5）。これは黄海の主要事業場がすべて東洋捕鯨の事業場であったことによる。例外は太平洋戦争の期間中に西大洋漁業統制株式会社（大洋漁業系）が設置操業した青島と於青島である。いずれも設置年はわからないが、1937–1945年の捕獲実績はともに1945年のみで、於青島10頭（長須10、鯰3）、青島4頭（長須）と少数であった（徳山 1992: 53–55）。青島事業場の捕獲については日本海洋漁業協議会（1951: 208）でも確かめられる。青島については東洋捕鯨の営業報告に事業場として現れるが操業や設備の記録は見られない（表2-4）。

もうすこし詳しく見ると、場長必携の記録からわかることは、黄海北部にあった関東州と大青島の事業場の捕獲数が1930年代には僅少となり休業を余儀なくされたことである。とくに関東州では減少が急激だった（図3-5）。関東州事業場長必携の捕獲記録や「漁場の変化」の記述では、長須鯨の群れは当初は海洋島の東南30-40海里にあったものが1920年代には東南50-60海里に遠ざかり、動きも敏感になったという。1931-1932年の不漁の後1933年は休業、翌1934年も長須1頭ミンク16頭で漁獲の回復が見込めず5年の休漁の後、1939年に再会するが長須3頭座頭1頭の計4頭で終わる。1940（昭和15）年は長須8頭、1941-1943年に再び休漁した後の1944年に長須2頭が最後の捕獲記録となっている。関東州事業場では1931年以降は事業が成立しないほどの不漁となったことを伝えている。北から2番目の大青島は1918年に事業を開始、1928年までは50頭前後の捕獲で安定していたが1929年に最高の84頭を記録したが翌1930-1931年はともに35頭に減少、そして1932-1941年の捕獲記録は1934年長須9頭と1940年長須3頭に限られ他の年は休業した。太平洋戦争の開始以降の1942-1944年の捕獲はいずれも長須のみで順に9、12、20頭である。大青島でも1930年代にはほとんど操業できない状態が続いた。

これらの記述では捕獲数の減少は鯨群の行動の変化の影響を受けていることも示唆されるが、数年以上の休業の後にも捕獲数が回復していないことは、捕獲によって実際に回遊個体数が大きく減少したと考える方が自然である。

一方、三陸海域のナガスクジラについて場長必携から新たな議論をおこなうのは困難である。東北地方太平洋側にあった東洋捕鯨の事業場は鮎川と荻浜そして鯨の3か所、1916年の第二次合併で釜石が加わったが、高知の捕鯨会社など東洋捕鯨に合流しなかった企業の事業場が鮎川に複数存在した。そのため東洋捕鯨だけでは捕獲状況を議論するに十分な記録には至らない。参考に場長必携の記録をグラフにすると、笠原（1950）の捕獲数とおおむね平行の状態推移しているが、他の捕鯨会社の捕獲数による数値の開きが大きく、とくに第二次合併をした1916年以前に顕著である（図3-6）。それでも事業場別の傾向が読み取れ、鮎川での減少が鯨や釜石に比べて早くに生じ、1919年以降では1923年と1925年以外の捕獲数は著しく少ない状態であったことがわかる。なお、荻浜は実際には操業せずに廃止されたため（表2-4）、場長必携が残るのは鯨、釜石、鮎川の3事業場であ

る。松浦（1935a）は三陸海域を東北海区とし捕獲の減少が著しいとしているが、分析対象とした1924-1933年の捕獲数は1925年の11頭を除けば0-5頭と極めて少なく、すでに回遊個体がほとんどいない状況であった。より長期間の記録で議論した笠原（1950: 64-65）は、捕獲数の減少に加え捕獲個体に占める大型個体の割合の低下が見られ特に三陸漁場では未成熟個体の割合が驚くほど高くなったとしている。

鮎川は近代沿岸捕鯨の最大の根拠地であったので、東洋捕鯨だけの記録となるが事業場の種別捕獲数について示しておく。鮎川の漁場である金華山沖はマッコウクジラの漁場として知られ、現在の鮎川住民にもその認識が強い。しかし、事業場開設当初5年間はナガスクジラとイワシクジラの2種がほぼ同数で捕獲の大半を占めていた。マッコウクジラの捕獲が増加するのは1914年度から、イワシクジラは1915年度からであり、前述のとおりナガスクジラは1919年度以降になるとほとんど捕獲が見られない。場長必携によれば操業月が当初は夏だけであったものが次第に秋から冬へと延長されている。これがマッコウクジラの捕獲数の増加の原因なのか結果なのかはわからない。1927-1930年はマッコウクジラが卓越するが、その後1936-1941年度はイワシクジラの割合が正規の捕獲では第1位となるので、捕獲対象種がナガスクジラからイワシクジラとマッコウクジラに変化したことは確かであるが、イワシクジラの次にマッコウクジラという順序は認められない（図3-7）。

1931-1935年度に捕獲数が減少しているのは、1929（昭和4）年に始まる大恐慌の影響に加え、不況下でも南極海での捕鯨が伸展したことによる世界的な鯨油価格の下落（多藤 1985: 19-20）の影響、それに加え1933-1934年は1933年3月3日に発生した昭和三陸津波で事業場が破壊された影響が加わったと思われる。鮎川場長必携には1932-1934年度の事業着手と引揚げの日付の記録がなく、この期間は捕獲統計も通常とは異なる様式で記されており、異常な状況であったことがうかがえる。

図3-7に示したように、1932-1936年の鮎川事業場長必携には多数の番外鯨の捕獲が記録されている。日本で捕鯨に捕獲に関する体長制限が導入されたのは1938（昭和13）年のことであり（粕谷 2011: 141）、公的な捕獲制限が無いにもかかわらず、捕鯨会社が捕獲数を公式記録から除外するの

は税金逃れを推定する見方もある（同: 585）。場長必携にも、捕鯨税として捕獲した鯨1頭あたり種別に定められた県税や町村税が設定されていたことが記されている。

鮎川と異なりナガスクジラを専門に捕獲していた黄海の事業場の場長必携には1930年頃に捕獲調整をおこなった痕跡は見られない。これはナガスクジラが国内向けの鯨肉生産が主目的であったために世界的な不況ではあっても一定数の需要が継続したためと考える。

オホーツク海のナガスクジラについて松浦（1935a）は、東洋捕鯨の樺太事業場（札塔）の捕獲が1930年代に中絶しているのは、捕獲対象となった系群の絶滅ではなく根拠地として不適切という別の理由だろうと推測している。この推測が妥当だったことは場長必携から確かめられる。東洋捕鯨が設置したオホーツク海沿岸の事業場は網走と札塔の2か所であり、操業した年は網走が1915–1919年、1933–1935年、1940–1945年、札塔は1920–1923年、1925–1930年、1936–1937年で両者の重複はなく、交互に操業している（表2-4および場長必携）。両事業場での操業の中断は捕獲数の減少と関連しており、網走では1回目の1919年の中断は捕獲数が最大となった1916年の142頭に対して16頭に減少、2回目の1935年は1931年の50頭に対して1頭、最後の1945年は前年1944年の77頭に対して32頭であった。1919年の中断は根室への設備移転、1945年は終戦という別の要因も働いたと推測するが、1935年の中断は捕獲数の減少と思われる。札塔も同様に、1回目は最大となった1921年の47頭に対し1923年の捕獲は7頭、最後の操業は開始年の1936年は17頭に対し中断した翌1937年は1頭の捕獲であった。松浦（1935a）の議論で現れた1930年の中断は35頭でピークとなった1926年の41頭との差は少なかった。

札塔と網走の事業場が捕獲していた回遊群が同一であるとの証明は未遂であるが、捕獲月や地理的状況からその可能性は高く、捕獲開始年あるいは翌年に捕獲数が最大となった後に急減し、捕獲数が僅少となったところでもう一方の事業場で捕獲を再開するという方法を、網走と札塔の2か所で継続してきたことが示唆される。

シロナガスクジラの捕獲状況

場長必携にはシロナガスクジラの記録は少ない。場長必携の作成は東洋捕鯨が設立された1909年以降であり、シロナガスクジラはそれ以前に大量の捕獲があったこと、捕獲が多かった土佐清水、

高知県の甲浦や隣接した徳島県の穴喰、和歌山県の二木島では場長必携は残されていないこと、宮崎県の細島も捕獲記録が1912年からと最盛期を過ぎてからの記録であることなどの理由による。松浦（1935b）によれば、シロナガスクジラの漁場は冬期に紀伊半島の潮岬から四国の室戸岬を経て九州の細島近海で、捕獲の最盛期は1907-1908年でその後10年あまりで捕獲数は急減、捕獲が多かった事業場は根室（北海道）、鮫（青森）、二木島（三重）、甲浦および清水（高知）、細島（宮崎）であり対馬や黄海方面での捕獲は極めて少なかった。沿岸捕鯨の事業場の設置からすれば、東洋漁業や高知県で設立された捕鯨会社が太平洋沿岸に事業場を置いた1907年以降に本格化したと説明できる。松浦（1935）は1907-1934の捕獲統計をグラフにまとめているが、年別捕獲数は記さず、海域や事業場ごとの捕獲数も掲載していない。笠原（1950: 75）も本文では典拠を示さずに1907-1910年の捕獲数を表に掲げ、1907年約340頭、1908年約220頭、1909年は数値なし、1910年約103頭、1911年240頭、1912年236頭とするが、数値から松浦（1935）の引用と思われる。別に古い年代の捕獲数に言及した報告として田子（1922）が1910-1920年の年別月別の捕獲数を表にまとめている（1910年は9-12月、1920年は1-8月）。これによると1911年の捕獲数は243頭、1912年236頭、1913年58頭、1914年123頭（笠原1950は122頭）、1915年57頭、1916年75頭（笠原1950は70頭）となっており、他の年の数字も松浦（1935）と矛盾せず、1911-1912年の捕獲数は笠原（1950: 75）とほぼ同じである。少数であるが既存の報告では、シロナガスクジラは本州の南西部から四国九州の沖合の太平洋を中心に捕獲され、年間捕獲数は最大300頭を超え、明治末期の1907-1916年10年間の捕獲数は1446頭以上になっている（笠原 1950: 75-76）。

東洋捕鯨以外の捕獲記録は高知に設立された大東捕鯨について年別事業場別に作成されたものがあるが（伊豆川 1943）、種別の集計がされていない（表3-9）。また、場長必携は1909年に設立された東洋捕鯨の冊子であるので1908年以前の記録は見られない。

そこで1907-1908年の東洋漁業の営業報告（山口県文書館蔵）および大日本捕鯨の営業報告（勇魚文庫蔵）、そして1916年の第二次合併で東洋捕鯨に合流した内外水産と紀伊水産ならびに太平洋捕鯨と大日本捕鯨（1909-1914年のみ利用）の捕獲統計を収録した『串本町誌』（串本町

1924)、そして場長必携からシロナガスクジラの捕獲数を抽出すると、1907-1916年10年間の捕獲数は1231頭となった(表3-10)。これは笠原(1950)の集計よりも少ないが、その理由は1908年の東洋漁業の捕獲数が不明なこと、そして相当数の捕獲があったと思われる高知の捕鯨企業3社の種別統計が含まれないことによる。本論の集計で年あたりの捕獲数が既存の報告を上回るのは1908年の239頭、1909年196頭、1910年143頭の3回であった。各年度の捕獲数で笠原(1950)あるいは田子(1922)と本論の集計の多い方を集計すると1907-1916年の捕獲数は1707頭になる(表3-10)。種別の記録が得られ、かつ年間捕獲数が20頭以上の捕獲記録から総捕獲数に対する白長須鯨の割合を見ると、1908年の大日本捕鯨は129/184頭となり70.1%、1907-1912年の内外水産は183/263頭で69.6%、1908-1913年の紀伊水産では125/264頭の47.3%、合算で437/711頭61.5%であった。単純にこの割合を大東捕鯨の太地(和歌山県)と浮津(高知県)の1907-1916年(1912年は欠損、表3-9)の捕獲数276頭に掛けると同社の1907-1916年のシロナガスクジラの推定捕獲数は170頭、日本全体での1907-1916年のシロナガスクジラの推定捕獲数は1877頭となる(表3-10)。これに笠原(1950)の統計の1917-1945年分683頭を追加すると、1907-1945年の日本におけるシロナガスクジラの推定捕獲数は2560頭に上り、笠原(1950)が掲載する捕獲統計1907-1945年に2,129頭より400頭以上多くなる。

戦前の沿岸捕鯨で捕獲されたシロナガスクジラの推定捕獲数2560頭は、1972年に算出されたシロナガスクジラの北太平洋のアジア系統群の初期資源量は1200-1300頭(大隅 1994)の2倍にのぼる。もともと少なかった資源に大きな影響を与えたことは間違いないだろう。

3章 日本の近代沿岸捕鯨で着業した捕鯨船と砲手

表3-1 1945年までに就業した沿岸捕鯨船

登録船名	建造年	船名録初出	製造地	総トン数	寸法 ^{*1} L×W×D	帆船形式	船体番号	使用者 ^{*2}	元船名および備考
1 弥生丸	1887.7	明治31年	長崎	46t	19.9×3.5×2.2	-	1620	捕鯨組	新造、1896年までは他で使用
2 初鷹丸	1897.4	明治31年	長崎	105t	26.2×4.8×3.1	スクナー	1659	長崎捕鯨	新造
3 烽火丸	1899.3	明治32年	大阪	124t	27.9×4.7×3.7	スクナー	1867	長崎捕鯨	新造、当初の船名は西海丸
4 第一長周丸	1899.11	明治33年	東京	122t	29.0×5.1×3.0	スクナー	5644	日本遠洋漁業	新造
5 オルガ丸	1898	明治39年	ノルウェー	125t	28.4×5.5×3.5	スクナー	9045	東洋漁業	Olga ^{*4}
6 にこらい丸	1895 ^{*4}	明治39年	ノルウェー	132t	28.5×5.5×3.5	カッター	9329	東洋漁業	НИКОЛАЙ ?, Nicolai ^{*4}
7 アイランド丸	1903	明治41年	ノルウェー	110t	28.7×5.1×3.1	スループ	10315	内外水産	Island ^{*4}
8 ギョルギー丸	1894 ^{*4}	明治41年	ノルウェー	136t	28.6×5.5×4.1	スクナー	10328	内外水産	ГЕОРГИИ ^{*5} , Georgii ^{*4}
9 第二東郷丸	1902	明治41年	ノルウェー	115t	28.4×5.2×3.2	スループ	10360	長崎捕鯨	Humber ^{*4}
10 第二大東丸	1905	明治41年	ノルウェー	112t	28.9×5.2×3.1	スループ	10367	大東漁業	Bacalien ^{*4}
11 六甲丸	1907.10	明治41年	大阪	135t	30.4×5.3×3.2	スループ	10376	範多竜太郎	新造、後に第六捕鯨丸に改名 ^{*8}
12 第三東郷丸	1907.1	明治41年	大阪	152t	33.1×5.3×3.6	スクナー	10377	長崎捕鯨	新造
13 曙丸	1906.2	明治41年	ノルウェー	113t	28.6×5.2×3.1	カッター	10416	東洋漁業	Queen Alexandra ^{*4}
14 いなつま丸	1906.10	明治41年	ノルウェー	116t	28.6×5.2×3.1	スクナー	10419	東洋漁業	新造
15 いかつち丸	1906.10	明治41年	ノルウェー	116t	28.6×5.2×3.1	スクナー	10425	東洋漁業	新造
16 神功丸	1906.5	明治41年	ノルウェー	111t	28.6×5.1×3.1	スクナー	10471	長門捕鯨	新造、レギナ号の代船 ^{*8}
17 レックス丸	1902.5	明治42年	ノルウェー	119t	28.6×5.2×3.2	スループ	10523	東洋漁業	Rex ^{*4}
18 第一太平丸	1904	明治41年	ノルウェー	111t	28.2×5.1×3.2	スループ	10812	太平洋漁業	Neptune ^{*4}
19 第二太平丸	1902.1	明治41年	ノルウェー	122t	28.4×5.2×3.3	-	10820	太平洋漁業	Falcon ^{*4}
20 第一東郷丸	1906.1	明治41年	ノルウェー	112t	28.6×5.2×3.1	スクナー	10841	長崎捕鯨	新造
21 福志満丸	1904 ^{*4}	明治41年	ノルウェー	111t	28.4×5.1×3.2	スループ	10843	町田丑子	Röskva ^{*4}
22 丸三丸	1907.8	明治42年	ノルウェー	116t	28.5×5.3×3.0	スクナー	10850	丸三製材	新造
23 アヴァロン丸	1904	明治41年	ノルウェー	110t	28.4×5.0×3.0	カッター	10895	帝国水産	Avalon ^{*4}
24 第一捕鯨丸	1903	明治41年	ノルウェー	103t	27.1×5.1×3.2	スループ	10897	大日本捕鯨	Kap Nord ^{*4}
25 漣丸	1906	明治42年	ノルウェー	120t	28.8×5.2×3.3	-	10914	紀伊水産	Hjorlisfur ^{*4}
26 第三捕鯨丸	1902	明治42年	ノルウェー	109t	28.6×5.2×3.2	スループ	10915	大日本捕鯨	Selvik ^{*4}
27 第五捕鯨丸	1898	明治42年	ノルウェー	103t	26.9×5.0×3.2	スループ	10916	大日本捕鯨	Nordebble ^{*4}
28 諏訪丸	1898	明治42年	ノルウェー	114t	28.6×5.2×3.2	スループ	10917	帝国水産	新造
29 第二捕鯨丸	1907.7	明治41年	大阪	132t	30.2×5.2×3.3	スループ	11050	大日本捕鯨	新造
30 天富丸	1907.5	明治42年	ノルウェー	123t	28.5×5.3×3.0	スクナー	11059	東海漁業	新造
31 第一大東丸	1907.6	明治42年	ノルウェー	120t	29.5×5.3×3.1	スクナー	11093	大東漁業	新造
32 第五東郷丸	1890 ^{*4}	明治43年	ノルウェー	82t	25.5×5.0×2.8	-	12133	東洋捕鯨	Snorri Sturlason ^{*11}
33 千鳥丸	1903	明治43年	ノルウェー	108t	28.4×5.1×3.2	スループ	12167	紀伊水産	Thor ^{*4}
34 第一博運丸	1906	明治43年	ノルウェー	112t	28.7×5.2×3.1	-	12438	大日本水産	Faula ^{*4}
35 第二博運丸	1906	明治44年	ノルウェー	112t	28.7×5.2×3.1	-	12439	大日本水産	Busta ^{*4}
36 第二神功丸	1910.6	大正2年	大阪	130t	30.2×5.2×3.2	-	13372	長門捕鯨	新造 【以上、初期型】
37 鯨洋丸	1912.5	昭和3年	イギリス	195t	32.1×6.4×3.9	-	29082	遠洋捕鯨	Saima ^{*7} 【以下、後期型】
38 鮎川丸	1925.9	昭和4年	大阪	181t	30.9×6.2×3.9	-	31165	鮎川捕鯨	新造
39 第一元日丸	1926.4	昭和22年	大阪	216t	37.1×6.5×3.9	-	33571	日本海洋漁業	新造
40 昭和丸	1928.5	昭和4年	ノルウェー	187t	31.4×6.3×3.9	-	33852	東洋捕鯨	新造
41 第二昭和丸	1930.1	昭和6年	ノルウェー	196t	31.6×6.5×3.9	-	36156	東洋捕鯨	新造
42 第五昭和丸	1924	昭和11年	イギリス	219t	33.8×7.1×4.1	-	39661	日本捕鯨	Galicja ^{*10}
43 第三昭和丸	1926	昭和11年	ノルウェー	222t	43.0×7.1×4.1	-	39662	日本捕鯨	Leslie ^{*10}
44 第六昭和丸	1925	昭和11年	ノルウェー	217t	33.8×6.7×4.2	-	39663	日本捕鯨	William Wilson ^{*10}
45 澤捉丸	1912	昭和11年	イギリス	207t	32.4×6.5×4.1	-	39664	日本捕鯨	Sitka ^{*10}
46 色丹丸	1912	昭和11年	イギリス	207t	32.4×6.5×4.1	-	39665	日本捕鯨	Symra ^{*10}
47 メイン号 Main ^{*4}		ノルウェー	ノルウェー						新造、長崎捕鯨や東洋捕鯨で備船として操業した ^{*8}
48 レギナ号 Regina ^{*3}		ノルウェー	ノルウェー						新造、日本遠洋漁業や東洋漁業で備船として操業、1905.12月沈没 ^{*8}
フィン号 Fin ^{*6}		ノルウェー	ノルウェー						Tønnessen 1967 では Finn、日本遠洋漁業にて備船契約するも紅海で座礁沈没 ^{*9}

記載は船体番号順。^{*1} 尺はメートルに変換した。^{*2} 総トン数、寸法、使用者は初出のもの。元船名は「日本船名録」ではカタカナ表記のため、次の文献から得た：^{*3} Tønnessen 1967、^{*4} Lloyd's Register of British and Roreign Shipping、^{*5} 本論の写真、^{*6} Dickinson and Sanger 2005

^{*7} <http://www.lardex.net/TONNBERG/salvesen/skipstekst/1912saima.htm>、^{*8} 明石編 1910、^{*9} 渋谷 1967、^{*10} 捕鯨船要目表 (個人蔵)

^{*11} 船舶部会「横浜」船舶史稿編纂チーム n.d.、船名と建造年は注釈のないかぎり日本船名録による

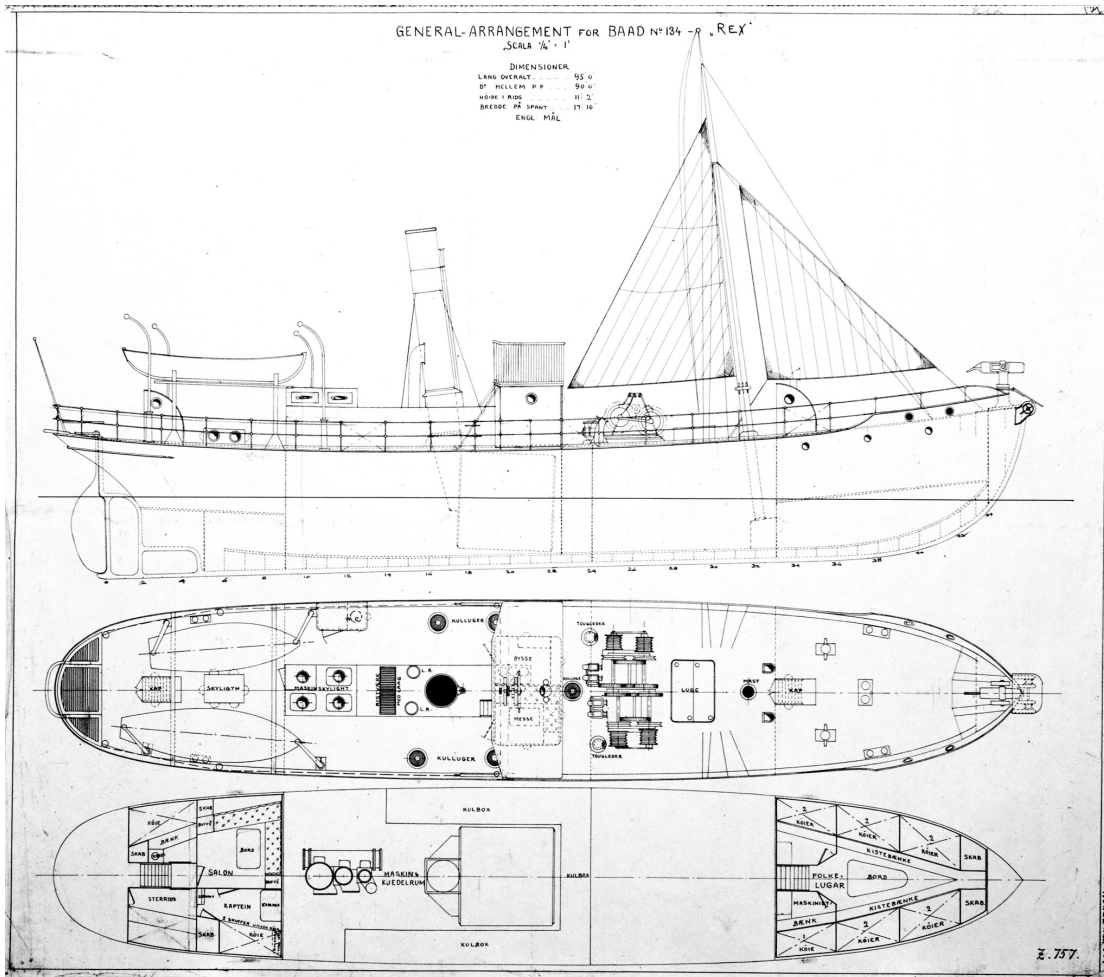


図3-1 レックス丸の船体図 (ノルウェー海洋博物館蔵 Norsk Maritimt Museum)



写真3-1 鮎川事業場の捕鯨船アイランド丸。この写真で内外水産のファンネルマークが明らかとなった。内外水産の捕鯨船は2隻であることから、左奥のおなじマークの船が1章で紹介したギョルギー丸とわかる #27359 American Museum of Natural History Library

表3-2 東洋捕鯨鮎川事業場に1914-1931年度に在籍した捕鯨船

捕鯨船名	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931
一東郷丸	1																	1
五捕鯨丸	1	1																1
一太平丸	1	1						1			1	1	1	1	1			
電丸	1	1	1				1			1		1	1	1	1	1	1	
アヴァロン丸	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1								
三捕鯨丸	1				1		1				1	1						1
一捕鯨丸		1		1	1	1	1			1				1				
二太平丸			1		1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1
神功丸			1				1		1		1							
二神功丸			1		1				1		1	1	1	1	1	1		
オルガ丸			1	1														
千島丸			1		1				1		1				1	1	1	1
一博運丸				1	1	1	1	1	1	1	1	1						
アイランド丸				1	1	1	1						1	1				
天富丸				1	1			1					1					
二博運丸					1	1		1		1	1	1	1	1		1	1	1
二東郷丸					1	1				1								1
諏訪丸					1		1	1	1	1								
ギョルギー丸						1											1	1
五東郷丸							1											
レックス丸								1	1	1	1							
六甲丸(巾着網)								1							1	1	1	1
漣丸									1	1	1	1	1		1	1	1	1
曙丸											1							
にこらい丸											1							
三東洋丸												1	1	1	1			
一元日丸																	1	1
在籍船数	6	5	7	6	12	8	10	9	9	9	12	9	9	9	8	8	8	9

宇仁・加藤編 (2017) より

表3-3 東洋捕鯨鮎川事業場に1918年度に在籍した捕鯨船の日数と期間

捕鯨船名	加入	離脱	日数	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月				
千島丸	3/18	5/19	63	■	■	■												
第一博運丸	3/29	12/3	250	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				
第二博運丸	6/9	7/3	25		■	■	■	■										
天富丸(1回目)	4/22	6/25	65			■	■	■	■									
天富丸(2回目)	9/9	9/26	18							■	■							
アイランド丸	10/29	1/13	77									■	■	■				
第二東郷丸	5/13	9/2	113			■	■	■	■	■								
第一東郷丸	5/23	9/10	111			■	■	■	■	■								
第二神功丸	7/28	9/16	51					■	■	■								
第三捕鯨丸	9/13	10/8	26							■	■	■	■					
アヴァロン丸	9/17	11/20	65							■	■	■	■	■				
第二太平丸	10/28	1/13	78									■	■	■				
諏訪丸	10/27	11/21	26									■	■	■				
在籍船数				1	2	2	2	3	3	4	4	5	5	4	3	2	2	2

宇仁・加藤編 (2017) より

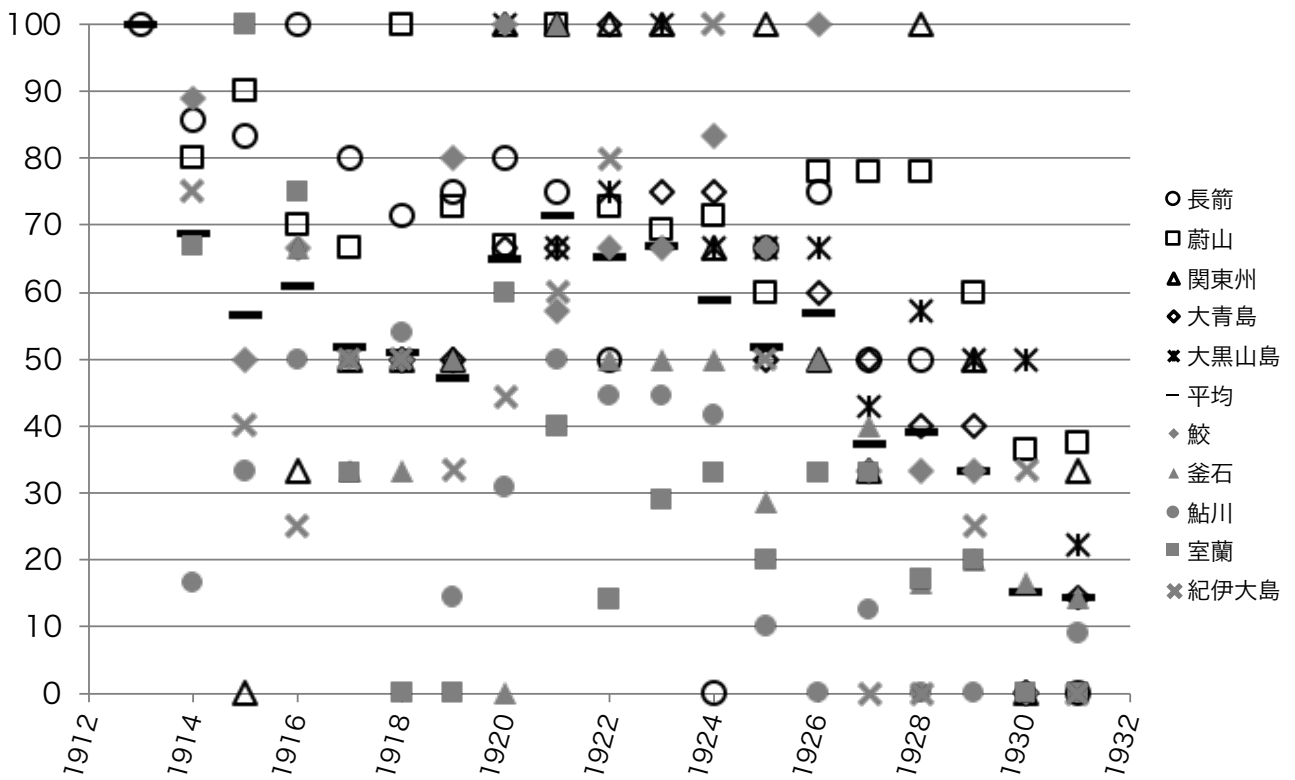


図3-2 主要な事業場に在籍した砲手の実人数に対するノルウェー人砲手の年度ごとの割合（％）。灰色記号は北海道と本州、黒線白抜きは朝鮮の事業場、横棒は年度毎の平均値。宇仁（2016a）より

表3-5 東洋捕鯨蔚山事業場の1914-1931年の砲手とノルウェー人の割合 (%)

年度	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931
ノルウェー人の割合	80	90	70	67	100	73	73	100	73	69	71	60	78	78	78	60	36	38
ノルウェー人の実数	8	9	7	6	6	8	8	7	8	9	5	6	7	7	7	6	4	3
砲手の実数	10	10	10	9	6	11	11	11	7	11	13	7	10	9	9	10	11	8
ヨンセン	1	1		1	1													
ヤコブセン	1		1	1			1					1						
キッテルセン	1	1																
ヒュールム	1	1	1							1				1				
ハンスヒュールム	1	1	1	1	1	1		1	1		1	1	1		1	1	1	1
M.Y.	1		1	1		1	1		1									
スコントルブ	1	1	1	1			1	1	1	1	1	1	1			1		
オルセン	1	1	1	1														
ヨハンセン	1	1	1		1		1	1										
T.G.	1		1															
F.T.		1																
アンダーセン		1																
ラーセン		1	1		1	1	1	1	1	1	1							
K.S.			1	1														
N.T.				1		1												
エーヒュールム			1															
ベテルセン					1													
ゼンセン					1	1		1	1	1				1				
エービーヤコブセン						1												
アールジャコブセン						1				1								
イーアンダーセン						1	1											
キナンダー						1	1					1						
エデーメルソム						1												
K.S.						1	1											
T.K.							1		1	1		1						
カールセン							1	1	1	1	1	1	1	1				
メルソム							1	1	1	1			1	1				
ハンセン									1	1					1	1		1
A.R.									1	1						1		
ダビッドセン									1	1			1					
O.K.										1	1	1	1			1	1	1
A.T.										1	1	1						
ブロンニツク										1			1	1	1	1		
エレフセン												1	1	1	1	1	1	
空欄													1					
F.S.													1					1
A.S.															1	1		1
Y.T.															1			
ハンス															1			
ビンセン																1		
クリステンセン																1		
I.Y.																1	1	1
M.S.																	1	1
エルラーセン																	1	1
イブンセン																		1
I.T.																		1
H.M.																		1
T.K.																		1
O.H.																		

灰色部分がノルウェー人砲手、日本人はイニシャルとした。宇仁 (2015b) より

表3-6 東洋捕鯨鮎川事業場の1914-1931年のノルウェー人砲手の割合 (%)

年度	大正3	大正4	大正5	大正6	大正7	大正8	大正9	大正10	大正11	大正12	大正13	大正14	大正15	昭和2	昭和3	昭和4	昭和5	昭和6
	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931
ノルウェー人砲手の割合	17	33	50	50	54	14	31	50	44	44	42	10	0	13	0	0	0	9
ノルウェー人砲手の実数	1	2	4	3	7	1	4	4	4	4	5	1	0	1	0	0	0	1
砲手の実数	6	6	8	6	13	7	13	8	9	9	12	10	12	8	8	8	8	11

宇仁 (2015b) より

表3-7 捕鯨船レックス丸の1921-1932年度の着業地

年度	着業地 (左)	着業月日 (中央)	および離脱月日 (右)				
1921	大黒山島	4/21 鮎川	記載なし 6/9 蔚山	6/20 10/1 大河内	11/4 11/15 蔚山	12/4 12/13	2/3
1922	大黒山島	1/13 鮫	5/7 5/29	6/21 鮎川	10/20 大青島	11/15 12/7	3/22
1923	関東州	3/23 鮫	6/9 7/8 斜古丹 斜古丹	7/12 7/13 8/25 鮎川	7/26 10/13 10/20 蔚山	11/15 12/6	12/30
1924	台湾	1/8	4/11 鮎川	6/12	11/19		
1925	台湾	12/27 鮫	4/19 5/18 蔚山	7/2 9/9 大黒山島	11/3 11/5 蔚山	11/22 11/23	記載なし
1926	台湾	12/27 鮫	4/17 5/30 蔚山	9/6 9/14 济州島	10/29 11/1 蔚山	11/12 11/18	12/4
1927	台湾	12/31 霧多布	4月 5/16 鮫	6/7 6/13	6/21 蔚山	8/29	12/10
1928	台湾	12/27	4/10 鮫	5/17 紗那	8/2 記載なし 蔚山	記載なし 10/13	12/7
1929	台湾	12/23 蔚山	4/14 9/5 黄島	9/8 9/15 大河内	10/10 10/14 济州島	10/19 10/21 蔚山	12/12 11/12 11/19
1930	台湾	12/27	4/10 鮫	6/3 蔚山	9/1 9/11 济州島	9/29 10/2 大河内	11/23 11/24 12/5
1931	台湾	12/26	4/3 網走	6/2 蔚山	9/8 9/17 济州島	11/3 11/6 大黒山島	12/6 12/7 12/21
1932	台湾	1/6	4/10 網走	6/8 单冠	8/27 8/28	9/7 釜石	12/2 12/16

宇仁 (2016a) より

鯨獲りの名人

スココンさん

卅餘年の捕鯨生 活をやめて歸國

我捕鯨界の大恩人で鯨とりの名人
 赤能のスココンさんと東洋捕鯨會社
 捕鯨船曙丸の名砲手ミルス・ス
 コントルク氏とは三十餘年間の
 捕鯨砲手生活をやめてこんど故國
 ノルウェーに歸ることになった。

スココンさんはノルウェー國ト
 スバーク港の生れで十八歳の時
 東洋捕鯨の前身東洋漁業會社に
 聘ばれて來朝、今日まで朝鮮、
 北海道、千島、三陸地方沖合等
 の各漁場へ活躍する傍ら捕鯨砲
 手の指導養成に力を致し、その
 技術は頗る優秀で同人の砲先に
 斃れた鯨の数は二千餘頭の多き
 に上り、これを價格に見積れば
 四百二十万圓の巨額に達する
 といふ。スココンさんに赤能とい
 ふ綽名があるのはその容貌が魁
 偉であるからだ。身長二メート
 ルに近く、体重百三十餘キロと
 いふ赤顔の巨大漢から赤能の綽
 名が出たのである。

スココンさんは二十三日夜から翌日
 まで山陽ホテルで二ダースのビ
 ルをケロリと平げまだ飲み足らぬ
 節で同日夜、神戸のノルウェー領
 事館から旅券を買ふため海路上神
 した。東洋捕鯨會社では社費とも
 いふべきスココンさんの歸國を非
 常に惜しみ来る五月一日下關發の關
 釜聯絡船で出發の際盛大な別宴を
 張る由。

図3-3 スコントルク砲手の離日を伝える新聞（河北新報 1930.4.28）



写真3-2 鮎川事業場のノルウェー人砲手と家族。1910年7月 #27370 American Museum of Natural History Library

表3-8 事業場の記録開始から1945年度までの累積捕獲頭数が概ね千頭以上12事業場の種別捕獲数

名称	脊美	白長須	長須	座頭	抹香	鰯	克	計
鮎川	2	105	647	49	2,649	2,265		5,717
蔚山	1	7	2,114	68	2	2	1,022	3,216
紗那	20	0	21	0	2,636	4		2,681
斜古丹	3	13	880	21	257	1,095		2,269
釜石	1	44	215	13	479	1,401	1	2,154
単冠	12	1	647	4	71	1,257		1,992
鮫	2	48	1,304	19	33	504		1,910
紀伊大島	12	287	61	81	309	935	1	1,686
小笠原	7	21	4	691	440	500		1,663
大黒山島	2	2	1,218	41	0	0		1,263
霧多布	9	18	249	20	419	394		1,109
関東州	0	0	967	14	0	3	5	989
計	71	546	8,327	1,021	7,295	8,360	1,029	26,649

各場長必携より作成

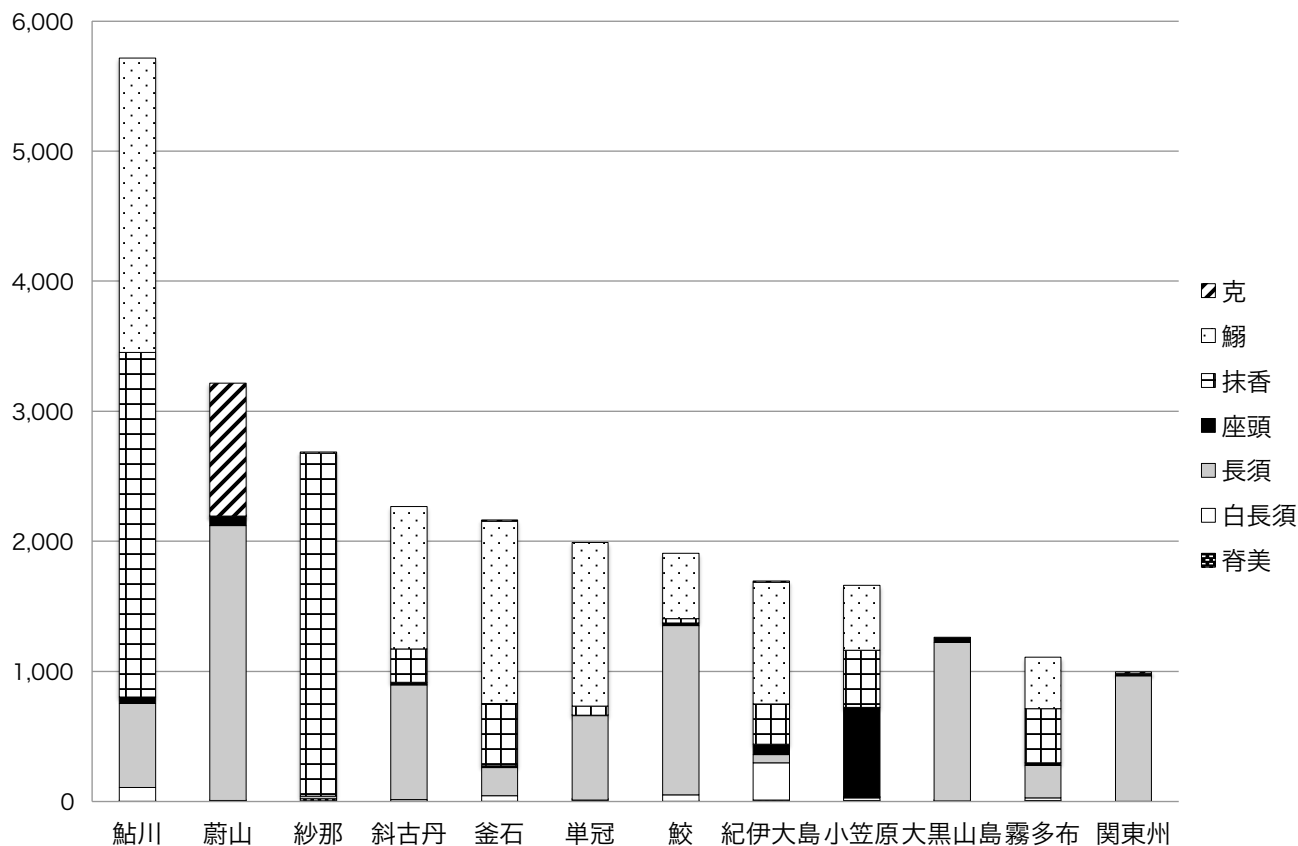


図3-4 事業場の記録開始から1945年度までの累積捕獲頭数が概ね千頭以上の12事業場の種別捕獲数。場長必携より作成。宇仁 (2016a) を訂正、小笠原を加筆した

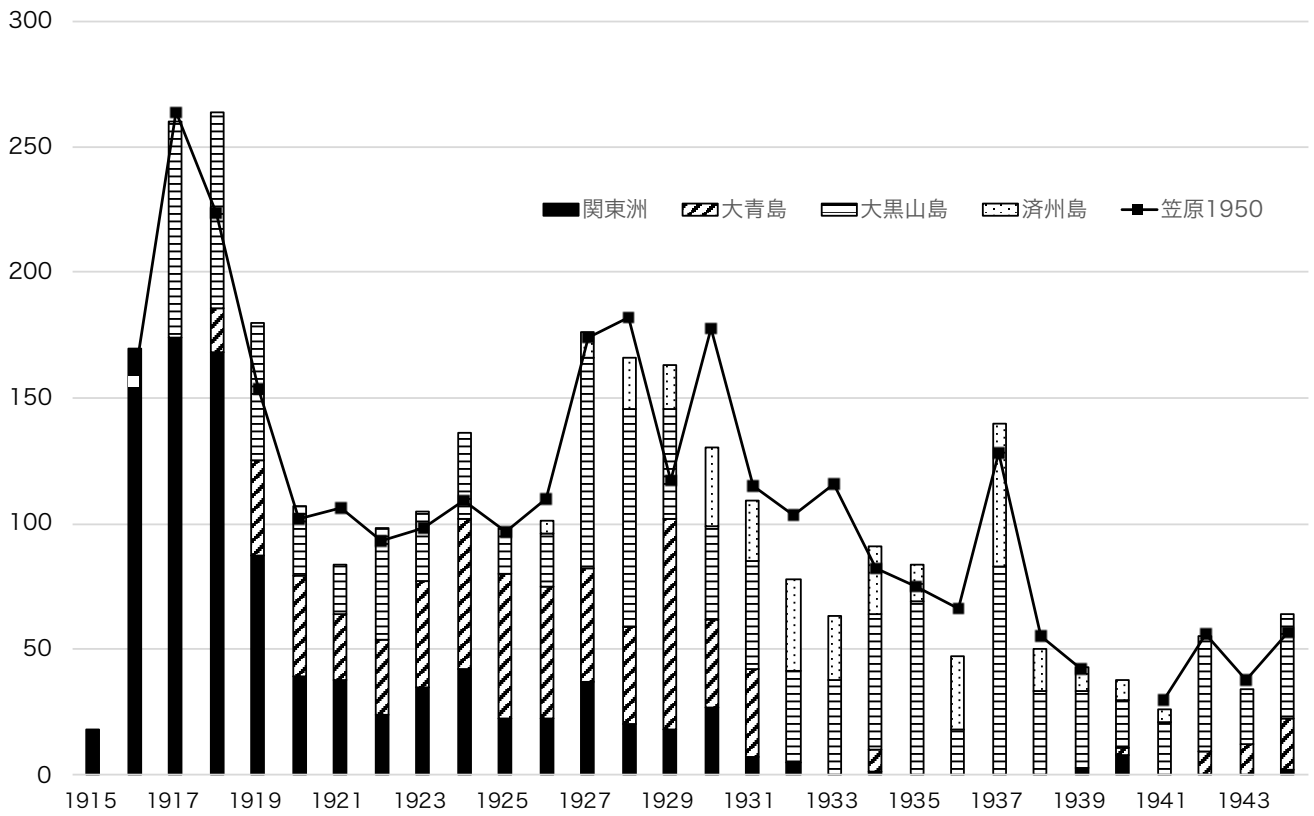


図3-5 黄海の長須鯨の捕獲数の変遷。関東州、大青島、大黒山島、濟州島の場長必携より作成

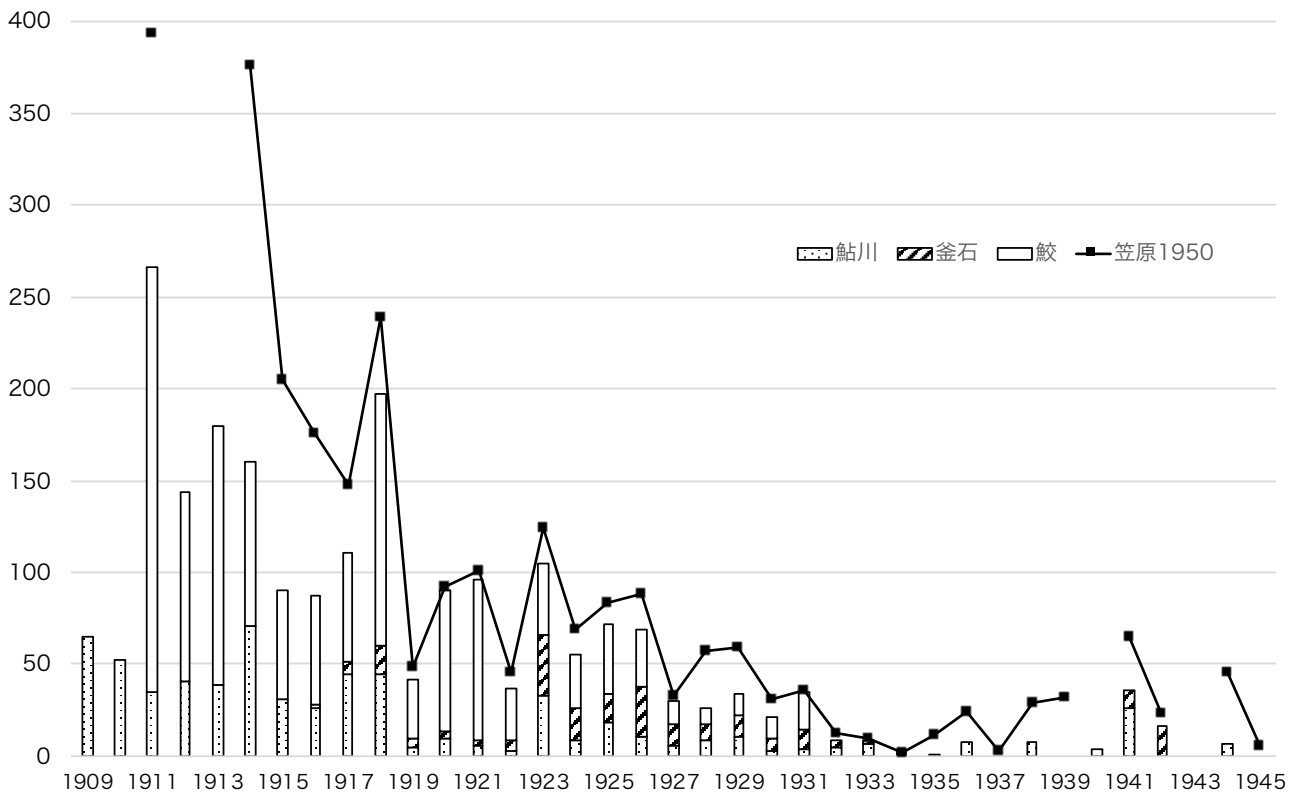


図3-6 三陸の長須鯨の捕獲数の変遷。鮎川と鮫の場長必携より作成

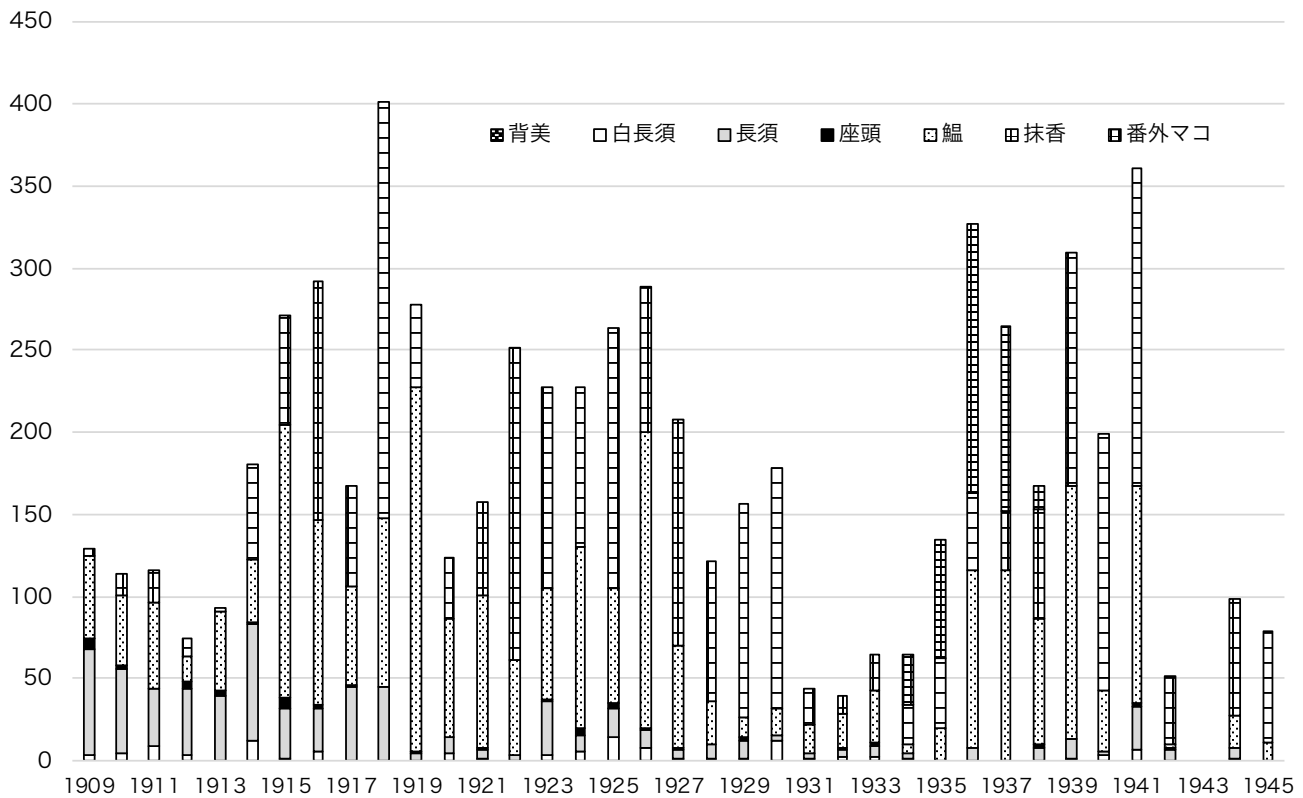


図3-7 東洋捕鯨鮎川事業場の種別捕獲数の年次変化。場長必携より作成

表3-9 伊豆川（1943）から作成した大東捕鯨の年別事業場別捕獲数

	呼子	浮津	太地	鮎川	荻浜	釜石	両石	花咲	網走	紋別	その他	計	備考
1907		46			31							77	鯨3
1908		36			48							84	
1909	6	18	19		103							146	
1910		7	38		14		56					115	
1911	3	2	28		11		101					145	鯨5
1912													0 全項目空白
1913	5		7				105					117	
1914	6		13		9		119					147	
1915	8	2	4				185					199	
1916	9		56				152					217	
1917	9		35	52		100						196	
1918	10		35	159		112						316	
1919	0	0	0	0		0							漁場別捕獲高不明
1920	0		0	0		0							漁場別捕獲高不明
1921	0		0	0		0							漁場別捕獲高不明
1922	15		9	127		74						225	鯨1
1923	8		8	84		60						160	
1924	11		3	26		58						98	
1925	3		9	64		41						117	鯨1
1926	4		7	46		79						136	
1927	10		4	56		58						128	
1928			1	22		47		34				104	
1929	7			40		39		55				141	
1930	6		42	7		15		53		22		145	
1931	7		5	19		58		25	3	18		135	
1932	12					61		40	4			117	
計	139	111	323	702	216	802	718	207	7	40	0	3771	

表3-10 大東捕鯨の推定捕獲数を加えた1907-1916年の日本全体でのシロナガスクジラの推定捕獲数

	本集計①	田子 (1922) または笠原 (1950) の多い数②	①または②の最大数	大東捕鯨の浮津と太地の総捕獲数の合計③	大東捕鯨推定シロナガスクジラ捕獲数③×0.615	シロナガスクジラの推定最低捕獲数
1907	289	340	340	46	28	368
1908	239	220	239	36	22	261
1909	196	-	196	37	23	219
1910	143	103	143	45	28	171
1911	119	240	240	30	18	258
1912	71	236	236		0	236
1913	29	58	58	7	4	62
1914	52	123	123	13	8	131
1915	21	57	57	6	4	61
1916	72	75	75	56	34	109
計	1231	1452	1707	276	170	1877

シロナガスクジラの推定捕獲数に用いた0.615の数字は、1908年の大日本捕鯨、1907-1912年の内外水産、1908-1913年の紀伊水産の捕獲数を合算してシロナガスクジラの割合を算出したもの

4章 鯨肉食は食の近代化のなかで普及した

1節 近世の料理書に現れる鯨料理と使用部位

2節 鯨肉食は近代和風惣菜として普及した

3節 捕鯨会社の鯨肉製品とその販売努力

1節 近世の料理書に現れる鯨料理と使用部位

本章では、近代日本における鯨肉食の普及過程を考察する。鯨肉食について現在広く受け入れられている理解として、近世以来の伝統的な鯨肉食は網取り捕鯨の操業地域や大阪など一部に限られていたが、戦後の食糧難時代にGHQの許可の下におこなわれた南極海捕鯨によって鯨肉の消費が日本全国に広まったとの説明がある（森田 1994: 414-415, 渡邊 2006: 116-117, 138, 小島編 2009: 136-138）。この理解は誤りではないが本論が対象とする明治末から昭和前期、1890-1940年代の半世紀についての言及がない。この期間は鯨肉食に関して何の変化もなかったというのだろうか。本章では、近代沿岸捕鯨が1900-1940年代の鯨肉食の普及に果たした役割を明らかにしていく。

日本の近代捕鯨はロシアから輸入された鯨肉に刺激されて始まったことはよく知られており（明石編 1910: 184-189, 渋谷 1967: 2-5）、後に東洋捕鯨の社長となる岡十郎も同社の設立時期の講演において食用鯨肉の生産が日本の近代捕鯨の主要目的と述べ（明石編 1910: 8-9）、戦時中に出版された「土佐捕鯨史」（伊豆川 1943 [復刻版 1973]）も「我国捕鯨業の目的は、前述の如く、従来は鯨肉の供給にあり、これに対し鯨油や肥料は、副産物たるかの如き観があつた」と記したように（伊豆川 1973: 662-696）、日本の近代捕鯨の主目的は鯨肉と認識されていた。沿岸捕鯨の捕獲数を見ても、1911-1944年に毎年1500-2000頭以上の捕獲があり（笠原 1950: 9）、生産された鯨肉量は莫大で看過できる量ではない。この時期の鯨肉の普及については不明な点が多く、まとまった形での記述は前田・寺岡（1952: 170-177）に見られる程度である。この概要を記すと、西日本では古くから鯨を食べていたがほとんどが脂皮や結合組織などのいわゆる白手物で、筋肉部分、つまり赤肉が普及したのは最近のことであり、以前は赤肉の食用利用は捕鯨根拠地の近隣に限

られていたこと、1920年頃でも白手物と赤肉の割合は8対2程度だったこと、1918年頃から氷蔵輸送が実現し夏季の赤肉も食用となるようになったこと、1931年頃から大量の軍需が始まりマッコウクジラの赤肉も食用にされ始めたこと、1923年頃に年間1万トンの消費となったことなどが記されている。きわめて概略的な内容で、年代や対象があいまいな記述や前後で矛盾する部分、鯨肉の消費に関する表がいくつか掲載されているが典拠が示されていないなど、そのままの形での引用は難しい。20世紀前半の鯨の使用目的や消費動向は戦後に鯨肉食が受け入れられた前史としても、批判に耐える形で説明する必要がある。

ところで、本章のタイトルに用いた「鯨肉食」という言葉そのものに疑問を投げかけたい。鯨肉食を日本の伝統文化と考えた場合、近世では地域的な料理であったものが近代になって全国に広まったと解釈できる。しかし、鯨肉食が明治以降に西洋文化を取り入れて一般化した肉食の一形態であれば、それは近代になって新たに受け入れられた文化、言葉を換えれば鯨肉食は食文化の近代化のひとつという位置付けが可能となる。言葉尻をとらえるようだが、まず「鯨肉食」と「鯨食」を区別することから始めたい。そうすると近世や明治大正期の料理書に見える食材としての「鯨」や「身鯨」という文字が、どの部位を表していたのかという検討も必要である。これまでの議論では「鯨肉」という単語を機械的に鯨の筋肉と理解してきたのではないだろうか。近世以前の日本での肉食は一般に避けられており、この条件でも鯨は別扱いで利用されていたのか、それとも筋肉以外の可食部を食料としてきたのか、鯨肉食は近世から広く存在したのか、あるいは明治以降に政府主導で進められた肉食の普及とともに食されるようになったのかなど、解決すべき課題が残されている。

なお、本論では、軍隊や刑務所、学校や事業所など大口消費者による鯨赤肉の消費、そして家庭での消費量や利用頻度については十分な調査をおこなっていない。これらは今後の課題として残されている。

資料と方法

本章が意図するのは、県境を越える広域的なレベル、おおよそ国民レベルでの鯨肉食の普及過程

であり、それを捕鯨会社の売り上げや販売努力といった供給面、そして料理書の鯨食材の調理法や取り上げ方といった消費動向の両方から解明することである。次いで、仲卸や小売店の販売実績といった流通面、そして個人レベルの鯨食体験について考察を加えた。食事日誌や家計簿は扱っていない。調査の方法は、近世から近代の料理書を跋渉して鯨料理の記述を集成した『鯨料理の文化史』（高正 2013）を参考に、ケンシヨク「食」資料室が所蔵する近世から1930年頃（昭和初期）に出版された料理の単行本（以下、料理書）や捕鯨会社が作成した鯨料理小冊子を調べ、そこに現れる鯨料理の内容を検討し、鯨食材の部位を考察した。加えて、近代の料理書では、行事食など格式のある料理と家庭料理である総菜との間で見られる鯨食材の利用部位と調理方法の違いを検討したほか、鯨肉が牛肉の代用品として用いられる記述を集めた。次いで、東洋捕鯨やその前身会社の株主総会資料「営業報告」を用い、鯨肉の供給者である捕鯨会社の製造製品とその変化、販売努力、冷蔵や冷凍施設の整備、鯨肉売上の変化などから、鯨肉の普及状況について考察した。さらに『大阪市海産物市場調査』（大阪市役所商工課 1924）と『資料大阪水産物流通史』（大阪水産物流通史研究会編 1971）とを用い、近世から鯨が流通していた大阪を中心に、鯨肉流通を支えた市場や設備の変化、わずかであるが消費量を考察した。つまり、鯨肉の供給と消費、そして流通の三方向から分析をおこなった。それとは別に、大阪名物として料亭で出されてきた鯨鍋の成立時期について、当時の料理雑誌の記事を用いて検討した。

言葉の定義として、本論では食材としての「鯨」は筋肉か脂皮その他を問わず鯨全体に用い、「鯨肉」は筋肉を食材とした場合に用いる。しかし現実には脂皮を含めて鯨肉と呼ばれることがあるため、とくに区別する必要がある場合について筋肉は「赤肉」、脂皮は「白皮」、そのうち脂肪を除いた部分は「黒皮」とした。文脈上必要に応じて脂皮や筋などを包括する「白手物」も用いた。もちろん、引用部分はこの限りではない。鉄道輸送と冷蔵冷凍設備の普及から、戦前に鯨肉流通がある程度進行していたという見立ては、科研費の報告書のなかで老川（2008: 173-174）が簡単に言及しているが、本論は同時代の資料を用いて多面的に考察する。

近世の料理書に現れる食材「鯨」は基本的に白皮であ

最初に食材としての鯨について、近世の用語や用法を振り返っておく。西海捕鯨の代表的な鯨図

説『勇魚取絵詞』の付録として刊行された『鯨肉調味方』では、食用部位として肉や身の文字を用いた部位として「皮身」「赤身」「塩赤身」「胸の身」「相身 [あいのみ]」「咽輪身 [のどわみ]」「臓肉」などが示されている（吉井編 1980c: 41, 高正 2013: 14-15）。『鯨肉調味方』では、白皮も赤肉も「身」の文字を用い、「肉」の文字は内臓にだけ使われている。なお、臓肉の部位について、『鯨肉調味方』では「十二指腸より上の臓を抱き包める肉なり」（高正 2013: 18）と記していることから、横隔膜であることを示唆している。

大槻清準「鯨史稿」（1808 [複製版 1976]）については、高正（2013: 10-11, 46, 52）が引用するとおり、「唐津捕鯨図説に出たる説え見聞を参えて鯨魚の諸具各々用法を記す」として多くの部位を示している（大槻 1976: 491-503）。そのうち「身」の文字を用いた部位は、白身、背の身、サエスリ（サヤの身とも言う）、胴の赤身、カバチの赤身、肋身、丸切赤身、扇赤身、間の赤身、アイの身、スノコ身、三ツ合白身、臓の赤身などで、このうち食用に適しているとする部位と評価は次のとおりである。白身「所によりて油少し、それ故に食料になる所もあり [中略] 味上品なり」、背の身「上品なり。食料によし」、胴の赤身「外の赤身より軽くして柔らかなり」、カバチの赤身「食料にして味よろし」、肋身「赤身の中にての上品なり」、小骨「赤身の中にて極上なり。料理に賞味す」、丸切赤身「筋あり。大概よろし」、間の赤身「肋の身に似て少し悪し」、エンハ「食料ばかりなり」、スノコ身「赤身同様なり」、尾羽毛「食料にす。上品なり」、三ツ合白身「食料によし」、小袋「食料にもするなり」、コレ輪「食料によし」、齒莖「料理に賞味す」などの記載が見える。また、「咽輪、吹腸、豆腸、丸（白とも言う）、丸皮、ウス腸、烏賊腸、丁子腸」にも「食料」と注記している。肉の文字は用いられていない。白皮も赤肉も「身」の文字で表していることに注意したい。料理法については、「鯨内調理」の見出しで「これは鯨記に出たる説へ一二見聞を参えて鯨魚料理の法を記す」として「赤身黒皮、テイラ（尾羽毛とも言う）、子の齒莖、百尋、白腸、豆腸、ヒメ腸、フク腸、丁子腸、喉輪、鑄骨、油身煎れから」を挙げるが（大槻 1976: 513-516）、ここにも肉の文字は見えない。しかし「赤身黒皮」は「焼赤身は好物の人雁鴨に勝れりと云う」（高正 2013: 52, 大槻 1976: 513）と雁鴨の焼き物と比較をしており、赤色の濃い胸肉との比較を思わせる。よって「鯨史稿」の「赤身」は赤肉である。

『鯨肉調味方』と「鯨史稿」の2つの研究書は、すでに知られた知識を集成した書物である。ただしこれら2冊は近世に広範に読まれた書物ではない。『鯨肉調味方』は版本（木版本）であるが、唐津藩の大名などへの贈答品で発行部数は20数冊に留まるとされ（高正 2013: 21）、「鯨史稿」は稿本（手書き）であり版本のような大量生産はされず、近世では少数の学者や関係者がみただけである。この2冊の記述は1800年代前半の知識や常識の普及状況を示しておらず、それよりも知識を体系立てて整理して示した点が重要である。つまり近世では「肉」の文字は筋肉よりもむしろ内臓に使われ、食用の部位は脂肪でも筋肉でも「身」の文字あるいは音が用いられていた。この2冊の記述は、近世文献では鯨関係の食材で「身」の文字は白皮と赤肉の両方に用いられることを示唆している。

ここからは都市を中心にある程度の読者を得たと想像される近世の料理書について、そこに現れる鯨由来の食材が何を指していたのかを検討する。近世の料理書の記述はきわめて簡素であり、具体的な部位や調味料の分量は指定されず、調理方法も加熱の時間や頃合いについても読み手の判断に委ねており、すでに料理の基本を習熟した読者を前提としたものとなっている。

『鯨料理の文化史』で食材として鯨の部位が見える近世の料理書は30を越えるが、鯨と思われる素材に「肉」の文字を伴っているのは『名飯部類附録』（1802）にある「海鱈 [くじら] 雑炊」の「赤肉」だけであった（表4-1）。ただし、ルビは「あかみ」として「にく」とは読ませていない（高正 2013: 37, 吉井編 1980b: 37）。「海鱈雑炊」（吉井編 1980b: 293の目次では「鯨ざうすい」）は「鮮鯨 [よきくぢら] の赤肉 [あかみ] を補足切水に浸し塩を出置後水にて洗ふこと二三度 [ど] にして湯をよく滾沸 [たきら] し右の肉を煮出し籠に並べ湯中に浸し上おき粉薄味そにて雑炊を常のこく煮て割ねぎ線蘿蔔 [らふ=だいこんのこと] の類好に随ひ肉 [み] と共に入一二沸して食ふ 夏時は冬瓜瓢蓄 [かもふりゆふがほ] の類最よろし△ [ママ] 右生鮮 [なま] くしらにても同じ又云くしらせんを以て煮るもよしとくぢらせん既に包丁梯にでたり」（吉井編 1980b: 293, 296-297）というものである。水で塩出し後に洗って煮出すことは白皮でも赤肉でも共通しているが、糠を使わない点は赤肉を思わせる。根拠は薄いだが文字を優先し「赤肉」は実際に赤肉と考える。『名飯部類附録』の版元は、高麗橋一丁目と記されており、現在の大阪市中央区に含まれる

(杉野 1978)。このことは、1800年頃の大坂で鯨赤肉が流通していたことを示している。

「身」「み」あるいは「み」の音を持つ漢字を用いたものは、『素人包丁』（1803-1820）の「鯨あんかけ」の「実くじら」（吉井編 1980b: 41）、『新撰献立部類集』（1776）の「身くじら」（吉井編 1980a: 45）、朝鮮通信使の饗応献立では『壬戌信使記録三十二』（1682）の「鯨白身」、『辛卯信使記録下書七十八』（1711-1712）の「赤身」「鯨赤身」（高正 2013: 60-63）などに限られていた。『素人包丁』の「鯨あんかけ」の「実くじら」の調理方法は「よき実くじらを程よく切てさつと湯煮」し、干し蕪や焼栗などを加え、葛たまりとして出すというものである（高正 2013: 41）。同書は「同茶碗蒸」「同酢味噌」「同白あへ」を続けるが素材の部位は示されないため（吉井編 1980b: 118-119）、いずれも同一の食材「実くじら」と判断できる。鯨茶碗蒸しの説明は「是も随分上品のものを加減よく塩を出し」というもの、鯨の酢味噌和えは「随分ほそくきれいにつくりて かけんよく塩を出し さつと湯煮」、続く白和えでは「前のことく よき魚をしほかけんよく出し」とある（高正 2013: 43-44）。部位の判断は困難だが、湯通しが「さつと湯煮」する程度であること、酢味噌和えの「ほそくきれいにつくりて」という記述から白皮としておく。『新撰献立部類集』の「身くじら 付やき」（吉井編 1980a: 71）は、現在のように焼くとすれば赤肉である。朝鮮通信使の献立については調理法の記述がないが、「鯨白身」は白皮、「赤身」「鯨赤身」は赤肉と見るのが自然である。

続いて『鯨料理の文化史』の記述に従って、料理書の記述から他の文字があてがわれた鯨の使用部位を検討する。まず、保存方法の記述から見てみたい。『料理物語』（1649）の「くじらのをきやう」は「鯨の置き様」で、文中に素材の部位を示す言葉は見えないが「あかみは久しくみ申さず候」は「赤みはそのうちに消える」の意味であるので（高正 2013: 27）、この「くじら」は赤肉ではなく、後述する鯨汁の内容から白皮と考える。『合類日用料理抄』（1689）の「鯨の塩漬」には部位として「鯨」「身鯨」「皮」の3種類が見え、保存について説明したものである。「寒の内に新敷[あたらしき]鯨」を食べてやわらかいものを漬けるとし、「身鯨」と「皮」についてそれぞれ説明している（高正 2013: 27-28）。このことから身鯨は赤肉、皮は白皮と考えるのが自然である。『黑白精味集』（1746）の「漬物の法」の食材は「鯨」である。これも白皮と考える。保存方

法は4通り示されているが、調理方法を示さず、すなわち生のまま塩水に浸けて放置する方法が3種類、残りの1つは先に鯨を「鍋にてさつと煎さま」す（高正 2013: 28-29）。肉を鍋で煎ることは通常しない、もしおこなったなら肉が鍋にこびりついてしまう。よって、ここでの素材「鯨」は白皮とするのが自然である。

次に下準備を見る。『古今料理集』（1674-1699）では「焼くしら」の下準備を「やはらかにゆにをして切りて 又湯煮をしやきしやきとはきれのする程にして用へし」と記す。意味は「軟らかに茹でてから切り、また歯切れのよい硬さに茹でてから用いる」（高正 2013: 29）であり、これが赤肉ならば茹でると堅くなり、しゃきしゃきと歯切れのよい状態にもならない。よってこの「焼くしら」は白皮である。『合類日用料理抄』は生鯨、塩鯨、焼鯨の利用法が記され、「生鯨」は酒で煮た後に味噌に入れ、塩鯨は塩出し後に同様とする。ここでの生鯨と塩鯨はおなじ部位である。そして「色が赤い場合は上を切り取る」（同: 30）という説明は赤肉ではあり得ず、ここでの生鯨、塩鯨、焼鯨はいずれも白皮である。焼鯨は、松前の「焼鯨」で「三日ほど水に浸け、水を替えてさらに三・四日すれば」軟らかくなるとし、「さしみにも汁にも仕候」（同）とあるが、赤肉であれば1週間も水に浸けると腐敗の危険がある。そして「これを薄く切り、鍋に糠味噌を入れてよく茹でる」と糠を用いて茹でるのは油抜きの方法である（同: 30）。さらに「茹でた鯨を水で洗って日に干すと日持ちする」（同）という記述は赤肉では考えにくい。よって、『合類日用料理抄』の「松前焼鯨」は白皮と考える。焼鯨は素材「鯨」を焼いたものと考えれば、文字からも白皮の可能性が高い。

続いて料理法に出現する鯨を取り上げ、文字だけでは明らかでない素材について考察する。『料理物語』の鯨汁は「くじら」を用い、「つくり次第 さつとにえゆをかける事も有」という記述がある（高正 2013: 38）。「つくり」はお造り、つまり刺身で薄く切り分ける意味であり、熱湯をかけるのも余分な脂分を取り除くため、いずれも白皮を思わせる。この「くじら」も白皮と判断する。『料理方之次第』（1670-1688）は、「鯨の事」という見出しがあり、素材名称は「鯨」であるが、文中に「塩付は水にてあらい」とあるので塩鯨である。「うすく作りて なまぬるゆにて洗いあげ 酒塩にひたらし置」（高正 2013: 38-39）という記述は前の事例と同様に白皮にふさわし

い。赤肉を薄く切って湯で洗うと味が抜けてしまうだろう。『料理献立集』（1761）の6月の魚料理に「しほくしら」や「くしら」、2月分は「くしらのうちのもの」、4月は「くしらのうち」が現れる（高正 2013: 39-41）。調理法が記されておらず「しほくしら」や「くしら」については、部位の判断はできない。「くしらのうちのもの」や「くしらのうち」は内臓である（高正 2013: 40）。部位については、「鯨史稿」で百尋は湯煎にする、その他の白腸や豆腸、ヒメ腸、フク腸、丁子腸、喉輪は「百尋と同じ塩蔵にしては宜しからず」というので（大槻 1976: 515-516）、百尋かも知れない。大槻の説明では、百尋の保存は湯煎後に塩蔵ということであろうか。『料理綱目調味抄』（1730）は刺身の部で「鯨 皮身ともにうすく切 ゆがき 水に晒し」、和え物の部で「鯨 鱈 ゆがきて 芥子 山葵みそ にんにくみそ」と記す（高正 2013: 42-43）。刺身の素材は白皮であり、和え物については素材を説明する文面がないが、刺身とおなじ「鯨」を用いており、同一の書籍のなかであるので、これも白皮と考える。『料理珍味集』（1764）には「鯨蕎麦切」の材料に「くじらいかす」が現れる。調理の仕方として「色の白きを 黒かわは去り 随分細ながく そば切のごとくに切煮る」とあるので（高正 2013: 43）、これも明らかに白皮を用いた蕎麦切への見立て料理である。

以上のことから、近世の料理書では「肉」の文字の使用はきわめて少なく素材の記述では筋肉よりむしろ内臓に使われていること、ただ「鯨」「くじら」とだけ記されている場合はほとんどが白皮であること、「身（実）鯨（くじら）」は白皮と赤肉の両方の場合があることがわかった。また刺身「つくり」は白皮を用いることが大半であった（表4-1）。

ただし料理書に出現する食材の割合は実際の消費の状況を反映したものではない。近世の書物は高価であり、料理書はハレの日に食べる格式高い行事食などを解説したもので、日常の食卓に向けたものではないため、近世における実際の赤肉の消費状況は料理書の分析だけではわからない。

料理書の記述からは、近世における建前としての肉食の禁止は、鯨においては赤肉を「身」あるいは「実」とすることで肉食を回避していたことが示唆される。料理書の出版年に注意すると、『料理物語』（1649）は網捕り捕鯨開始以前の料理書である。太地で刺手組が組織された1611年よりは後だが、網捕り式の開始の1675年や室戸に伝えた1683年、北九州への伝播とされる1684年（熊野

太地浦捕鯨誌編纂委員会 1969) より前である。つまり、網捕り捕鯨以前から大阪では、鯨つまり白皮を格式ある料理の素材として用いてきたのである。

2節 鯨肉食は近代和風惣菜として普及した

明治大正期の料理書に見える鯨食材の多くは白皮である

近代の鯨料理についても『鯨料理の文化史』で引用された資料を中心に、ケンシヨク「食」資料室が所蔵する明治大正期を中心とする料理書から鯨料理を抽出し、食材として用いられた部位を検討した。使用部位の判断は名称だけで特定することは避け、切り方や加熱方法、調理の記述や味付けなどから総合的に判断した。調べた範囲で材料に鯨を用いた料理を掲載していた書籍は軍関係1冊を含め30種、出版年は1887-1929(明治20-昭和4)年である(表4-2)。この時代の料理書は、まったく同一の内容で別の出版社から後年刊行されることや、別タイトルであるが中身がほぼおなじ書籍など、今日からすれば著作権を無視したような出版物も散見される。本論では、出版年や出版社が異なっても、タイトルがおなじで内容にも変更が見られないものは同一作品とみなし、別タイトルでの刊行、あるいは、おなじタイトルでも内容やページ数に大きな違いが見られた場合は別作品として扱った。内容が類似した料理書が見られるのは、元本として少数の近世料理書を参照した結果と思われる。なお、表4-2には本文での言及がない書籍が含まれている。これは、本文では類似した内容への言及を避けたために生じたものである。

調べた料理書に記された鯨食材の名称は、年代による登場順に、塩蔵鯨の肉[み]、皮くじら、鯨、鯨のいりから、鯨のし、鯨かぶらぼね、鯨あづさ身、鯨肉、皮鯨、良き鯨、良き肉[み]鯨、上品のもの、鯨の肉、鯨鬚、黒皮、白皮、塩鯨、白き肉[み]、塩漬鯨皮、をばけ、海鱈、生鯨などであった。近世とおなじく肉を「み」と読ませることや「身」の文字を用いる例のほか、「身」の文字で筋肉以外を指す用法が少数見られた。

近世の料理書の記述をほぼそのまま借用したものとして、『和洋料理 家庭全書第六篇』(的場編 1889: 74)の「海魚の調理」には「鯨(くじら)」があり「あんかけ」と「茶わん蒸」が説明されている。「塩魚」とは別の大項目にあるので、こちらの鯨は生と考える。このうち「あんかけ」

は先に述べた『素人包丁』の料理法がそのまま用いられている。素材は「あんかけ」が「随分よき身くじら」、「茶わん蒸」は「身」である。「よき身」が赤肉のなかで上品なのか、赤肉が下品でそれに対する白皮が上品なのかかわらないが、上述の『素人包丁』の分析で「白皮？」としたのでそれを踏襲する。

近世の料理書への意識が少ない料理書でも白皮の使用が目立つ。『割烹料理教授用総菜三百種』（井上 1902: 152-153）の「鯨汁」は、「鯨は黒皮を取り白皮を薄く小口より切り」という説明から始まっている。先に示した『和洋料理 家庭全書第六篇』でも食材「鯨」を用いた料理として汁、刺身、三ばい漬、平皿などが紹介されているが、刺身に用いて辛子味噌で食べること、三ばい漬は「白き身」を細引きに使うという記述があることなどから白皮と判断する。一方、「あづき身」は赤肉である。「あづき身」は、「尋常 [つね] にあり、しかれども下品なり、ねぎの白根、又は根芹、又は水菜など入れ、鴨などの代りに吸物などにしてよろし」と説明されており、鴨の代わりで白皮はあり得ない。興味深いのは「鯨のいりから」は「京都には常にあり」としていること、「あづき身」は下品ながらいつもあるとしていることである（的場編 1889: 41-43）。大阪の出版であり、上方では鯨が食材として身近であったことを示している。軍の料理書でも『軍隊料理法』（無記名 1910: 31, 33, 64）に現れる食材の部位は、鯨、皮鯨、生鯨、塩鯨であった。同書には「食肉選択標準第2節獣肉類」と「同第3節魚肉」があるが、鯨肉の文字はどちらにも見えない。近世の用法では単に「鯨」という食材は普通白皮であること、「獣肉類」にも「魚肉」にも鯨が現れないのは、用いた部位が筋肉以外であったことの現れと考える。

鯨料理といえば白皮が想起されていたことは、鯨の見立て料理が白皮であることから説明される。『和洋日用料理』（竹堂 1901: 173）の「鯨くわむ」は「くわむをおろし、よくよくすり、こんぶを黒やきにしてすりませ、皮のあつさにのべ、その上にすりたるくわむに、粉 [こ] くず少し入れ、くじらの肉のごとくにのべて」とするが、ここで見立てた食材の色彩や形状は明らかに白皮である。先に挙げた『割烹料理教授用総菜三百種』は、しぼり豆腐に黒皮に見立てた昆布を載せた「鯨豆腐」を掲載している（井上 1902: 58）。『佳節儀式料理 赤堀料理全書第49編』（赤堀 1917: 109-110）では、白玉で脂身、昆布で黒皮を表した「鯨白玉」を紹介している。また別の著

作『四季の料理 附養生食物の拵方 赤堀料理全書第一編』（赤堀ら 1917: 136-138）でも「くじら白玉」を掲載し、「のした白い白玉に黒い白玉を貼りしんじょうのようにしたものを幅5分縦1寸5分ほどに薄く切って揚げ熱湯で油切りして味噌汁に入れる」と解説する。このことから、1920年頃までは、ただ単に「鯨」と記した食材は白皮を意味していたことが示唆される。今回の検討課題ではないが、広島県の尾道銘菓として知られる「鯨羊羹」は近世の鯨餅の流れを汲み、厚い白い層に薄い黒い層を載せた白皮に見立てた菓子である（尾道のお菓子 中屋本舗 http://www.nakaya-honpo.com/syohin_f/item_f/kujira.html 2018.6.30閲覧）。

おおよそ1920年代中頃までの食材としての鯨では「さしみ」も白皮がふつうで、赤肉ではなかった。たとえば『四季の料理』（中川 1916: 15）や『四季家庭お料理の拵 [こしら] へ方 完』（家庭割烹研究会編 1925: 143）は、鯨を湯がいて刺身にする食材として説明する。『新撰和洋料理精通』も「うすく切り、にえ湯にいれはせさせてつかう」（池村編 1901: 123）。現在でも白皮を本皮と呼んで刺身用に販売されており、白皮を刺身に用いることは通常の用法である。湯がいて酢味噌で食べる鯨の部位は白皮で、赤肉ならば醤油の使用が普通である。また、料理書を読んで台所に立つのはおもに都会の住民であって、1925年当時には後述のとおり冷蔵設備も普及してきたが捕鯨根拠地から離れた都会で赤肉の刺身を味わうのは塩蔵肉を含め鮮度上困難だったと考える。なお、白皮を用いた料理法の記述の特徴として、薄く切ること、糠をまぶして余分な脂肪分を除去すること、熱湯に湯通しすること、その後に清水に晒すことなどが見られた。

一方、赤肉を食材とした例も存在する。『お手軽料理 細君の腕前』の鯨汁（赤松 1905: 12-13）は、鯨汁と皮鯨汁の両方を紹介するが鯨汁の説明に「鯨の赤身は総菜には用ゆるが、客へ出す時は白き肉 [み] のみを用ゆるやうにするのがよい」としており、赤肉を用いること、そして下品な食材で客人には出すべきではないという認識、また白皮にも「肉」の文字を用いていることがわかる。上述した「あづさ身」は『新撰和洋料理精通』のなかの「鯨の料理」に現れ（池村編 1901: 123-124）「鯨のあづさ身：是は鴨などの代りに吸物に用ふ其品はありふれたるものなれども甚下品なりねぎの白根又は水菜などを取合す」と記し、やはり鴨の代わりに用いる赤肉となっている。網取り捕鯨の根拠地を有する高知県でも、女学校の教材に赤肉を材料した「鯨附焼」が紹介されて

いた（西野・一圓 1893: 6）。また、皮鯨味噌汁も紹介されている（同: 18）。同書は、女学校の授業日誌という内容の私家版である。なお、同1集には鯨肉を材料とした「皮鯨はんぺん」が紹介されているが（高知県尋常中学校女子部卒業生編 1892: 7）、中身は白皮への見立て料理であるので素材に鯨肉とあるのは誤植と判断した。

赤肉料理を多数紹介しているのは『総菜料理 家庭百科全書第10編（赤堀ら 1908）』である。緒言によると著者の既出料理書で掲載されなかった料理を説明したものであり、目次に見える項目のうち肉類は鶏肉と鯨肉、そして牛肉の3種類であった。ただし、「肉類の鑑定法」の項目には、他に豚肉と馬肉、羊肉が見える。同書が示す鯨食材は「鯨肉」[くじら]や「生鯨肉」[なまくじら]で、実質的に醤油煮を説明した「鯨肉は如何に調理するが最も旨味きや」では、選択すべき鯨肉を「紅き良肉」と記しているのが赤肉であることがわかる。調理法も直火で焼くなど、脂皮ではなく肉を用いた料理であることが明らかであるが、その一方「最も旨味きや」では、醤油煮込みの下ごしらえとして塊のまま2時間茹であげ箆[ざる]上げて水を切るとしており（赤堀ら 1908: 241-244）、今日のような鮮度や食感ではなかったのかも知れない。

東洋捕鯨は設立記念誌『本邦の諾威式捕鯨誌』（明石編 1910）に、「肥前平戸の鯨肉食法」（明石編 1910: 37-66）や「九州に於ける鯨肉調理法」（同: 125-138）という「鯨肉」をタイトルに使った編[章に相当]を置いた。肉の文字を使うことが少ない料理書の伝統からすれば『鯨肉調味方』とならぶ異例な用法である。ただし、「肥前平戸の鯨肉食法」は「鯨体各部の名称およびその食法」を述べるが、その項目名に「肉」の文字を用いるのは「下人の食料とす」る「臓肉」のみで、一般的な鯨肉については「赤身」と記し、後者は「赤肉」「剥肉」と記すもののルビは「あかみ」「はぎみ」として「にく」という読み方を避けている。これは1910年当時でも、食材に「肉」（にく）を用いることへの忌避的空気が残っていたことを示唆しており、そのような認識のなかで赤肉を販売していた状況がうかがえる。

以上のとおり、1910年代までの料理書のうち行事食などあらたまった料理の記述は近世の料理書を下敷きにしたものが多く、近世料理を踏襲した料理書でもそうでないものでも食材としての鯨の部位は白皮が多くを占めたが、肉食が普及しつつあった時期であり赤肉の料理を積極的に取り上げ

た料理書も見られた。ただし家庭料理の惣菜としての位置付けであった（表4-2）。1910年代までの料理書で単に「鯨」とあればそれは白皮を指し、「鯨肉」の表現も赤肉だけではなく白皮についても用いられていた。赤肉は鯨肉や近世以来の「あづき身」として現れ、鴨の代用品としても用いられた。

鯨赤肉は1920年代の牛肉の代用品としての地位を得た

鯨赤肉を食材として多用する料理書が現れるのは1920年代のことである。鯨赤肉を使った料理の例は『西洋料理』（割烹講習会 1921）の「ビーフ、カツレツ」（同: 193-194）と「肉入ヲムレツ」（同: 212-213）、そして『家庭日本料理』（越智 1922: 392-393）の「すきやき」があった。いずれも牛肉の代用品または同等の素材としての扱いである。『家庭日本料理』が解説する「味噌煮」や「佃煮」も明記されていないが、調理法から牛肉と同等の使用である。総菜料理のレシピ集『お手軽和洋料理』（小川 1929: 190）には「鯨鍋」が紹介されている。赤肉とセリを醤油と砂糖、酒、生姜汁などを入れて煮立てると説明し、明治以降の日本で肉食が普及する過程で親しまれた牛鍋の鯨赤肉版といえる料理である。1920年代には西洋料理や醤油と砂糖を用いる明治以降の近代になって発明された和風料理に鯨赤肉が現れる。

時代が下がり戦時色が濃くなった1930年代後半になると捕鯨や鯨料理が国策として国民に認識されるようになる。雑誌『食通』1939年1月号では「国策の線に沿う鯨料理」という記事が掲載され、獣肉や一部の魚肉料理は和食洋食とも鯨で代用できるとする記事が現れる（三宅 1939）。つまり、輸入に頼らず国内資源である鯨肉を用いることで、自給食料にもかかわらず多様な料理が可能という解釈であり、これも一種の牛肉の代用品としての鯨肉利用と見なすことが可能である。同じ頃、つまり南極海捕鯨が軌道に乗ってきた頃に、雑誌『食通』1937年2月号の「鯨肉試食座談会」では日本水産の社員が招かれ、鯨製品について説明をしている。鯨のハムやコンビーフ、鯨の背身の刺身、鋤焼きなどを提供し、「魚市場では千トン希望していたのに入荷は〇〇〇トン、内〇〇〇トンは軍需として缶詰及び乾燥肉になり僅々〇〇〇トンしか魚市場へ入りません」〔〇〇〇は検閲の結果の伏せ字〕、「刺身にするのは鯨で背の身です」、「牛肉よりは決して高くならぬ心算です」と話しており、捕鯨会社では様々な調理法を提案し、加工食品を開発していたこと、

価格を考慮して刺身に適した鯨種や部位が定まっていたこと、価格を牛肉より低廉にしようとしていたことがわかる（本社 1937）。

逆に、牛肉を鯨肉と偽る事例があったという。年代は不明だが、「日本食肉史」（福原 1956: 95-96）で著者の福原は、父も祖父も生涯にわたり牛肉を食べようとせず、祖父に一度だけ「町の魚屋に美味しそうな鯨の赤身があったから」と牛肉を鯨肉と言って食べさせたことがあり、後で牛肉とわかると祖父は歯を磨いたりうがいをしたり大変だったと子どもの頃に聞かされたという。これは希な例と想像するが、牛を食べることに忌避感が強かった時代では、肉食の手始めとして鯨肉を用いることがあったのかも知れない。

大阪の名物は創作料理

最後に大阪の名物として知られる鯨鍋を取り上げる。現在、鯨の鍋料理はハリハリ鍋として理解され、2019年5月に閉店した大阪府中央区の「徳屋」が女将の著作や活動によってよく知られている。しかし、鯨の鍋料理の元祖はおなじ大阪府中央区の鯨料理専門店「西玉水」といわれる。鯨の鍋料理の変遷について文献から跡付けてみたい。

鯨鍋の始まりを記した資料は探せなかったが、大阪で出版された雑誌『食道楽』1929（昭和4）年12月号に「鯨汁」が登場している。味付けについては記載がないが、あんこう鍋に並ぶ大阪ならではの冬の料理として紹介されている。食材として用いるのは白皮とし、尾羽が上等、塩漬けのものを塩抜きし、次いで脂抜きすると記す（会田 1929）。東北地方や北海道南部の郷土料理として知られる鯨汁に似た料理かも知れない。おなじ号の別の記事「近頃大阪評判記 第18回食道楽漫談会 日本橋「香蘭亭」」では、「上方唯一の鯨料理専門西玉水」が紹介されている。唯一というのは鯨料理の専門店という意味らしく、記事では京都の木屋町の菊屋の「京菜と鯨の煮込み」に言及しており（食道楽漫談会 1929）、京都や大阪で複数の料理屋で鯨の煮込み料理が出されていたことがわかる。やはり大阪で出版された雑誌『上方食道楽・食通』は、第1回上方食道楽会を「鯨料理の会」という名称で1930年2月1日に開催し、鯨料理は「珍な趣向」と記されるようにユニークな名物料理として扱っている（無署名 1930）。西玉水はその後も繁盛していることが前出の雑誌『食通』1937年2月号の「鯨肉試食座談会」で言及されている（本社 1937）。「鯨肉試食座談会」に

は、鯨料理について大阪では西玉水のほかにも専門店があつて繁盛しているとの紹介もあるので、1930年代後半には鯨料理は大阪名物として広まっていたことが示唆される。座談会で言及されている鯨鍋は「菊屋」は京菜と煮込んだもの、西玉水は菜っぱと煮込んだものという記載があるだけで、鯨の部位への言及はない。しかし座談会では「堅い」という発言があり（食道楽漫談会 1929）、これは赤肉を示唆している。現在の西玉水が提供している鯨の煮込み料理は、すまし汁に赤肉と水菜を用いた「ハリハリ鍋」であり、写真にはナガスクジラ尾の身が用いられている（大阪料理会監修 2017: 136-137）。

以上、少数の雑誌記事からであるが、大阪の名物とされた汁気の多い鯨の煮込み料理は、庶民も食した白皮を用いた鯨汁、そして高級店で供される赤肉を用いた鯨鍋の2系統があつた。白皮を用いるのは近世からの習慣を受け継いだものであるが、赤肉を用いる高級料理は肉食の普及に乗った近代の創作である。

以上、近代の料理本や東洋捕鯨の鯨肉普及冊子からわかることは、1910年代までは料理の素材としては白皮が多かったが、1920年代になると鯨赤肉が西洋料理や醤油と砂糖を用いる近代の和風料理の食材として登場するようになる。その多くは牛肉を用いた調理法と同様の料理で、これは鯨の赤肉が牛肉の同等品あるいは代用品として使われていた、少なくともそれが奨励されていたことを示唆している。近代における鯨食の普及の特徴は、近世以来の白皮を用いた格式高い伝統料理が広まったのではなく、西洋料理や醤油と砂糖を用いる近代に始まる和風料理として普及し、一部は牛肉の代用品として用いられたことである。

3節 捕鯨会社の鯨肉製品と販売努力

1) 近代捕鯨導入前の鯨肉の販売状況

長崎に輸入された鯨肉の頭数換算

日本でノルウェー式捕鯨が注目されたのは、周知のとおりロシアの太平洋漁業会社が長崎に輸出した鯨肉がきっかけだった。その量は、1898（明治31年）長崎税関の取扱では、1-5月に鯨肉1,336,854斤 [802トン、1トン未満切り捨て以下同じ]、鯨骨202,372斤 [121トン]、鯨油

61,691斤 [37トン]、6-11月に鯨肉208,423斤 [125トン]、鯨骨78,830斤 [47トン]、鯨油7,150斤 [4トン]であり、市価は塩赤肉 [あかみ] 100斤 [60kg] 6円30銭、皮類100斤9円80銭、鯨骨100斤3円だった (明石編 1910: 186)。1-11月合計では鯨肉1,545,277斤 [927トン]となり、渋谷 (1967: 2-3) の述べるとおり年間150万斤 [900トン] を超えていた。長崎県「第五課事務簿」 (明治31) によればロシアの捕鯨船の長崎寄港は明治27年からで、鯨肉輸入の記録は明治29・30年の2年分が記載されており、その量は1896年1,086,642斤 [651トン] 49,306円 [円未満切り捨て、以下おなじ]、1897年1,784,218斤 [1,070トン] 67,714円だった (鳥巢 1999: 335-336)。これらの数字はクジラ何頭分にあたるのか。日本遠洋漁業によると、長須鯨1頭から赤肉2万斤 [12トン]、本皮8,500斤 [5.1トン] が得られるとしており (明石編 1910: 56-59)、この数字を用いて長崎に輸入された鯨肉の頭数を算出すると1896年54頭、1897年89頭、1898年77頭分となる。この時期のロシア太平洋漁業会社の捕獲数については、「1895-96年漁期に52頭」「1897年の夏から冬にかけて50頭」などの数字が記されており (神長 2002: 60)、捕獲した鯨から得られた鯨肉のほとんどが長崎に輸出されたのかも知れない。長須鯨換算で年間50頭分を越える鯨肉の輸出は、長崎という赤肉の消費が期待できる地域だからこそ可能だった。なお、長須鯨1頭から赤肉2万斤 [12トン] という換算については、元になったと思われる資料「沿岸鯨種体長別処理内訳表」が残されている (個人蔵、粕谷俊雄氏提供)。それによれば長須鯨1頭から得られる赤肉は体長55尺 [16.5m] で14,000斤 [8.4トン]、60尺 [18m] で18,000斤 [10.8トン]、65尺 [19.5m] で23,000斤 [13.8トン]、70尺 [21m] で28,000斤 [16.8トン] とあるので体長60-70尺は1尺1,000斤 [0.6トン] の計算となり、赤肉2万斤が得られる体長は62尺 [18.6m] である。

1890年代後半の長崎でロシアからの鯨肉が継続して輸入されたことは、当時の北九州の網取り捕鯨の漁獲量では地域の潜在的な鯨肉需用に応えきれていなかったことを示唆している。

1880年代の東京での鯨肉販売

読売新聞データベース「ヨミダス歴史館」によると、1887 (明治20) 年3-4月以降に鯨肉販売の広告が見える。広告は4-5行の簡素なもので、日本橋1丁目17番地の鯨組という販売業者が主として赤肉販売を手掛けることを周知する。最初の広告は「○鯨肉 今度日本橋一丁目鯨組にて販売を

始めたる鯨の赤肉は、高知浮津の捕鯨会社にて捕獲し去る3日同所発荷、同7日到着せし。すこぶる新鮮なる肉にて鯨通の最も悦ぶものなり」（1887.3.7）というものであった。販売方法は売り切つては次の入荷を待つという方法で、新聞広告では翌4月7日に第6回販売という広告が見える。その次の同一業者の広告が現れるのは同年12月であり、夏から秋の鯨肉販売広告は見られない。翌年の広告は1-4月そして12月と同様のパターンが見られる。よって気温の低い冬から春にかけての季節商品であったことがわかる。種類については座頭鯨と明記された例があるが（1888.12.9、1888.3.11、1888.4.20）、他の種類は見当たらない。販売量は、3日間で1千貫（3.75トン）という（1887.3.20）。上述の「沿岸鯨種体長別処理内訳表」には50尺〔15m〕のザトウクジラから赤肉22,000斤〔13.2トン〕というので、ザトウクジラ約0.28頭分となる。ナガスクジラ1頭から赤肉12トンとすればナガスクジラ換算で約0.3頭分である。鯨組の広告は断続的に1894（明治27）年まで見られ、1888年3月11日は土佐海の座頭鯨、1888年4月20日は1890年と1894年の1月には紀州熊野沖のザトウクジラを入荷している。鯨組の広告は1894年1月が最後で、その後は見られない。販売部位には「赤白肉」（1888.3.11）もある。

以降は「鯨肉」を検索語に抽出された記事も散発的となり、1901年12月、1905年5月、1907年7月2回、1907年10月、1908年1月、そして1919年7月まで10年以上現れない。1907年10月は、牛肉が高騰して軍隊の副食が不足したので鯨肉を試したところ滋養消化もよかったという、軍隊の鯨肉利用だった。

2) 捕鯨会社の販売努力

東洋漁業の東京や太平洋岸での販売状況

ここからは鯨肉の普及について、東洋捕鯨とその前身会社の営業報告を中心に、捕鯨会社の製品と販売努力から追いかけて見たい。具体的な記述が得られるのは初期の短期間のため、その部分は貴重と考え長くなるが詳しく引用する。

「東洋漁業東京出張所第1期事業報告（明治39年4-7月）」（山口県文書館蔵）は東京出張所の管轄から東京の販売状況を記している。

東京から東北では鯨肉は脂っこく臭いと思われていたが、東京の紳士70余名に鯨赤肉や尾羽

畝肉や皮なども贈呈したほか、毎日新聞改題祝賀遊園で尾羽毛6貫目 [22.5kg] を細工料理として寄付したところ、瞬時になくなった。尾羽毛細工料理の瓶詰めを作り宮家や政財界の有力者に配布し、好評を得た結果、宮内省御用の内命を得た。続いて東京や地方の新聞数十紙に販売広告を掲載、その甲斐あって販売規定や見本品の請求が京浜、東北、北信地方からあわせて279通に達した。1906年5-7月の2か月間の売上は、製品が佃煮、缶詰、皮鯨、塩赤、煎皮、尾羽、鬚、畝の8種類で計3,326円となった。製品では、佃煮のような手軽な副菜がとくに受入れられた。そのため、数千貫を調理して樽詰めして数百里の遠距離を輸送販売したが、容器が不完全で腐敗したため当社の佃煮の評価を落とす結果となった。今後は容器の選択に配慮したい。

以上の記述は、東京でも鯨肉を食材とした料理は受け入れられ、なかでも佃煮のようなすぐに食べられる副菜が好評だったことを報告している。東京で鯨肉が受け入れられたのは、日本橋の鯨組による販売の先例があったことが影響したのかも知れない。

東京出張所第1期の販売製品のうち、数量も代価も最大を占めたのは皮鯨で、数量は2,907貫 [10,904kg、貫未満切り捨て、以下おなじ] と約11トン、代価は1,811円で全体の54%を占めた。皮鯨を本皮とすれば先の数字、長須鯨1頭から本皮8,500斤 [5.1トン] (明石編 1910: 56-59) を用いれば、11トンとはナガスクジラ2頭分である。鯨肉の製品と考えられるのは佃煮と缶詰そして塩赤で、合わせて501円、全体の15.1%に留まる。製品の種類に「肉」の文字は現れない。

東洋漁業は7月が決算月のため、1906年8月からは翌年度となる。「東洋漁業株式会社東京支店第2期事業報告(明治39年8月-明治40年7月)」(山口県文書館蔵)の記述には、鯨肉の成分分析を内務省東京衛生試験所に依頼、赤肉、皮、尾羽毛を調べ、牛肉豚肉に比べて遜色のない結果を得たこと、新規開拓した取引先は新潟、直江津、函館、高岡、松本、金沢、長野などに広がったこと、軍隊や監獄その他の団体に向けて生赤肉の販売をおこない第1両師団の各大隊から注文を受けたこと、関東甲信越の刑務所から注文を受けたこと、ほかにも学校や工場などから受注があったことが記されている。軍や刑務所、学校、会社などの大口消費者への販路が開けたらしい。ところが、鯨肉供給元の銚子と鮎川の事業場が冬季の時化が続き出漁困難となり、紀伊大島と甲浦に捕鯨船を移動させたために運搬に日数を要し、鯨肉が変質劣化して顧客の大部分を失ってしまったと販売の失

敗を記している。鮎川と銚子の事業場は5月下旬に再開して挽回を図ったが夏季は生肉の保存に適さず、わずかに4-5の納品先を得るに終わったという。

東京支店第2期報告では、市場調査も伝えている。要約を次に記す。

東京市内の鯨肉取引で重要なのは日本橋区魚河岸だけで、東京支店ではおもに赤肉を試験販売したところ、最初1日の売上はわずかに200-300貫 [750-1125kg]、価格は夏期1貫目1円-1円90銭、冬季2円50銭-3円程度だった。この分だと、冬季に鮎川や銚子から新鮮な肉を出荷すれば1日1千貫 [3.75トン] を捌き、価格も1貫5-6円をくだらないと信じる。1907年6月以降、同市場には日本捕鯨と太平洋捕鯨が赤肉を出荷しているが、当社の方が価格がよい。これは解剖してから出荷までが早いことと解剖技術が良いことによる。尾羽毛燻詰の製造は改良を加えた結果、売上は倍々の状況で、大日本水産記念共進会と東京勸業博覧会でともに3等賞となった。「皮肉」 [白皮] は、新潟、長野、富山、東京が販路の中心でもっとも販売がよいのは6-8月で今年はこの3か月で約6万斤 [36トン] を販売した。

東京支店第2期報告が製品一覧表に挙げたものは、赤肉、尾羽毛、煎皮、筋、鯨鬚、燻詰、白肉、畝肉、立羽、缶詰、鯨油、佃煮の12種類で、「肉」の文字が製品名に使われている。売上の数量も代価もともに最大となったのは赤肉であり、数量で約60トン、金額は5,041円となり売上は全体の26.4%を占めた。長須鯨1頭で赤肉12トンとすれば赤肉60トンは5頭分である。製品に皮鯨や皮肉が見えないが、売り上げや数量から白肉が白皮である。前期に比べると赤肉の販売が伸び、宣伝にも鯨肉という言葉を使っていることに注意したい。

東京支店が管轄する鮎川捕鯨事業場では鯨肉と皮類の販売も担当していた。記述によると、

塩皮類は北海道と東北各県信越地方に搬出し、塩蔵物で当地方に不向きな商品は九州へ出荷した、煎皮は大阪と地方商人へ売却。臓腑劣等赤肉類は地方製肥業者に特約販売したとする。皮類は市価の状況によっては塩蔵し、畝 [うね]、伝導 [伝胴とも、でんどう]、立羽 [たっぱ]、車剥 [くるまはぎ] など地方に不向きな肉類はすべて塩蔵したという。

後段の聞き慣れない部位が「塩蔵物で当地方に不向きな商品」の具体的内容と思われる

ここで、手羽、伝胴、車剥といった聞き慣れない言葉について解説しておく。これらはいずれも

近世捕鯨から使われていた、あるいはそう考えられる鯨体の食用部位を表す用語である。このうち手羽と伝胴は『鯨肉調味方』に現れる。手羽は立羽とも書き、胸びれを指すが、『鯨肉調味方』では「鰭なり。黒き皮に白き皮附たり。食料にして。テイラにひとし。尾羽毛には品劣れり」と記されており（高正 2013: 16）、食材としての手羽は胸びれの付け根の結合組織を指している。伝胴は、伝導、またカタカナでデンドウとも記され、「鯨史稿」では「デンツルトモ云」としており（大槻 1976: 493）、『鯨肉調味方』では「デンヅル 上腮と下腮の間を包たる肉也。色白していと堅し。若魚よし。廻しに似たり。下品也」と記され、上下の顎の付け根の結合組織を指している。車剥については、近世の文献からは見つけることができず『本邦の諾威式捕鯨誌』に現れるが部位が示されていない。部位の記述が得られたのは、大洋漁業株式会社の社員であった渡瀬節雄が1964年の日付でまとめた未発表文書「捕鯨用語集」（勇魚文庫蔵）だけであった。それによると車剥[くるまへき]は「脊椎骨のまわりの筋を云ふ」としている。加えて「廻し」について言及し、「車剥の事。脊椎骨に付着する周囲の結締組織」とする。「廻し」は『鯨肉調味方』では「丸切の骨を包める肉也。白して堅し。テイラに似たれど。味はやや劣れり。歯ぎれよろしからず。若魚よし」との記述がある（高正 2013 :16）。東洋捕鯨が地方に不向き肉類とした部位は、いずれも歯ごたえを賞味する結合組織を主とする部位であった。これらは鯨を食べ慣れた通好みの食材といえるのかも知れない。

東京支店は高知県甲浦も管轄しており、その報告は次のようなものであった。

赤肉の大部分は下関や博多方面に輸送したほか、兵庫大阪中国各地、そして関東奥羽地方へも出荷した。九州下関が販売良好だった。品質が劣るものや搬出の見込みがないものは、事業場で即売した。捕獲が多数で処理ができない場合は、室津や浮津に1頭そのまま丸売した。甲浦では旧鯨組に関係した商人が多数出入りし、舌や臓物などの売却やその他の処理に都合がよく、事業場の狭さ、衛生上の問題、労賃の高さなどを考え、すべての製造を止めて全部を原料のまま1頭そのまま入札または適切な価格で彼等に売却した。このような便益に加え季節が良かったことから、2月には1頭最高で7千円に達した。しかし、3月になると豊漁につれて1頭2千円台となり、4月は温度が上がって価格の下落が続き1頭7-800円、5月では事業場での買い取りが

なく、兵庫大阪地方も売れ行き不振と処理運搬が困難で品質を損じ、同一市場に同業者が大量の売り込みをしたため、ついに1頭5-600円となった。季節の変化には対策がない。

紀伊大島の様子は次のとおりである。

事業場近くでの価格は他の地方に比べて高額で、入札により仲買人に即売していた。仲買人の数は一時184人に上りたいへんな盛況であった。阪神地方、和歌山、下関、九州、四国および東海道の各方面に樽詰や箱詰、籠入として輸送したところ好評を得た。缶詰製作所を建設中で、これは毎年3月以降の赤肉価格暴落の予防策として企画したものである。遠く各方面に輸送しても変質劣化がなく、輸送に便利で販路の有望確実であるので、現在はこの設備の完成を急いでいる。

大阪出張所の記述も見える。

大阪は帝国の商業中枢の地であり、とくに鯨肉の価値を理解する場所である。捕鯨事業場を甲浦と紀伊大島に設けたので、1907（明治40）年5月、大阪に出張所を置き独自に販売努力をすることになった。季節的に赤肉の販売が困難なため、東京支店と同様に尾羽毛細工の瓶詰め、そして短冊切樽詰を製造して出荷したところ好評であった。京都や長門と周防から注文を受け、また市内の天満市場雑魚場〔ママ、通常は雑喉場（ごこぼ）〕では毎朝各10貫目〔37.5kg〕以上を競売する状態であった。そして革細工や敵などは軍隊の副菜として売り込みを計り、第4師団〔大阪〕に数回納品した。秋冬には福知山、姫路、岡山、大津、松山の軍隊に納入する計画であるとしている。

鯨肉の販売先として大阪や京都、長門や周防など近世以来の消費地をあげ、近畿や四国の軍隊への販売が言及されるが、実績については資料が得られていない。

以上、東洋漁業の営業努力や販売状況に関する詳しい報告が得られたのは、1907年7月までである。東洋漁業の報告書からは、鯨肉の販売経路として、1）網捕り捕鯨操業地の事業場では既存の仲買人への販売、2）東京という大消費地への売り込み、3）近代捕鯨で初めて新鮮な鯨肉を知った鮎川の周辺での販売促進という3つの方策が記されており、東洋漁業の時代（1904-1909）に鯨赤肉の需要開拓をしていたことがうかがえる。また、4）他の捕鯨会社との価格競争が発生してお

り、5) 1頭最高7千円していたものが、6) 供給過剰によって1頭500円にまで暴落した、という状況は、過当競争を防ぐために大手捕鯨会社が合同して東洋捕鯨を設立した1909年の直前の状況を具体的に伝えている。

東洋捕鯨と前身会社の鯨肉普及努力

前節で見たとおり、1920年代に鯨赤肉が牛肉の代用品や独自の素材として西洋料理や醤油と砂糖を用いた和風料理に用いられるようになった。その前段には、東洋捕鯨やその前身会社の鯨肉普及努力が見られる。ここでは営業報告から離れ、新聞広告や普及冊子の発行、国の後押しから販売努力を見てみたい。

第1期報告で言及された新聞広告かどうかは不明だが、東洋漁業東京出張所は鮎川に事業場を置いた1906（明治39）年、仙台に本社を置く河北新報に「鯨肉販売広告」を出している（河北新報 1906.5.31、図4-1）。項目として大きく取り上げているのは、「くじら白肉 [しろみ]、くじら尾羽、くじら佃煮、くじら煎皮」の4品目で、「鯨生赤肉」は広告の末尾近くに置かれている。この広告の内容は、当時の宮城県では赤肉が一般に受け入れられていないことを示唆している。おなじ広告は同年5月27日付け東京二六新聞（ケンシヨク「食」資料室蔵）にも掲載された。河北新報の広告によると、東洋漁業は鮎川との船舶輸送の拠点である宮城県塩釜に鮎川事業場塩釜派出所を置き鯨肉の委託販売をしている。広告には調理法を掲載し、その内容は「白肉の部、赤肉の部、西洋料理」で、「赤肉」の調理法は「すき焼、薩摩汁、惣ざい、味噌漬」などで「惣ざい」は筑前煮のような料理である。5月の広告に比べると赤肉の比重が高い。受託者は翌年に海産物問屋として事業を開始、鯨の鮮肉を継続して扱うことを広告している。広告には内務省衛生試験所がおこなった鯨赤肉の分析結果を「牛肉に比較して遜色無之候」として宣伝に利用していた（河北新報 1907.9.18、図4-2）。

翌1907（明治40）年3-7月に開催された東京勸業博覧会に東洋漁業は特設出品飲食館を出店し、「鯨肉料理法」（ケンシヨク「食」資料室蔵）というパンフレットを発行した（図4-3）。内容は、東京支店が依頼した内務省東京衛生試験所の定量分析の報告、そして赤肉を使った味噌煮、煮び、焼肉、其外（刺身・味噌汁・難波煮）を紹介し、「洋食では牛肉の代用 [かわり] になります」と

し、白皮よりも赤肉を先に記して明治政府が普及に努めた牛肉の代用品と宣伝する。

後述のように1918-1919年は東洋捕鯨が捕獲数や売り上げ、そして利益の最高を記録した時期である。1919（大正8）年7月に東洋捕鯨は「鯨肉廉売広告」を1919年7月30日付け東京朝日新聞（ケンシヨク「食」資料室蔵）に掲載している（図4-4）。これは長文の説明を載せた牛肉との比較広告であった。内容は「今回、農商務省より東京市における食料品欠陥の一部をおぎなう目的をもって特に鯨肉を御推奨」と国の支援を記し、理化学研究所の評議委員で専門に研究する2人の博士から「栄養価の比較上鯨肉をもって魚類の首位におく」との評価を得たこと、九州では20数年来鯨肉が牛肉以上の価値を保っていること、欧米でも時局〔第一次世界大戦〕以降は食料品として賞賛されていること、内務省衛生試験所の調査でも栄養価が牛肉に劣らないことなど述べている（図4-4）。この件について後述する東洋捕鯨の営業報告（第14期 1919.2-1920.1）では「夏季8-9月の交において農商務省の推奨により東京市に鯨肉の廉売をなしたるに、これまた非常の売行を見、品不足を告ぐるの有様なりき」と記している。省庁の推奨が会社からの働きかけによるものかはわからない。

前後関係や因果関係は不明だが、広告のとおり1919年は日本政府が鯨肉の奨励をおこなっている。赤嶺（2017：180-183）が指摘したように、当時の農商務省水産局長が「鯨は海の牛肉なり」（村上 1919）というキャッチコピーで鯨肉の普及をうながした。さらに小菅（1997：128）が紹介したように北海タイムス（1919.7.27）は「水産局では鯨肉奨励 価が至廉で牛肉鶏肉よりも滋養」という東京発の記事を掲載している。記事の中身は「農商務省水産局が食鯨奨励を唱え魚河岸の間屋と特約し各方面へ十分供給することとなつた」とし、食品成分が牛肉や鶏肉と比較して遜色ないことを伝え、価格が牛ロース100匁〔375g〕あたり1円60銭、鶏肉笹目〔さき身か〕1円80銭、馬肉60銭なのに対し鯨赤肉は16銭と安さを強調している。また背皮は100匁あたり30銭、特約販売店は魚問屋30軒のほか公設市場、軍隊など団体申込も取り扱ふと記している。この金額が小売価格なのか問屋への卸売り価格なのかは明記されず、また特約販売が1回限りあるいは特別な場合に限られるのか、それともこの後も継続する見込みなのかという点については明記されていない。読売新聞1919年7月26日にも「鯨肉食用奨励」の記事、別ページに「鯨肉を食せ、最近東京へ沢山来る」と

いう関連記事も掲載している（ヨミダス歴史館）。大手から地方紙にまで鯨肉奨励の新聞広告が見られることは、政府に付度したメディアの姿なのかも知れない。

内容から1922（大正11）年頃の発行と思われる東洋捕鯨の「鯨とは」という小冊子には、その当時の鯨肉需用と消費の様子が記されている（図4-5）。要点は、

鯨の赤肉は栄養学が説く理想的な食料品であることが近年一般にも認められるようになった、近年赤肉はさまざまに調理され大和煮などの缶詰も製造され家庭や野外携行品として使われ年々需用を増している、鯨肉は牛豚肉に栄養が匹敵し味もおなじで牛肉より遙かに安価であり、家庭や工場、団体の副食として素晴らしいと新たな肉食の食材として普及しているという説明である。普及の状況については、従来の需用は紀州や土佐、九州の一部に留まっていたが、東洋捕鯨が全国に根拠地を持ち新鮮な鯨肉を各地の市場に提供してきたので、牛馬肉と比較される存在となったと自社の活動の結果で鯨肉の消費が全国規模になった

というものであった。また、赤肉は鮮肉と塩蔵肉があり一番広く使われていること、調理法には刺身、焼鯨、佃煮、京菜との煮付け、すき焼き、牛蒡との甘煮、カツレツ、その他（たたき、煮付け、玉子焼き、味噌煮、時雨煮、つくね焼き）などとする。その他、白皮や畝、尾羽の調理法も掲載している。この冊子に紹介された料理は、上述した1920年代の料理書に見られる調理法と共通し、現代の家庭料理に醤油と砂糖を用いた牛肉との交換が可能な和風総菜である。

3) 東洋捕鯨の捕獲と販売流通

ピークは1918-1919年

ここからは東洋捕鯨の「営業報告（第1-28期）」（日本水産蔵複写版）を用い、各期の販売頭数と鯨肉および副製品の売上、1頭あたり平均価格をまとめた。平均価格は種別では掲載されておらず、捕獲種すべてを合算した頭数で割り出している。表題は「第〇期報告」であるが本論では所蔵者の整理に合わせ「営業報告」と呼び、それとは明記されていないが株主総会資料と判断した。期間については何度か変更があり、第1-2期は5-4月、第3期は5-1月の9か月間、4,6,8期は2-7月そして5,7,9期は8-1月と半年間となり、10期以降は2-1月の1年間となった。夏期と冬期の期間は、1-3期は販売については不記載だが漁労の記録では夏期5-9月・冬期10-4月、4期は夏期5-7月・冬期1-

4月、5,7,9期は夏期8-9月・冬期10-1月、6,8期は夏期5-7月・冬期2-4月、10-13期は夏期5-9月・冬期2-4および10-1月という扱いだった。第29期にあたり南極海捕鯨を開始した日本捕鯨第1回報告(1934.5-10)以降は、沿岸捕鯨の捕獲や販売の成績が不明となるので調査対象から外したため、対象期間は1909-1933年の25年間となった。

記述内容のうち本論に関係が深い部分は「事業に関すること」で、事業場の名称と所在地および操業区域、捕獲成績、販売成績などである。事業場は新設と廃止はほぼ記述があるが2章で述べたとおり宇出津や隠岐の事業場では廃止年度に記載がない。捕獲成績は種別月別および捕鯨選別月別のものを掲載するが事業場別の集計はない。販売成績の記述は一定せず、1期は月別販売地別の「鯨肉類販売月別表」(表4-3)を掲載するが、2期は「鯨肉類販売月別表」として区分なしの月別販売金額を掲載、3-9期はトロール漁業をおこない「肉類、製品、魚類」の3区分による「売上金内訳明細表」を掲載している。10期以降は販売製品の表はない。鯨体価格について、第1-13期は夏期と冬期に分けた価格を示している。また、鯨油についての売り上げは1-2期は「鯨製品類販売種別表」から1期は98,753円、2期は143,425円であったが、3期以降は本文や「売上金内訳明細表」から鯨油あるいは鯨由来の製品の金額を抽出することができなかつたため、鯨油の販売は分析対象から外した。

そこで東洋捕鯨の捕獲や販売状況を一覧するため、捕獲数、鯨1頭あたりの販売金額、本文の「鯨肉販売状況」に記された「肉類製品代金」や類似した名目の金額を販売金額とし、利益については貸借対照表から1-20期は「当期純益金」を集計した。

概要を述べると、夏冬別の平均価格が得られる1-13期では、期ごとの1頭あたり価格は1,227-2,350円で1917年(12期)に急騰し平均1,625円、夏期は580-1,424円で平均864円に対し、冬期は1,725-4,283円で平均2,291円だった。1-28期の全体では、期ごとの1頭あたり価格は1,227-3,546円で平均2,159円、鯨肉と副製品を合わせた販売金額は516,809-4,096,340円だった。捕獲数は403-1,488頭で1期の平均は945頭、1,100頭後半を越えたピーク期間は1916-1919年と1923-1927年の2回あり、最高捕獲数は1918年の1,488頭だった。1頭あたり価格(全体、夏期、冬期)、販売金額、捕獲数ともに1918-1920年に最高を記録している。また利益については、1918年の数値が欠

損しているが、最大利益は最高販売金額を得た1919年に記録し1,216,610円だった。逆に販売金額が少なかった1930-1931年は利益を計上できず、翌1932年も18,234円とわずかであった。(表4-3、図4-6)。東洋捕鯨の事業は1918-1920年に最高潮を迎え、その後も1929年まで堅調だったといえる。1918年は三陸地方のナガスクジラの捕獲が200頭近くと1911年に次いで2番目(図3-6)、そして開設間もない黄海でも250頭を超えるナガスクジラの捕獲があった(図3-5)。1918年は主力漁場で値段の高いナガスクジラが豊漁であり、翌年もその傾向が続いたことが好成績の理由と考えられる。

なお、東洋捕鯨は設立時から日本最大の捕鯨企業であったが、当初は土佐の三捕鯨会社の他にも内外水産や紀伊水産など捕獲数が比較的多かった捕鯨会社が独立して存在していた。東洋捕鯨1社で国内の捕鯨状況をほぼ反映するようになるのは1916年に第二次合併を果たしてからである。

販売先の変遷

第1期の営業報告に限り鯨肉の販売先が表に記されている(表4-3)。それによると鯨肉の販売は11-4月に84.4%と冬期に集中し、5-10月の売上金額の割合は15.6%に過ぎなかった。販売先は博多が41.9%、次いで下関が26.9%となり両者で約7割68.8%を占めていた。営業報告によると捕鯨根拠地によって鯨肉の搬出は分かれており、朝鮮の鯨肉は下関と博多、土佐紀州分は阪神地方で販売したという(第5期 1912.8-1913.1)。第二次合併の後でも、関東州、朝鮮海および本土西部の事業場の肉類はおもに下関や博多の両港に搬入し、四国紀州ならびに陸前方面の各事業場の冬季中の肉類は主として大阪に輸送販売されたとしている(第13期 1918.2-1919.1)。第1期で鯨肉販売先が下関と博多で7割を占め、大阪と兵庫が少なかったのは、当時の東洋捕鯨の捕獲の地域的な偏りを反映した結果かも知れない。東洋捕鯨第1期(1909年度)の事業場別捕獲記録は、場長必携でも鮎川(129頭:白長須3、長須65、座頭7、抹香4、鯨50)と紀伊大島(74頭:白長須27、長須12、座頭6、抹香8、鯨20)が得られるだけで、四国や他地域の捕獲数が不明なため、実際の理由はわからない。

夏季の赤肉は肥料用だった

営業報告から夏季の赤肉の利用状況を取り上げると、関東[当時の用法として関ヶ原以東を指し

東北地方を含む]での捕獲は漁期が夏季のため大部分を肥料用とし白皮は採油や塩蔵した(第3期 1911.5-1912.1)、1912(明治45)年10月出漁から赤肉の塩蔵を廃止、すべてを氷詰めで出荷した(第5期 1912.8-1913.1)、1913(大正2)年前半は関西[関ヶ原以西の意味]の事業場の赤肉は5月頃まで生肉とし、東京市場でも1913年に鮎川と鮫の事業場から氷詰め樽入りの鯨肉を送って試売し1日5千斤[3トン]の売れ行きを見せた、また、漬込皮[塩蔵皮]は東北地方で販路が拡張し、同方面の捕獲の品をほとんど消化するようになった(第6期 1913.2-7)、鮎川の鯨肉も夏は肥料原料だが、初夏と秋は氷蔵汽車積として東京と阪神に搬出して食用とした(第7期 1913.8-1914.7)、などの記述が見える。冬期11-4月頃の赤肉は食用で、塩蔵であったものを氷蔵輸送に切り替える試みがされていたが、夏季の赤肉は肥料用で白皮も一部は採油用とされたことがわかる。1913年に鮎川から東京や阪神への氷蔵輸送は初出である。ただし回数や数量はわからない。

1920年代には北海道と千島からの鯨肉も食用とされた

鯨肉の輸送には船舶に加え鉄道も利用された。日本列島の鉄道網の発達に関しては、(明治40)年に帝国鉄道庁が設置され、鉄道国有法の成立直前の1893年には、現在の東海道本線や山陽本線、東北本線、鹿児島本線の門司八代間が開通し、長崎や佐世保、鮎川に近い塩釜にも鉄道が開通(鉄道省編 1921a: 地図)、北海道の網走へも1912年に達していた(鉄道省編 1921b: 118-119)。他方、1920年現在で紀伊半島に開通した鉄道は新宮勝浦間のみ、高知県はまったく未開通であった(鉄道省編 1921c: 地図)。鉄道輸送からすれば、紀州や高知県は後進地であった。

東洋捕鯨は1918年に捕獲頭数の最高を記録し(表4-4、図34-6)、翌1919年には売上額が最高を記録した。これがこの時期に実現したのは1917年の第二次合併やそれに続く事業場の新設整理による鯨肉供給能力が拡大にあわせ、省庁あげての鯨肉消費キャンペーンの後押しもあったと考える。翌1920年も、鯨肉の需用著しく増進のため、昨秋以来鮮魚の下落せるにかかわらず影響すること比較的少なく、相当の価格を維持しますます販路の拡張を見るに至れり」としている(第15期 1920.2-1921.1)。1922年には夏に捕獲された北海道や千島方面の赤肉を氷蔵あるいは塩蔵として大阪や博多で試売している(第17期 1922.2-1923.1)。翌年1923には夏季の操業に限られる樺太の赤肉も食用として販売されるようになる(第18期 1923.2-1924.1)。第19期では根拠地による

出荷先の違いが改めて記され、朝鮮と関東州そして台湾ならびに本土西部方面は主として下関および博多の両地へ、小笠原事業場の肉類はその全体を大阪および博多や下関市場へ、四国や紀州ならびに三陸方面の肉類は大部分を大阪および東京の両地に搬出し、一部を地売りにしたとする（第19期 1924.2-1925.1）。本土西部方面の具体的地域は記されていないが、四国や紀州が別記されていることから九州地方と思われる。1926（昭和2）年には冷凍保存が登場する。同年夏に斜古丹事業場で冷蔵庫「ママ」を建設して赤肉の一部を「ブライン」式により冷凍し、冬季の需用期間まで貯蔵のうえ冷蔵船で大阪、下関、博多の3市場へ搬出して試売した（第21期 1926.2-1927.1）。しかしながら、北海道、樺太方面の肉類は冷凍や冷蔵のうえ冷蔵汽船で道内および本土の各地へ搬出し、一部は缶詰原料として地売したが、北海道方面の赤肉が肥料原料に用いられることはなお継続した（第23期 1928.2-1929.1）。同様の記述は、本章が対象とする1934年の営業報告まで継続して見られるので、北海道方面の鯨肉の完全な食用利用は、東洋捕鯨の時代には実現しなかったのかも知れない。もちろん、肥料用の需用も存在し、剥肉や捕獲や曳航の事情で肉質が劣化する場合もあり、すべての鯨肉を食用とするのは不可能であるので赤肉を肥料用とするのは正常な利用である。

景気や他の海産物との関係

景気の影響も記されている。まず不景気であるが、米価下落の影響を受け、肥料用の赤肉や蕪骨の価格が昨年同時期比で約8分の1から1割5分の下落となった。皮畝類の漬込品の夏季主需要地である青森地方が昨年の大凶作の余波によって売れ行きが悪く約1割の安値となった（第8期 1914.2-7）。さらに、欧州開戦〔第一次世界大戦〕以来の不景気、とくに米価暴落の影響を受け地方の購買力が著しく減退した結果、食用鯨肉も値下がりし、肥料用の赤肉および蕪骨なども米価下落に伴い前年より約2割の安値となった。鯨油も欧州開戦以来、輸出途絶となっている（第9期 1914.8-1915.1）。翌年も米価暴落と魚類の豊漁によって鯨肉などの購買力が低下（第10期 1915.2-1916.1）、1916年9月にはコレラ流行のため福岡と佐賀では輸入が禁止〔両県への搬入禁止の意味か〕となるが下関や大阪方面では魚類の代用品として歓迎された（第11期 1916.2-1917.1）。そして汽船トロール漁業と11月以降の鰯漁の不漁が鯨肉類の購買力を激増させ、近年希に見る売行を見

せた。肥料用の赤肉も肥料の活況にともない約2割方の高値となり、鯨油も鉱業会社の勃興による需要が増加し好況となったという（第12期 1917.2-1918.1）。

鯨肉やその他の製品の価格を決める要因は、食用は汽船トロール漁業や朝鮮沿岸の鯖漁あるいは鰯漁など大規模漁業の好不漁による魚価、肥料用は米価や養蚕価格などの農家の景気動向であった。捕鯨企業の収益は魚や農産品の価格によって変動したことがわかる。

以上、東洋捕鯨による赤肉の販売動向を見ると、東京を中心とする販売努力、事業場での氷蔵や冷蔵冷凍設備の整備、冷蔵船や冷蔵貨車などの流通面での保存環境の向上、さらには前述の農商務省による鯨肉普及の奨励などによって、鯨肉食の普及は1920年代に西日本だけでなく東京周辺にも範囲が拡大していったことが明らかとなった。なお、鯨赤肉の保存について、先に述べた東洋捕鯨発行の「鯨とは」（図4-5）という小冊子で、赤肉の鮮肉は氷箱や涼しいところで保管すれば冬は20日、春秋でも10日ほどは変化しないとしている。現在では冷蔵販売されている食肉の賞味期限が3-4日であることに比べれば長期間にわたり保存利用することを食肉供給会社が宣伝していた。

3) 水産物流通からの鯨肉流通の推定

関西への鯨肉は土佐と紀伊から

最後に大阪の水産市場を事例に鯨肉の流通について文献から考察する。ここでも氷蔵輸送や冷蔵庫が画期となっていた。『資料大阪水産物流通史』（大阪水産物流通史研究会編 1971: 74）を見ると、明治元年（1868）前後の塩干魚商人が取扱っていた商品は「塩魚類・煎魚類・干魚類・鯨類・鯉節類・煎貝・干貝類・生節類・熨斗類・鱧子類・煎海単類・松前棒鱈・鯨鱈・海草 [ママ] 類・塩辛類・玉子・焼魚類・腸抜鮪」としている。典拠は示されていないが、文脈から1868年に行われた株仲間についての大がかりな調査からの抜粋のようである。上述のとおり、近世では食材の「鯨」は白皮を示すと考察したので、この「鯨類」も塩蔵白皮としておく。この資料は、幕末の大阪で塩蔵あるいは乾燥の食材としての鯨が流通していたことを示している。1901（明治34）年の調査資料では、大阪の主要な水産市場であった鞆 [うつば] 海産物市場の取扱商品に「クジラ」が見え、塩魚としては紀伊と周防から、干魚では土佐を産出国としている（同 1971: 84。出典は明治27年大阪商業史資料および明治34年大阪商業史資料）。東洋捕鯨の営業報告のとおり、朝鮮や九州

から関西への鯨肉搬出はほとんど無かったようである。

冷蔵と冷凍設備の整備

鮮魚の広域流通には保存や輸送で冷蔵や冷凍の設備が必要となる。1903（明治36）年に大阪で開催された第5回内国勸業博覧会では水産館に冷蔵庫が出品された。漁業基地では和歌山県勝浦に1907年に冷蔵庫が置かれ、大阪市の雑喉場〔ざこば〕市場でも1907年頃になると主な問屋は冷蔵庫を設けて常時氷を保管するようになった。倉庫企業としての冷蔵倉庫も1906年に登場し、鉄道での冷蔵輸送も同時期から始まり、大正時代中頃（1920年頃）には両者ともに本格化した。大阪の冷蔵倉庫は1923年には16か所にまで増加する。魚を運搬する冷蔵船はやや遅れ、1920年頃から実質的に登場し始める（以上は大阪水産物流通史研究会編 1971: 102-106）。東洋捕鯨の設立された1909年は、水揚げ地、鉄道、市場、倉庫など水産物流通の要所要所で冷蔵保存が可能となっていたことがわかる。なお鉄道の冷蔵輸送が氷蔵か冷蔵車かの記述はないが年代から氷蔵と思われる。

大阪市の海産物市場調査に現れる鯨食材

大阪の水産市場の状況を伝える資料には、大正時代に大阪市がおこなった魚市場の実態調査の報告『大阪市海産物市場調査』（大阪市役所商工課 1924）が存在する。明治大正期の市場調査の記録はきわめて少なく、この調査はたいへん貴重なものである。内容は、海産物市場の起源や組織、取引方法や商習慣、取扱高や輸送、そして市内に3か所（靱海産物市場、天満魚市場、木津難波魚青物市場）あった海産物を扱う市場について詳述したもので、組合員や運送業者の名簿や住所なども掲載した資料的価値の高い報告である。本書については伊豆川（1943: 568-583）が触れているが、彼の報告では明治前期の市場の沿革に注目する一方、調査の具体的な内容は紹介していない。取扱量や金額などについて断片的な記述ではあるが報告書を順にたどってみたい。なお、靱海産物市場は雑喉場魚市場と宝船市場を内包する（1p）。

まず、鯨肉の扱いは牛豚とともに「獣肉」のひとつに列せられている。鮮魚と塩干物の両方を掲載した「海産物仕出地および季節」を見ると、「身鯨」は8-4月に伊豆、土佐、紀州、豊前、周防、長門、朝鮮から来ている。皮鯨は記載がない（31p）。東洋捕鯨の営業報告や『資料大阪水産物流通史』（大阪水産物流通史研究会編 1971）では、大阪への鯨肉供給地として九州や朝鮮は出てこな

いので、少量が流通していたのか、あるいはどちらかが誤った記述なのかも知れない。1年間の取扱高を金額で調査した「塩干魚類品別取扱高」には「身鯨」25万貫〔973.5トン〕50万円、皮鯨10万貫〔375トン〕15万円となっている（47p）。他の塩干物と比較すると、身鯨だけで鯨の23万貫〔862.5トン〕41万4千円を上回り、皮鯨は棒鱈の9万貫〔337.5トン〕16万2千円に迫る数字である。ここでの「皮鯨」と「身鯨」の実体については具体的記述がなく、文字から「皮鯨」は塩蔵白皮、「身鯨」は塩蔵赤肉と考えておく。

なお、東洋捕鯨の販売会社としての性質を持つ、株式会社伊佐奈商会在雑喉場市場に接して東にあった「靱西海産組人名表 靱西市場之部」に見える（135p）。また、大阪市内の鯨肉売買業者68名が組織する精耕会があったという。事務所を靱南通5丁目に置き、入荷のつど宝船市場で入札し、時期によっては月に20日以上も入札会を開き、多い日には鯨肉50–60トンを扱い、大阪市内で取り扱いされる鯨肉はほとんどが精耕会で入札されるとしている（pp143–153）。前述の日本遠洋漁業による長須鯨1頭から赤肉12トンが得られるという数字（明石編 1910: 56–59）を当てはめると、鯨肉50–60トンは4–5頭分となる。鯨肉50トンは、ひとり100gを消費したとすれば50万人分、200gならば25万人分であり、大都市を商圈とする市場であっても完売には広い商圈と数日を要したと想像する。

まとめ

日本の近代捕鯨は当初から理念としては食用を主目的としていたが、鯨体の通年食用利用は販路の開拓や流通手段の整備、冷蔵や冷凍設備が普及した1920年代前半になって実現した。東洋捕鯨が最多捕獲数の記録は1918年、最高販売金額が1919年、最高1頭平均価格は1920年に記録しており、1918–1920年は戦前の近代沿岸捕鯨のピークであった。食事の場面で見ると、近世の料理書に現れる鯨料理のほとんどは白皮を用いたもので、赤肉と特定できる料理は極めて限られていた。実際には赤肉も京都や大阪では日常的な食材であったが、下品とされ客に出す料理には用いられずにいた。その傾向は近代の料理書にも引き継がれ、行事食などの格式の高い鯨料理に用いられる素材は白皮である一方、赤肉は下品な食材とされ庶民の惣菜としての位置付けであった。近代における鯨肉の全国的な普及は白皮を用いた行事食や郷土料理のような伝統食ではなく、西洋化や強兵策とし

て推奨された肉食の拡大に乗った醤油と砂糖を用いた近代に生まれた和風総菜として普及したものであり、1920年代には全国的に食されるようになっていた。これは、鯨肉の全国的な普及を戦後まもなくの南極海捕鯨に求める見方より30年早く、一世代古い。1950年代に学校給食によって鯨肉が全国的に飢餓を救ったとされるが、鯨肉食が受け入れられた背景には、一世代前に実現していた鯨肉惣菜の創作と一般化が前提として存在した。なお、1930年代の昭和初期に大阪の名物となった鯨鍋は料亭の創作料理であり、家庭や事業所での鯨肉食の普及は別のできごとである。

4章 鯨肉食は食の近代化のなかで普及した

表4-1 近世の料理書に現れた鯨料理と素材の部位

書名 記事名	記事での素材の表記	判断した部位
『料理物語』 (1649)		
くじらのをきやう [鯨の置き様]	なし (あかみは久しくみ申さす候 [赤身はそのうちに消える])	白皮
鯨汁	くじら (つくり次第 さつとにえゆをかける)	白皮
『料理方之次第』 (1670-1688)		
鯨の事	鯨 (うすく作りて なまぬるゆにて洗いあげ 酒塩にひたらし置)	白皮
『古今料理集』 (1674-1699)		
焼くしら	なし (湯煮をしやしきやしきとはきれのする程にして用へし)	白皮
『合類日用料理抄』 (1689)		
鯨の塩漬	身鯨	赤肉
鯨の塩漬	皮	白皮
鯨の料理	生鯨、塩くしら	白皮
松前焼鯨の料理	焼鯨	白皮
『料理綱目調味抄』 (1730)		
刺身	鯨 (皮身ともにうすく切 ゆがき 水に晒し)	白皮
和え物	なし [前項のつづき]	白皮
『黑白精味集』 (1746)		
漬物の法	鯨	白皮
『料理献立集』 (1761)		
	しほくしら、くしら	不明
	くしらうちのもの	百尋?
	くしらのうち	百尋?
『料理珍味集』 (1764)		
鯨蕎麦切 [蕎麦への見立て料理]	くじらいらかす	白皮
『新撰献立部類集』 (1776)		
身くじら 付やき	身くじら	赤肉
『名飯部類附録』 (1802)		
海鱈 [くじら] 雑炊	鮮鯨 [よきくぢら] の赤肉 [あかみ]	赤肉
『素人包丁』 (1803-1820)		
鯨あんかけ	実くじら	白皮?
同茶碗蒸、同酢味噌、同白あへ	上随分品のもの、前のごとくよき魚、前のごとくよき魚	白皮?
酢味噌和え	前のごとく (ほそく…つくりて かけんよく塩を出し さつと湯煮)	白皮?
白和え	まえのこたく (色の白きを 黒かわは去り 随分細ながく …切煮る)	白皮?

記事の表記は、吉見 (1980a, 1980b, 1980c) に従い、これらにない場合には高正 (2013) に従った
宇仁 (2018) を改訂

表4-2 明治大正期の料理書に現れた鯨料理と素材の部位

書名 記事名	記事での素材の表記あるいは識別点となる記述	判断した部位
伴源平編 (1887) 日本西洋支那三風料理滋味之饗奏. 72pp., 赤志忠雅堂出版, 大阪.		
鯨の葛あんかけの方	塩蔵鯨の肉 [み]	不明
白ごま汁 (汁之部)	皮くじら	白皮
的場銆之助編 (1889) 和洋料理 家庭全書第六篇. 210pp., 尚文堂, 大阪. 1909年版も同一内容		
海魚の調理 鯨	鯨	白皮?
海魚の調理 あんかけ	身くじら (サット湯煮)	不明
海魚の調理 茶かん蒸	上品の身	不明
塩魚の調理 鯨 汁	鯨	白皮?
塩魚の調理 鯨 刺身	鯨	白皮?
塩魚の調理 鯨 三ばい漬	鯨	白皮?
塩魚の調理 鯨 平皿	鯨	白皮?
塩魚の調理 鯨のいりから	鯨のいりから	煎りから
塩魚の調理 同くのし	同くのし	尾羽毛
塩魚の調理 同かぶらばね	同かぶらばね	燕骨
塩魚の調理 同じくあづさ身	同じくあづさ身	赤肉
高知県尋常中学校女子部卒業生編 (1892) 割烹授業日誌第一輯. 21丁, 私家版, 高知.		
皮鯨はんぺん	鯨肉→誤植と判断	見立て料理 (白皮)
西野たつ・一圓とよ (1893) 割烹授業日誌第二輯. 26丁, 私家版, 高知.		
鯨附焼	鯨	赤肉
皮鯨味噌汁	皮鯨	白皮
東生鉄五郎編 (1894) 日用素人料理. 169pp., 袋屋書店, 東京.		
鯨なべ	鯨	不明
刺身 鯨	鯨	白皮
三田村熊之介 (1895) 新撰料理独案内. 201pp., 鹿田書店, 大阪.		
魚類即席料理 [上段] 鯨	鯨	白皮
魚類即席料理 [上段] 汁	鯨	白皮
魚類即席料理 [上段] さしみ	鯨	白皮
魚類即席料理 [上段] 三盃漬	鯨	白皮
魚類即席料理 [上段] 平皿	鯨	白皮
魚類即席料理 [上段] 同いりから	同いりから	煎りから
魚類即席料理 [上段] 同のし	同のし	尾羽毛
魚類即席料理 [上段] 同かぶらばね	同かぶらばね	燕骨
魚類即席料理 [上段] 同あづさ身	同あづさ身	赤肉
魚類料理 酢の物 ○鯨酢味噌	良き鯨	白皮 (塩蔵)
魚類料理 あんかけ ○鯨	良き肉 [み] 鯨	白皮
魚類料理 蒸し物 ○鯨	上品のもの	白皮 (塩蔵)
河井壽造 (1896) 古今料理大全. 148pp., 積善館, 大阪.		
鯨のあんかけ	実くじら	白皮
同茶碗蒸し	くじら	不明
同酢味噌	鯨	白皮
隅谷巳三郎 (1900) 古今料理大全. 309pp., 開拓社, 東京.		
総菜料理法 鯨の柔らか煮	鯨	白皮
汁の部 鯨じる	なし	不明
即席料理 鯨	鯨	白皮
支那料理塩物魚調理の部 鯨 汁、刺身、井、平皿	鯨	白皮
支那料理塩物魚調理の部 鯨 いりから	いりから	煎りから
支那料理塩物魚調理の部 鯨 のし	のし	尾羽毛?
竹堂王人 (1901) 和洋日用料理. 200pp., 小川尚栄堂, 東京.		
第二編料理法 第一章魚類料理 ○鯨の白あへ	鯨の肉	赤肉
第二編料理法 第二章精進料理法 ○鯨くわみ	くわみ、昆布	見立て料理 (白皮)
池村鶴吉編 (1901) 新撰和洋料理精通 全. 80pp., 松陽堂/光世堂 (二書房蔵版), 東京.		
汁 塩魚物料理の部 ○鯨の料理	皮鯨	白皮
井物、三杯づけ、鉢肴 塩魚物料理の部 ○鯨の料理	白き脂肪肉 [あぶらみ]	白皮
さしみ 塩魚物料理の部 ○鯨の料理	薄く切り湯に入れはぜさせる	白皮
平皿 塩魚物料理の部 ○鯨の料理	うすく切る	白皮
鯨のあづさ身 塩魚物料理の部 ○鯨の料理	鴨などの代りに	赤肉
鯨のかぶらばね 塩魚物料理の部 ○鯨の料理	鯨鬚 [げいそう] としてくじらの口中に在る	ひげ板
鯨のし 塩魚物料理の部 ○鯨の料理	みしま海苔のごとく、湯をかけてもめば毛のごとなる	尾羽毛?
井上善兵衛述 (1902) 割烹料理教授用総菜三百種. 180pp., 大日本図書, 東京.		
鯨豆腐	豆腐、昆布	見立て料理 (白皮)
鯨汁	黒皮、白皮	白皮
横山順 (1902) 料理の枝折. 144pp., 明昇堂, 大阪.		
鯨汁 味噌汁に属する汁類	塩鯨	白皮

表4-2 明治大正期の料理書に現れた鯨料理と素材の部位（つづき）

書名 記事名	記事での素材の表記あるいは識別点となる記述	判断した部位
鯨 酢の物の作り方	塩鯨	白皮
赤松登美子（1905）お手軽料理 細君の腕前. 146pp., 名倉昭文館, 大阪.		
汁物料理 鯨汁	塩鯨、白き肉 [み]	白皮
汁物料理 皮鯨汁	皮鯨	黒皮
家庭倶楽部編（1906）四季和洋料理. 250pp., 井上一書堂, 大阪.		
鯨汁（味噌仕立て、清汁）	鯨	不明
横山順述・大村忠二郎校閲（1902）料理の枝折. 144pp., 明昇堂, 大阪.		
鯨汁	塩鯨（赤みあらば其所だけを、そぎ取り）	白皮
酢の物 鯨	塩鯨（細く作りて塩を出し、さつと湯がきて清水にて洗ひ）	白皮
赤堀吉松・赤堀峰松・赤堀菊子（1908）惣菜料理 家庭百科全書第10編. 263pp., 博文館, 東京.		
鯨肉の調理法（醤油煮、生姜煮、塩焼き、朝鮮焼き、味噌煮）	生鯨肉 [なまくじら]	赤肉
無署名（1910）軍隊料理法. 川流堂, 東京. 145pp.		
「皮鯨」第一章調理ノ心得第七節燻 [ゆで] 方其二魚鳥獸肉類 皮鯨		白皮
亀井まき子（1911）洋食の調理 家庭百科全書第30編. 282pp., 博文館, 東京.		
鯨肉味噌あへ	鯨肉	白皮
赤堀喜久・赤堀峰吉（1912）家庭年中料理の仕方. 300pp., 岡村書店, 東京.		
盃蘭盆の献立 鯨白玉	黒皮は椎茸入り白玉、脂身は白玉	見立て料理（白皮）
観月の献立 汁	さらし鯨肉	白皮
割烹講習会編（1913）四季家庭料理. 300pp., 岡田文祥堂, 大阪.		
盃蘭盆の献立 鯨白玉	黒皮は椎茸入り白玉、脂身は白玉	見立て料理（白皮）
観月の献立 汁	さらし鯨肉	白皮
浪速料理会（1914）家庭料理法. 300pp., 精華堂書店, 大阪・東京.		
さらし鯨の山椒酢味噌	鯨のよき肉	白皮
観月の献立 汁	さらし鯨肉	白皮
中川愛水（1916）四季の料理. 182pp., いろは書房, 東京.		
三月 湯がきて作る刺身 鯨	白皮	白皮
赤堀峰吉（1917）佳節儀式料理 赤堀料理全書第49編. 324pp., 博文館, 東京.		
鯨白玉 仏事の御馳走献立 一茶碗	黒皮は昆布、脂身は白玉	見立て料理（白皮）
かぶら骨 月見の御馳走献立 一向	かぶら骨	蕪骨またはひげ板
鯨玉子 還暦祝の御馳走献立 一椀盛	黒皮は海苔、脂身は出汁蒸し玉子	見立て料理（白皮）
赤堀峰吉ら4名（1917）四季の料理 附養生食物の拵方 赤堀料理全書第一編. 220+84pp., 大鑑閣, 東京・大阪.		
くじら白玉 精進膳部献立 111吸物の加減	黒皮は椎茸粉入りの白玉、脂身は白玉	見立て料理（白皮）
精進膳部献立 122さらし鯨肉 [くぢら]	塩漬鯨皮	白皮
青木恒三郎（1918）四季和洋新料理. 212pp., 田村照 [き] 春堂, 大阪.		
魚貝類名寄せ いらがら	いらがら	煎りから
魚貝類名寄せ をばけ	をばけ	尾羽毛
四季の献立 料理のいろいろ くじら汁	鯨、塩の [鯨]	白皮
魚貝類名寄せ くじら『海鱈』	海鱈	白皮
四季の献立 料理のいろいろく其5 > くじらのすみそ	皮くじら	黒皮
中川愛水（1920）料理手引. 241pp., 求光閣書店, 東京.		
鯨の柔らか煮	鯨	白皮
糸鯨	塩漬白肉鯨	白皮
塩鯨の料理やう	なし	白皮
割烹講習会（1921）西洋料理. 230pp., 立川文明堂, 大阪.		
鯨汁	塩鯨（肉が赤ければ上を切りのけ）	白皮
鯨の酢味噌	皮鯨	白皮
鯨のかしらあへ	白皮	白皮
ビーフ、カツレツ	鯨も用いることができる	赤肉
肉入ラムレツ	鯨も用いることができる	赤肉
越智キヨ（1922）家庭日本料理. 474+20pp., 六盟館, 東京.		
鯨肉 すきやき	鯨の赤身	赤肉
鯨肉 味噌煮	鯨の赤身	赤肉
鯨肉 佃煮	鯨の赤身	赤肉
鯨肉 酢のもの	鯨	白皮
鯨肉 おばけの味噌汁	おばけ	尾羽毛
鯨肉 おばけの生姜味噌あえ	おばけ	尾羽毛
家庭割烹研究会編（1925）四季家庭お料理の拵 [こしら] へ方 完. 230pp., 暁星社書店, 大阪.		
鯨汁の作り方	塩鯨、生鯨	白皮
湯がきて刺身にする原料 [もの]	鯨	白皮
くじらさしみの作り方	鯨	白皮
小川忠三（1929）お手軽家庭料理. 293pp., 文武書院, 東京.		
鯨鍋	鯨肉	赤肉

利用書籍の所蔵先は、赤堀ら（1906）および亀井（1911）は国立国会図書館デジタルライブラリー、その他はすべてケンシヨク「食」資料室蔵
宇仁（2018）を改訂

表4-3 東洋捕鯨第1期鯨肉類販売月別表 (1909.5.7-1910.4.30)

	大阪	兵庫	下関	博多	その他	計	%
5月	0	0	0	6,941	5,646	12,586	1.1
6月	0	0	0	23,183	9,617	32,799	3.0
7月	0	0	4,074	12,179	24,144	40,397	3.7
8月	0	0	0	1,775	13,651	15,426	1.4
9月	0	0	0	0	203	203	0.0
10月	14,432	3,785	12,471	33,695	5,663	70,046	6.4
11月	19,699	13,100	40,798	48,888	7,461	129,946	11.8
12月	28,541	11,573	77,790	94,336	19,538	231,777	21.1
1月	24,299	17,224	45,034	54,432	22,346	163,334	14.8
2月	18,613	6,979	61,408	101,824	18,034	206,857	18.8
3月	12,800	7,559	32,246	26,617	15,298	94,519	8.6
4月	4,128	1,092	21,818	56,582	18,423	102,042	9.3
計	122,510	61,312	295,638	460,451	160,023	1,099,934	100.0
%	11.1	5.6	26.9	41.9	14.5	100.0	

東洋捕鯨営業報告1期より作成

表4-4 東洋捕鯨の期別の捕獲頭数と1頭平均価格、鯨肉および副製品の売上

期	開始年	平均	夏期	冬期	製品販売金額	当期純益金	捕獲頭数	期間
1	1909	1,565	580	1,950	1,404,090	423,483.561	897	1909.5.2-1910.4.30
2	1910	1,609	641	2,155	1,444,976	414,014.479	898	1910.5.1-1911.4.30
3	1911	1,265	689	2,006	1,186,095	266,673.021	937	1911.5.1-1912.1.31
4	1912	1,227	893	1,725	516,809	70,701.781	421	1912.2.1-1912.7.31
5	1912	1,940	945	2,164	782,018	232,516.701	403	1912.8.1-1913.1.31
6	1913	1,220	913	1,809	655,462	115,162.264	537	1913.2.1-1913.7.31
7	1913	1,990	923	2,336	877,646	266,270.374	441	1913.8.1-1914.1.31
8	1914	1,420	999	1,963	705,985	136,204.746	497	1914.2.1-1914.7.31
9	1914	1,599	616	1,865	727,800	165,329.737	455	1914.8.1-1915.1.31
10	1915	1,235	601	1,788	1,337,530	341,750.634	1,083	1915.2.1-1916.1.31
11	1916	1,535	884	2,333	1,936,801	577,072.401	1,261	1916.2.1-1917.1.31
12	1917	2,169	1,127	3,410	2,937,067	872,101.834	1,354	1917.2.1-1918.1.31
13	1918	2,350	1,424	4,283	3,498,181	コピー欠落	1,488	1918.2.1-1919.1.31
14	1919	3,319			4,096,340	1,216,610.190	1,234	1919.2.1-1920.1.31
15	1920	3,546			3,457,847	458,615.537	975	1920.2.1-1921.1.31
16	1921	2,486			2,713,306	229,883.324	1,091	1921.2.1-1922.1.31
17	1922	2,468			2,715,693	443,844.580	1,100	1922.2.1-1923.1.31
18	1923	2,688			3,089,235	578,519.390	1,149	1923.2.1-1924.1.31
19	1924	2,798			3,489,536	601,770.926	1,247	1924.2.1-1925.1.31
20	1925	2,714			3,195,232	539,181.211	1,177	1925.2.1-1926.1.31
21	1926	2,402			2,985,693	418,356.002	1,243	1926.2.1-1927.1.31
22	1927	2,627			3,050,605	490,727.270	1,161	1927.2.1-1928.1.31
23	1928	3,014			2,966,382	505,046.412	984	1928.2.1-1929.1.31
24	1929	2,822			2,847,737	430,682.942	1,009	1929.2.1-1930.1.31
25	1930	1,696			1,914,838	記載なし	1,129	1930.2.1-1931.1.31
26	1931	1,924			1,601,554	記載なし	832	1931.2.1-1932.1.31
27	1932	2,161			1,614,537	18,234.230	747	1932.2.1-1933.1.31
28	1933	2,666			1,917,239	168,016.610	719	1933.2.1-1934.1.31

東洋捕鯨営業報告--28期より作成。宇仁 (2018) に当期純利益を加筆

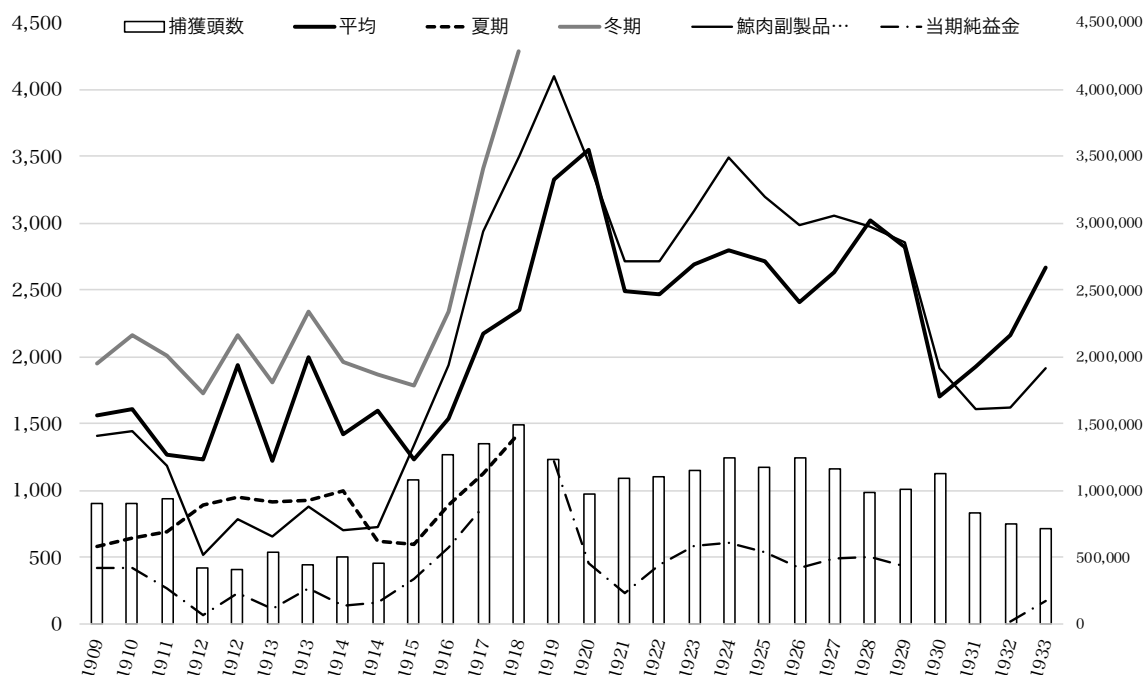


図4-6 東洋捕鯨の期別の捕獲頭数、販売頭数と1頭平均価格、鯨肉および副製品の売上金額

棒グラフ：捕獲頭数、灰色線：冬期の1頭平均価格、点線：夏期の1頭平均価格、太実線：期別の1頭の平均価格（以上、左目盛り）。細実線：鯨肉および副製品の売上金額、一点鎖線：純益金（以上、右目盛り）、1911年度は9か月間、1912-1914年度は1期半年間、1918年の純益金は資料欠損、1930-1931年は記載なし。宇仁 (2018) に当期純利益を加筆

5章 沿岸捕鯨が近代鯨類学を導いた

1節 近世の鯨類知識によるナガスクジラ属の分類

2節 東洋捕鯨が定着させた鯨類和名

3節 アンドリュースの鯨類調査の再評価

4節 日本における近代鯨類学の形成とアンドリュース

1節 近世の鯨類知識によるナガスクジラ属の分類

近世日本の大型鯨類の知識、すなわち近世鯨類学は主要な捕獲対象であったセミクジラ、ザトウクジラ、コククジラを中心に知識の集積が進んだが、捕獲が難しく死ぬと沈んでしまうため回収困難であったナガスクジラ属の知識は現在と比べて著しく不足していた。近世の文献でナガスクジラ属の鯨類を「ザトウクジラに似ている」と表現しているのはナガスクジラ属の鯨類の捕獲は稀であり、比較対象となる似た特徴を持つ鯨がザトウクジラであったためである（粕谷・山田 1989: 60）。そして日本の近代鯨類学の大きな課題のひとつがナガスクジラ属の知識を深めることだった。本章の課題は日本における近代鯨類学の形成であるが、最初に近代沿岸捕鯨の初期に主要な捕獲対象種であったナガスクジラとシロナガスクジラの呼称の固定を中心にナガスクジラ属の鯨類認識について考察する。

現在の生物学の知識では、日本の沿岸に回遊するヒゲ鯨はセミクジラ、コククジラ、ザトウクジラ、シロナガスクジラ、ナガスクジラ、イワシクジラ、ニタリクジラ、カツオクジラ、ツノシマクジラ、ミンククジラの10種、大型の歯鯨はマッコウクジラ1種である。おもに捕鯨個体を用いて研究が進められてきた大型鯨類について、この認識に至るには近代捕鯨開始からおおよそ1世紀を要している。ニタリクジラが日本近海を含む北太平洋に分布することは1950年代に判明（大村 1953）、ツノシマクジラ（*Balaenoptera omurai*）が新種記載され、ニタリクジラとされてきた鯨が沿岸域に分布するカツオクジラ（*B. edeni*）と沖合を回遊するニタリクジラ（*B. brydei*）の3種からなること明らかとされたのは21世紀初めのことであった（Wada et al 2003）。ナガスクジラ属の生物学的種分類という課題は近代初期だけでなく20世紀をとおして存在したのである。序章で述べたと

おり、ツノシマクジラとカツオクジラの2種はニタリクジラに含めて議論を進める。

本節では日本の近代鯨類学の土台となった近世鯨類学の大型鯨類の分類について簡潔なまとめをしておく。近世の鯨図説（福本 1960: ）の個々の詳しい分析は省き、近世鯨類学の総説といえる2つの文献に沿って検討する。ひとつは、大槻清準が1808（文化5）年に著した「鯨史稿」（大槻 1976）で、近世鯨類学の到達点とされる（福本 1960: 189-192、大矢 1976）。もうひとつは服部徹が1887（明治20）年に前編、1888（明治21）年に後編を出版した『日本捕鯨彙考』（復刻版：服部編 2000）で、こちらは「本邦古来の鯨書中より項目によって適合適所を選択し当時の定説に照らして編集したもの」（細田 2000）と評価されるとおり、近代の出版でありながら記述内容は近世鯨類学を集大成したものとなっている。

「鯨史稿」は大型鯨類について西海や紀州の鯨図説、本朝食鑑や和漢三才図絵、日東魚譜や海鱒譜などの記述を一覧表にまとめて検討した結果、西遊旅談の5種が最も正確と判断し、そこに自身の平戸での聞き取りから得た5種のなかの2種にはそれぞれ2品があるという知識を加え、5種7品と結論した。品は種の下位分類のように見えるが、2品あるとした長須の本文では「長須に2種あり」と述べており（大槻 1976: 129）、種と品の階層性を意識していたのかどうか疑わしい。マッコウクジラは真甲鯨と表記し本物の鯨類から区別を「附」としている。大槻の分類は六鯨から歯鯨のマッコウクジラを本物の鯨5種から除外して別にカウントしたもので（前掲書: 101-106）、六鯨説の変形といえる。

5種7品の内容は、脊美、座頭、長須、兒、鰯の5種、2品とあるのは長須の白長須と似タリ、そして兒鯨の青サキとシヤレである。まず長須について考察する。長須は2品といいつつ描かれた図は1つのみであり、座頭鯨が黒く描かれているのに対し白抜きで背びれは尾柄に近くに小さく寝た形で描かれておりシロナガスクジラを思わせる。長須全体の説明の最後に引いた「白長須と云ありまた小さきつれを似タリという」という「唐津捕鯨図説」の表現はシロナガスに対して小型の個体はすべて含むようにも読める。ただし、「唐津捕鯨図説」すなわち唐津藩士木崎攸軒（盛標）が安永2（1773）年に描いた「小児の弄鯨一件」の原文は「長須鯨 但し此内に白長須と云ありまた小さきつれを似たりという」であり（中里 2005: 105 中里は「小たり」と翻刻しているが誤り）、2品

ではなく長須、白長須、似たりの3品とも読める。ヒゲに関する記述は「座頭同然」という西海の鯨図説を引いている。これが色を差すのならば黒色でシロナガスクジラの特徴を言い当てているが、何を意味しているかは不明である。体長15尋（22.5mまたは27m）はシロナガスクジラに近い（前掲書: 129-134）。似タリは、「鯨志」を引用したうえで「此鯨総て白長須に似たり、ただし灰色」と体色を異なる点と結論している。油の産出の記載で比較すると、白長須は紀州の鯨図説を引用して400樽、それに対して似タリは「鯨記」より100樽から大きな個体では300樽という記述を紹介している。似タリの油産出量は樽が同一単位とすれば白長須より少ないが幅が広く、南極海捕鯨のシロナガス換算（BWU）のシロナガス=2ナガス=2.5ザトウ=6イワシを用いると300樽はナガスより大きく、100樽はナガスとイワシの間となる。油の産出に関する近世鯨類学の記述から似タリの特長は難しい。似タリの記述では「鯨記」から冬の「食物鱒なり」とする。これはニタリクジラを思わせる。白長須では食性を記述していない。本論での結論は、「鯨史稿」の白長須はシロナガスクジラであり、似タリはナガスクジラとニタリクジラを混合した記載というものである。

一方、兒鯨は図が2つ描かれ「兒鯨ノ一青鷺」および「兒鯨」と題されている。前述の一覧表や本文では兒鯨の下位分類風に記されているのは「青サキ」「青鷺」「シヤレ」で図の表題と一致しない。2つの図はよく似ており、両者ともに白抜きで描かれ、頭部と下顎、背の中央部に黒色の斑点が付けられている。違いは青鷺の方が若干大きく描かれている程度である。本文では、名前の意味を鯨志の「鯨中であつて最細小」という説明を用い、和漢三才図絵を引いてヒゲは白く長さ1尺5-6寸（45-48cm）、また鯨志から喉や下唇に短毛があると正しく記している。青鷺については、油が白く良質でヒゲは白くて長さ2尺（60cm）に達し、紀州の鯨図説から通常の体長が5-7尋（1尋は1.5または1.8m、1.5mで計算すれば7.5m-10.5m、1.8mならば9-12.6m）であるのに対し、青鷺は10尋（15mまたは18m）ほどあるとしている。本文の最後で青サキとシヤレの識別点に言及し、同形同色ながら背の尾に近い場所に「刻折 キレコミ」を有するものをシヤレ、無いものが青サキと述べるが、図では違いが描かれず、根拠となる文献や聞き取りについては言及がない。大槻の説明では青サキとシヤレの違いは不明であるが、紀州の鯨図説から（大槻 1976: 135-142）、コククジラの大個体の呼称と示唆され、青鷺とシヤレはともにコククジラと読める。

近代に出版された『日本捕鯨彙考』（服部編 1887）が採録した大型鯨種は、近世で六鯨とされた背美、小、座頭、長簀、鰭、抹香の6種類であり、近世鯨類学の共通理解を踏襲している。近代の出版物らしく、近世鯨類学の鯨類名に学名と英名とを比定している。ただし、学名はイタリックではなく正体（正立体）で記されている。活字どおりに記すと、RIGHT WHALE. *Balaena antarctica* 背美鯨 セミクジラ、CALIFORNIA GRAY WHALE, OR DEVIL-FISH. *Rhachianectes glaucus* 小鯨 コクジラ、HUMPBACK WHALE. *Balaenoptera antarctica* 座頭鯨 ザトウクジラ、SULPHUR BOTTOM OF PACIFIC. *Sibbaldius sulfureus* 長簀鯨 ナガスクジラ、PIKE WHALE. *Balaenoptera arctica* 鰭鯨 イワシクジラ、SPERM WHALE. *Physeter macrocephalus* 抹香鯨 マッコクジラとなる（服部編 1887: 41）。また鯨の図は近世の文献は誤りが多いため西洋の文献も参考にしたといい（同: 2）、実際、近世鯨類学の鯨図とは異なる写実性が見られる。大型鯨類のうち種と判断できずに保留した呼称は「能曾鯨」（のそくぢら）のみである。コククジラの異名である青鷲とシヤレについては年齢による外部形態の違いと断定しており（同: 55-57）、この点は画期的である。

『日本捕鯨彙考』（服部編 1887）は階層化した近代鯨類学の分類体系の図を掲げ、六鯨と小型鯨類を「学術上の定則に従い」分類している。すなわち鯨類を哺乳動物のうちの游水類（Cetacea）とし、鯨科（*Balaenidae*）、壺魚科（*Physeteridae*）、海豚科（*Delphinidae*）の3科に分け、鯨科には背美鯨と小鯨を含む正鯨属（*Balaena*）、座頭鯨と長簀鯨および鰭鯨を含む鱗鯨属（*Balaenoptera*）の2属、壺魚科には抹香鯨を含む壺魚属（*Physeter*）1属を置いている。ちなみに海豚科は海豚属（*Delphinus*）と一角魚属（*Monodon*）の2属で一角魚属には本邦産なし、大魚喰〔オキゴンドウ〕は海豚属としている（服部編 1887: 41）。しかしながら、分類体系を解説するのは「動物学上に関係し本書の主旨に反する」として意見や解説はしていない。また、この分類体系や科属名の典拠は記されていない。『日本捕鯨彙考』は、近代鯨類学あくまで日本の近世鯨類学の総仕上げであるとの立場をとり続けた。

個別の鯨種の記述に戻ると、セミクジラの記述は詳しく価格や利用法など産物としての特性に加え、観察記載は眼球や胎児に及び（同: 47-50）、ザトウクジラでは母父鯨が子を伴い来るという理

解であるがエスコートの存在まで記録している（同: 65）。つまり、近世鯨類学の知識はセミクジラでは肉眼的な解剖学、ザトウクジラでは繁殖生態にまで及んでいたことがわかる。

一方、ナガスクジラ属の分類では、能曾鯨は別種と証明するに至らず座頭鯨の項の付録とし、紀州と土佐、西海の鯨図説を検討した結果、座頭と同物異名が6割、服部の考えでは座頭の成長や年齢による色や形の違いとする九州の同種異形説を3割、身体に白点があり背びれがより後方にある別種とする紀州の説を1割と考え、他からの意見を待つと判断を保留している（同: 67-69）。長簀鯨については、白長須と似タリは年齢による体長体色の違いの可能性をしてみつつ灰色と白色について区別せずに説明したとしており（同: 72-73）、必然的に複数種が混在した記述となってしまう。長須鯨に比定された学名はシロナガスクジラに用いられたもので、図も白抜きで表され背びれが背の後方に寝た状態で小さく描かれシロナガスクジラに見える。鰯鯨は、項目のタイトルは「鰯鯨一名鯨鯨」であるが図版の漢字は「鰯鯨」とだけ記し、鰯鯨と鯨鯨を別種とする紀州の説は「鯨志」が修正し、紀州の文献の図は誤りが多いとするなど鰯鯨と鯨鯨は同物異名という立場が明確である（同: 77-81）。文献を引いて特徴を描くが、体長5-7尋（7.5-10.5mまたは9-12.6m）で全身黒色にはのどの下あたりが赤いという記述はニタリクジラの特徴に近い。近世鯨類学の知識が紀州から北九州の捕鯨から得られたことを考えれば、イワシクジラの可能性は低く、消去法でもニタリクジラに比定できる。

結局のところ、「鯨史稿」や『日本捕鯨彙考』の分析からは、近世鯨類学の知識にあるナガスクジラ属の分類は長須（長簀）鯨と鰯（鯨）鯨の2種類に留まり、鯨鯨はニタリクジラに比定される一方、長須鯨についてはナガスクジラとシロナガスクジラの両方、ニタリクジラを含めていた可能性が考えられた。またヒゲ鯨のうち最少の種は兎鯨や小鯨と表記されてきたコククジラとされており、ミンククジラは認識されていなかったことが明らかである。「鯨史稿」や『日本捕鯨彙考』は、古い文献を比較検討してそこに記された名前を実体に比定する作業、逆にいえば記述された実体に名前を当てはめる作業、つまり名物学（西村 1999: 110-112）だったといえる。『日本捕鯨彙考』が比定を試みた学名の比定は、西洋で知見が蓄積された学名について、標本を用いずに近世日本という場所も年代も異なる文献の記載に比定しようとする名物学だったのである。当然のことな

から実物の観察が不足した状態では正しい解答には至らない。このような名物学としての学名の比定作業は、近代生物学を志向した分類研究でも1900年代まで継続し（付録：岡田 1891、大日本水産会 1896、田子 1907）、ナガスクジラとシロナガスクジラの正確な判別、ミンククジラの認識は近代沿岸捕鯨の操業以前は実現しなかった。

2節 東洋捕鯨が定着させた鯨類和名

ナガスクジラとシロナガスクジラの呼称の標準化

本節では、近代に新たに識別された鯨類とその和名の定着過程について考察する。対象としたのは、ナガスクジラとシロナガスクジラ、そしてミンククジラである。

日本におけるナガスクジラとシロナガスクジラの呼称について、既に粕谷・山田（1995: 69）は「これ [『本邦の諾威式捕鯨誌』] 以後シロナガスクジラとナガスクジラの呼び方が現在の様に統一されたい」として1910年頃に現在の用法が成立したという見通しを立てている。本節ではこの見通しについて社内資料などを用いて検証するとともに、粕谷・山田（1995）では示されなかった呼称統一の理由を考察する。本節で用いた事業報告書は日本遠洋漁業や東洋漁業、東洋捕鯨などが株主総会に提出する資料であり、ここに用いられた呼称は社内用語であるとともに外部に向けた公的呼称といえる

これらの事業報告書に現れる捕獲鯨類の名称は、日本遠洋漁業は長曾、座頭、赤鷺、抹香、野曾（第3回の2頭のみ）、青鷺、白長曾（第5回の1頭のみ）、東洋漁業では長須、座頭、白長須、克、鰯、背美、抹香であるが、東京出張所あるいは東京支店の報告書では捕獲統計は掲載されず、事業報告文中で使用された鯨類名称は長曾、長須、白長曾、坐頭、鰯、脊美、抹香、眞甲などであった。東洋漁業株式会社第2期報告書（1905.8-1906.7）には漁労の報告がない。東洋捕鯨は眞長須、座頭、白長須、克、鰯、抹香であった（表5-1）。使用した資料はいずれも山口県文書館所蔵のものがある。

粕谷・山田（1995）を参考に漢字表記を生物学的な分類に当てはめると、セミクジラは背美と脊美、コククジラは赤鷺と青鷺そして克、シロナガスクジラが長曾と白長曾そして白長須、ナガスク

ジラは長曾と野曾、長須や眞長須、イワシクジラは鰯と鯧、ザトウクジラは座頭と坐頭となる。このうち野曾は日本遠洋漁業の1例、眞長須は東洋捕鯨の1例、そして白長曾は東洋捕鯨での2例のみの使用だった。長須の表記の初出は東洋業第3回報告書で、以後も捕獲記録ではこの表記が続いたが、同社東京出張所（1906.4-7）や東京支店（1906.8-1907.7）の報告では本文で再び長曾の表記が見られ、東洋漁業報告書第2 [ママ] 期（後のもの、1907.8-1908.7で第4期に相当）で長須に戻っている（表5-1）。長曾の使用は東京出張所や支店の担当者によるものだったのかも知れない。

日本遠洋漁業は山口県日本海側出身者が設立した企業で、本社は山口県仙崎、蔚山を根拠地に朝鮮半島日本海側を主な操業海域とした。同社の鯨肉や鯨油の販売先は、山口県や北九州であり、長門や西海などの日本海側で用いられてきた鯨類呼称の使用することで、社外の取引先を含め捕獲動物を特定し共通して理解することが可能であった。他方、東洋漁業は太平洋側の銚子や紀伊大島、穴喰や土佐清水に事業場を新設し、これら太平洋側の事業場では主な捕獲対象がシロナガスクジラで、鯨体や鯨肉、鯨油などの販売先は土佐や紀州の商人である。操業場所が日本海と太平洋の両方に展開した結果、日本国全域で対象動物が区別可能な名称が必要となり、現在の標準和名に相当する社内呼称が使われるようになったと推定する。いまのところ名称選択に関する意志決定の文書は見つかっていない。東洋漁業は日本海と太平洋の両方に事業場を設けたことでナガスクジラとシロナガスクジラの両種を捕獲するようになり、両種ともに1910年頃まで捕獲の大半をしめた主要漁獲対象種であったため、呼称統一の必要性が高かったことも考えられる。

シロナガスクジラとナガスクジラの呼び方が現在の形に統一されたのは、粕谷・山田（1995: 69）は『本邦の諾威式捕鯨誌』以降としたが、社内資料を見る限りその数年前の東洋漁業で成し遂げられていたことが明らかである。東洋捕鯨事業場長必携では、すべての事業所で共通様式の種別月別の捕獲記録表が用いられており、第1期の明治42（1909）年度から捕獲記録が残されている鮎川や紀伊大島、翌1910年から記録がある蔚山でも、始まりから脊美／背美、白長須、長須、座頭、抹香、鯧、克の7種となっている。細かく見れば同一冊子であっても捕獲が極端に減少した年などでは、種名の省略や表形式を廃した簡略な表現とされる場合もあるが、東洋捕鯨は操業最初年の1909年から長須と白長須という名称を用いており、ナガスクジラとシロナガスクジラを別に立項し、表

記のブレは見られない。この脊美／背美、白長須、長須、座頭、抹香、鯨、克という7種の区分が1950年代にニタリクジラが識別されるまで、日本の沿岸捕鯨の捕獲対象種として認識されていたのである。

東洋捕鯨の普及事業が和名の標準化を促した

近世鯨類学では性格に認識されていたなかったナガスクジラとシロナガスクジラの名称が普及したのは近代捕鯨開始以降であるのは明白である。その名称の標準化は東洋捕鯨がおこなったことでも上に見たとおりであるが、ここからはこれらの和名の普及に関する東洋捕鯨の役割を見ておきたい。

鯨類は現在でも捕鯨根拠地や鯨類観察事業の実施地域以外では縁遠い存在である。近世で大型鯨類に地方名称が存在したのは捕鯨の根拠地だけだったと仮定すると、捕鯨操業地域以外での鯨類認識は近世であっても書物によるものになる。つまり、特定の地域名称の拡大は人づてではなく書物で使用された呼称が広がり標準名称になっていったと考える。これは近代における新たな捕獲種でも同様だったと推測できる。

現在でも身近な生物では標準和名よりも地方名が優先的に用いられることがある。これは魚類に顕著で沿岸漁業で捕獲される海水魚では、現在でも地方名称が優先して市場でも釣りなどをおとした日常場面でも使われ、標準和名がほとんど知られない場合も存在する。他方、遠洋漁業で捕獲される魚種とくに深海魚では流通名称や商品名称が定着する。これは該当の深海魚と日常場面で接することがなく、水産会社が流通させる商品として一般に認知され、全国的に流通することにより地方名が発達する余地がないことと考えられる。ナガスクジラ属の鯨類の名称もおなじ理由により、捕鯨企業が用いた名称が標準和名として定着したと考える。なお、近世鯨類学において、ナガスクジラ属以外の鯨類では和名の標準化が事実上完成していたことは、鯨類呼称の広がりが書物から得た知識の普及であることを示唆している。

東洋捕鯨が標準化して鯨類名称の普及には、東洋捕鯨が出品した博覧会での骨格標本や鯨体模型、小冊子の発行、そして独自に開催した展示会など役立った可能性がある。1916（大正5）年に東京上野で帝国海事協会と大日本水産会の共催で開催された海事水産博覧会では、ナガスクジラの

全身骨格と捕鯨砲を出品展示している（海事水産博覧会 1916）。4章で紹介した1922年頃の発行とみられる「鯨とは」という小冊子では鯨の種について図を用い標準和名を付して解説している（図5-1）。東京でも鯨肉が本格的に流通し始めた年代に生物学的種概念で鯨を紹介したことになる。1929（昭和4）年に京城で開催された朝鮮総督府主催の朝鮮博覧会でもナガスクジラの全身骨格を出品したほか（図5-2）、鯨体模型7種（長須、白長須、脊美、抹香、座頭、克、鯨）を展示している（無署名 1929）。記録では鯨体写真も7枚展示しているが内容は記されていない。さらに1932年には東京四谷のほてい屋（伊勢丹百貨店の前身）で「鯨に関する展覧会」を開催している。当時ほてい屋には東洋捕鯨の販売会社として機能していた伊佐奈商会で鯨肉販売促進に成功した鴻野支配人がほてい屋に専務に就任しており（中谷 1932）、その関係もあって博覧会の開催が実現したと推測される。出品目録を見ると、後援に東京市教育委員会、国立水産試験場、帝国水産会、大日本水産会など教育と水産の両方の団体が名を連ね、出品者には農林省や水産学者、古書店土佐捕鯨など同業他社、新聞社が出品しており、大掛かりな展覧会であったことがわかる。出品されたものは、近世の鯨図説の原本や写本、ヒゲ板や白長須鯨の下顎骨、胎児、世界の漁場やノルウェーの捕鯨船の写真、事業場で使用された製造機器、ヒゲ板や歯の工芸品、捕鯨の映像など多岐多数であり、同社が鯨や捕鯨の文化面でも普及活動の先導役だったことが伺える。

東洋捕鯨は多くの人にとって新たな食材であった鯨赤肉を西洋風の料理方法とともに普及する努力をしてきた。博覧会での全身骨格標本の展示、自社企画の鯨博覧会、小冊子の出版は自社製品の消費拡大を目的としたものである。牛肉の代用品として鯨肉を普及しようとする努力は、結果として和名の標準化に役立ったと考える。

ミンククジラの呼び名は捕鯨者が伝えてきた

大型鯨類の最小種であるミンククジラは、近世鯨類学の文献には明示的には現れない。1910年に紀伊大島と鮎川で鯨類調査をおこなったアンドリュースは、鮎川の捕鯨従事者はミンククジラについて尋ねているが、捕鯨従事者の回答は知らないというものであった¹⁾。ミンククジラが日本近海に分布することを初めて論文として報告したのは永澤六郎（1915）で、コイワシクジラと和名を与えた。粕谷・山田（1995: 53-55）の記述から、学界では1980年代中頃まではコイワシクジラが主流

でミンクの呼称は別名として扱われていたことがわかる。ところが現在はコイワシクジラの名が用いられることは学界においても、漁業用語としてもほとんど見られず、もっぱらミンククジラの呼称が用いられている。本節では、日本におけるミンククジラの認識とともに、ミンククジラの呼称の定着について考察する。

上述のとおり、東洋捕鯨事業場長必携では捕獲した鯨類を統一様式で記録しており、そこに記載された鯨種は、背美、白長須、長須、座頭、抹香、鰭、克の7種であった。実際には、3章で見たとおり正規外の捕獲を意味する「番外」あるいは「号外」とする注記が見られる場合があった。「番外」や「号外」に記された鯨は、鯨（虎の作りが異なる異体字もあり）、槌、ミンク、マッコウ、ザトウなどである。シャチとツチクジラ、ミンククジラなどである。体長不足の大型種を除くと「番外」あるいは「号外」として扱われた鯨は、近世以来の正規の鯨すなわち六鯨に含まれない小型の種である。「号外」このなかに「ミンク」が現れるのは、早いものでは蔚山と黄海の大青島で1923（大正12）年、鮎川で1924年であり、いずれも大正年間のことである。場長必携の記載は、東洋捕鯨ではミンクの呼称を同種に対して永澤（1915）がコイワシクジラの和名を提唱してからも継続して使用してきたことが示唆される。新聞報道でミンククジラが使用されるのは読売新聞では1954年で1954-1957年に計4回の記事に見られるが、その次は1972年となる。朝日新聞ではさらに遅れて1976年が初出である。いずれもIWCや捕鯨基地の話題であり、捕鯨に伴ってミンククジラの名前が現れていた。大村ら（1942: 64）は「捕鯨業者間ではもっぱらミンクと言われている」と記しているが、場長必携の記述から少なくとも1920年代に遡ることが明らかとなった。

ミンクの呼称が東洋捕鯨で使用されたのは、ノルウェー人砲手から伝わったと想像されるが、いまのところこの呼称が取り入れられた過程を伝える資料は見つかっていない。アンドリュースは1910（明治43）年に、鮎川でミンククジラの捕獲や観察の有無をノルウェー人砲手や従業員に聞いているほか、ノルウェー人砲手との手紙には互いにミンククジラの呼称を用いており、ノルウェー人砲手にはミンクの名称は既知だったことがわかる。東洋捕鯨の事業場関係者はノルウェー人砲手からミンククジラの名称を認識したことが示唆される。結局、学界で提唱されたコイワシクジラの呼称は一時期用いられたものの現在では消滅している。読売新聞は1956年の記事で「ミンク（コイ

ワシクジラ)」と副次的に用いた例があるが(1956.12.22夕刊)、商用データベースの検索ではコイワシクジラ(コイワシ鯨、小鰭鯨)を用いた記事は抽出されない。新聞では一貫して捕鯨者が使うミンククジラを主に用いてきたことがわかる。そして捕鯨由来のミンククジラが和名として定着したのである。

*1 ANDREWS, ROY CHAPMAN; FOLDER III-1, Expedition, 1908-'15; Andrews to Nagasawa, 12 Nov. 1915

アイヌはミンククジラの呼称を持っていた

日本では近代捕鯨の開始以前にミンククジラが認識されていなかったというのは、正確には本州以南に居住する大和民族の認識である。北海道のアイヌはミンククジラの独自呼称としてノコルフンペ(現在の表記ではノコルフンペ)を持っていることが1930年代の聞き取り調査で明らかにされている(名取 1940)。名取(1940)は、噴火湾に居住するアイヌの鯨類呼称はミンククジラのほかにイワシクジラやナガスクジラ、コククジラとマッコウクジラが存在するとしたが、このうちイワシクジラやナガスクジラに比定された呼称は、アイヌが述べた鯨体の特徴、現在知られる回遊や座標漂着個体の情報から誤りで、いずれもミンククジラの特徴ある外部形態を備えた個体に用いた呼称であった。アイヌの鯨類に対する民族呼称も外部形態を元に生物学的種とは独立に名付けられていたのである。

3節 アンドリュースの鯨類調査の再評価

本節では先に触れたR. C. アンドリュースが、1910年に日本で、1912年に朝鮮の東洋捕鯨の事業場で実施した鯨類調査について整理する。日本での調査の成果はリクゼンイルカの記載論文

(Andrews 1911a) やイワシクジラのモノグラフ(Andrews 1916a)、朝鮮での調査はコククジラのモノグラフ(Andrews 1914)として出版され、また東洋捕鯨の協力を得て収集した骨格標本から日本沿岸でのツチクジラの分布の短報が出された(Andrews 1912a)。また1900年代初頭に日本と北米でおこなった鯨類調査や関連するできごとをまとめ、一般向けの読み物をナショナルジオグラフィック誌に発表し(Andrews 1911b)、これを元に主著『Whale Hunting with Gun and

Camera [砲とカメラで鯨を追う]』を出版した (Andrews 1916b)。アンドリュースが勤務したアメリカ自然史博物館のデータベースには、アンドリュースが収集した鯨類標本が数十あり、その多くは標本化はされたものの学術論文は作成されないままにある。また、資料の一部には収集場所に疑問がある。これらの鯨類標本は、日本や朝鮮の沿岸で収集された鯨類標本としてはもっとも古い資料群のひとつであり、収集情報を含め日本の近代鯨類学を語るうえで不可欠のものである。そこで本節では、アンドリュースが日本と朝鮮で収集した鯨類標本について、現在の所在情報、収集情報、同定の正確さなどを検討し、全体を整理した。そこからアンドリュースの鯨類調査を日本の近代鯨類学の歩みに位置付ける。記述は調査地ごとに整理している。

本節で用いた資料は、アメリカ自然史博物館 (AMNH) 哺乳類研究部アーカイブ所蔵の手紙、同研究図書館所蔵のアンドリュース撮影の写真と調査日誌 (Andrews Journals) 3巻日本編および4巻朝鮮編、同哺乳類資料データベースなどである。なお調査日誌4巻に北朝鮮探検の記述は見られない。

1) 紀伊大島

調査日誌や写真の日付で紀伊大島に関連したものは3月末から4月中旬であった。調査日誌に記された最初の個体は、4月4日付の妊娠したシロナガスクジラで、最後の個体は4月15日のシロナガスクジラだった (表5-2)。日付の意味は調査日誌には記されていないが、鯨の観察日のようである。多くは捕獲個体の陸揚げ日と同一と思われるが、陸揚げが深夜の場合や翌日になることがあったかも知れない。紀伊大島での調査個体の全容は、12日間に2科2属2種8個体で、具体的にはシロナガスクジラ3 (♂2・♀1)、ナガスクジラ1 (♂)、イワシクジラ3 (♂1・♀2)、そして串本にあった紀伊水産の事業場で収集したシャチ1 (♀) であった。調査日誌の記載内容は、北西太平洋最初の鯨類調査という意気込みからか、大量の鯨体を処理した鮎川に比べて記述は詳細である。紀伊大島の捕獲個体8頭に37ページを使用、個体番号1のシロナガスと2のイワシクジラに対してはそれぞれ5ページにわたる記述があり、3のシャチは8ページを費やし、色彩や吻部の毛の有無、胃から見つかったイルカの背びれなどを詳述しスケッチを残している。

収集した骨格標本は、シロナガスクジラ、イワシクジラ、シャチの3点である。紀伊水産が捕獲し

たシャチについては、同社の事業場で名古屋から来たという2人組と競り合いになり、62 [円] 約10ドルで購入したものであり、[ニューヨークでは] 400-500ドル以下では買えないので62ドルでも安いこと、名古屋の2人組は骨格を得て展示するつもりだったこと、東洋捕鯨はすでに蔚山でアンドリュースのためにシャチの骨格を保管していることを記している^{*1}。また、アメリカ自然史博物館の収蔵庫には、無番号の複数種からなるヒゲ板が保管されている。同館で鯨類標本を積極的に収集したのはアンドリュースに限られるため、このヒゲ板もアンドリュースの収集の可能性が高い。肉眼での観察からヒゲ板の種類はシロナガスクジラ、ナガスクジラ、イワシクジラと判別した。調査日記によれば、紀伊大島では捕獲された鯨が事業場に来るのは夜のことが多いとしており、解剖の写真が見られない原因になったと思われる。シャチは昼間の陸揚げで詳細な写真が残されているが、前述のとおり別会社の捕獲個体である。骨格標本はスクーターで下関に送り、そこから Hamburg-American liner の Aragonia という船でニューヨークに送られた (Andrews 1911d)。

紀伊大島での調査は実質2週間に満たないものだったが、博物館に送られた骨格標本の数、帰国後のスライド講演会に使用される写真の撮影など、成果は十分に大きいものであった。

*1 Mar. 9, 1910 Ōshima, FOLDER II-2, 1909-'20 Allen, J. A. Corres.

2) 鮎川

鮎川での調査は、1910年5-8月に行なわれた。この年の日本滞在中で最も長く過ごした場所である。紀伊大島からの移動経路や日付は不明だが、塩釜ホテルの写真の注記では、鮎川へは塩釜から船で到着したとしている。調査日記によると、最初に調べたクジラは5月20日の観察、5月20-29日の10日間にシロナガスクジラ2頭（胎児1頭を含む）とナガスクジラ8頭、計10頭を調べている。6月になると調査の主体はイワシクジラとなり、アメリカに持ち帰りはしなかったがザトウクジラの骨格標本を作製して観察したほか、カマイルカやセミイルカ、リクゼンイルカを調べている。この3種のイルカは太平洋にのみ分布するため、ヨーロッパや合衆国東部が科学の中心地であった当時としては知見が少ない仲間だった。6月29日には、コビレゴンドウを詳しく観察し、スカモンがカリフォルニアの個体で報告した全身が黒色の図 (Scammon 1874: 85) とは異なり、腹部が灰色である

ことに注目している。世界の海に分布するコビレゴンドウは、いくつかの個体群に分かれており、アンドリュースは北西太平洋個体群の外部形態の特徴について初めて報告したことになる。7月になるとマッコウクジラが捕獲されるようになったが、雌が多く、雄でも小形の個体ばかりであった。6月初めにすでにマッコウクジラの骨格を持ち帰ることを考えており²、博物館に良い標本が得られる7月下旬までの滞在期間の延長と調査資金の送金を頼んでいる。待ち望んでいた大型のマッコウクジラを得たのは7月22日頃で、手紙によると豊漁のため解剖夫の処理が追いつかず、骨格にするのに10日以上待たねばならず、横浜か神戸で船積みするのには2週間以上かかると見積もっている³。このマッコウクジラを捕獲したのは、レックス丸の Fred Olsen オルセン砲手だった (Andrews 1911: 21-24 AMJ1911)。骨格は日本郵船の定期船で横浜に送られ、そこから蒸気船 Welsh Prince でニューヨークに直送された (Andrews 1911d)。

まとめると、鮎川で調査日誌に記された動物は9-75番と別に番号を与えた胎児2個体が加わり69個体、また49番は魚類のカジキであるのでこれを引くと合計68個体分となる。しかし番号以外の記述がある鯨は、4科7属9種55個体で、シロナガスクジラ3 (♀2、胎児 fetus ♀1)、ナガスクジラ14 (♂7・♀7)、イワシクジラ16 (♂9・♀7)、ザトウクジラ2 (♂2)、マッコウクジラ11 (♂5・♀5、胎児♂1)、コビレゴンドウ1 (♂)、カマイルカ4 (♂2・♀2)、セミイルカ3 (♂2・♀1)、リクゼンイルカ1 (♂) であった。季節で見ると、6月上旬まではシロナガスクジラやナガスクジラが主で、6月中旬にイワシクジラが始まり、下旬はイルカが主体となり、7月後半はマッコウクジラが大半で、8月のほとんどはイワシクジラということになる。

以上、調査日誌に記録された鯨類は鮎川55頭と紀伊大島8頭の計4科7属10種63頭であった。鮎川で調査した鯨のうち記載を欠く個体のうち、7個体はモノグラフ (Andrews 1916a) から種 (イワシクジラ) と性、および全長を補充することができたので、鮎川の調査個体の記述は62個体分存在する。調査日誌とイワシクジラのモノグラフを合わせると、アンドリュースが日本で調査記録を残した鯨類は紀伊大島8個体、鮎川62個体、合計4科7属10種70頭ということになる (表5-2)。

鮎川の調査で論文として発表されたのは、イワシクジラのモノグラフとリクゼンイルカの論文の計2本である。イワシクジラの論文は、図版を含め約160ページ、B4判相当の大型論文として出版

され、現在もアンドリュースの主要論文と見なされている (Andrews 1916a)。調査内容のほとんどは鮎川のものだが、骨格だけは紀伊大島の個体のものが用いられた。リクゼンイルカは、新種として報告した記載論文である (Andrews 1912)。現在、リクゼンイルカはイシイルカの色彩変異で、別種としては扱われていない。そのため、アンドリュースが与えた学名は無効となっているが、天野 (2008) によるとリクゼンイルカは独立した個体群で亜種として分けるのが適切という論文が発表されている (Hayano et al. 2003, Amano and Hayano 2007)。これが受け入れられれば、アンドリュースが与えた学名は少なくとも亜種レベルで通用するようになる。現在もアメリカ自然史博物館でリクゼンイルカの標本は、一般の標本とは区別され、タイプ標本室で大切に保管されている。標本の状態も良好である (図5-2)。アンドリュースにとって鮎川での調査は、展示用の骨格標本を得たマッコウクジラ、論文で報告したイワシクジラとリクゼンイルカはもちろん、標本が収蔵資料となったカマイルカやセミイルカ、コビレゴンドウなど小形歯鯨についても観察に基づき学名が比定されており、標本も保存されている。論文にはならなかったものの、近代生物学に則った科学的な成果であった。

結局、アンドリュースの鮎川滞在は操業が終了した8月下旬に及んだ。手紙によれば、台風がいくつも来襲して横浜との鉄道が寸断されたこと、輸送用の木箱の製作に時間を要したことなどにより、滞在期間を延ばしたとしている^{*4}。

*2 From Andrews to Allen, Jun. 5, 1910 Aikawa, FOLDER II-2, 1909-'20 Allen, J. A. Corres.

*3 From Andrews to Allen, Jul. 25, 1910 Aiukawa, FOLDER II-2, 1909-'20 Allen, J. A. Corres.

*4 From Andrews to Allen, Aug. 19, 1910 Aiukawa, FOLDER II-2, 1909-'20 Allen, J. A. Corres.

3) 蔚山

蔚山でのコククジラ調査は、アンドリュースにとって最後の体系だった鯨類調査となった。コククジラは体長13-15メートルほどの中型のヒゲ鯨で、北太平洋のアジア大陸沿岸とアメリカ大陸沿岸に分布する。アンドリュースによれば、19世紀末にはアメリカのナチュラルリストたちは大陸沿岸

の個体群は絶滅したと信じるようになっていたという (Andrews 1914: 232)。このアンドリュースの説には典拠がなく、自身の朝鮮でのコククジラ調査に意味を持たせる発言だったのかも知れない。1910年に日本の沿岸捕鯨基地で鯨類調査を行ったアンドリュースは、この「絶滅種」が朝鮮半島では捕鯨対象種であることを知り、ぜひとも自らの手で調査をしたいと考えるようになった。実現すれば世界初の科学調査となるからである。彼が目指したのが、秋にナガスクジラ、そして冬にはコククジラを捕獲していた東洋捕鯨蔚山事業場だった。

アンドリュースの調査日誌によると、蔚山事業場で調査した鯨は、1912年1月8日のコククジラに始まり2月24日のナガスクジラまでであった。この間に調査した鯨は胎児2頭を含め32頭で、内訳はコククジラ23頭 (♂20・♀3)、シャチ2頭 (♂1・♀1)、シロナガスクジラ1 (♂)、ナガスクジラ1 (♂)、ザトウクジラ3頭 (♂1・♀2) の計30頭で大半がコククジラだった (表5-3)。標本採取の記載は、骨格の採取が1月12日と19日のコククジラ (♂)、2月1日のシャチ (♂)、2月13日のザトウクジラ (♂) で記録されていた。

アンドリュースが書いたコククジラの調査報告書『The California Gray Whale (*Rhachianectes glaucus* Cope)』 (Andrews 1914) は、写真が多数収録されたB4版に近い大判で約100ページの大作であり、コククジラ西部個体群に関する唯一のまとまった論文として現在に至るまで引用が続いている (Omura 1984、Jones 2009など)。

4) 標本

アメリカ自然史博物館の標本データベース「Mammalogy Query Page」を収集者：アンドリュース、収集地：日本、鯨目で検索すると27点が得られ、同様に収集地：朝鮮で2点が得られた (2019.10.7 <http://sci-web-001.amnh.org/db/emuwebamnh/Query.php?dept=Mammalogy> 検索)。これら以外に日本で1910-1912年に収集された鯨類標本4点がデータベースで確認され、内訳はセミイルカ1点とスナメリ3点 (うち1点は皮) で、これらも収集年からアンドリュースの収集と判断した。同様に、朝鮮産では1910年8月1日収集の性別不明のシャチ頭骨1点が得られ、収集者「T. Hagai Kaisha」は東洋捕鯨と推定され、これもアンドリュースの依頼による標本と判断した。これらを合わせると、アメリカ自然史博物館のデータベースに登録されたアンドリュース収集標本は日

本産31点、朝鮮産3点、両者計34点であった。このうち収蔵庫を実見した所蔵調査で確認できたのは日本産が骨格標本17点、液浸標本1点の計18点5科10属12種、朝鮮産は骨格標本3点2科2属2種すべてが確認された。日本産と朝鮮産の標本を合わせると、全身骨格はシロナガスクジラ1、ナガスクジラ1、イワシクジラ1、コククジラ1（朝鮮産）、マッコウクジラ1、ツチクジラ1、シャチ3（うち1点朝鮮産）、コビレゴンドウ1、カマイルカ3、セミイルカ2、リクゼンイルカ1、スナメリ1の17個体分、頭骨標本はシャチ（朝鮮産）、オキゴンドウ、スナメリの各1点の計3点、6科11属13種20点の確認された（表5-4）。骨格標本以外で所在が確認できたのはシャチの眼球の液浸標本1展である。データベースに登載されているが所蔵調査で見つからなかった標本は、カマイルカとセミイルカの全身骨格が各1個体の計2点、液浸標本8点、皮1点、その他2点の13点であった。ここに挙げた種名はアメリカ自然史博物館のデータベース記載のものと同一であるが、骨格標本は肉眼観察では同定ミスの標本は見つけれず、リクゼンイルカのタイプ標本はすくなくともイシイルカ属 *Phocoenoides* であることには間違いない。アンドリュースが蔚山で収集した標本にザトウクジラ全身骨格標本があったが、ニューヨーク到着後に焼失している（Andrews 1914: 292-293）。

所蔵調査で確認された標本のなかで特筆すべきものにShimosa（下総）で収集された全身骨格とSagami（相模）の頭骨がある。これらが実際の個体の採集場所とすれば前者は東京湾北西部、後者は東京湾西部または相模湾で、現在では生息数の少ない海域であり貴重な標本である。が鮎川収集標本として記載されているが、2013年の調査では確認できなかった。また、紀伊大島で収集されたイワシクジラ全身骨格標本 M-34871 は宇仁ら（2014）は「ニタリクジラ」としたが、これは別の標本の識別結果を間違えて利用したため、後に頭骨の特徴からイワシクジラと訂正されている（宇仁 2016）。これは大石雅之博士（元岩手県立博物館）のご教授によるが、より正確な判別には頭骨のより詳細な観察（大石 2018）またはDNA分析を必要とする。

アンドリュースが日本と朝鮮で得た標本の一部はアメリカの博物館の現在展示中またはかつて常設展示に用いられていたこともわかった。スミソニアン機構国立自然史博物館コククジラの全身骨格標本（USNM 199527）は現在も常設展示されている（図5-3）。現在のような形で設営されたのは1961-1962年で展示室の一般公開は1965年という（Yochelson 1985: 90-91）。現在の国立自然

史博物館のデータベース (Search NMNH Collections) によるこの標本の採集年月日は1912年1月、全長1200cmと記載されているが、調査日誌の記載では1912年1月12日に調査した体長1250cmの鯨である。論文での日付は1912年1月13日と1日違いで記載している (Andrews 1914: Table IV)。他方、アンドリュースが勤めるアメリカ自然史博物館では、鮎川で得た巨大な雄のマッコウクジラや館山の捕鯨会社が捕獲したツチクジラ、串本で買い求めたシャチなどが1930-1960年代に常設展示されていた (図5-4)。この期間、アメリカ自然史博物館でニューヨーク市民などが目にした鯨類骨格標本は東洋捕鯨など日本の捕鯨会社が捕獲し、研究や教育目的に提供したものだ。しかし、19世紀的な海洋資源の実物展示というコンセプトは生物展示に相応しくないとされ、1970年代に現在のような捕鯨との関わりを見せない展示に更新された (アメリカ自然史博物館ウェブページ「MILSTEIN HALL OF OCEAN LIFE」2013.5.22閲覧。現在は削除されている)。なお、収蔵庫には展示されていた骨格標本とともに、展示室で用いられたと思われるツチクジラとマッコウクジラの解説板も保存されている。

このようにアンドリュースの鯨類調査はヒゲ鯨だけでなくゴンドウクジラ類やイルカ類の小型鯨類、つまり歯鯨にまで及んでいた。歯鯨で論文として発表されたのはリクゼンイルカの記載論文とツチクジラの短報の2編に限られるが、他の歯鯨も正しく同定し博物館の標本として収蔵されている。大村の近代鯨類学の定義、すなわち個体や標本の観察に基づく種の同定とすれば、歯鯨の近代鯨類学の日本における始祖は小川鼎三に始まるという大村の評価 (大村 1981) とは異なり、日本産の歯鯨についても標本に基づく同定と学名の比定を行なったのはアンドリュースが始祖であったことが明らかである。

4 節 日本における近代鯨類学の形成とアンドリュース

本節では、日本における近代鯨類学の形成について、捕鯨会社やアンドリュースと国内研究者との関係に注意しながら述べる。アンドリュースと日本の科学者との接点は、日本近海産鯨類の学名を早くに整理した永澤六郎との関係を中心に考察する。永澤六郎は1910-20年代には動物学雑誌に多数の論文を発表した動物学者である。当時の学者にはよく見られるとおり、論文の題材とした分

類群は広範囲にわたった。東京帝国大学に在籍していたが、職名など詳しいことはわからない。

用いた資料は、「動物学雑誌」に掲載された鯨類関係論文、アメリカ自然史博物館哺乳類研究部図書文書室（哺乳類アーカイブ）に保存されている、アンドリュースと永澤六郎との手紙 ANDREWS, ROY CHAPMAN; FOLDER III-1, Expedition, 1908-'15; Nagasawa to Andrews, 23 June 1915 および Andrews to Nagasawa, 12 Nov. 1915 そしてアンドリュースが上司のアレン学芸員に宛てた手紙 ANDREWS, ROY CHAPMAN; FOLDER II-2, Allen, J. A. Corres. 1909-'20; RCA to Allen from Oshima, 9 Mar. 1910 などである。

アンドリュースの報告に触発された論文

国内の研究者が標本を元に鯨類の学名を正しく比定したことが明らかな論文は「日本産槌鯨類二種附赤坊鯨」（永澤 1913a）が最初である。永澤の論文には、永澤がアンドリュースの報告（Andrews 1912）によって帝室博物館に展示されているツチクジラ骨格標本を知ったこと、博物館に出掛け自ら標本の観察を行い、帝室博物館の槌鯨には房州勝浦産の *Berardius bairdii* と横須賀産の *Ziphius cavirostris* [アカボウクジラ] の2つが混在していることを見出したと報告している。帝室博物館は現在の東京国立博物館にあたる。当時所蔵していた自然史資料は、関東大震災の後に被災が大きかった東京教育博物館から改称した東京博物館に移管され、それが今日の国立科学博物館に引き継がれている（国立科学博物館編 1998）。永澤がアンドリュースに言及した論文はこれが最初である。

続いて永澤（1915）は「日本近海産鯨類十四種の學名」を発表する。この論文は日本の学界において鯨類の学名に関する初のまとまった論考であるが、実際に観察された標本は帝室博物館の4組の骨格と東京理科大学所蔵の頭骨1個のみと明記されている。つまり、ほとんどが文献の検討による記述である。ヒゲクジラの参考文献として東洋捕鯨（1910）『鯨』、つまり『本邦の諾威式捕鯨誌』が盛んに引用されている。いわば捕鯨会社の報告を職業研究者が再検討して作成した報告である。論文で言及された種は、槌鯨 *Berardius bairdii*、槌鯨（赤坊鯨）*Ziphius cavirostris*、抹香鯨（眞甲鯨）*Physeter macrocephalus*、兒鯨（小鯨）*Rhachianectes glaucus*、座頭鯨 *Megaptera nodosa*、鰭鯨 *Balaenoptera borealis*、小鰭鯨（鯨鯨？）*B. acuto-rostrata*、白長簣鯨 *B.*

musculus、長髯鯨 *B. physalus*、矮鯨 チヤボクヅラ *Neobalaena marginata* [コセミクジラ]、脊美鯨（世美鯨） *Balaena glacialis*、北極鯨 *B. mysticetus* の12種を既知とし、*Mesoplodon stejnegeri* [オウギハクジラ] と *Kogia breviceps* [コマッコウ] の2種をいずれ発見されるだろうと予言した。注目すべきは、ナガスクジラ属の和名の整理で、コイワシクジラの名称を提唱したこと、シロナガスクジラ、ナガスクジラ、イワシクジラの学名を正しく比定したことである。コセミクジラはアンドリュースが蔚山で入手したとする誤った情報に基づいて記述したもので、ノソクジラはザトウクジラに比定しているが、これは粕谷・山田（1985）が指摘したとおり誤りであった。また、*Ziphius cavirostris* は「ツチクヅラ（アカボウクヅラ?）」として2種の存在を保留しており、永澤（1913b）で2属2種と正しく判定したのに、なおツチクジラの種内変異を捨てきれていない。あるいは別種の動物におなじ呼称を用いることに迷いが無い。コククジラの別名であるシロサギやシヤレについては判断を保留しており、上述した服部（1887-1888）より退行したような記述も見られた。

永澤六郎とアンドリュースの往復書簡

永澤は1915年にアンドリュースと手紙で日本近海の鯨類について議論している。永澤からアンドリュースに向けた1915年6月23日付けの手紙では、アンドリュースに対し日本近海の鯨類と学名に関して意見を求めている。原文は手書きの英語で、学名はアンダーラインを付して示している。やや判読が困難な箇所もあるので引用するにあたり抄訳とし、学名は正しいものを記し、和名はローマ字からひらがなに置き換えた。内容は次ぎのとおりである。1) 日本の鯨類学は現在貧弱な状態であり、原因は主として文献が不足していることによる、2) Andrews (1912) まで *Berardius* [ツチクジラ属] を記録した動物学者はいなかった、3) アンドリュースは別のツチクジラとイワシクジラを報告しているが、それは *Ziphius cavirostris* [アカボウクジラ] と *Balaenoptera acutorostrata* [ミンククジラ] と考える、4) 理由は帝室博物館の骨格で横須賀産も陸前産も *Ziphius* [アカボウクジラ属] と記されていること、「イワシクジラ」として記録されたクジラが黄白色のひげ板と全長6-9mと記載されていることによる、5) よって日本で「ツチクジラ」や「イワシクジラ」と呼ばれてきたクジラにはそれぞれ2型が存在すると考える、6) *Balaenoptera*

musculus [シロナガスクジラ] と *B. physalus* [ナガスクジラ] はともに「ながすくじら」と同じ名前と呼ばれており、前者は後者の色彩変異と考えると「しろながす」と呼ぶ、7) しかしながら数種を除いて標本を調査したことがないのは残念である、8) 日本語文献から考え得る日本近海の鯨類は次のとおりである。 *Berardius bairdii* 「つちくじら」、 *Ziphius cavirostris* 「つちくじら」 [アカボウクジラ]、 *Physeter macrocephalus* 「まっこうくじら」、 *Rhachianectes glaucus* 「こくじら」「あおさぎ、あかさぎ、しろさぎ、しゃれ」はアンドリュースの論文を読んで年齢による色彩変異と考えるようになった、 *Megaptera nodosa* 「ざとうくじら」、 *Balaenoptera acuto-rostrata* 「いわしくじら」、 *B. borealis* 「上 [いわしくじら] に同じ」、 *B. physalus* 「ながすくじら」、 *Balaenoptera musculus* 「しろながすくじら」、 *Neobalaena marginata* 「日本語名称不明」 [コセミクジラ] はアンドリュースの文献で知った、 *Balaena glacialis* 「ほっきょくくじら」は、しかし日本で獲られたことはない。以上の種名についてアンドリュースの意見を知らせて欲しい。

永澤はこの手紙の冒頭で、アンドリュースからの返信と同封されていた論文に対して礼を述べているので、先にアンドリュースからの手紙があったことがわかるが、この手紙は見つかっていない。その前に永澤がアンドリュースに直接会ったのか、それとも手紙を書いたのかは、いまのところ不明である。

アンドリュースからの返信は、1915年11月12日付けで書かれている。学名は表記のとおりとしたが、属名については適宜省略形を用いた。ひらがなの和名は永澤の手紙に現れたものであり、アンドリュースは用いていない。内容は、1) *Tsuchi-kijura* (*Ziphius cavirostris*) [この手紙中でアンドリュースは *kijura* という表記を使い続けている。アカボウクジラ] と *Balaenoptera acuto-rostrata* [aeは合字、ミンククジラ] に興味を持った、2) アカボウクジラとミンククジラを日本で最初に記録したのは自分が知る限り永澤氏だ、2) 日本では捕鯨者に胸びれに白帯のある小さい鯨について聞いたが知る者は誰もいなかった、3) 大西洋の *B. acuto-rostrata* とスカモンがアラスカから記載した *B. davidsoni* には違いがない、4) 中国での探検の往路の1916年3月最終週に日本に着く予定だが、帝室博物館の骨格の調査、そして日本の鯨類学について話すのは可能か、5)

鮎川で沢山獲れたのはイワシクジラであると確認した、この鯨のひげ板は黄白色ではなく暗灰色だ、6) 「ながすくじら」は *B. physalus* [ナガスクジラ]、「しろながすくじら」は *B. musculus* [シロナガスクジラ] と同定した、7) 「ざとうくじら」は *Megaptera nodosa* [ザトウクジラ] である、7) *Neobalæna marginata* [aeは合字、コセミクジラ] が日本近海にいるとは考えない、8) 日本では他に *Tursio borealis* [セミイルカ]、*Globicephalus scammoni* [コビレゴンドウの地方型タツパナガ]、*Lagenorhynchus obliquidens* [カマイルカ]、そして新属を与えた *Phocænoides truei* [ae は合字、リクゼンイルカ] の標本を確保した、9) 関心あるだろう写真を別送する、となっている。

永澤は論文を出版する前にアンドリュースからの返事が欲しかったはずで、11月の返信では存在が否定されているコセミクジラを含めた「日本近海産鯨類十四種の学名」(永澤 1915) が先に出版されてしまった。

アンドリュースの助言を取り入れた訂正論文

「日本近海産鯨類の学名(再び)」(永澤 1916b) は上述の永澤(1915) にアンドリュースの見解を取り入れた訂正論文である。本文にはアンドリュース発1915年11月12日付け返信の内容を引用した部分が目立つ。そして、ここで日本近海産鯨類として、コセミクジラを取り下げ、コイワシクジラとセミクジラを「骨格の精査をなせる上確定すべき学名」と標本から種を特定したことを宣言し、ホッキョククジラは「日本近海に産すと記されあるもの」と保留した表現に変更している。

つまり、日本近海産の鯨類に対し、はじめて正しく学名を比定した日本人による科学論文はアンドリュースの手助けによって成立したのである。

永澤は動物学雑誌の同じ28(327)号で「日本産海豚類十一種の学名」(永澤 1916a) を発表している。この論文でも「種名の同定も、Andrews のものを借用せしもの大部分を含む(中略)吾等卓上議論家の、現に東京に在りて検査し得る標本としては、下に掲ぐる唯一種あるのみなり」とアンドリュースの教唆を大きく受けたこと、標本が不足しているためやむなく文献研究の報告であることと明記している。論文で言及した学名と和名は次のとおりである。*Delphinus longirostris* 「マイルカ」、*Prodelphinus longirostris* 「マダライルカ(斑海豚)もしくはハシナガイルカ(長吻海

豚)」、*Delphinus delphis* [ま] 「スヂイルカ (筋海豚)」、*Tursio borealis* 「セミイルカ (脊美海豚)」、*Lagenorhynchus obliquidens* 「カマイルカ (鎌海豚)」、*Neophocaena phocaenoides* [aeは合字] 「スナメリクヂラ、ナメノウヲ」、*Phocaena phocaena* [oeは合字] 「ネズミイルカ (鼠海豚)」、*Phocaenoides tru[e]ji* 「トルーイルカ」 [イシイルカ (リクゼンイルカ型)]、*Grampus griseus* 「和名なし」 [ハナゴンドウ]、*Globicephalus scammoni* 「ゴンドウクジラ (或いはゴトウクヂラ、又ゴトクヂラ。巨頭鯨、五嶋鯨)」、*Orcinus orca* 「サカマタ」。以上の和名の多くは近世鯨類学の和書からそれと判断された名称を流用したものだが、セミイルカ、そして現在は用いられないトルーイルカは永澤がここで提唱した新名称である。ハナゴンドウは永澤 (1913b) のとおりシャチとの混同に注意せよとし、ゴンドウクジラの名称内部の分類には踏み込んでいない。この論文での学名と和名の対象は保留事項が多くあり、正しい同定については1930年代の小川鼎三の研究 (小川 1950) を待つことになる。

日本近海産のイルカの学名についてもアンドリュースの助言が大きく採用されており、とりわけ鮎川で得た標本による知見が論文作成の証拠となっていた。

アンドリュースと谷津直秀

永澤の他に日本の生物学研究者で接触の可能性があるのは谷津直秀である。アンドリュースが紀伊大島に到着して間もない頃、1910年3月9日付けのアンドリュースが紀伊大島からアレン学芸員に宛ての手紙 ANDREWS, ROY CHAPMAN; FOLDER II-2, Allen, J. A. Corres. 1909-'20; RCA to Allen from Oshima, 9 Mar. 1910 では、GotoとYatsuの両博士から東京の Government Bureau of Science への招待状を受け取り、参加の意思を記している。会合の目的は、Goto と Yatsu からクジラの統計と経済的な話についてアンドリュースにも一緒に考えて欲しいというものである。Goto と Yatsu に関しては、他の情報がないので人物の特定は困難だが、Yatsuという名字はめずらしいので、谷津直秀ではないかと想像する。谷津 (1911) は、わずか4行の短報であるがアンドリュースについて記している。全文を引用すると「Roy C. Andrews は紐育 [ニューヨーク] 博物学会の四月の例会にて陸前にて捕れたるイルカの新種を紹介したり *Phocoena dalli* True に近似のものなる由詳細は論文出版の上記載すべし」であり、アンドリュースからの伝聞形で記されてい

る。谷津とアンドリュースの間で学術的な交流があったことを伺わせる内容である。

まとめ

鯨類学の近代化を、近世鯨類学からヨーロッパで始まった近代生物学の知識への変化の過程と見るならば、その具体的な営みは標本の観察に基づく記述、そして鯨類の呼称を地域名称から生物学的種を表す全国的な統一名称に転換すること、このふたつが重要であった。地域名称が混乱していたのは、具体的にはナガスクジラ属の鯨類で、とりわけナガスクジラとシロナガスクジラの識別にあった。ナガスクジラとシロナガスクジラについて生物学的種による全国的な統一名称を導入したのは、科学界ではなく営利企業である東洋漁業であった。同社が日本海と太平洋の両方に事業展開したこと、全国で使用可能な識別名称が必要であったこと、そして株主総会資料という公開資料で事業成績を公表する必要があったこと、これらの要因によって科学界では進まなかった統一和名を実現させたと考える。それが一般に普及するには東洋捕鯨がおこなった博覧会での骨格標本の展示や料理法を記した小冊子の発行が一定程度の役割を果たした。

イルカ類について、近世鯨類学では特定の呼称が与えられた種は見当たらず、イルカは総称あるいは産物名として用いられていたが、アンドリュースが複数種について標本を得て学名を比定した。これらの標本はリクゼンイルカの記載論文は報告されず、一般向けの単行本で記されるのみ（Andrews 1916b）だったのは科学的な営みとはいえないのかも知れない。しかし、単行本では標本となった個体は死後間もない新鮮な状態の写真が掲載され、また標本は正しく同定されていた。また、鯨類学に関して、当時の日本では他の学問分野のような指導者となるべき外国人が居なかった。その役割を不完全ながらアンドリュースが果たしたといえる。アンドリュースは日本におけるヒゲ鯨と歯鯨の両分類群で近代鯨類学の開祖であり、日本人研究者による日本の近代鯨類学の出発を促したと評価できる。

5章 沿岸捕鯨が近代鯨類学を導いた

表5-1 東洋捕鯨および前身会社が営業報告で用いた鯨類呼称

資料名 (略称)	期間	鯨類呼称 (鯨は略)
日本遠洋漁業第1回報告書	1899.7-1900.5	長曾、座頭
日本遠洋漁業第2回報告書	1900.6-1901.5	長曾、座頭、赤鷲、抹香
日本遠洋漁業第3回報告書	1901.6-1902.5	長須、座頭、野曾、青鷲
日本遠洋漁業第5回報告書	1903.6-1904.5	長須、座頭、白長曾
日本遠洋漁業第6回報告書	1904.6-1905.5	長須
東洋漁業株式会社東京出張所第1期報告書	1906.4-7	長曾、長須、抹香
東洋漁業株式会社東京支店第2期事業報告	1906.8-1907.7	長曾、長須、白長曾、坐頭、鯧、脊美、抹香、眞甲
東洋漁業報告書第2期	1905.8-1906.7	捕獲記録なし。明石編 (1910: 241) では292頭捕獲
東洋漁業報告書第2期 [ママ]	1907.8-1908.7	長須、座頭、白長須、克、鰯、背美、抹香
東洋捕鯨報告第1期	1909.191	眞長須、座頭、白長須、克、鯧、抹香

資料はいずれも山口県文書館蔵。宇仁 (2016b) を改訂

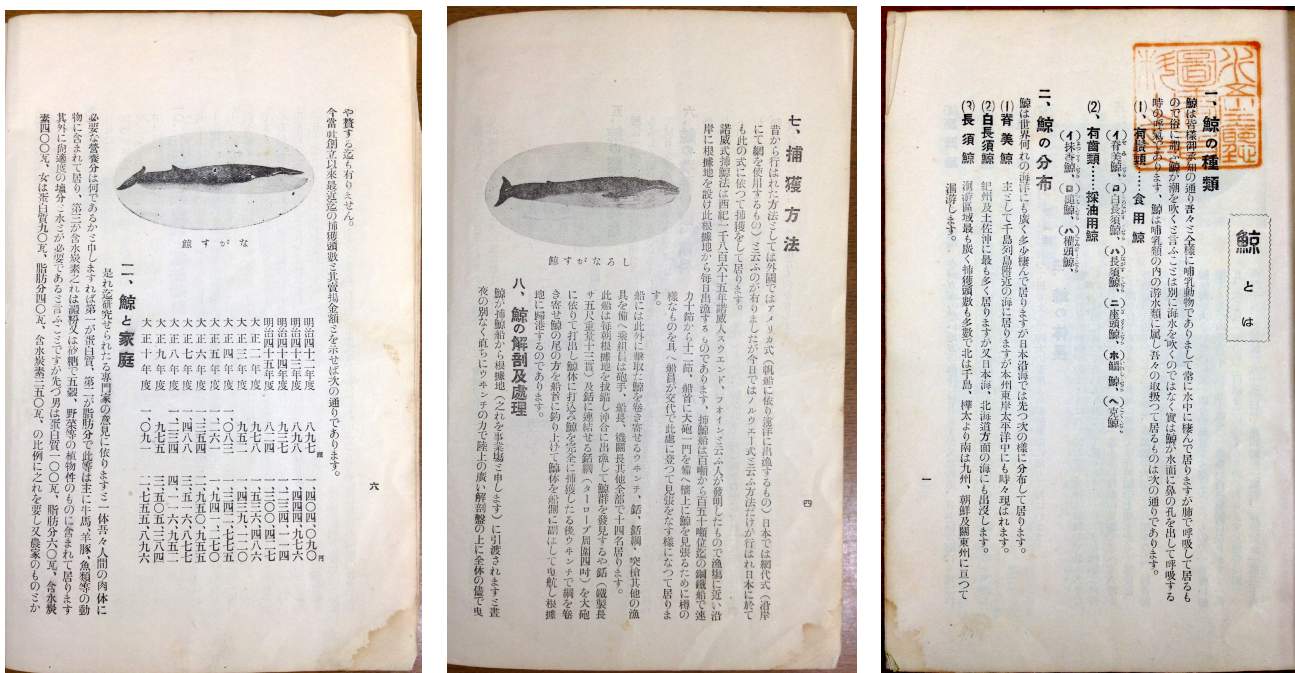


図5-1 東洋捕鯨が発行した小冊子「鯨とは」。白長須鯨と長須鯨の分布を述べ(右)、シロナガスクジラ(中)とナガスクジラの図を掲載している。実際の形態とは異なるもののシロナガスクジラの小さく寝た背びれの形状やナガスクジラの右下顎が白色であることなどの特徴は表現されている。表紙は図4参照。国立研究開発法人水産研究・教育機構中央水産研究所蔵

表5-2 アンドリュースが紀伊大島と鮎川で調査した鯨類の個体一覧

番号* No.	日付 Date	種 Species	性 Sex	全長 TL	調査日誌のページ pages of Journal	備考 Notes
(紀伊) 大島事業場 At Kii-Oshima Station						
1	4-Apr	Blue whale シロナガスクジラ	f	no data	5-9	Male foetus 18 inch, AMNH-34869
2	6-Apr	Sei whale イワシクジラ	m	1007 cm	10-14	
3	8-Apr	Killer whale シャチ	f	670 cm	15-22	AMNH-34844
4	13-Apr	Sei whale	f	1350 cm	23-27	AMNH-34871
5	13-Apr	Sei whale	f	1460 cm	28-31	
6	14-Apr	Finback whale ナガスクジラ	m	1865 cm	32-34	
7	14-Apr	Blue whale	m	2275 cm	35-38	
8	15-Apr	Blue whale	m	2205 cm	39-41	
鮎川事業場 At Ayukawa (Aikawa) Station						
9	20-May	Finback whale	m	1845 cm	42-44	
10	20-May	Finback whale	f	1980 cm	45-46	Contained fetus
11	22-May	Finback whale	m	1805 cm	47-50	
12	22-May	Finback whale	m	1860 cm	51-53	
13	22-May	Finback whale	m	1860 cm	54-55	
14	24-May	Blue whale	f	2380 cm	56-58	
14a	24-May	Blue whale (foetus 胎児)	f	1660 mm	59-60	
15	25-May	Finback whale	f	1735 cm	61-62	
16	28-May	Finback whale	m	1910 cm	63-65	
17	29-May	Finback whale	m	60 ft	66-67	
18	1-Jun	Pacific white-sided dolphin	m	1710 mm	125-131	カマイルカ AMNH M-31418
19	8-Jun	Sei whale	m	1350 cm	68-78	
20	9-Jun	Finback whale	f	66 ft	79-82	
21	9-Jun	Humpback whale ザトウクジラ	m	880 cm	83-85	
22	10-Jun	Finback whale	f	1830 cm	86-88	
23	11-Jun	Finback whale	f	1465 cm	89-91	
24	11-Jun	Sei whale	m	1455 cm	92-95	
25	12-Jun	Humpback whale	m	46'7"	96-98, 190-192	Skeleton observed
26	12-Jun	Sei whale	m	1380 cm	99-100	
27	14-Jun	Northern right whale dolphin	m	2115 mm	101-116	セマイルカ Caught on 12 June
28	14-Jun	Northern right whale dolphin	m	1975 mm	101-116	
29	14-Jun	Northern right whale dolphin	f	2110 mm	101-116	
30	14-Jun	Pacific white-sided dolphin	m	1755 mm	101-116	Caught on 12 June
31	14-Jun	Pacific white-sided dolphin	f	1760 mm	101-116	Caught on 12 June
32	18-Jun	Phocena n. sp?	m	1915 mm	117-124	リクゼンイルカ AMNH M-31425
33	No description					
34	No description Sei whale male 1400 cm (Andrews 1916a)					
35	No description Sei whale female 1405 cm (Andrews 1916a)					
36	No description Sei whale female 1465 cm (Andrews 1916a)					
37	No description					
38	No description Sei whale female 1400 cm (Andrews 1916a)					
39	No description					
40	26-Jun	Short-finned pilot whale	m	4940 cm	132-139	コビレゴンドウ AMNH M-31722
41	No description Sei whale male 1360 cm (Andrews 1916a)					
42	No description					
43	No description Sei whale male 1470 cm (Andrews 1916a)					
44	No description					
45	No description					
46	14-Jul	Sperm whale マッコウクジラ	m	45'	147-148	
47	14-Jul	Sperm whale	m	1455 cm	149	
48	14-Jul	Sperm whale	m	1395 cm	150	
49	19-Jul	Swordfish		2950 mm	140-141	カジキ
50	19-Jul	Pacific white-sided dolphin	f	2090 mm	142-146	
51	No description Sei whale female 1465 cm (Andrews 1916a)					
52	23-Jul	Sperm whale	m	59'1"	153-156	AMNH-34872
53	24-Jul	Finback whale	f	51'6"	157	

表5-2 アンドリュースが紀伊大島と鮎川で調査した鯨類の個体一覧（つづき）

番号*	日付	種	性	全長	調査日誌のページ	備考
No.	Date	Species	Sex	TL	pages of Journal	Notes
54	25-Jul	Finback whale	f	64'4''	157-159	
55	26-Jul	Blue whale	f	76'10''	160-161	
56	28-Jul	Sperm whale	f	37'2''	162-163	
57	28-Jul	Sperm whale	f	33'11''	163-166	
58	29-Jul	Sperm whale	f	41'2''	167-170	Contained fetus
59	29-Jul	Sperm whale	f	30'	170-171	
60	29-Jul	Sperm whale	f	31'	171-172	
60a	29-Jul	Sperm whale fetus	m	3950 mm	173-177	
61	30-Jul	Sei whale	f	1524 = 50'	178-179	
62	31-Jul	Sei whale	f	1285 = 42'2''	179-181	
63	1-Aug	Sei whale	m	1280 = 42'	182-183	1280 cm (Andrews 1916a)
64	5-Aug	Finback whale	m	61'9''	184	
65	2-Aug	Sei whale	m	40 ft	185	1220 cm (Andrews 1916a)
66	2-Aug	Sei whale	f	41 ft	185	1250 cm (Andrews 1916a)
67	3-Aug	Sei whale	m	45 ft	185-186	1371 cm (Andrews 1916a)
68	3-Aug	Sei whale	f	48 ft	185-186	1463 cm (Andrews 1916a)
69	5-Aug	Sei whale	m	48'4'' = 1473	187-188	1413 cm (Andrews 1916a)
70	18-Aug	Sei whale	m	41'6'' 1265	188	1265 cm (Andrews 1916a)
71	20-Aug	Sperm whale	m	39'6''	193	
72	20-Aug	Sei whale	f	30'10'' 940	189	940 cm (Andrews 1916a)
73	20-Aug	Sei whale	f	43'2'' 1315	193	1315 cm (Andrews 1916a)
74	22-Aug	Sei whale	m	39'	194	
75	23-Aug	Sei whale	f	46'6'' = 1417	2, 194	1417 cm (Andrews 1916a)

*番号はアンドリュースの調査日誌による。宇仁ら（2014）より

表5-3 アンドリュースが朝鮮の蔚山で調査した鯨類の個体一覧

番号*	日付	種	性	全長	調査日誌のページ	備考	RCA 1914
No.	Date	Species	Sex	TL	pages of Journal	Notes	Table IV
1	8-Jan	gray whale	f	1300 cm	3-4	Contained a fetus (1a Andrews 1914)	1300 cm
1a	8-Jan	gray whale	m		5-9	Male fetus	435 cm
2	8-Jan	gray whale	m	1140 cm	10-11		1160 cm
3	8-Jan	gray whale	m	1240 cm	11-12		1240 cm
4	8-Jan	gray whale	m	1170 cm	12-13		1170 cm
5	9-Jan	gray whale	m	1143 cm	13-14		1143 cm
6	9-Jan	gray whale	f	1317 cm	15-16		1317 cm
7	9-Jan	gray whale	m	1202 cm	16		1202 cm
8	10-Jan	gray whale	m	1240 cm	17-18		1240 cm
9	10-Jan	gray whale	f	38'?	19		1160 cm
10	10-Jan	gray whale	m	1050 cm	19-20		1050 cm
11	10-Jan	gray whale	m	1075 cm?	20-21		1075 cm
12	11-Jan	gray whale	m	39'	21		1190 cm
13	12-Jan	gray whale	m	1250 cm	21-22	USNM 199527, Jan.13 (Andrews 1914)	1250 cm
14	13-Jan	gray whale	m	38'	22-23		1160 cm
15	14-Jan	gray whale	m	1085 cm	24		1085 cm
16	16-Jan	gray whale	m	1180 cm	25		1180 cm
17	16-Jan	gray whale	m	980 cm	26		980 cm
18	17-Jan	gray whale	m	39'	27		1190 cm
19	17-Jan	gray whale	m	1180 cm	28		1180 cm
20	19-Jan	gray whale	m	1215 cm	28-31	AMNH M-34260	1215 cm
21	20-Jan	gray whale	m	1225 cm	31-33		1225 cm
22	21-Jan	gray whale	m	1240 cm	33		1240 cm
23	24-Jan	gray whale	m	1235 cm	34		1235 cm
24	1-Feb	Orca orca	f	665 cm	34-35		
25	1-Feb	Orca orca	m	835 cm	35	AMNH M-34276	
26	2-Feb	blue whale	m	2280 cm	36-37		
27	12-Feb	humpback whale	f	1130 cm	37		
28	13-Feb	humpback whale	m	1475 cm	38	Skeleton collected and fired (Andrews 1914)	
29	13-Feb	humpback whale	f	1426 cm	39	Contained fetus	
29a	13-Feb	humpback whale	f	495 cm	40	Fetus of No. 29	
30	24-Feb	finback whale	m	1870 cm	41		

*番号はアンドリュースの調査日誌による。宇仁ら（2014）より

表5-4 アンドリュースが1910-1912年に日本と朝鮮で収集した鯨類標本とその現状

標本番号 Number	和名 Japanese Name	学名 Scientific Name	標本種別 Preparations	性 Sex	場所 Locality	調査日 Date of exam.	備考 Note
アメリカ自然史博物館で確認された標本 Specimens identified by authors in American Museum of Natural History							
日本で収集 Collected in Japan							
M-30575	オキゴンドウ	<i>Pseudorca crassidens</i>	Skull	UK	長崎 Nagasaki		
M-31418	カマイルカ	<i>Lagenorhynchus obliquoidens</i>	Skeleton, Skull	M	鮎川 Ayukawa	Jun. 1, 1910	
M-31420	カマイルカ	<i>Lagenorhynchus obliquoidens</i>	Skull, Skeleton	F	鮎川 Ayukawa	Jun. 14 or Jul. 19, 1910	
M-31421	カマイルカ	<i>Lagenorhynchus obliquoidens</i>	Skeleton, Skull	F	鮎川 Ayukawa	Jun. 14 or Jul. 19, 1910	
M-31422	セミイルカ	<i>Lissodelphis borealis</i>	Skull, Skeleton	M	鮎川 Ayukawa	Jun. 14, 1910	
M-31424	セミイルカ	<i>Lissodelphis borealis</i>	Skeleton, Skull	F	鮎川 Ayukawa	Jun. 14, 1910	
M-31425	リクゼンイルカ	<i>Phocoenoides dalli</i>	Skull, Skeleton	M	鮎川 Ayukawa	Jun. 18, 1910	*1
M-31722	コビレゴンドウ	<i>Globicephala macrorhynchus</i>	Skeleton, Skull	M	鮎川 Ayukawa	Jun. 26, 1910	
M-31829	シャチ	<i>Orcinus orca</i>	Fluid (eyes only)	F	紀伊大島 Kii-Oshima	Apr. 8, 1910	
M-33197	ツチクジラ	<i>Berardius bairdii</i>	Skeleton, Skull	UK	東京湾 Tokyo Bay		*4
M-34278	セミイルカ	<i>Lissodelphis borealis</i>	Skeleton, Skull	M	相模 Sagami		
M-34280	スナメリ	<i>Neophocaena phocaenoides</i>	Skull, Skeleton	UK	下総 Shimosa		
M-34281	スナメリ	<i>Neophocaena phocaenoides</i>	Skull	UK	相模 Sagami		
M-34844	シャチ	<i>Orcinus orca</i>	Skull, Skeleton	F	紀伊大島 Kii-Oshima	Apr. 8, 1910	
M-34869	シロナガスクジラ	<i>Balaenoptera musculus</i>	Skeleton, Skull	F	紀伊大島 Kii-Oshima	Apr. 4, 1910	
M-34870	ナガスクジラ	<i>Balaenoptera physalus</i>	Skull, Skeleton	F	鮎川 Ayukawa		
M-34871	イワシクジラ	<i>Balaenoptera edeni or brydei</i>	Skeleton, Skull	F	紀伊大島 Kii-Oshima	Apr. 13, 1910	*2
M-34872	マッコウクジラ	<i>Physeter catodon</i>	Skull, Skeleton	M	鮎川 Ayukawa	Jul. 23, 1910	*3, *4
None	数種類が混じる	Few species mixed baleen pla	Baleens	UK	紀伊大島及び蔚山 Kii-Oshima and Ulsan		
朝鮮で収集 Collected in Korea							
M-34260	コククジラ	<i>Eschrichtius robustus</i>	Skeleton, Skull	M	蔚山 Ulsan	Jan. 19, 1912	
M-34261	シャチ	<i>Orcinus orca</i>	Skull, Skeleton	UK	蔚山 Ulsan	Aug., 1910	
M-34276	シャチ	<i>Orcinus orca</i>	Skull, Skeleton	M	蔚山 Ulsan	Feb. 1, 1912	*4
アメリカ自然史博物館のデータベースにあるが未発見の標本 Specimens listed in the database of AMNH, but undiscovered							
M-31419	カマイルカ	<i>Lagenorhynchus obliquoidens</i>	Skull, Skeleton	M	鮎川 Ayukawa		
M-31423	セミイルカ	<i>Lissodelphis borealis</i>	Skeleton, Skull	M	鮎川 Ayukawa		
M-31730	マッコウクジラ	<i>Physeter catodon</i>	Fluid	UK	鮎川 Ayukawa		
M-31731	ナガスクジラ	<i>Balaenoptera physalus</i>	Fluid	UK	鮎川 Ayukawa		
M-31732	イワシクジラ	<i>Balaenoptera borealis</i>	Fluid	UK	鮎川 Ayukawa		
M-31733	シロナガスクジラ	<i>Balaenoptera musculus</i>	Fluid	UK	鮎川 Ayukawa		
M-31734	ザトウクジラ	<i>Megaptera novaeangliae</i>	Fluid	UK	鮎川 Ayukawa		
M-31822	シロナガスクジラ	<i>Balaenoptera musculus</i>	Fluid	UK	紀伊大島 Kii-Oshima		
M-31823	シロナガスクジラ	<i>Balaenoptera musculus</i>	Fluid	UK	紀伊大島 Kii-Oshima		
M-31824	カツオクジラ	<i>Balaenoptera edeni</i>	Fluid	UK	紀伊大島 Kii-Oshima		
M-34279	スナメリ	<i>Neophocaena phocaenoides</i>	Skin	UK	下総 Shimosa		
M-42683	イワシクジラ	<i>Balaenoptera borealis</i>	Misc	UK	鮎川 Ayukawa		
M-42684	イワシクジラ	<i>Balaenoptera borealis</i>	Misc	UK	鮎川 Ayukawa		
国立自然史博物館に収蔵されている標本 Specimen donated to National Museum of Natural History, Smithsonian Institution							
USNM 199527	コククジラ	<i>Eschrichtius robustus</i>	Skeleton, Skull	M	蔚山 Ulsan	Jan. 13, 1912	*5

*1 *Phocoenoides truei* のタイプ標本 Type specimen for *Phocoenoides truei* (Andrews 1911b)

*2 Andrews 1916a 用いられた。宇仁ら (2014) がニタリクジラとしたのは誤り

*3 AMNHのデータベースでは紀伊大島とされているが誤り Locality mistakenly noted as Oshima in the data base

*4 Exhibited in the Hall of Ocean Life in AMNH between 1933–1962

*5 On display in the Hall of Osteology since early 1960s

宇仁ら (2014) のニタリクジラをイワシクジラに訂正



図5-2 アメリカ自然史博物館のリクゼンイルカのタイプ標本



図5-3 現在もスミソニアン機構国立自然史博物館で常設展示されているに蔚山で採集されたコククジラの全身骨格標本 USNM 199527

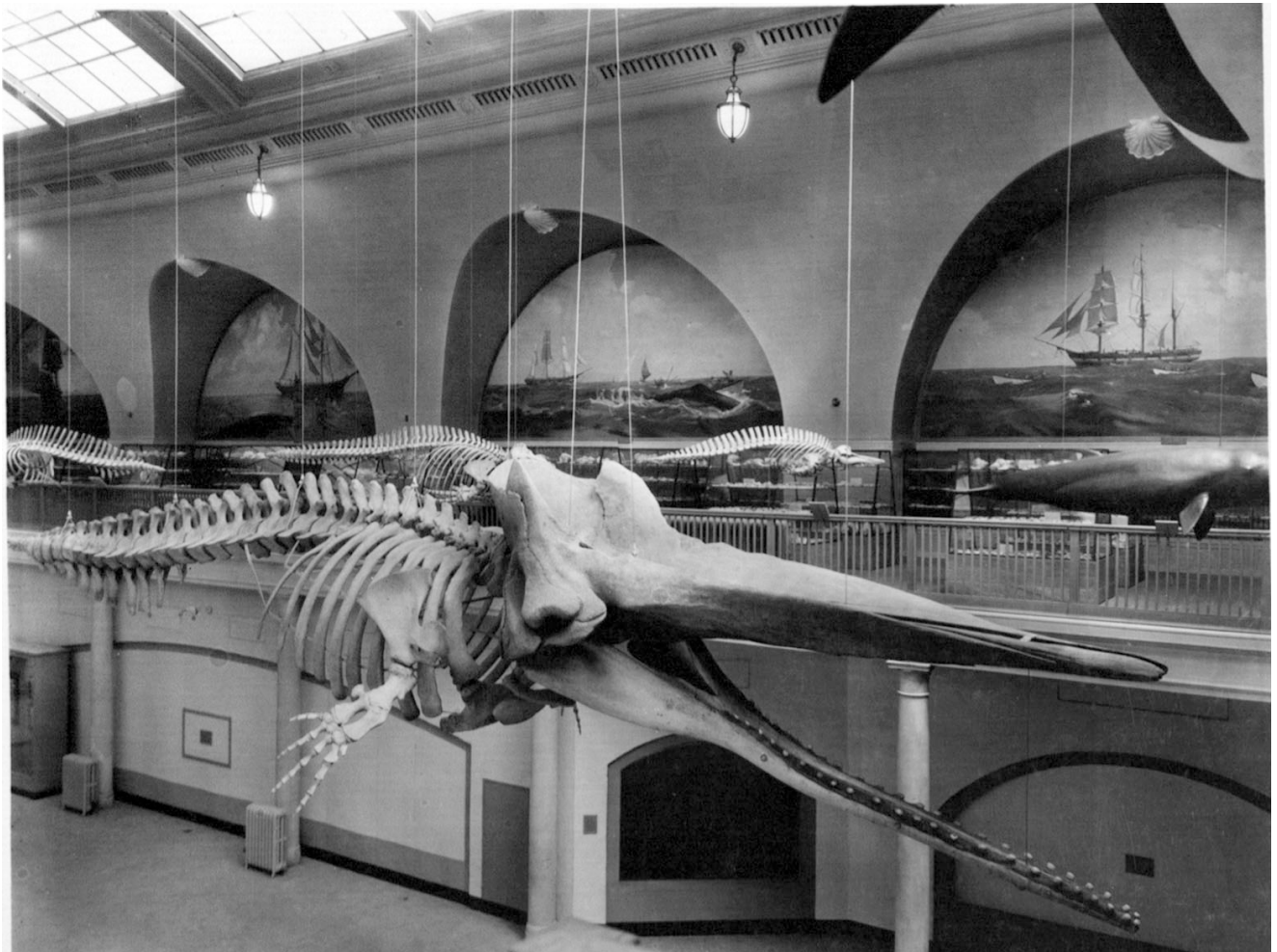


図5-4 鮎川で捕獲されたマッコウクジラM-34872は1930-1960年代に19世紀的な海洋資源の実物展示というコンセプトでアメリカ捕鯨の壁絵とともに展示されていた。 Image #314191 American Museum of Natural History Library

6章 近代沿岸捕鯨の遺産と歴史的意義

1節 公認された捕鯨遺産

2節 近代沿岸捕鯨の遺構と保存状態

3節 鯨骨鳥居は西欧の鯨骨門から転化した

1節 公認された捕鯨遺産

以上、本論で見てきたように近代捕鯨は国際的な関係のなかで生まれ、地方における近代化の先駆者となり、肉食という西洋文化の推進役でもあった。しかし、現在のところ近代捕鯨を地域の拠り所とするのは宮城県の鮎川だけという状況にあり、産業面でも文化面でも顧みられることは少ない。捕鯨を文化とする見方は、ほとんどが近世捕鯨である。それ可視化するのが指定文化財などの法令で指定された捕鯨遺産の状況である。

1) 公認された捕鯨遺産は近世捕鯨が大半である

本節では、日本の捕鯨に関する文化遺産について指定や登録などの文化財としての公的な位置付け、そしてその保存状況を報告し、現時点での近代沿岸捕鯨に対する文化的評価について考察する。結論を先に言えば、捕鯨に関する指定文化財や行政が公認する文化遺産の大半は、網取り捕鯨や突取り捕鯨などの近世捕鯨に集中している。近代の捕鯨に関する物件はきわめて少なく、沿岸捕鯨に関した物件はほとんどない。近代沿岸捕鯨は文化遺産としては認められていない状態にある。

文化庁の国指定文化財等データベースによると、文化財保護法による指定文化財のうち捕鯨関連の物件は6件ある。これらはすべて近世捕鯨やその技術の資料である（国指定文化財等データベース https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.asp 2019.3.28閲覧）。具体的には、重要文化財1件徳島県「徳島藩御召鯨船千山丸」、史跡1件山口県「青海島鯨墓」、重要有形民俗文化財3件千葉県「房総半島の漁撈用具」、三重県「伊勢湾・志摩半島・熊野灘の漁撈用具」、山口県「長門の捕鯨用具」、重要無形民俗文化財1件三重県「鳥出神社の鯨船行事」となっている。登録文化財になると近代捕鯨の事業会社の建物「蜂谷ビル（旧東洋捕鯨株式会社下関支

店)」（山口県）が現れる。ただし、対象の物件は建造物であり、捕鯨事業や付随物を直接対象にしたものではない。記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財には2件三重県「北勢・熊野の鯨船行事」、伊根の捕鯨を含んだ京都府「丹後の漁撈習俗」が、重要文化的景観は3件いずれも長崎県「小値賀諸島の文化的景観」「新上五島町崎浦の五島石集落景観」「平戸島の文化的景観」が選定されているが、これら5件もすべて近世捕鯨に関連した物件である。

都道府県の指定文化財では、和歌山県3件「三輪崎の鯨踊り」新宮市、「捕鯨の祖和田頼元墓」および「近代捕鯨銃砲」太地町、山口県1件「長門向岸寺の鯨位牌及び鯨鮓過去帳」長門市、佐賀県1件「小川島鯨見張所」呼子町、そして長崎県3件「捕鯨銃（附火矢・火矢抜き・早盒）一式」「吉村組捕鯨文書」「長泉寺の鯨供養石造五重塔」いずれも平戸市）と沿岸捕鯨に関した物件が見える。これらの都道府県指定文化財の特徴は、すべてが近世の網取り捕鯨の操業地域の物件であることだ。詳しく見ると近代の物件もあるが、平戸の捕鯨銃は日本では実用化されずに終わったアメリカ式捕鯨の道具であり、太地の近代捕鯨砲が唯一の近代捕鯨で用いられた県指定文化財である。

文化財保護法とは別の枠組みとして、文化庁が平成27年度から認定を開始した「日本遺産」がある。捕鯨関連では和歌山県が申請したストーリー「鯨とともに生きる」が認定されている。紀伊半島南部は網取り捕鯨を発明した太地町を含むことから想像できるとおり、ストーリーを構成する文化財のすべてが網取り捕鯨に関した物件である

(http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/pdf/nihon_isan32.pdf 2019.3.28閲覧)。これとは別に、水産庁が「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」がある。2005年度に募集をおこない2006年2月に認定結果が発表された。捕鯨に関係した物件では、千葉県「南房総捕鯨伝承施設」、和歌山県「太地町捕鯨歴史文化財」、山口県「青海島鯨墓」、高知県「室戸捕鯨関連文化遺産」、佐賀県「小川島鯨見張所」、長崎県「有川捕鯨関連文化遺産」など6件が認定施設となっている (<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/18/021701.pdf> 2019.3.28閲覧)。認定施設はすべて近世捕鯨の操業地域にあり、近代捕鯨に関する施設は、千葉の和田浦鯨体処理場、太地の南極海と北洋に出漁した大型捕鯨船第十一京丸、室戸の第一回南氷洋出漁の奉

納鳥居、有川に東洋捕鯨によるノルウェー式捕鯨を操業した原眞一顕彰碑があり、南極海捕鯨に関連した物件が2つ、沿岸捕鯨も2件ある。ただし沿岸捕鯨の物件のうち、和田浦鯨体処理場は戦後になって設置された小型捕鯨の施設であり、本論が対象としてきた大型沿岸捕鯨の遺産ではない。また、太地の物件で近代沿岸捕鯨が含まれるのは太地町立くじらの博物館そのものであり、個別の近代沿岸捕鯨の物件は選定されていない。結局、「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に大型沿岸捕鯨の遺構や有形物は含まれていない（表6-1）。

日本遺産や文化財産百選など新しい制度は、文化財保護法ではカバーされない文化遺産に公的な位置付けを与える役割を有している。これらの制度によって近代の捕鯨のうち、南極海捕鯨や小型捕鯨の文化遺産が選定されたのに対し、近代沿岸捕鯨を伝える物件は採択されなかった。つまり、現状では国や地方公共団体などによる指定文化財や文化遺産の活用を主眼にした事業、すなわち捕鯨の技術や文化に関連「公認された文化財」は、近世の網取り捕鯨、明治以降の操業であっても近世の技術が用いられた突取り捕鯨にほぼ限定されている。近代捕鯨の物件は少数に留まり、それも小型捕鯨や南極海捕鯨に関係したものに偏り、大型沿岸捕鯨の遺産を直接に指定選定した物件がまったくない。指定文化財やそれに類する制度を見る限り、近代沿岸捕鯨の遺構や文書は、公認すべき文化財とは考えられていないと評価できる。

現状では、沿岸捕鯨に関する操業技術や捕鯨船、事業場の施設や設備、捕鯨の記録やノルウェーやカナダ太平洋岸ニューファンドランド州との物語などは、保護すべき対象とは見なされていない。日本国内に期限を持つ漁法、地域の発明などだけが保護対象となっている。

2節 近代沿岸捕鯨の遺構と保存状態

近代沿岸捕鯨の遺構は現在どの程度残っているのだろうか。本節では沿岸捕鯨の遺構の現状を見てみたい。沿岸捕鯨の事業場、いわゆる解体場は、現地での保存が困難な条件にある。捕鯨事業場は波打ち際に立地しており、海岸の護岸事業や港湾地区の再開発など、土地の改変が頻繁におこなわれる場所に置かれてきた。津波の被害や破壊を被った例もいくつもある。つまり歴史的な価値を認めたとしても現地保存することが困難な立地である。さらに捕鯨特有の問題もある。

1970年代以降、捕鯨は環境団体や非捕鯨国から非難されるようになり、20世紀末以降は攻撃的な環境団体の悪意ある宣伝や行動のターゲットとなった。たとえば、社史に掲載された南極海で捕獲されたシロナガスクジラの写真について、すでにその企業は捕鯨事業から手を引いていたにもかかわらず、環境保護団体が攻撃的として宣伝したため多数の抗議の電話やファックスが届き業務に支障を来すなどの事例である。そのことが捕鯨事業やその記念物が後継企業の博物館や年史から省かれることや、前身会社が捕鯨会社であったことを隠す傾向を年々強めることにつながっている。近代沿岸捕鯨の事業化に成功した企業はもともと少数であり、合併を繰り返した後に現在も大規模水産会社として事業を継続している。東洋捕鯨は日本水産株式会社、林兼商店は長く大洋漁業株式会社であったが、大洋漁業は日魯漁業の後継会社であるニチロと合併し、マルハニチロ株式会社として現在も主要な水産会社である。しかしながら、これらの企業が捕鯨に関連した発言をすることは見られない。過激な環境団体の活動が歴史的遺産の保存にまで悪影響を及ぼしている事例である。現在の企業にとって捕鯨の遺産を文化財として維持すること、捕鯨を自社の歴史として記録公開することが困難な状況になっている。

近代の産業遺産や建築物、近代化遺産を文化財として見なし、保護やその意義を積極的に唱えていく動きは、日本では20世紀末にようやく始まった。文化庁による「近代化遺産総合調査」が1990年に着手され、阪神・淡路大震災の経験を経た1996年には登録文化財の制度ができたが、1節で見たとおり沿岸捕鯨の遺構がこれらの動きで文化財指定や登録をされたことはこれまでない。

沿岸捕鯨の遺構の保存は危機的である。本論の主役となった東洋捕鯨は、はじめ本社を大阪市西区靱北通2丁目18番地に置いたが、第2期営業報告に記された本社住所は大阪湾に近い同市西区川口町14番乙地であり、設立1年目のうちに移転している。旧本社の場所は靱公園、新本社は日産自動車の販売店となっており、東洋捕鯨の本社に関連した遺構はまったく見られない。これらが位置する大阪市西区は空襲の影響が大きく、遺構が存在しないのは戦災の影響もあると想像する。

事業場の跡地はどうか。現在の国内の状況を見ると、北海道では、オホーツク海に面した東洋

捕鯨網走事業場の跡地にはウインチの跡が残っている。レンガ製の柵やコンクリート製の工作物が見られるが、農地として使われた経過があり、その遺構の可能性もあるため、これらは捕鯨遺構と特定はできない。太平洋側の浜中町には東洋捕鯨霧多布事業場の場所を引き継いだ日東捕鯨株式会社霧多布事業場の引揚棧橋が残っている（図6-1）。日東捕鯨霧多布事業場長からの聞き取り（1999年12月）によると、この棧橋は1960（昭和30）年のチリ地震津波の後に日東捕鯨によって造られたものという。この棧橋は産業遺構と震災関連遺構の両方の価値を持つ。コンクリート製だが傷みが激しく、遺構の永久保存は困難と想像される。東洋捕鯨室蘭事業場は跡地が市立室蘭水族館として利用されており、もともと捕鯨事業場があったことを示す碑が建てられている。同水族館に50年勤める飼育係員からの聞き取り（2018年7月）では、現在のペンギンとアザラシのプールは捕鯨事業場の油タンクを流用したものという。本州では、宮城県の東洋捕鯨鮎川事業場の跡地が鮎川捕鯨の事業場となっており、日本水産時代の引揚棧橋（スリップウェイ）の海中部分が一部残されている（図6-2）。和歌山県の東洋捕鯨二木島事業場の跡地は二木島漁港の設備となっており、この施設の建設時に地中から大量の鯨骨がでてきたという（二木島港で近くの男性からの聞き取り、2015年2月）。同県の〔紀伊〕大島事業場は日本水産の事業として長く使われ、近くには1940（昭和15）年に皇紀2600年記念として建立された鯨供養碑がある。碑文は「弔鯨塔」となっている（図6-3）。1910年の東洋捕鯨の事業場であった当時は、近くは骨捨て場となっていた（写真6-1）。同様に高知県の東洋捕鯨清水事業場（写真6-2）は造船会社の社有地となっている（図6-4）。捕鯨事業場は波打ち際のまとまった土地であり、その後の利用も周辺の状況とは異なる特徴的な利用となっていることが目立つ。土地利用の歴史にも近代沿岸捕鯨が関係している。

このように国内の捕鯨事業場の跡地のなかには、遺構を残さず失われた場合でも、海岸に位置したまとまった土地として各地で特徴のある施設に変化した例が見られ、事業場の存在を想像することができる。また、網走事業場の土地の一部は、近世の蝦夷地を広く支配した漁場商人の藤野家の土地を購入したものである（日本水産蔵「網走契約一件」）。藤野家の本社は大阪で、遠く離れた北海道の辺地の土地の売買の主体がともに大阪にあり、庶民の手の届かないところで土

地の権利が売り買いされていたことを知らされ、その時代の特徴を現した文書である。これらからうじて存在している捕鯨遺構は保存のための公的な支援はまったくなされておらず、今後も形状を保つことは現状では困難だろう。

外地や千島の事業場は辺地に位置することが多く、遺構が残りやすい。加えて戦後も継続して捕鯨事業場として使用が続いた例もある。千島の捕鯨事業場は、第二次世界大戦後もソ連によって使用されていた。サハリン州博物館には1954（昭和29）年撮影の色丹島と新知島の事業場とする写真が展示されている。色丹島の事業場とする写真（図6-5）は、三角屋根の建物が並ぶ斜古丹事業場の写真（写真集懐かしの千島編纂委員会 1981: 68）と様子が似ており、同事業場で正しいと判断する。新知島とされる写真（図6-6）については、判断する材料を持たないが、博物館のキャプションが正しければ東洋捕鯨梅浦事業場かも知れない。州立博物館に捕鯨の展示があることは、短期間ながら捕鯨が州の主要な事業として認識されていたことの現れである。樺太では最南端に近いアニワ湾東側、知床半島の先端部の札塔に日本水産の事業場があった。現在は周辺を含めて定住集落はなく、夏の間の漁場の施設が点在するだけとなっている。建築物は、漁業者が作った簡易な建物だけであり、そのなかに70年以上の年月を経た日本時代の橋や住居がしっかりと建っている。同地を知る人は少ないなか、サハリン州博物館の考古学と歴史学の研究員が現地調査を行い、漁業や神社の遺構を特定している。尺を単位にしたコンクリートの桁が多数並ぶ遺構があるが（図6-7）、これが捕鯨事業場のものかは現在のところ特定できていない。近くには近代前期の日本の建築物として注目される灯台守の居宅などもあり、これらを含めて日本時代の樺太開発の遺構として歴史的な価値があると考えられる。

朝鮮半島では、東洋捕鯨の主力事業場であった蔚山事業場は現在の韓国蔚山広域市となっている。日本時代の事業場の場所は工場地帯となり埋立が進み遺構は一切残されていない。捕鯨自体は戦後も継続され、東洋捕鯨とは異なる場所、古沙洞〔ゴサドン〕に事業場が置かれていた。その経緯もあって蔚山広域市南区は、その対岸で捕鯨を中心にした公園整備が続けられ、長生浦鯨博物館や関連の水族館が置かれている。ただし、長生浦鯨博物館でも日本時代の歴史は十分に把握されておらず、日本時代の事業場の場所について博物館が正しく認識したのは、アンドリュー

スの写真展を開催した2015年のことであった（우니 2015、宇仁 2015）。これは図録用に戦前の地形図と現在の衛星写真を合わせた図が作成されたことによる。本論2章で見たとおり、現在では長崎捕鯨の事業場の場所の特定されている（図6-8）。

黄海では大黒山島、現在の黒山島と於青島の事業場は継続使用された。黒山島にある東洋捕鯨大黒山島事業場の跡地は、現在も日本時代の事業場が存在した当時の土地の形状が残されている。戦後も韓国の捕鯨会社の基地として長く使われ、現在はコククジラの模型を中心に据えた鯨公園として整備されている（図6-9）。濟州島南側の西帰浦にあった東洋捕鯨濟州島事業場の跡地は埋め立てられ遊覧船乗り場の駐車場となっているが、東洋捕鯨時代の遺構として遭難した捕鯨船電丸 [いなつままる] の乗組員の「遭難追悼之碑」が残されている（図6-10）。遭難碑は朴（1995: 287）では横たわった写真が掲載されているが、2016年3月には破損しているものの立てられた状態であった。日本の企業が立てた石碑だが、犠牲になった乗組員は朝鮮人であったので大切に人々もいるのだろう。蔚山と黒山島の事例は、日本の近代沿岸捕鯨が現代の韓国の地域産業として継承された例である。現地に残る捕鯨遺構は歴史的な証人といえるが、現在の韓国の政治状況を反映し、蔚山でも黒山島でも日本統治時代の展示はほとんど見られない。

台湾では南端の南湾に引揚げ棧橋の跡が残っている（図6-11）。これが東洋捕鯨時代のものか戦後のものかは不明であるが、相当に年数を経過したように見える。工学的な検討から年代の特定が可能かも知れない。

これら数少ない現存する沿岸捕鯨の遺構は保存策がとられておらず、このままでは近いうちに消滅する可能性が高い。捕鯨遺跡は歴史的文化的な価値に加え、鯨類を資源として利用した証拠でもある。生物多様性の保全が共通認識となった現在、人類の経済行為が野生動物に与えた影響に思いを巡らすためにも、近代沿岸捕鯨の遺構の保存は急務である。

3節 鯨骨鳥居は西欧の鯨骨門から転化した

はじめに

捕鯨の根拠地に位置する神社には、鯨の下顎骨で作られた「鯨骨鳥居」と呼ばれるものが存在

する。現存するものに和歌山県太地町の恵比寿神社や長崎県新上五島町有川の海童神社、捕鯨根拠地ではない宮城県南三陸町石浜の飯綱神社（川島 2007）、さらに鯨骨製の欄干を持つ雪鯨橋で知られる大阪市東淀川区の瑞光寺のものがある。戦前の写真からは樺太大泊支庁長浜郡知床村札塔 [さっとう] の恵比寿神社（樺太庁 1936: 58-59）、北海道根室支庁色丹郡斜古丹村（色丹島）の斜古丹神社（田中・大野 1940）、台湾高雄州恒春郡恒春庄鵝鑾鼻 [がらんぴ] の鵝鑾鼻神社（片倉 2015: 220）などの例が知られている。これらのいわゆる鯨骨鳥居は近世から見られる伝統なのだろうか。本論では鯨骨鳥居の由来について、構造や建立位置、解剖夫が用いた用語などから考察する。

結論を先に述べると、鯨骨鳥居は近代にノルウェーから持ち込まれた鯨骨門が転化したものである。これまで本章で見てきたとおり、捕鯨や鯨に関する習慣を日本独自とする見方、近年のいわゆる「日本スゴイ論」によって海外の影響を排除し、何ごとも日本独自の文化としてしまう風潮のひとつが鯨骨鳥居にも及んでいることを見ていく。

資料と方法

本論で用いた資料は、筆者が撮影した鯨骨門の写真、鯨骨門の写真が掲載された書籍あるいはデジタルデータ、そして現在の鯨骨鳥居という見方に影響を与えている井原西鶴の文学作品『日本永代蔵第1巻』「天狗は家な風車」、南極海捕鯨の解剖員が用いた鯨体の図面などである。方法は、1) 「天狗は家な風車」に記された鯨骨鳥居の素材や形状について、近世から現代の捕鯨者や解剖夫の用語から特定する、2) 日本の近世の捕鯨関連の文書や図絵を読み込み鯨骨鳥居の記録を搜索する、3) 近代（明治から終戦）における鯨骨鳥居の分布や建立位置の特徴を明らかにする、4) 海外における鯨骨門の分布と出現時期を文献から追求する、5) 日本における鯨骨門の出現時期とその機能を文書から比定する、などである。それらをもとに鯨骨門の起源と鯨骨鳥居の由来について考察をおこなった。

結果

1) 井原西鶴の「天狗は家な風車」の鯨骨鳥居

鯨骨鳥居が近世由来とされる根拠として用いられるものに、江戸時代前期の1688（貞享5）年

に刊行された井原西鶴 1642-1693 の小説『日本永代蔵』第1巻の「天狗は家な風車」がある。鯨骨鳥居の記述は「紀路大湊、泰地といふ里の、妻子のうたへり。此所は繁昌にして、若松村立ける中に、鯨恵比須の宮をいはひ。鳥井に、其魚の胴骨立しに、高さ、三丈 [9m] ばかりも、有ぬべし」（井原 1995）という文章として現れる。日本永代蔵は実話や実在の人物を題材にしており、泰地は近世に見られる太地の表記であり、たとえば「紀伊続風土記」（熊野太地浦捕鯨史編纂委員会編 1969: 315）にも現れる。太地の恵比寿神社では現時点で実際に参道となる階段の下にマッコウクジラの下顎骨が対面して立っている。太地町教育委員会が設置した解説板によると「井原西鶴著『日本永代蔵』に登場する話に着想を得て、1985年に建てられた（1996年に再建）」ものとある。この鳥居については、ウェブページ「日本遺産 観光情報 観る。遊ぶ【串本】 - 鯨とともに生きる」でも「井原西鶴著『日本永代蔵』に登場する話に着想を得て、1985年に建てられた（1996年に再建）」（<http://kumanonada-nihonisan.jp/tourism/play/01.html> 2019.6.1閲覧）と記されている。余談であるが、このページは太地の情報であり、トップページでも「観光情報>太地」としてリンクされているので、【串本】は誤りで、本来は【太地】であると思われる。また、太地町歴史資料室への照会でも同様の回答を得ている。つまり、現在の太地にある鯨骨鳥居は、井原の小説の記述が先にあり、それを参考に現代になって建立されたことを押さえておきたい。なお、同神社の鯨骨鳥居は2019年4月にイワシクジラの下顎骨に新調された（太地町教育委員会 2019）。

「天狗は家な風車」に描写された鳥居は「胴骨立しに、高さ、三丈 [9m] 」という。「胴骨」とは何を指しているのか、その部位を考察する。もし胴骨が下顎骨であれば、井原の描いた鳥居は現在の鯨骨鳥居と同様であり、鯨骨鳥居が近世由来という考えを補強する。『熊野太地浦捕鯨史』（熊野太地浦捕鯨史編纂委員会 1969）に収録された江戸時代末期の作と推定される「捕鯨漁具図・鯨解剖図」では、下顎骨は「ハシノ骨」、椎骨（背骨）は「大骨」と記されており、「胴骨」という記述は見られない。太地町立くじらの博物館の企画展「熊野灘のクジラ絵図」の図録『鯨者六鯨ト申候』（櫻井編 2011）は太地に関連した29点の鯨図説や関係の絵図を収録するが、「胴骨」という記述や鯨骨門は見えない。この図録に掲載された成立年不明の「古

座捕鯨絵図」（太地町立くじらの博物館蔵）にはセミクジラの解剖図があるが、やはり下顎骨は「ハシノ骨」、椎骨は「背骨」であり、「胴骨」という記述は見られない。福本（1960: 162-197）が1725（享保8）年の成立とした鯨図説と同一かどうか不明の「古座浦捕鯨絵図」（太地町立くじらの博物館蔵）には解剖途中の胴体が見えるが、下顎骨は「ハシノ骨」、椎骨への注記は「大骨」である。北九州西海系の鯨図説を見ると、木崎攸々軒盛標による「小兒の弄鯨一件の巻」を含む「肥前国唐津領産物図考」（中里 2005）では椎骨は「大骨」で、下顎骨の名称は示されていない。生島仁左衛門常蔽が1790年代末頃に制作した「鯨魚■ [金偏に覽] 笑録」（中園・安永 2009）でも「大骨」である。本論の調査では、近世の鯨図説や鯨の解剖に関連した文献には「胴骨」という記述は見つけられなかった。

近世の鯨図説では正体が分からなかった「胴骨」であるが、南極海捕鯨の解剖夫の間では、椎骨の意味で日常的に用いられた用語であった。図6-12は、共同捕鯨時代の第三日新丸製造事業部が作成したもので、1989年に収集された。解剖作業の現場で用いられた図であり、背骨は「胴骨」と明記されている。この図は、鯨体の解剖作業にあたり各部の名称を作業員に周知するために作図されたものと推定することができるので、捕鯨母船では背骨が胴骨と通称されていたことが示唆される。

『日本永代蔵』では、胴骨の長さを3丈、9mとする。当時のおもな捕獲対象であったセミクジラは、成獣では16m以上に成長し、体長の3分の1を頭部が占めるが、おおよそ15m以上の個体であれば背骨の繋がりを9m程度確保することは可能である。文字通りの構造ならば、井原が記した鳥居はセミクジラの背骨を地面から9mの高さに積み上げたものとなる。この点から推定するならば、井原は、解剖途中の鯨の長い背骨の連なりから、それを柱のように用いた工作物を思いついた、あるいは背骨を中心とする骨捨て場の山から鳥居を思いついたのかも知れない。

2) 近世の鯨絵巻や関連絵画に鯨骨鳥居は見えない

『熊野太地浦捕鯨史』付属の解説（橋浦 1969）によれば、太地最古と推測される「鯨類絵巻」は寛文初期（1660年代）であるが、これには解剖図がなく、周辺風景が描かれていない。おなじく寛政年代前後（1789-1800年）の作と推定された「太地浦捕鯨絵巻」は太地の家並みな

どを描くが、鯨骨門はどこにも見えず、恵比寿神社の鳥居は朱色に塗られた明神鳥居が描かれており、遠くに描かれた神社とおぼしき鳥居も同様である。近世の太地を描いた鯨図説や近代初期の太地の地方史には、鯨骨鳥居は文字にも絵図にも見えない。なお、太地では近代（＝明治から終戦）の地方文献のうち、熊野太地浦捕鯨史編纂委員会編（1969）『熊野太地浦捕鯨史』に収録された、「太地町郷土誌」「太地」「太地浦の概観（『太地村誌』）」「太地浦の物産（『紀伊続風土記』）」「太地町概況（『太地町郷土誌』）」などには鯨骨鳥居の記述は現れない。

北九州の近世文献では、佐賀県立名護屋城博物館の展示図録「くじらといきる」（佐賀県立名護屋城博物館編 2006）に収録された「肥前国小河嶋鯨場絵図」（同館蔵）には、納屋場近くに鳥居が描かれているが、朱塗りであり鯨骨鳥居は確認できず、他の絵図も同様に鯨骨鳥居は見えない。別の展示図録「海にいきる」（同博物館編 2011）や『FUKUOKA STYLE Vol.12特集「西海の捕鯨」』（福博総合印刷 1995）にも多くの近世の鯨絵巻や関連絵図が掲載されているが、鯨骨鳥居は見えない。

現時点では、鯨の図説や捕鯨操業地を描いた近世の絵図からは、鯨骨鳥居は見えず、その存在を示す間接的な証拠も得られない。現存するすべての資料に目を通したわけではないが、鯨図説や物産図は宣伝の役割があり、鯨骨鳥居のような目立つものがあれば積極的に図示した筈である。さらに、今日発行される捕鯨関係の出版物は近世の事物を重視したものが目立ち、もし鯨骨鳥居が描かれた近世絵図が見つければ、捕鯨文化の象徴や証拠として掲載するであろう。これまでのところ、捕鯨文化に関する書籍や報告には、近世絵図から鯨骨鳥居を見つけたとする記述や記載がないという事実は、鯨骨鳥居が近世には存在しなかったことを示唆している。

なお、近世に鯨骨が神社に奉納された例としては、愛媛県四国中央市川之江の八幡神社に奉納されたコククジラの肩甲骨を用いた絵馬が知られており（進藤 1968, Omura 1984）、鯨の骨を神社に奉納すること自体は存在した。

3) 戦前の鯨骨鳥居は鳥居の場所に位置しておらず、鯨骨鳥居は戦後の建立

戦前に鯨骨門が鳥居として用いられた事例が知られるのは、樺太や台湾、色丹島などであり、外地や離島、そしてその地域のなかでも遠隔地にあたる場所である。このうち写真から建立場所

と本来の鳥居との位置関係がわかる例は、色丹島の斜古丹神社（図6-13）と台湾南端の鵝鑾鼻神社（図6-14）の2例あり、いずれも本来の鳥居の外側に置かれている。つまりこの2例は神社の聖域の外側に置かれた奉納品と見ることができる。これに対し、樺太の札塔の恵比寿神社は社殿のすぐ近くに鯨骨鳥居が置かれていた（図6-15）。写真に本来の鳥居は見えないが、鯨骨がある位置は通常の鳥居としても社殿に近すぎる場所である。2016年7月におこなった現地調査では、神社は急な斜面を数十メートル登った狭い平坦な場所にあることがわかり、鳥居あるいは石灯籠の基礎部分が写真に写る鯨骨鳥居よりも社殿から離れた場所から見ついている。よって、この鯨骨鳥居の位置は、神社の結界の内側にある神聖な領域に位置する。札塔の集落は中知床岬に近く樺太のなかでも辺地にあたりことから、当時の通例から外れた奉納位置でも許される状況にあったのかも知れない。なお、戦前の鯨骨鳥居の建立年代については、その地域の捕鯨事業場の設置後とすれば、東洋捕鯨事業場長必携の記録から（宇仁 2016）、斜古丹神社は1917年以降、札塔の恵比寿神社と鵝鑾鼻神社が1920年以降となる。

戦後に建てられた鯨骨鳥居では、南三陸町の飯綱神社と太地の恵比寿神社（図6-16）は社殿に上がる階段の下に置かれている。飯綱神社の鯨骨鳥居は1954（昭和29）年に南極捕鯨の記念として奉納されたものであり（川島 2009: 122）、太地の恵比寿神社は前述のとおり1985年に設置された。これらは本来の鳥居の位置に鯨骨鳥居が置かれた例と考える。他方、有川の子神神社は本来の鳥居よりも社殿側に建てられている（図6-17）。子神神社のものは、近くの鯨賓館ミュージアムによると1973年に日東捕鯨が寄贈したものという。地方史の記述を見ると、『有川町郷土誌』（有川町郷土誌編纂委員会 1972）には、海道神社は独立した項目としては記載されず、神社の項目で最初に現れる祖母君神社の終わり近くに「合祀する海童神」として述べられるだけで、鯨骨鳥居への言及はない。同書に列記された21の神社には、鯨骨鳥居の記載は見られず、有川に鯨骨鳥居が1972年以前に存在していたことを示す資料は得られなかった。なお、石浜飯綱神社の鯨骨鳥居は2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震の津波（東日本大震災）によって大破し現存しない。

4) 欧米にも鯨骨門が存在する

鯨骨門は海外にも存在し、ノルウェーをはじめ、欧米の捕鯨操業地でも鯨骨門 whale bone arch が見られる。ノルウェーでは最北部フィンマルク Finnmark 県バツソー Vadsø の捕鯨事業場を描いた1886年の木版画 (Ellis 1991: 262)、南部ベストフォル Vestfold 県テンシュベル Tønsberg の1906年の写真に見える (Johnsen 1959: 318)。また、現在でもノルウェーの捕鯨基地として著名なサンネフヨル (サンデフィヨルド) Sandefjord の市役所の前には記念碑として建てられていることを2016年11月に現地を確認している。ノルウェーの捕鯨者が根拠地を作ったイギリス北部スコットランドの Lewis 島 Bragar の1920年の写真にも写っている (Johnsen 1959: 576)。また18世紀後半から19世紀前半のイギリス捕鯨の基地となった Whitby など北東ヨークシャー Yorkshire 地方の各地でも見られ、写真も残っている (Spence 1980: 67)。また、米国アラスカ州バロー Barrow には下顎骨の鯨骨門が記念碑として建立されている。北極圏に居住するエスキモーはホッキョククジラの骨を住宅の建材としたが、欧米でも小屋の部材に用いた例が写真に残る (Spence 1980: 67, 122)。

いずれも下顎骨の先端部を上にして関節部を地面に置き、左右の先端部は空中で結合したアーチ型をしている。

5) 鯨骨門から鯨骨鳥居に変化した

本研究で把握している最も早い時期の日本に関連した鯨骨門は、ノルウェー人砲手が撮影した長崎捕鯨の長生浦事業場の写真に見える鯨骨門である (写真2-7)。2章で述べたとおり、この事業場はロシアの事業場をそのまま用いた可能性があり、鯨骨門も19世紀のロシア企業時代に建てられたものかも知れない。撮影時期は長崎捕鯨が東洋捕鯨に合流する1909年以前の大韓帝国の時代である。同時期の1907年に長崎県主催により長崎市で開催された第2回関西・九州府県聯合水産共進会でも鯨全身骨格の展示資料の入口に鯨骨門が立てられていた (第二回関西九州府県聯合水産共進会事務所 1909)。1910年に撮影された東洋捕鯨鮎川事業場にも鯨骨門が見える (写真2-16)。これらの鯨骨門は左右の下顎骨が頂点で接するアーチ型であり、神社や鳥居とは無関係である。日本で早くに見られた鯨骨門は、捕鯨事業場または博覧会の展示会場に建立されていたことが明らかである。

鯨骨鳥居の形状についても同様で、戦前の写真に記録された1900-1910年代の鯨骨門や1920-1930年代の鯨骨鳥居は、下顎骨の先端が接しており whale bone arch の形状を維持している（図6-20）。これは鳥居というよりもアーチ型というのがふさわしい。それに対し、左右の骨が先端を接することなく離して立てられた、つまりより鳥居らしい形状で建立されたものは、有川
の海童神社と太地の恵比寿神社、歌津の石浜飯綱神社、大阪市東淀川区の瑞光寺などで、いずれも1970-1980年代に建てられた鯨骨鳥居である（図6-21）。この形状の変化は、戦前は鳥居としてよりも鯨骨門という奉納品として認識されていたものが、戦後になって鳥居として認識されるようになったという認識の変化を示唆している。

まとめ

以上のように、鯨骨鳥居を近世以来の伝統的な風習とする証拠は得られず、逆に、ロシアの捕鯨会社から得た朝鮮蔚山では1900年代初め、鮎川では1910年に、すでに捕鯨事業場に鯨骨門が存在していたことは、鯨骨門が近代捕鯨とともに西欧から、おそらくはノルウェーの捕鯨者からもたらされた習慣であることを示唆している。近世には鯨骨鳥居は存在せず、鯨の下顎骨を鳥居として用いるのは日本独自の事象ではあるが、西洋起源の事物を日本の習慣に応用して生まれた近代の創作である。近代においても日本的伝統が生み出されている事例のひとつといえる。

それにも関わらず近世に起源を求めようとするのは、日本の捕鯨について外からの影響を排除した日本独自の文化として喧伝する営みである。それよりも現実に残る近代沿岸捕鯨の産業遺構を保存することが重要である。

6章 近代沿岸捕鯨の遺産と歴史的意義

表6-1 捕鯨に関する指定文化財等

	重要文化財	重要有形 民俗文化財	重要無形 民俗文化財	国指定史跡	県指定 文化財	記録作成等の措 置を講ずべき無 形の民俗文化財	重要 文化的景観	登録 有形文化財	日本遺産	漁業漁村の 歴史文化財産 百選
網捕り捕鯨	1	2	1	1	7	2	3		1	5
突き捕り捕鯨		1								
小型捕鯨					1					1
大型沿岸捕鯨								1 ^{*1}		1 ^{*2}
母船式捕鯨										2

*1 蜂谷ビル（旧東洋捕鯨株式会社下関支店）（山口県下関市）、*2 ノルウェー式捕鯨を操業した原真一顕彰碑（長崎県新上五島町有川）



図6-1 北海道東部の浜中町に残る日東捕鯨霧多布事業場の斜路（2014年撮影）



図6-2 宮城県石巻市の東洋捕鯨鮎川事業場の跡地は鮎川捕鯨が引継ぎ、斜路の一部が海中に残る（2017年撮影）



図6-3 東洋捕鯨 [紀伊] 大島事業場の跡地には1940 (昭和15) 年に皇紀2600年記念の鯨供養碑が建つ (2015年撮影)。右はアンドリュース撮影の骨置き場 (写真6-1) #27352 American Museum of Natural History Library



図6-4 東洋捕鯨 [土佐] 清水事業場の跡地は造船場となった (2013年撮影)。右はアンドリュース撮影の事業場 (写真6-2) #26785 American Museum of Natural History Library



図6-5 戦後、ソ連時代に撮影された捕鯨事業場。キャプションは色丹島となっており、建物などから斜古丹事業場でよいと思われる (サハリン州郷土博物館常設展示)



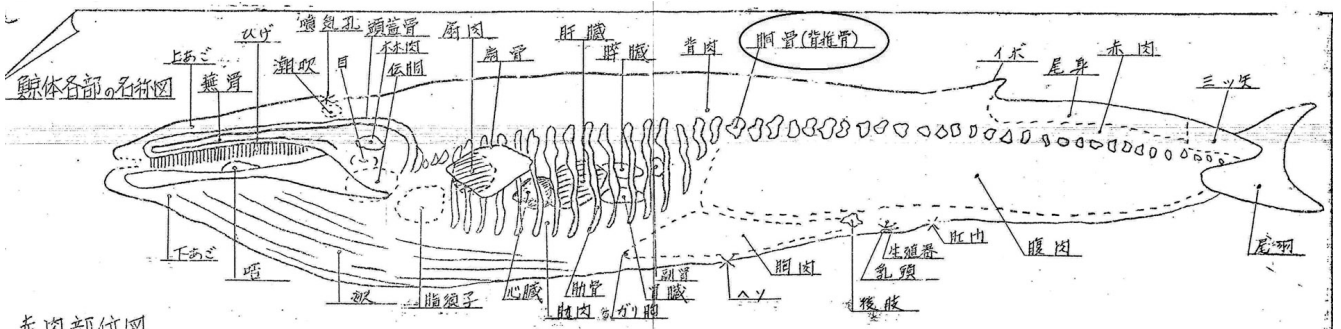
図6-9 大韓民国の黒山島では東洋捕鯨の事業場跡が鯨公園として整備されている



図6-10 済州島西帰浦には遭難した東洋捕鯨の電気丸 [いなづま丸] の「遭難追悼之碑」が残る



図6-11 台湾南端の南湾に残る引揚げ栈橋の跡。東洋捕鯨台湾事業場の跡地かも知れない



本河部作図
 図6-12 捕鯨母船第三日新丸で解剖作業員が用いた名称を記した図。上部に肋骨と見える。1989年に収集されたもの



図6-13 色丹島の斜古丹神社の鯨骨鳥居（田中・大野 1940）。本来の鳥居の外側に立つ



図6-14 台湾の鵝鑾鼻神社の鯨骨鳥居（絵葉書、勇魚文庫蔵）。本来の鳥居の外側に立つ



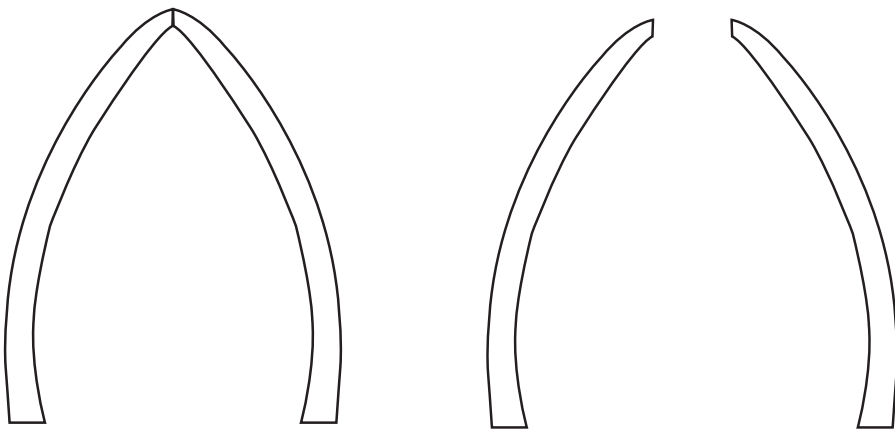
図6-15 樺太は札塔の恵比寿神社の鯨骨鳥居（樺太庁 1936）。社殿のごく近くに立つ



図6-16 和歌山県太地の恵比寿神社の鯨骨鳥居（2018年9月撮影）。社殿に向かう階段の前に立つ



図6-17 長崎県有川の海童神社の鯨骨鳥居。本来の鳥居の内側に立つ（2012年10月撮影）



左：図6-20 1900-1910年代の鯨骨門や1920-1930年代の鯨骨鳥居。下顎骨の先端が接しており whale bone arch の形状を維持している
 右：図6-21 1970-1980年代に建てられた鯨骨鳥居。上部が離れ、より鳥居の形状に近くなった

終章 戦前の沿岸捕鯨が現在の鯨に関する常識の多くを形成した

沿岸捕鯨によって生み出された知識と習慣

本論で見てきたとおり、日本における近代の沿岸捕鯨はノルウェーから輸入した技術と人材で始まり、昭和初期までノルウェー人砲手が就業し、辺地で家族を持つ者もいた。捕鯨船の大多数はノルウェー製であり、一部の砲手は現在のカナダ太平洋岸ニューファンドランド州、当時の英領ニューファンドランドでの操業の後に日本企業に売却されている。沿岸捕鯨は新たな漁場を求めて、台湾や小笠原、黄海や千島にまで根拠地を設け、関東州や第一次世界大戦の後にはドイツ敗戦を受けて青島での事業許可を得るなど、大日本帝国の末端にまで事業を展開した。ノルウェー人砲手も1930年代初めまで遠隔地を中心に在籍し、地域との関わりも生まれていた。鯨肉は国内向けの商品だったが鯨油は海外に輸出され、輸出日本の近代沿岸捕鯨は国際的な産業で、外に向かった外に開かれた産業だった。そのなかでアメリカ人研究者が捕鯨企業の協力を得て調査を実施、持ち帰った標本はニューヨークや首都ワシントンDCで常設展示され、一部は現在も人々の頭上にある。日本国内で科学研究の進展は遅々としていたが、混乱を来す産物名から生物学的種概念による共通和名が用いられるようになった。ところが、太平洋戦争の敗戦によって沿岸捕鯨の主要な根拠地があった千島や朝鮮を失うと、近代捕鯨の国際性や海外拡張の過程は忘れられ、捕鯨は日本固有で戦後の国土で完結した産業という物語が流布されていった。

本論で知りたかったのは知識と経験の断絶の向こう側にある戦前の事実である。よくわからなかった沿岸捕鯨の実体を追求すると、現在の鯨に関する知識や習慣などの常識がこの時代に形成されたことがわかった。常識の面では、生物学的種分類に応じた和名が標準化されたこと、鯨の赤肉が下品なものではなく近代取り入れられた洋食や和風惣菜「近代和食」として食されるようになったこと、この2つが戦前の沿岸捕鯨で確立され現在に及ぶ大きな影響であった。現在の鯨に関する知識や鯨肉食などの文化はこの時期に生まれたものが大きく、東洋捕鯨を中心とする戦前の沿岸捕鯨が現在の鯨に関する常識の多くを形成したのである。被害者意識で始まり終わる捕鯨認識

近代の日本では、捕鯨に対する認識は被害者意識が目立っていた。一つは持続的な資源利用を続

けていた網捕り捕鯨がアメリカ捕鯨船の乱獲により不漁となり、ついには太地の捕鯨者100名以上が犠牲となった1878（明治11）年の「大背美流れ」を引き起こしたとするもの。網捕り捕鯨の伝統はアメリカ捕鯨によって絶やされてしまったという意識。二つ目は、商業捕鯨モラトリアムによって大型沿岸捕鯨や母船式捕鯨が廃業し、地域に根ざした小型捕鯨業者も転業や雇用者の解雇を余儀なくされたという商業捕鯨の終わり。こちらも日本独自の伝統を引き継いだ産業が国際世論と政治工作によって廃業となり地域経済と文化が被害を受けたとする。どちらも国内の世論や意見では太刀打ちできない国際情勢、はっきり言えば欧米の自己中心的な振る舞いが日本の伝統産業を破壊したという被害者意識で記憶されている。

日本近海に欧米の捕鯨船が操業していたことは明治の世では記憶に新しく、ロシアの捕鯨業が巨大な利益を得ていることが知れ渡ると、再び日本海にやってきて同じように取り尽くすのではないかと真剣に憂慮された。この事態に自らもアメリカ式捕鯨を試験操業した関澤明清は「我が日本海の鯨は、日本人にて業を興し日本人にて捕り尽くし日本国の利益を謀らす」と述べ（関澤1887）、外国人が捕る前に捕り尽くしてしまえと檄を飛ばす。その10年後の近代的な捕鯨を説く『捕鯨志』（大日本水産会 1896: 3）も同様に、「安政以降我が九州捕鯨場のがぜん衰滅倒産の悲境に沈淪〔ちんりん：深く沈む〕するゆえんを尋究するに我が捕鯨者の最も貴重せる脊美鯨なるものは彼欧米人の鯨ひげをもって尊重する「バレナ」鯨族中の尤〔ゆう：優れている〕種にしてこれを捕獲することすこぶる苛酷なりしより、ほとんど脊美鯨族を殲滅せり。これ我が対州壺州ら脊美鯨漁場の倒産をいたせる原因なり」。これらの言説はアメリカ捕鯨によって日本の捕鯨が壊滅的な影響を被ったという被害者意識が強く出されたものであり、関澤の意見は将来起こる可能性がある被害を事前に防御しようというもので、やはり被害者意識に駆り立てられた内容である。そして被害者意識は捕られる前に捕り尽くせという暴論に至り、その後の日本の近代沿岸捕鯨は捕り尽くすことを一部で実現してしまった。

国家間の出来事を扱う大きな歴史に対し、生活者レベルあるいは地域の視点で描く歴史記述がある。そういった民衆史の視点での近代捕鯨は、地域の外から資源を取奪して住民の生活を破壊する外来資本と敵視する。典型例に、青森県鮫（現・八戸市）で1911年に発生した東洋捕鯨焼き討ち事

件を扱った著作がある（石田 1978）。近代沿岸捕鯨を実体不明のまま大会社や資本として扱い、具体的な事業の様子や当時の生活に与えた影響などは描かれない。

国家や産業レベルからすれば強大な外国に対する被害者意識、民衆史の視点では捕鯨企業に対する被害者意識、これら既存の枠組みのいずれも見落としてきたのは、結局は沿岸捕鯨の事実追求であった。

歴史的な自然として鯨を見る

以前から知られ本論でも見てきたとおり、本州沿岸に回遊していたシロナガスクジラを絶やしてしまったのは日本の近代沿岸捕鯨である。それに対し、近世の網捕り捕鯨は資源を持続的に利用し自然と共生してきたという流布された話がある。日本で近代捕鯨が始まったとき、既にセミクジラは捕り尽くされた状況であり主因はアメリカ捕鯨と目されている。しかし、近代捕鯨の導入当時からザトウクジラの捕獲は少なく、1910年代には「めずらしい」という記述が日本の太平洋側の鮎川と紀伊大島、朝鮮半島南部の日本海に面した蔚山の捕鯨事業場で調査をおこなったアンドリュースの調査日誌、そして網走の「大正網走懐旧記」に見える（菊池 2004: 112）。アメリカ捕鯨はザトウクジラを積極的に捕獲しておらず、近代捕鯨開始直後のザトウクジラの少なさは網捕り捕鯨が原因だった可能性すらある。同様に、網捕り捕鯨によるセミクジラへの影響は計量されていない。近世の網捕り捕鯨が持続的な資源利用だったという証拠は得られておらず、その言説は神話に近いものがある。

2001–2012年の12年間に日本の主要四島周辺で記録されたミンククジラを除く大型ヒゲ鯨の座礁や漂着、迷入や観察は、セミクジラ15件、コククジラ9件、ザトウクジラ96件、ナガスクジラ12件、イワシクジラ1件、ニタリクジラ12件、ツノシマクジラ5件であり、ホッキョククジラとシロナガスクジラは記録されず、マッコウクジラは113件であった（石川ら 2013）。ザトウクジラは近年もっとも観察が多い大型鯨類となっており、個体群が回復してきたことがうかがえる。その後、ホッキョククジラが知床半島沿岸で観察され、2018年8月5日には神奈川県でシロナガスクジラの座礁が初めて記録されている。網走沖のオホーツク海で2011年から本格的に始まった観察事業船では2013年からナガスクジラの群れが観察されるようになり（宇仁ら 2014c）、その後も毎年観察が続いている（あばしりネイチャークルーズ公式ツイッター <https://twitter.com/abaNaturecruise>)。

本論で見たとおり1910年以前の日本の沿岸には年間数百頭が捕獲できるほどにシロナガスクジラが回遊していた。現在、僅少だったザトウクジラの個体数増加が目立つ一方、シロナガスクジラの回復が遅いことは南極海と同様である。日本近海の鯨類個体群の将来構想という夢物語であるが、将来的にはシロナガスクジラを回復させることも含めて考えたい。

自然や野生動物といえども人間による影響を受けてきた歴史的存在である。このような歴史を持つ存在、植生や野生動物を歴史的自然として見ることは、将来の国土や環境の設計にとって、それらが暮らしや文化に与えてきた役割を自覚するために必要なことと考える。

最後に生物産業学という視点で捕鯨を見れば、それは鯨類の野生個体群の消費的利用である。鯨類の保護が支配的な国際環境のなか商業捕鯨を再開した現在、捕鯨を続けるには反対派への説明、そして賛成派には納得が不可欠となる。本論は、説明するにも納得するにも事実記載が不足していた戦前期の近代沿岸捕鯨の実態と文化的影響について一定程度明らかにしてきた。捕鯨という特殊な産業について、日本固有の伝統文化に正統性を求める視点に対し、具体的な事実発掘から近代の捕鯨について再評価する材料は提供できたといえる。それは捕鯨についての賛否を問わず、捕鯨産業の実態と現在におよぶ影響についてより深い理解をもたらすものとする。

付録

付録1 東洋捕鯨事業場長必携の内容

付録2 R.C. アンドリュースの日本と朝鮮での行動

付録3 近世鯨類学から近代鯨類学へ

付録1 東洋捕鯨事業場長必携の内容

1) 東洋捕鯨事業場長必携と資料価値

東洋捕鯨事業場長必携（以下、場長必携）は、本論の議論の基本資料であるので、記載事項や範囲について説明しておく。

場長必携は、おもに東洋捕鯨の名前が入った社用便箋に記されており、後年の記録や筆写では日本水産の名入り便箋、各期間で名前のない便箋や白紙の用紙の使用も見られた。現在までに場長必携の簿冊が見つかった事業場の名称は、北から順に、樺太、北千島〔幌筵島／パラムシル島〕、梅浦〔うめうら、新知島／シムシル島〕、紗那〔しゃな、択捉島〕、単冠〔ひとかつぶ、択捉島〕、斜古丹〔しゃこたん、色丹島〕、網走、霧多布〔きりたつぷ〕、広尾、室蘭（以上、樺太千島北海道）、鮫、女川、鮎川、桑浜、釜石、大島〔以降、紀伊大島〕、串本、仙崎（以上、本州）、大河内、比田勝、壱岐、呼子、有川、富江、椀島〔かぼしま〕、黄島、甌島〔こしきじま〕、細島、外の浦、久根津〔奄美大島〕（以上、九州地方）、楡津〔ゆうしん〕、長箭〔ちゃんぜん〕、九龍浦〔きゅうりゅうほ〕、蔚山〔うるさん〕、濟州島、大黒山島、大青島（以上、朝鮮）、関東州〔海洋島〕、台湾〔恒春〕、小笠原〔父島のちに兄島〕の40事業場である。地域的な内訳は、樺太1、千島5、北海道4、本州8、九州12、朝鮮7、その他3となる（表1-1、図1-1）。この中には、近くに移転して名称を変更したもの（桑浜から釜石、鮎川から女川、比田勝から大河内、細島から外の浦）、一体的に運用され事実上同一個所の事例（紀伊大島と串本、年代によっては蔚山と大河内）が含まれる。地理的には、北海道以北と九州や朝鮮に多く、本州が少なく、四国のものは見られない。これは2章で述べるとおり実際の事業場の状況を反映している。明石編（1910）に収録された事業場の位置図と比べると、荻浜、銚子、能登、二木島、太地、宍喰〔ししくい〕、

甲浦 [かんのうら]、土佐清水、新甫 [しんぽ]、巨済島 [きよさいとう]、笠原 (1950) に記載なし] の10個所の事業場が見つからない。表題に「写し」と書かれた簿冊もあったが (図1-2)、その文字がないものと同様に扱った。小名浜事業場については「小名浜事業場一件綴」が見つかり、宇仁 (2015: 19) に示されたが、表題と記述から場長必携とは別内容の綴りと判断し、本論では除外した。黄島については、場長必携に加え類似した内容の「黄島事業場記録」という名の綴りもあった。これは場長必携としてはカウントしていない。

場長必携は現在も東洋捕鯨の流れを汲む日本水産株式会社が保有し、社内文書の位置付けである。公共物ではなく私文書であり、内容も個人情報を含んでいるため一般公開はされていない。

2) 場長必携の記載内容

場長必携の記述は「例言」から始まる27項目である (表1-2)。その内容は、場長 (または主任事務員) が赴任のときに本店や出張所から交付を受けて必ず携行し [毎年の] 引揚げ時に返還する、場長は秘密書類として厳重に保存し任期中の事件を記録し追加する、場長の転任時には後任者に引き継ぐ、重要な場所に出張した者がいるときはその派遣地分も報告すること、などである。以下、27項目の内容の概要と特徴的な事例を記す。

なお、東洋捕鯨時代の社用便箋の一部に事務所所在地が記されていたので紹介しておく。大正の年号が入った用紙では、本店：大阪市西区川口町14番地乙地、朝鮮支店：京城府南米倉町205番地、東京出張所：東京市赤坂区森町一丁目13番地、下関出張所：下関市岬之町王司山第五番の14、博多出張所：福岡市博多海岸通五丁目15番地となっていた。大正の年号が入った用紙の一部と昭和が入った用紙では、東京出張所の住所のみ異なっており、東京市京橋区五郎兵衛町18番地だった。明治の年号が入った用紙や、当初の本社所在地である大阪市西区靱 [うつば] 北通二丁目18番地が記された社用便箋の使用は見つかっていない。

1) 沿革略

各事業場の設置について述べた項目である。記述内容はばらつきが大きく、許可年月日など形式的内容にのみに留まるものから、他の事業場の設備を移設した、何年何月に社員の誰がどの捕鯨船

で現地を視察して試験操業で捕獲した、といった詳細な活動を述べる例まで、さまざまな記述が見られた。会社合併により得た事業場についても、前身会社の名称を示すだけのものから、前身会社による設置経過を記したものであった。白紙でまったく記述のない事業場もあった。

2) 事業場許可年月日並ニ期間

捕鯨根拠地の設置の出願と許可、会社の統合や名称変更など、許認可書類の日付や内容が記されている。ここでの許認可の期間と実際の操業期間とが不一致の場合も見られた。

3) 操業区域並ニ其ノ期間

操業海域と漁業権の期間に関する許認可書類が示されていた。操業海域の記述は雑ぱくであり、たとえば海域の区切りが明示されていない、沖合への制限距離が記されていない、漁期について何月上旬などといった表現が見られる。たとえば、紀伊大島の操業海域は「志摩国大王崎附近より紀伊国比井岬に至る沖合一円にして、漁期は毎年10月より翌年4月上旬となりおりしが、明治45

[1912]年4月30日閏年操業のことに漁期延長かた出願し、大正元 [1912]年8月2日付農商務省指令水第4489号をもって許可を受けたり」、細島は「日向灘一円および土佐海にわたる海面を操業区域とし漁期日は毎年10月初旬より翌年5月下旬までなり」、鮎川に至っては「操業区域は最初出願の当時別に記入なし。漁期は最初毎年5月上旬より8月下旬までなりしも、明治44年12月さらに毎年1月1日より12月末日までに漁期を延長せり」といった具合である。地域名称には旧国名が用いられていた。

4) 税金、割賦金、及負担金

現れる税金は、捕獲1頭あたり定額の県税の捕鯨税、それに付加される町村税、そして地稅で、1930年前後から宅地稅、家屋稅、林野稅、船稅、小船稅、金庫稅などが記されていた。それぞれの税の初出年度や金額は事業場によって異なる。税額など変更されるたびに追記されるため、ページ数は多い。実際の法令は未見であり調べていない。いずれにしてもセミクジラの税額が極めて高い。

5) 対地元、漁業組合等トノ報酬条件及摘要

既存の小規模漁業者や地域住民との円滑な関係構築のために行った金銭的な対応が記されてい

る。近代捕鯨の事業所の設置に対して、鮫や能登などでは反対運動が生じた経緯もあり（石田1978）、迷惑料とも受け取れる漁協などへの報酬の提供、学校や神社、地域の祭への寄付などをおして、地元との良好な関係を維持しようとしたものと想像される。寄付先には小学校や神社、地元水産会に捕鯨船1隻あたりの賦課金の支払い、などが見える。

6) 公有水面使用面積、料金及之レカ許可年月日期間

ここでの公有水面の使用は、半恒久的に設置棧橋などが海面、場合によっては河川敷地や堤防を占有する面積を意味し、その面積に応じた使用料金の支出が記されている。支払先は記されていない。この項目には、営林署長あての国有林の使用願い、道路敷地の占用許可願い（提出先不明）なども含まれている。

7) 汽機汽缶、検査期日有効期間及取扱主任者

汽缶、つまりボイラーの検査は毎年行なわれている。対象となった型式は、紀伊大島では船用煙管式汽缶、陸用煙管汽缶、コルニッシュ型、横型多管式などが見える。購入先や製造元、品番、価格などは記述がない。なお、汽機はボイラーの蒸気を動力にした蒸気機関である。

8) 敷地及建物貸借関係

敷地の貸借や公有水面の埋立て、公有水面占有の返還、建物の購入記録などである。その用地の使用目的として現れるのは、鮎川では千筋工場、乾燥用敷地、野炭場、用水笕、塩釜、事務所、水管、船員寮などである。また記述からは、東洋捕鯨の製品の販売会社であった伊佐奈商会についても、事務所や敷地が日本水産に編入されていたことが記されている。

9) 設置ニ関シ尽力セシ先方

事業場用地の土地所有者、町長や村長、地方議会議員などの名前のほか、肩書きのない個人名も見える。朝鮮の済州島では、済州島司や同支庁長そして西帰浦漁業組合長に並んで、朝鮮人である地元の右面面長〔村長〕の名前があった。

10) 開業当時ノ披露列席者氏名

ここでも地域の名士や有力者のほか、上級公務員が名前を連ねている。網走では、1916（大正5）年5月の開業披露宴の来賓として、裁判所判事、検事、網走支庁長〔道庁の地方事務所〕、典獄

[刑務所長]、網走警察署長、網走町長、同助役、[地元]道議会議員、町会議員などと記されている。

11) 每期開始ニ際スル披露

こちらは毎年の事業開始時の宴会である。前項と同様の役職が見える。紀伊大島では、村役場、巡査駐在所、郵便局、協議会長、魚商組合、取引銀行、医師、大島区議員などとなっている。多く見られた招待者は、村長、役場、駐在所、郵便局、区長[特別区や政令都市の行政区ではない]、議会、駅長、郡長などである。開催されない年度や、まったく開催のない事業場もあった。

12) 每期引揚ケニ際シ挨拶、開宴セハ其案内先、饗応ノ程度其上回訪スヘキヤ単ニ回訪スルノミナレハ其先方等

前項と同様の役職者名が記されている。項目名は挨拶となっているが、前項と同様の役職者を招待した宴会が開かれたという記録も見える。同一地域に事業場を持つ同業者も招待されることもあった。

13) 每期ノ開始及引揚ケ月日

年度ごとの開始と引揚げの年月日が記されている。場長必携の記述項目のなかで、継続期間が最も長い項目となっている。開始と引揚げの月日が年によって異なる事業場が普通に見られた。

14) 期別、月別、種類別等ノ捕獲

捕獲記録は、年度毎に作表された月別種別の捕獲記録である。記録が得られるのは最も早いもので東洋捕鯨設立の1909(明治42)年度である。表は、各事業場共通で、背美(脊美)、白長須、長須、座頭、抹香、鯨、克の7種で、戦争や資源枯渇などの理由で捕獲数が僅少になった場合を除き、この順で作表されている。また、少数ながら「番外」「号外」と注記された数字が現れることがあった。これは標準の表には含まれないシャチやツチクジラ、ミンククジラなどで、「番外」などの注記とともに記録されていた。「番外」のなかには少数だがマッコウクジラを現す注記があり、これは小形個体と想像される。番外が現れるのは、事業場の操業年数が経過し捕獲数が相当に減少してからであった。同様に経年的に捕獲数の減少が著しくなると、捕獲ではなく観察数が表中に記される場合も見られた。

特徴的な事例に触れると、鮫事業場の初年度1911年度の捕獲数で、白長須25、長須231、座頭1、鰻24、計281頭であった。月別では6月に長須75頭、7月は白長須4、長須71、計75頭であった。釜石では1924年4月に克鯨1頭が記録されている。戦後になるが紀伊大島の事業場の終末は

昭和39 [1964] 年度 本年度捕獲なし (参考) 5月4日～8日 1c, 3c, 8c, 52c, 53c. 逐次当沖合調査するも海淋しく発見なし。後発船 2c, 5c, 6c 7月4日～8日当地沖合調査するもいずれも発見なく終わった。昭和40年度 事業開始に至らず

という状況で、資源が消滅した状況がありのままに記されていた。

15) 社長若クハ重役出張ノ際ニ於ケル事業場員、事業夫船員及地方有志者ニ対スル振合

「振合」は社長や重役が事業場に出張した時に振る舞われる船員や場長、その他の雇用者や事業夫長、そして事業夫への「酒肴料」である。1927 (昭和2) 年にアヴァロン丸哀悼碑除幕式に社長が鮎川へ出張した事例では、1人あたりの支給額は上級船員 [砲手や船長、機関長] 2円、下級船員1円、場長5円、本務 (雇員) 2円50銭、事業夫長1円、事業夫50銭だった。支給対象はグループ何人と複数人のこともあった。女性への支給は、戦後1950年の炊事婦が最初に現れ、金額は場員や作業員、捕鯨船船員と同額の1人100円だった。

16) 特ニ連絡ヲ採ルヘキ官公吏及有志者ノ重ナル先方

「9) 設置ニ関シ尽力セシ先方」「10) 開業当時ノ披露列席者」に重なる人物名が主体である。紀伊大島では、串本に所在する海軍の出先機関や事務所が後に書き加えられている。

17) 定例ノ寄附

この項目は「5) 対地元、漁業組合等トノ報酬条件及摘要」に記載した事項の再掲も含む。多くは、小学校、神社やその祭、運動会などへの寄付であった。紀伊大島では、「元東洋漁業会社よりの慣例として鯨鯢の供養として盆・正月三回又は二回、回向の為に金一円宛寺院に布施す」とあった。

18) 臨時ノ寄附

神社例大祭や運動会への寄付が、この項目に記されることもある。記載で見られたものに、派出所の改築費用、地元新聞社、消防組、水難救済会、道路修繕費、警察署演武場建築費、消防ポンプ

購入費などがあつた。

19) 事業引揚ケノ際謝礼先

「12) 每期引揚ケニ際シ挨拶」と異なり、実務的相手先が見え、謝礼は現金である。鮎川の例では、国運送店、塩釜ホテルの2件であつた。

20) 変事

自然災害や伝染病、遭難、その他の事件や事故が記されている。広く見られたのは1918年のスペイン風邪の流行であつた。

21) 歴代ノ場長及場員

文字通り、事業場の場長の氏名、数名の場員の氏名が記されている。「13」每期ノ開始及引揚ケ月日」とともに、記録期間が長い項目である。「場員」の意味が不明であるが、同一人物が時期において再出すること、後に場長として現れること、別の事業場へ「転任」が見られることから、地元雇用者ではなく、事業開始とともに赴任する社員と想像される。

22) 配属ノ船名及上級船員

ここに現れるのは、捕鯨船の砲手、船長、機関長の氏名である。記述からは、砲手が日本人の場合には船長を兼務し、ノルウェー人の場合は別に日本人の船長を置いていることがわかる。ノルウェー人はカタカナで記載され、同一人物と思われる名称に、複数の異なる表記が用いられている場合が見られた。たとえば、ゼンセンとジェンセン、ジャコブセンとヤコブセン、加えて濁点の有無など。ファーストネームのイニシャルが付記される場合と名字だけのものもあり、同一人物かどうか判別に悩む記述もしばしば見られた。記録が得られるのは1914（大正3）年度からがほとんどであるなか、長箭は1909年度から、黄島では船名のみ1910年からの記録があつた。

23) 配属ノ事業夫及常雇ノ延人員

年度ごとの事業夫の人数が1か月平均で示されている。事業夫とは、記述から解剖夫と思われる。人数は事業場、そして年度によって異なり、記録が得られる1914-1925（大正3-15）年度を見ると、鮎川では22-48人、紀伊大島では25-45人、細島2-36名、蔚山21-68名であつた。氏名や出身地はほとんどの場合記述がない。

24) 官公衙へノ重ナル願、届、報告、及陳情（運動、陳情其他之レガ経過事情等を詳細スヘシ）

鯨の捕獲届けその他の提出先や提出日、その他の事務手続の注意事項が記されている。

25) 県令、法規又ハ規約ノ大要並ニ之レカ改廃ノ概要

関連法規の改定や廃止を記す項目だが、記載は少ない。

26) 漁場ノ移動（天候、水温潮流等ノ関係ニテ、当該方面毎期漁場ノ変異移転ノ詳細ナル状況及操業月数等）

発見した鯨群の位置や頭数、捕獲位置やその変化を方位や距離で記している。しかしながら、記載内容が概略的であり、記述から定量的な分析を行なうのは困難と考える。記述内容で興味深いものを示すと、樺太事業場の1925（大正14）年度の記録に「事業開始前即チ六月上旬（工事中）ハ湾内沿岸ニ於テ座頭及ク鯨多数游泳セルヲ見ル」、翌1926年度では「本期ハ漁期繰上げ五月十五日事業再始湾内ニハ多数クノ来游ヲ見シガ不幸流水ノ襲来ニ逢ヒ五月中殆ンド事業休止」とあるのが注目される。ただし、途中休漁年があるものの1920-1943年度の記録のうち、ク鯨への言及はこの2年のみで、残りは長須と座頭の観察や捕獲の記述となっている。

27) 其他参考トナルヘキ事項（業務連絡、奨励方法、操業解剖処理製造方法、建物の改廃修築及物資供給方法、販売、及搬出の方法、引揚後の残始末等に関スル気付意見又は研究セラレタル事項等）

さまざまな記述が見られ、記述がまったく無い冊子やごくわずかな場合もあった。特徴的なのは伝染病の状況で、1918-1919（大正7-8）年の「スペインかぜ」の流行は多くの事業場で記され、鮎川事業場では1933（昭和8）年3月3日の昭和三陸津波の被災状況が記録されている。

以上が場長必携の記載内容である。名前が示すとおり、捕鯨事業場の業務や設備、地域との関係は網羅されている一方、捕獲位置や捕獲状況、砲手の成績や捕鯨船の特徴、捕鯨砲の製造元、捕獲器具の故障といった捕獲技術に関する事項、従業員の募集先や賃金、福利厚生といった事業場での雇用関係、製品の生産高や価格、卸先といった販売に関する事項、本社や出張所の業務を含めた経営に関する事項などはほとんど知ることができない。これらの事項は捕鯨事業場長の管轄外であったと推測される。

付録2 R.C. アンドリュースの日本と朝鮮での行動

はじめに

ロイ・チャップマン・アンドリュース (Roy Chapman Andrews 1884–1960) は、1920年代に中央アジア探検 the Central Asiatic Expeditions を率いモンゴルを踏査し、ゴビ砂漠で恐竜の卵を発見した野外研究者である。高校卒業後にニューヨークにあるアメリカ自然史博物館 American Museum of Natural History (AMNH) に職を得て、技術補佐員から学芸員となり、最後は館長を務めた。その風貌と活躍から映画の主人公インディ・ジョーンズ Indiana Jones のモデルといわれる。日本での知名度は高くないが、アメリカでは自国が生んだ20世紀の探検家として高く評価されており、ふるさとのベロイト Beloit では1999年に彼の功績をたたえる「ロイ・チャップマン・アンドリュース協会」 Roy Chapman Andrews Society が設立されるほどである。恐竜で知られるアンドリュースだが、研究者としての経歴は鯨類に始まっている。日本には1910年に滞在し、東洋捕鯨の紀伊大島 (和歌山県) や鮎川 (宮城県) の事業場で調査を実施、鮎川の調査をもとにリクゼンイルカを新種として記載し (Andrews 1911a)、イワシクジラのモノグラフを出版した

(Andrews 1916a)。日本からは西回りのヨーロッパ経由で帰国の後、1911年末に再び太平洋を渡って日本を経由して1912年1月には朝鮮半島に渡り (Andrews 1916b)、南東部の蔚山事業場でコククジラを調べ (Andrews 1914)、朝鮮半島北部を横断する探検を敢行した。一般向けにもナショナルジオグラフィック誌の雑誌記事 (Andrews 1911b) や主著『Whale Hunting with Gun and Camera』 [砲とカメラで鯨を追う、以下「砲とカメラ」とする] (Andrews 1916b) を刊行し、日本の沿岸捕鯨について英語圏を中心に広く紹介した。

ところが日本では、彼が英語で発表した自国の捕鯨の報告について現在に至るまでほとんど読者がいない状況にある。さらに、AMNHには未刊行写真が多数保存されており、これらは2010年代になって初めて日本や韓国で公刊されるに至った (宇仁ら 2014a, 宇仁ら 2014b, 宇仁 2015a, 宇仁・加藤編 2017, 장생포고래박물관 [長生浦鯨博物館] 2015, 2016)。

アンドリュースは上記のとおり1910年に日本で、1912年に朝鮮での鯨類調査をおこなったが、著作のなかで明らかにされた行程は一部である。2000年代になって評伝が出版され (Gallenkamp

2001)、日本語訳も刊行されたが(ガレンキャンプ 2006: 58-59)、これら2冊は訪問地が誤って記されている。たとえば土佐清水を静岡県清水、紀伊大島を伊豆大島、宮城県鮎川を佐渡の相川といった具合である(表付-1)そこで本節では、アメリカ自然史博物館に所蔵されている手紙や写真を基に、アンドリュースの1909年夏のシアトル出発から翌1910年秋のニューヨーク帰着までの行程、1912年の朝鮮探検の行程について復元する。朝鮮探検の行程は報告に地図が掲載されているがアルファベット表記であるので(Andrews 1912c)、これを日本統治時代の漢字名称に比定した。

結論を先に述べると、アンドリュースが初めて日本に来たのは1909(明治42)年9月で、アメリカ合衆国の著名な調査船アルバトロス号 Albatross I によるフィリピン・インドネシアの海洋調査 Philippine Expedition に合流するため、シアトルから日本郵船の貨客船安芸丸に乗船して横浜に入港したことに始まる。翌1910年2月、調査を終えたアルバトロスは台湾と沖縄を経由して長崎に入港、アンドリュースは日本で鯨類調査を行うために長崎でひとり下船した。彼は、初め土佐清水へ行ったが鯨は得られずに終わったが、次の紀伊大島では12日間で8頭の鯨を調べ、次ぎに鮎川に向かい3か月で90頭近い鯨類を調査、巨大なマッコウクジラの骨格標本を得た。そして下関を出港してエジプトやヨーロッパを経由する西回りでアメリカに帰国している。日本での鯨類調査を終えたアンドリュースは、翌1911年の12月に再び太平洋を西へ横断する。アンドリュースが上司に提出した「朝鮮探検報告」¹⁾によると、ニューヨーク出発が12月3日、日本には1月1日に到着している。そして嵐のなか、1912年1月4日に九州の博多から対馬海峡を渡り船で蔚山に到着した(Andrews 1916b: 190)。蔚山では1912年2月下旬まで調査を行なった(図付-1)。

以下、やや長くなるが1909年夏から1912年2月までの行程について日付を追って記述する。なお、彼の写真を用いた捕鯨や事業場の記述は第2章で用い、彼がおこなった鯨類調査については4章で考察する。アンドリュースが20世紀初めに発表した日本の近代沿岸捕鯨の記述は、捕鯨の産業史からすれば同時代の貴重な報告である。

*1 Report of Korean Expedition, 1911-12: ANDREWS, ROY CHAPMAN Expeditions Folder III-I 1908-'15, AMNH Mammalogy Archives

1) アルバトロス号のフィリピン調査に合流する途中、横浜と神戸での一時滞在

アンドリュースが初めて日本の土を踏んだのは、アメリカ漁業局 U.S. Bureau of Fisheries の調査船アルバトロス号 Albatross I によるフィリピン調査に参加するための往路であった。アルバトロス号はフィリピン調査に向かうため、1907年10月にサンフランシスコを出港、以降調査は1910年1月まで継続した。この調査は、フィリピンのほか現在のインドネシアや香港、台湾周辺にまでおよぶ大掛かりな調査航海で、多数の魚類標本が収集された (Smith and Williams 1999)。収集資料の図版作成係として伊藤熊太郎が乗り込んでいたことも知られている (Springer 1999)。アンドリュースは1909年8月25日にニューヨークを発ち、8月下旬から9月上旬にシアトルから日本郵船株式会社の貨客船安芸丸に乗った。横浜到着が9月17日なので、旅行日数からすれば9月上旬の出港の可能性はあるが、船内で撮影された写真の日付は8月と記されている。

横浜での滞在の様子は、1909年9月21日付けで神戸に向かう安芸丸のなかで書かれた手紙²と写真から判断した。アンドリュースが博物館の理事長に宛てた「オズボーンへの報告書」³によるとアンドリュースは、1909年9月17日に横浜に到着（手紙では16日）、人力車で市内見物、夜は10マイル離れた宿で過ごし、木と紙と竹でできた家を堪能する。翌日は鎌倉に行き大仏を見学、水田の風景や村の景観も興味深く見る。市街地や田園風景を撮影。18日（土）は日光に出掛け、東照宮でたくさん写真を撮った。大雨のため東京帰着は19日（日）の午後3時になった。雨が続く20日（月）に再乗船、そして手紙を書いている9月21日は素晴らしい天気の中か岸から1マイル、[恐らく nautical mile=海里] 沖を航行。日本の人たちはたいへん礼儀正しい、と記している。手紙の冒頭に横浜で3日過ごして昨日 [=20日] 出港したとあるので、これによれば入港は17日が正しいことになる。16日というのは日付変更線を越えたことを考慮しないで書いた間違いかも知れない。

『日本郵船株式会社渡航案内』（日本郵船株式会社 1916）によれば、日本とアメリカとを結ぶ「米国航路」は香港シアトル線と神戸シアトル線の2つがあり、香港線は4隻、神戸線は3隻の船で日米間毎月3回の定期航海となっていた。ただし1916年の案内では安芸丸の名前は米国航路ではなく濠州航路に掲載されている。香港航路の場合、途中の寄港地は上海、門司、神戸、四日市、横浜、カナダのビクトリアである。「渡航案内」は日本起点の記述をしているため、シアトル発の米国航路の日本での行程が記されていない。そこで代わりに欧州航路の記述を見ると、神戸には土曜

日午後に入港し月曜日午前出港、門司では短時間の寄港とある（同: 13）。シアトルから香港行き
の米国航路も同様とすれば、アンドリュースは横浜で安芸丸に再乗船して神戸に移動、神戸では2
泊3日の碇泊となる。アンドリュースは休日を満喫し、神戸では当時外国人に Moon Temple と呼
ばれていた摩耶山天上寺、新神戸駅からすぐの六甲山の布引の滝、神戸の大仏として親しまれた能
福寺を訪れ、六甲山麓の家並みや街を行く葬送の行列も撮影した。さらに京都まで足を伸ばし、方
広寺の巨大な梵鐘、東本願寺、レンガ造りの動物園のクマの檻、清水寺、大谷本廟、豊国廟などを
訪問している。

安藝丸は神戸から瀬戸内海を西進し備讃海峡の鍋島灯台を通過（写真付-1）、日本最後の寄港
地、門司港では安芸丸に横付けされた石炭運搬船の写真を撮った（写真付-2）。大型客船に横付け
して人間がバケツリレーで搬入する石炭運搬船は広く注目されていたらしく、同様の作業を撮影し
た写真や絵葉書が存在する。日本を離れ上海を経由して香港に到着。香港からはタミン Taming と
いう船でマニラに到着している。

なお、『ドラゴンハンター』では、この最初の横浜訪問時に Yoshiwara の "Number Nine"
[九番楼] に出掛けたとする（ガレンキャンプ 2006: 51-53）。アンドリュースも著書のなかでアル
バトロス号調査に合流するため安芸丸で横浜に到着した話のすぐ後に、横浜には九番楼があると記
している。しかし、アンドリュースの文章は段落を変え "In Yokohama there was the Grand
Hotel and "Number Nine." という文章で始まり、前段の安芸丸で訪問した時とは言うておらず、
むしろ別の話題としての書き出しに見える（Andrews 1943: 52）。1909年9月の滞在時の行動や人
的つながりなどを考えると、九番楼、すなわち高島遊郭にあった「神風楼」（齋藤 1998）の話は
後年の経験と考える。なお、九番楼の所在地に関して、Andrews (1943) の目次では、
「Yokohama's Yoshiwara」と記し東京の吉原とは明確に区別している。

*2 Andrews to Allen, Sep. 21, 1909 en route to Kobe from Yokohama, S.S. Akimaru

*3 ANDREWS, R. C. 12/19/10? 8-PAGE UNDATED REPORT ON RCA'S TRIP TO FAR EAST. 1910-11

2) フィリピン調査の帰路に立ち寄った台湾と沖縄

「オズボーンへの報告書」や1910年2月1日付け台湾北部の基隆でのアレン宛の手紙⁴の記述から

經由地を推定した。フィリピンでの調査を終えたアルバトロス号は、1月21日にマニラを出発した。しかし、悪天のうえ強い向かい風に阻まれ、それが災いしてエンジンの故障もあって台湾に避難する。1月23日、まず台湾南端西側にある Kwaliang Bay、現在では南湾 Southern Bay と呼ばれる台湾南端部で2-3日を過ごし、再出発して基隆の東南にある蘇澳湾 Suao Bay に投錨、そして基隆 Keelung でも3日間滞在した。台湾避難中の調査は、野鳥の収集を少ししただけであった。南湾では、日本の役人が竹製のいかだに乗って査察に来た様子を撮影しており（写真付-3）、この様子は『The Ends of the Earth』で面白おかしく紹介されている（Andrews 1929: 108-109）。台湾南端でアルバトロス号のフィリピン調査で初めてとなる鯨、おそらく海域から推定してザトウクジラを2頭見たというのは（Andrews 1916b: 77）、南湾でのできごとと思われる。基隆では少なくとも2月1日まで過ごし、沖縄に向けて出港した。

沖縄では那覇に上陸した。ここでは生物学的な調査は何一つしなかったが、ここは自分が知る限り世界で最も興味深い場所のひとつと感じられたと記している。恐らく1日から数日の滞在の間にアンドリュースは那覇と首里で撮影をおこなっている。写真は現在30枚が保存されている（宇仁ら 2014b）。

なお、アンドリュース撮影写真の4×5判のネガ番号は、沖縄が26670-26680、台湾は26681-26691と沖縄が先になっている。現在、アメリカ自然史博物館で使用されている5桁のネガ番号がいつ与えられたのかは不明だが、アンドリュースの著書でもフィリピンのマニラから沖縄に向かい、その後、北に向かって台湾を訪問したような記述が見られることから（Andrews 1929: 108）、ネガ番号の順序の入れ違いはアンドリュースに原因があり、1929年までに生じたのかも知れない。

*4 From Andrews to Allen Feb. 1, 1910 Keelung, FOLDER II-2, 1909-'20 Allen, J. A. Corres.

3) 長崎から土佐清水

沖縄から土佐清水までの経過については、行程を記した文書が見つからない。「オズボーンへの報告書」では、沖縄を発ち1910年2月11日に、長崎に到着し知事とアメリカ領事に歓待され、下関に行って東洋捕鯨を訪問した。同社では社長も社員もアンドリュースが調査のために事業場を

訪問し、資料を収集することを許してくれた。長崎に戻り船を離れる準備をして、調査器具の多くを下関に発送、下関には2月27日まで滞在したと記している。東洋捕鯨の社員もアンドリュースが下関で東洋捕鯨の岡十郎社長と面会していることを記している（渋谷 1967: 108-111）。当時の東洋捕鯨の本社は大阪であったが、創業地の仙崎や朝鮮に近い下関支店の役割も大きく、社長が下関にしばしば滞在していたのかも知れない。

アンドリュースの著書や評伝では、長崎市内を散歩中に鯨肉が販売されているのを見て日本での鯨類調査を思いつき、急遽アルバトロスを下船したことになるが（Andrews 1916b: 77-78、ガレンキャンプ 2006: 58）、実際には鯨類調査の実施は単独の行動ではなく、知事やアメリカ領事などトップクラスの行政官が仲立ちあるいは準備をした可能性がある。ただし、アンドリュースは基隆から博物館での上司アレンに宛てた手紙でも長崎や鯨類調査の話はせずに2月最終週に横浜到着の予定とし⁵、「オズボーンへの報告書」でも、下関での東洋捕鯨への聞き取り後に長崎に戻って調査器具を船から降ろす準備を始めたと書いているので、日本での鯨類調査を決心したのは長崎到着後というのは確からしい。しかしながら、鯨類調査の発端が何であり誰の発想であったのかは不明のままである。

東洋捕鯨の協力を得て、アンドリュースが最初に訪れた捕鯨事業場は高知県の土佐清水の事業場だった（写真付-4）。『砲とカメラ』では、下関から紀伊大島に向かったと書いているが（Andrews 1916b: 78-79）、実際に向かった四国の土佐清水と書いている著作もある（Andrews 1911d: 22）。別の著作では、土佐清水では鯨の調査を目的に訪問したものの、漁期が終了間近で滞在した10日間に鯨が1頭も捕れなかったことから串本行きを勧められたと記している（Andrews 1929: 112-115）。実際、アメリカ自然史博物館では土佐清水の鯨の写真は見つかっていない。代わりに、景観や生活、人物などの写真38枚が保存されている（宇仁 2015a）。そして3月になって和歌山県南端の串本の対岸、紀伊大島の事業場に移った。

*5 前出 From Andrews to Allen Feb. 1, 1910 Keelung, FOLDER II-2, 1909-'20 Allen, J. A. Corres.

4) 土佐清水から紀伊大島、串本へ

土佐清水から串本への移動経路を記した資料は見つかっていないが、1910年3月撮影とする写真

には、国内屈指の潮の流れで知られる愛媛県沖の来島海峡の中渡島 [なかとしま] 潮流信号所の写真がある (写真付-5)。中渡島にはアンドリュースが通過する前年1909年に、日本初の潮流信号所が稼働を始めており (海上保安庁燈台部編 1969: 204-209)、アンドリュースの写真にも灯台とともにはっきり写っており、瀬戸内海を通り串本に向かったことがわかる。紀伊大島で彼を待っていたのは、対岸の串本に住む Ikeda (Andrews 1916b: 79) で、彼は1909 (明治42) 年9月29日から翌1910年6月4日まで大島事業場長を務めた池田英太郎であった⁶ (写真付-6)。アンドリュースの調査日誌 (4章で取り上げる) によると紀伊大島では鯨が揚がってくるのはほとんどが夜だったと記しており、昼間に時間の余裕があったためか、景勝地や人物の写真が比較的多く見られる (写真付-7)。アメリカ自然史博物館の常設展示室日本コーナー「日本の農村」に展示されている女性キヌの写真 (図付-2) は、同館の研究図書館が保管する閲覧プリントに記載されたデータによれば紀伊大島での撮影である。

*6 大島事業場長必携の記述

5) 紀伊大島から鮎川へ

紀伊大島から鮎川への行程を記した手紙や報告書も見つかっていない。写真では、宮城県の塩釜ホテルの写真の注記に「鮎川へは塩釜で船に乗る」とあるので、塩釜まで鉄道で行き、そこから船に乗り換えて鮎川に向かったと思われる。旧塩釜駅近く、現在の本塩釜駅前にあった塩釜ホテルの写真には「東洋捕鯨株式会社御定宿」の札が写っており (写真付-8)、同社の関係者が多数宿泊したのだろう。

6) 鮎川から離れて帰国まで

鮎川の調査日誌の最後の日付が1910年8月23日であるので、アンドリュースが鮎川を離れたのは、それ以降である。この年、鮎川事業場は8月25日に事業を終えており⁷、切り上げの日前後まで滞在していたことになる。調査日誌には、その以降の記述は見られない。

離日に関して、公刊記事では横浜で標本の積み出しを見送った後、エジプトに向かい、その後イタリアなどヨーロッパの動物園や博物館を見学、コレクションを比較研究したと記している

(Andrews 1911d)。前述の「オズボーンへの報告書」も同様の内容で、標本をすべてニューヨー

クに送り出した後、北ドイツの蒸気船 the North German Steamship "Bülow" で日本を発ってカイロに向かいヨーロッパを経由で帰国したと記されている。日本を離れてからの写真は、香港で数枚が撮影されているが、ネガ番号によると次はカイロやエジプトであり、ガレンキャンプ (2006: 64-66) が記したような北京に向かったという証拠は得られず、この評伝の記述は誤りと考える。

なお、アンドリュースが撮影した写真のプリントは、鮎川からアレン学芸員に宛てた手紙でのなかに、鯨類調査の様子を写したプリントが同封されていた^{*8}。少なくともアンドリュースが撮影した写真の一部は日本で現像プリントされていたことが判明した。

以上が、1909-1910年の日本周辺での行程である。

*7 鮎川事業場長必携の記述による

*8 From Andrews to Allen Jun. 29, 1910 Aikawa, FOLDER II-2, 1909-'20 Allen, J. A. Corres.

6) 1912年の朝鮮での鯨類調査と朝鮮探検

アンドリュースにとって2度目となる北西太平洋の鯨類調査の目的は、コククジラ調査だった。当時、コククジラはアメリカでは絶滅したと考えられていた。1910年の鯨類調査で同種が当時日本統治下にあった朝鮮で多数捕獲されていることを知り、画期的な調査になると考え蔚山での調査を計画したものと思われる。調査は、朝鮮慶尚南道の東洋捕鯨蔚山事業場でおこなわれた。アンドリュースはアメリカから日本を経由し、1912年1月4日夜に博多から蔚山へ小船で向かった。これは東洋捕鯨がチャーターした鯨肉と白皮を運搬する小船だった (Andrews 1916b)。蔚山ではコククジラを詳しく調べ、シャチなどの他の鯨類の骨格標本も収集した。

蔚山事業場での鯨類調査は1912年3月初めに終了した。その後、アンドリュースは前述のように下関に3週間ほど滞在し、その後ソウルに立ち寄ったと考えられる。ソウルの日本外務省からは通訳と炊事係の斡旋を受け、北朝鮮探検 The Korean Expedition に向かった。北朝鮮探検の経路は、釜山から船で日本海を北上し、朝鮮半島北東部に位置する清津に向かい、豆満江を遡り白頭山山麓を抜け、鴨緑江を筏で安東 (丹東) まで下るといふ、朝鮮半島の付け根を東から西に横断するものであった (図付-3、Andrews 1912c: 260)。清津から安東までの間、報告 (Andrews 1912c) や雑誌記事 (Andrews 1913, 1919) に記された、あるいは写真が撮影された町や場所は次

のとおりである。町や集落では、富寧 [ふねい]、茂山 [むさん]、農事洞 [のじどう]、鴨緑江側に出てからは、普天 [ふてん]、恵山鎮 [えさんちん]、新■ [加の下に乙] 坡鎮 [しんかるばちん] である。このほか、白頭山麓の湖「三池淵」も訪れ、鴨緑江に出てからは1日に最大70マイル [112km] を船で下り、安東からソウルへ鉄道で戻った (Andrews 1912c)。160点を超える陸生哺乳類の標本を持ち帰り、アメリカ自然史博物館のコレクションに加えた。調査の様子は後年の書籍にも記されているが脚色が目立ち (Andrews 1929: 132-147, 1943: 109-118)、早い時期に出版された雑誌記事の方が事実記載に徹している。また、この探検は、アンドリュース以外は全員が賄い係などを含め現地ガイドという形での最後の探検となった。

朝鮮半島探検を終えたアンドリュースは、1916年に妻のイベット (Yvette Borup Andrews) と動物学者のエドモンド・ヘラー (Edmund Heller) を合わせた3人と現地ガイドとともに揚子江から雲南への探検を成功させる (Andrews and Andrews 1918)。そして1920年代になると中央アジア探検を組織し、モンゴルで卵を含む恐竜の化石を大々的に発掘するなど、その名声を確実なものにしていった。この頃になるとアンドリュースは大探検隊の隊長であり、組織運営と資金集めが主な仕事となっていた。

アンドリュースの日本や朝鮮半島での鯨類調査と探検は、その後の活躍に比べれば地味であり知られていない。しかし、アンドリュースの科学者としての顔は、鯨類調査でこそ見られるものであり、鮎川や紀伊大島、蔚山での調査は彼の主要論文を生み出し、科学界に北西太平洋の鯨類知識と標本をもたらし、日本の近代鯨類学の発端を作った。そして、アンドリュースが残した記録写真と若干の文書記録は、地域によっては唯一の報告と思われ、20世紀初めの日本と朝鮮の日常を記録した人文学的資料としても価値が高いものである。

付録3 近世鯨類学から近代鯨類学へ

資料と方法

付録3で用いた文書資料は次のとおりである。アメリカ自然史博物館哺乳類研究部図書文書資料室 Mammalogy Departmental Library & Archives, American Museum of Natural History 所蔵のアンドリュースと永澤六郎との手紙、山口県文書館所蔵の東洋捕鯨株式会社とその前身会社の事業報告書、日本水産株式会社所蔵の東洋捕鯨事業場長必携などで、詳細はそれぞれの項目に記す。このほか近世から明治期の鯨類に関する書籍を用いた。これらの資料について鯨類の記述について整理し、それぞれ考察を加えた。その際に着目したのは、学名の使用、和名の生物学的種としての使用、とりわけナガスクジラ属の種認識と名称の変遷である。

鯨類名称の表記は次のように区別した。学名は属名と種小名のみで表しラテン語イタリック表記、現在の標準和名はカタカナとした。資料中の表現は原文のままとし、混乱の無いように適宜注記した。学名は本文同様に属名と種小名のみ引用した。名称が明らかに生物学的種として使用されている場合は「種」、それ以外の用法は「種類」として区別した。引用した原文にない字仁による注記は〔 〕角括弧で示し、同一資料の記述のなかで2回目以降の出現は誤解の生じない範囲で略称を用いた。引用文では、旧字体を新字体に、種名や固有名詞以外のカタカナや接続詞など一部の漢字をひらがなに置き換えたほか、現在の表記への変更や句読点をおぎなった部分がある。

1. 近世鯨類学からの展開と外国文献翻訳の限界

本項では、明治以降に出版された鯨類論考のうち、アンドリュースが日本に滞在した1910年以前のものを年代順に考察した。本文中に現れる種の名称は、引用した文献での登場順である。

服部徹編（1888）『日本捕鯨彙考』（復刻版：鳥海書房 2000）

『日本捕鯨彙考』は明治以降に日本で出版されたまとまった鯨類論考のなかで、探せた範囲では学名を用いた最も早いものであった。これは「本邦古来の鯨書中より項目によって適合適所を選択し当時の定説に照らして編集したもの」（細田 2000）と評価されるとおり、近世鯨類学を継承し

たものとなっている。採録した鯨種は、大型種は紀州で六鯨といわれてきた背美、小、座頭、長簀、鰯、抹香（せみ、こ、ざとう、ながす、いわし、まっこう）の6種類、中型種は巨頭、逆戟、槌、赤坊、（ごんどう、さかまた、つち、あかぼう）、小型種は「すなめり」と海豚の2種の合計12種類である。このうち巨頭は複数種を含むと記載されている。種別解説の項では、図版のキャプションとして漢字とカタカナによる和名、英名、学名を記している。総論ではコククジラをセミクジラとおなじ正鯨属 *Balaena* に区分するなど、現在の知識とは異なる外部形態の差違を重視した分類体系や分類名称を示している（pp55-61）。

個別の記述を見ると、ナガスクジラに用いられた「能曾鯨」（のそくぢら）は座頭鯨の項に「附」として文章のみで記述され、図は付されていない。鰯鯨の項目のタイトルは「鰯鯨一名鯨鯨」であるが図版の漢字は「鰯鯨」とだけ記されている。ゴンドウクジラの解説では近世鯨類学の知識を紹介し数種に言及し、著者の見解と思われる文末では潮巨頭（しほごと）と大難巨頭（だいなんごと）の2種類を記し、シャチについては項目名では「逆戟鯨（さかまたくぢら）一名さかまつしやち」とし、図版の英名は GRAMPUS、ツチクジラの図版は雄雌異形で、吻長や歯（雌は口を閉じている）、胸びれ、背びれ、腹側の白色部の範囲に違いを持って描かれている。スナメリの項目名は「すなめり鯨一名なめうを」 [「な」は変体仮名]、イルカは「海豚」を項目名として近世鯨類学の知識を紹介した後、著者の整理として「ねずみいるか、ばんどういるか、ぼういるか、すぢいるか、かまいるか、にゆどういるか」 [変体仮名は修正した] の6種を示している。海豚の図は2種示されている。

学名が与えられているのは能曾と赤坊を除いた10種で、複数種が含まれる巨頭は1つの図が、海豚は2種の図が示された。種名は項目名と図版のキャプションとでは一部異なるが、図版のキャプションに従い、英名、学名、和名の順で書き出すと次のようになる。学名はイタリックではなく立体で記されている。RIGHT WHALE. *Balaena antarctica* 背美鯨 セミクヂラ、CALIFORNIA GRAY WHALE, OR DEVIL-FISH. *Rhachianectes glaucus* 小鯨 コクヂラ、HUMPBACK WHALE. *Balaenoptera antarctica* 座頭鯨 ザトウクヂラ、SULPHUR BOTTOM OF PACIFIC. *Sibbaldius sulfureus* 長簀鯨 ナガスクヂラ、PIKE WHALE. *Balaenoptera arctica* 鰯鯨 イワシクヂラ、

SPERM WHALE. *Physeter macrocephalus* 抹香鯨 マツコクヂラ、BLACK WHALE *Delphinus globiceps* 巨頭鯨 ゴトクヂラ、GRAMPUS. *Delphinus Orca* [Oは大文字] 逆戟鯨、BOTTLE NOSE WHALE *Hyperoodon rostratus* 槌鯨 ツチクヂラ、[英名学名なし] 赤坊鯨 アカボウクヂラ、*Delphinus Melas* [Mは大文字、英名なし] スナメリ鯨 [まま]、DOLPHIN. *Delphinus longirostris* [まま] 真海豚 マイルカ、[英名学名なし] 北海道根室海豚之図 種名不詳、であった。最後に附説として、大魚喰 オホウヲクイの図が英名と学名は示さずに掲載されている。

本書は近世鯨類学の知識のみで考察した部分が多く、生物学的種と近世以来の呼称が混在した記述が目立つ。能曾鯨の項では、この鯨について紀州と九州そして土佐の近世鯨類学の書籍を挙げて論じ、挿絵は座頭鯨と近似しており座頭鯨の年齢による形態変異と考察している (pp67-69)。中型ナガスクジラ属の鯨の名称に「鰭鯨」に紀州で区別されていた「鯨鯨」を付しているが、引用している近世文献の「鯨魚品種図目」や「海鱚」の喉が赤色を帯びるという記述などから、「日本捕鯨彙考」の「鰭鯨」はニタリクジラと考える。小型歯鯨では、マイルカのスペルミスと思われる学名で示された図は体色や歯の数が多いことからマイルカやスジイルカを思わせる絵で掲載されている。「北海道根室海豚之図 種名不詳」とされた図は明らかにネズミイルカであり、これは標本を元に描かれたことが示唆される。これは、他の鯨類についてはすべてに和名を、赤坊鯨のみ和名だけを付しているが、これらは近世鯨類学の知識が存在していたのに対し、ネズミイルカはその既存の知識を欠いた状態で実物を観察した図が得られた結果と考える。スナメリが海豚とは別に立項されていることは、近世ではスナメリは海豚とは独立に認識されていたことを示している。またゴンドウクジラ類も明確に識別されていたコビレゴンドウとオキゴンドウはそれぞれに名前が与えられている。近世における海豚とはハンドウイルカのようにくちばしと背びれを持つ小型ハクジラ、つまりイルカ型の動物に与えられた名称であり、現在の用法よりも指し示す動物の範囲は小さかったことがわかる。

岡田信利 (1891) 『日本動物総目録 有脊椎部』

『日本動物総目録 有脊椎部』は近世以来日本の各地で用いられてきた名称に学名をあてがい、種

ごとに産地を旧国名で示したものである。学名の表記は属名と種小名は正体（立体）、命名者はイタリックを用い、比定か綴りに確証が持てないためか多くの種に「？」が付されている。なお、属名と種小名は別の場所に示されているが、本論では通常の続ける表記に改めた。現れる鯨種は、*Balæna ? japonica* [aeは合字] セミクヂラ、*? Rhachianectes ? glaucus* コクヂラ、*? Megaptera ? boops* ザトウクヂラ、*Balænoptera ?* [aeは合字、種小名は?のみ] ナガスクヂラ、*B. ? arctica* イワシクヂラ（カツヲクヂラ）、*Physeter macrocephalus* マッコウクヂラ、*? Hyperoodon ? rostratus* ツチクヂラ、*Phocæna ? communis* [まま、aeは合字] 和名なし [ネズミイルカ]、*Neomeris phocænoides* [aeは合字] スナメリ（ナメノウヲ）、*Globicephalus sieboldii* ゴトウクヂラ、*Grampus sakamata* サカマタ、*Delphinus longirostris* イルカ 海豚魚 [学名はハシナギイルカ] で、合計ひげ鯨5種、歯鯨7種（うち1種は和名無記載）の計12種である（pp115-117）。採録された鯨類は、大型鯨類は太地という六鯨（背美、座頭、真甲、兎、長須、鰯鯨）と同じであった。

学名は属名のいくつかと半数程度の種小名に「？」を付し、ナガスクヂラは種小名は与えていない。逆にマッコウクヂラ、スナメリ、ゴトウクヂラ、サカマタ、イルカの歯鯨5種は？を付さずに属名と種小名を記している。残念ながらこの目録は図が一葉もなく、形態学や解剖学的な特徴が記されていない。そのため、日本ではこのような名称の鯨類が認識されていたという漠然とした情報を述べたに留まる。「イルカ 海豚魚」は漢字を用いており、複数種を含むものかも知れない。全体的に見れば学名は比較的正確で、『日本捕鯨彙考』に比べて近代鯨類学の知識を取り入れた内容といえる。ネズミイルカの学名が正しく、和名未詳であることから標本を外国文献の図によって同定した、あるいは前出の『日本捕鯨彙考』を参照したと想像される。

『動物学雑誌』掲載記事

1945年以前の『動物学雑誌』について、CiNii で検索した結果を述べる。検索項目は論文タイトルで、「鯨」「クジラ」「くじら」「クヂラ」「くぢら」で検索した結果、抽出された論文数はそれぞれ、25、0、0、3、0であった。同様に「海豚」4「イルカ」6、「いるか」0で、それ以外の

鯨類に関する語で抽出されたのは、「スナメリ」1、「鯨」1、「サカマタ」1、「逆戟」1であった。ただし「鯨」の1本は「鯨は何故に城の上につけるにや」というタイトルの鯨類研究とは無関係の論文であった。なお、CiNii からリンクされた電子化資料は291-303号（1913年1月-1914年1月）の13号分が欠号となっている。欠号分に掲載された鯨類に関する記事には、「日本産槌鯨類二種附赤坊鯨」（永澤 1913a）および「邦産逆戟とGrampusと」（永澤 1913b）、そして「邦産イルカの新属・新種」（青木 1913）が含まれる。

検索で抽出された論文のうち、鯨類を学名で記述したもっとも早いものは、高松榮太郎（1894）の「紀州熊野浦之捕鯨」であった。この報告は題名のとおり紀伊半島南部の捕鯨を紹介したもので、捕獲対象種について形態や食性、捕獲海域などを詳しく述べ学名を適用している。学名は正立書体で表記し、属名の末尾に「,」を加えている。取り上げた鯨類は出現順に、ざとうくぢら *Megaptera, boops*、いわしくじら *Balaenoptera, arctica*、ながすくじら *Balaenoptera, sulphuria?* [まま、*sulphurea*が正しい]、せみくじら *Balaena, Japonica* [Jは大文字]、こくじら [「こ」は変体仮名] *Rhachianectes, Glaucus* [Gは大文字] の5種で、属名と種小名を付さずに、「Cetacea類中にまつこうくじら [「こ」は変体仮名]」、「Denticiti類には、いるか、あかぼう、つちくじら」があると、4種類に言及している。注目されるのは「ながすくじら」の種小名にシロナガスクジラに用いられた *sulphuria* [*sulphurea*の間違い] を使用していることである。紀州を対象にした記事であり、粕谷・山田（1995: 59-63）の考察からも「ながすくじら」がシロナガスクジラを指していたことは十分に予想される。また、ザトウクジラ以外の鯨類に「くぢら」ではなく、現在同様「くじら」の文字を用いたことも指摘しておく。

次に学名を用いた記述は、田子勝彌の「クヂラ」（田子 1907）であった。このなかでは鯨類の形態や行動 [「習性」と表記]、解剖学的知見を概括し、鯨類の分類を有髯類、有歯類、絶滅鯨類、つまり歯鯨とひげ鯨、そして原鯨類と絶滅種を含めた記述となっている。記述の詳しきはひげ鯨が一番で、それに比べると歯鯨は簡単で、絶滅鯨類は具体的な記述がない。学名は正立書体で表記し、ナガスクジラ属は世界に4種あり、日本近海には2種のみ分布とした。取り上げた種は、長須鯨 *Balaenoptera sulphurus* [まま、aeは合字、*sulphurea* の間違いか]、白長須鯨 *B.*

sibbaldii、座頭鯨 *Megaptera longimana*、コクヅラ *Rhachianectes glaucus*、背美鯨 *Balaena australis* [aeは合字]、抹香鯨 *Physeter macrocephalus* [まま、属の説明では *Physeter* と表記しており誤植か] の6種の大型種である。解説では長須鯨と白長須の説明が混乱しており、*Sulphur bottom* を「長須鯨と同一種あるいは近似のもの」とする一方で鯨族中最大とし、*Balaenoptera sibbaldii* は Blue whale で「本邦の白長須と称ふるもの」としている。どちらも学名はシロナガスクジラに用いられたものである。ただし「長須鯨は朝鮮海及び太平洋にても金華山沖及銚子沖に多く、白長須は太平洋南海即ち紀伊沖土佐沖に多し」という分布の説明は正しい。太地の六鯨と異なり鰭鯨が見られない。

大日本水産会（1896）『捕鯨志』

水産系で学名の使用が早かった著作は『捕鯨志』である。凡例に「本書欧米における捕鯨沿革、鯨種、および捕鯨の状況などは米国水産調査員報告および米国捕鯨家キャプテン・スカモン氏著海獣史などによるかたわら諸書を参考して編述す」とあるとおり、近世鯨類学の再解釈ではなくおもに外国文献を翻訳して作成された。目的は「欧米捕鯨の情態を知悉 [ちしつ] せしめ、将来遠洋捕鯨業を起さんとする者の参考に資せんとするにあり」という。ただし、国内の捕鯨については近世鯨類学や水産博覧会報告などを参考にし、鯨種については「鯨種名称の用字は努めて普通の慣用に従う」としている。本文の記述で取り上げられた鯨は以下の7種で漢字と正立書体の学名が記されている。登場順に、兒鯨 *Rhachianectes glaucus*、鰭鯨 *Balaenoptera velifera*、座頭鯨 *Megaptera versabilis* [属名も小文字始まり]、北極鯨 *Balaena mysticetus*、脊美鯨 *Balaena sieboldii*、長簀鯨 *Sibboldius salfaireus*、抹香鯨 *Physeter macrocephalus* の7種である。このうち長簀鯨の記述は1ページと3行で他種に比較して少なく、60-100フィート [18-30m] という体長、鯨に比較して相当に小さく尾柄に近い背びれ、幅広で黒色の鯨鬚、青色を帯びるものがあるという体色などはシロナガスクジラに比定される。捕獲統計の鯨類名称は近世から明治20年代前半のもの、つまり近代捕鯨以前の網取り捕鯨の記録が掲載されており、名称も当時の呼び名と思われるものが掲載されている。山口県川尻捕鯨場の元禄11（1698）年から明治21（1888）年の捕獲記録

に現れた鯨種は「背美鯨、座頭鯨、長簀春、青鷺、小春、鯧春」である。現在の知識で生物学的種に比定すれば、セミクジラ、ザトウクジラ、ナガスクジラ、コククジラ、小春は不明、鯧春も不明となる。明治15-24（1882-1891）年の捕獲統計では長崎県や山口県、福岡県、佐賀県では座頭、長須、鯧、小、脊美、雑などを使用しているのに対し、高知県では座頭、長須、鯧、小、脊美、能曾が用いられていた。粕谷・山田（1995: 70）の指摘どおり、シロナガスクジラの回遊がめずらしい日本海側の長門や西海では長須がナガスクジラを指し、シロナガスクジラが比較的多く見られた土佐ではシロナガスクジラに長須をあて、ナガスクジラは能曾としていた。

まとめ

1910年以前の鯨類に関する論考は、学名を用いたことで近代化に一步踏み出したが、近世鯨類学で用いられた地方名称をそのまま記し、日本語名称を統一し標準和名を固定しようとする動きは見られない。この時期の論考のほとんどは文献の比較検討に終始しており、標本の観察から種を比定して学名を与えたと考えられるのは、岡田信利（1891）『日本動物総目録 有脊椎部』に「北海道根室海豚之図 種名不詳」とされたネズミイルカに限られる。これも標本ではなく『日本捕鯨彙考』の図を参照した可能性が残る。イルカ類については、近世鯨類学はもとより、近代になっても1890年頃までの鯨類学は「海豚」として集合的な名称のままで議論されていたことも注目される。これは、イルカの利用は近世でも行われていたが、操業主体は地域的な小規模事業体に留まり、個々の種について全国的な統一名称を固定する必要がなかった結果と考える。



写真付-1 瀬戸内海を西進し備讃海峡の鍋島灯台 #26573 American Museum of Natural History Library

写真付-2 安芸丸に横付けされた石炭運搬船 #26576 American Museum of Natural History Library



写真付-3 竹製のいかだに乗って査察に来た日本の役人（台湾最南端の南湾） #26576 American Museum of Natural History Library



写真付-4 背後の山から見た東洋捕鯨土佐清水事業場 #26786 American Museum of Natural History Library



写真付-5 来島海峡にある中渡島潮流信号所と灯台。瀬戸内海の帆船も写る。 #26802 American Museum of Natural History Library



写真付-6 東洋捕鯨大島事業場長を務めた池田英太郎と妻 #26802 American Museum of Natural History Library



写真付-7 紀伊大島の水谷漁港 #26818 American Museum of Natural History Library



左：図付-2 アメリカ自然史博物館に常設展示されている「キヌ」の写真
 右：写真付-8 「東洋捕鯨株式会社御定宿」の札が掲げられた塩釜ホテル Image #26823 American Museum of Natural History Library



図付-3 アンドリュースの朝鮮半島探検の行程 (Andrews 1912bから作成)

謝辞

本論は主として2011年から2016年までにおこなった日本の沿岸捕鯨と鯨類の科学史の調査研究をまとめたものである。

審査を引き受けていただいた東京農業大学大学院生物産業学研究科の教員の方々に感謝申し上げます。主査を務められた生物産業学専攻の塩本明弘教授、副査をお願いした生物産業学部自然資源経営学科の黒瀧秀久教授、同学部海洋水産学科の小林万里教授、そして15年以上にわたり論文の相談や助言をいただき学外副査も務められた粕谷俊雄博士に心よりお礼申し上げます。アメリカでの調査では、米国海洋大気庁南西水産研究所のロバート・ブラウネル上級研究員 (Robert L. Brownell Jr., Senior Scientist, South West Fisheries Science Center, NOAA) とニューベッドフォード捕鯨博物館の顧問も務められる太地町歴史資料室の櫻井敬人学芸員、そしてノルウェーでは日本で活躍したノルウェー人砲手を祖父とする元ストックホルム大学トルシュタイン・ショーボルト

(Torstein Sjöbold) 氏が心強い共同研究者であった。20年以上にわたり文献検索でご助言いただいた竹内賢士氏、稀覯本の閲覧や使用を許された細田徹氏、文献を紹介された吉積二三男氏の支援は他では得られない特別なものであった。早い段階での草稿を読んでいただいた国立科学博物館の山田格名誉研究員、(公財) 下関海洋科学アカデミー鯨類研究室の石川創室長には執筆のヒントを限りなくいただいた。武蔵野美術大学の加藤幸治教授には東北学院大学勤務時にアンドリュースの写真を地元に向けた展示と文章にまとめる機会を提供され、その際には元牡鹿町鮎川支所長の成澤正博氏には鮎川浜の詳細な情報を教えていただいた。貴重な文献のコピーをいただいた北海道立水産試験場(当時)の丸山秀佳氏、通常では知り得ない地方文献を示された佐賀県立博物館の安永浩学芸員、瀬戸内町立図書館・郷土館の町健次郎学芸員、向け崩壊が進む悪路を走り廃村となった捕鯨根拠地への案内人となったサハリン州郷土博物館 (Сахалинский государственный областной краеведческий музей) のイゴリ・サマリン (Игорь Самарин) 学芸員とオリガ・シュービナ

(Шубина Ольга Алексеевна) 歴史研究部長、韓国に保存された近代捕鯨初期の文書を教えていただいた長生浦鯨博物館 (장생포고래박물관) の朴 (박혜린) 学芸員と通訳を務められた姜 (강혜진) 氏。網走の捕鯨者が用いる鯨類呼称について教えていただいた元捕鯨船乗組員の福岡昇三氏、前田

氏。網走の捕鯨者が用いる鯨類呼称について教えていただいた元捕鯨船乗組員の福岡昇三氏、前田光彦氏、三好浩治氏。沿岸捕鯨船の古い情報を快く知らせされた長澤文雄氏、場長必携の翻刻をしていただいた北海道大学大学院文学研究員の上田哲司氏および下関市立大学の安部伸哉氏。アンドリュースの書簡データ整理をおこなった東京農業大学の菅野貴久君とガラスネガの複写データのレタッチした井内衛君、調査日誌の翻刻をしたジョナサン・オリ博士 Dr. Jonathan Olly、いずれも本論の作成には不可欠な協力者であった。ここにお礼申し上げる。最後になったが、本論の中心となる資料「東洋捕鯨事業場長必携」の利用を許された日本水産株式会社に深謝の意を表す。

本論の調査研究は、JSPS科学研究費補助金「もうひとつの近代鯨類学「第一鯨学」の形成と展開」（基盤研究C：2011-2013、課題番号23501209）、「明治大正期に遡る一次資料「事業場長必携」を用いた東洋捕鯨の操業復元」（基盤研究C：2014-2016、課題番号26350365）および「アイヌ文化における捕鯨の検討」（奨励研究B：2003、課題番号15904001）の補助を得ておこなった。

引用文献

英文はABC順、和文は五十音順

- Amano, M. and A. Hayano. 2007. Intermingling of dalli-type of Dall's porpoises into a wintering truei-type population off Japan: implication from color patterns. *Marine Mammal Science*, 23: 1-14.
- Andrews, R. C. 1911a. A new porpoise from Japan. *Bulletin American Museum of Natural History*, 30: 31-51+plates.
- Andrews, R. C. 1911b. Shore Whaling: A World Industry. *The National Geographic Magazine*, 2 (25): 411-442.
- Andrews, R. C. 1911c. Around the World for the Museum. *Bulletin American Museum Journal*, 11(1): 21-24.
- Andrews, R. C. 1912a. *Berardius Bairdii* in Japan. *Science*, 939: 902-903.
- Andrews, R. C. 1912b. An Expedition in Korea. *The American Museum Journal*, 12(6): 207-213.
- Andrews, R. C. 1912c. An Exploration of Northeastern Korea. *The American Museum Journal*, 12(7): 259-267
- Andrews, R. C. 1913. The Wilderness of Northern Korea, *The Harpers Monthly*, May 1913: 828-839.
- Andrews, R. C. 1914. Monographs of the Pacific Cetacea. I. The California gray whale (*Rhachianectes glaucus* Cope). Its history, external anatomy, osteology and relationships. *Memoirs of the American Museum of Natural History*, 1: 227-287.
- Andrews, R. C. 1916a. Monographs of the Pacific Cetacea. II. The sei whale (*Balaenopter aborealis* Lesson). *Memoirs of the American Museum of Natural History*, Newseries, (16): 289-388+plates.
- Andrews, R. C. 1916b. *Whale Hunting with Gun and Camera*. D. Appleton, New York, 322pp.
- Andrews, R. C. 1919. Exploring Unknown Corners of the "Hermit Kingdom", *National Geographic Magazine*, 36: 24-48.
- Andrews, R. C. 1929. *Ends of the Earth*. G. P. Putnam's Sons, New York, 355pp.
- Andrews, R. C. 1943. *Under A Lucky Star*. A Lifetime of Adventure. Blue Ribbon Books, New York, 355pp.
- Andrews, R. C. and Andrews. Y. B. 1918. *Camps and Trails in China: a narrative of exploration, adventure, and sport in little-known China*. Appleton, New York, 334pp.
- Bergman, Sten. 1931. *De tusen öarna i Fjärran Östern : skildringar från en forskningsfärd till Kurilerna*. Bonniers, Stockholm. 348pp.
- Bockstoce, J. 1995. *Whale, Ice and Men: The History of Whaling in the Western Arctic*. University of Washington Press, Seattle. 400pp.
- Boreal Institute for Northern Studies. 1988. *Small-type coastal whaling in Japan: report of an*

- International Workshop*. Boreal Institute for Northern Studies, the University of Alberta, Edmonton. 116pp.
- Dickinson, A. B. and Sanger, C.W. 2005. *Twentieth-century Shore-station Whaling in Newfoundland and Labrador*. 254pp., McGill-Queen's University Press, Montreal.
- Ellis, R. 1991. *Men and Whales*. Alfred A. Knopf, New York. (Cited from 1st Lyons Press ed. 1999)
- Gallenkamp, C. foreword Novacek, M. J. 2001. *Dragon Hunter: Roy Chapman Andrews and the Central Asiatic Expeditions*. Viking, New York. 344pp.
- Hayano, A., M. Amano and N. Miyazaki. 2003. Phylogeography and population structure of the Dall's porpoise *Phocoenoides dalli* in Japanese waters revealed by mitochondrial DNA. *Genes and Genetic Systems* 78: 81-91.
- Johnsen, A. O. 1959. *Finnmarksfangstens historie 1864–1905: Den Moderne Hvalfangsts Historie Bind 1: . Norges Hvalfangstforbund, Sandefjord*. 710pp.
- Jones, M. J. and Swarts, S. L. 2009. Gray Whale. In: Perrin, W. F., Würsig, B. and Thewissen, J. G. M. (eds). *Encyclopedia of Marine Mammals* 2nd Edition, Academic Press, Amsterdam. pp503–511.
- Kalland, A. and Moeran, B. 1992. *Japanese Whaling?: End of an Era* (Scandinavian Institute of Asian Studies monograph series, no. 61). Curzon Press, London. 228pp.
- Krohn-Holm, J. W. 1972. *Slekten Melsom fra Vestfold*. Saturn Trykkindustri As., Drammen. 125pp.
- Mageli, E. I. 2006. *Towards Friendship The relationship between Norway and Japan, 1905–2005*. Oslo Academic Press, Oslo. 237pp.
- Omura, H. 1984. History of Gray Whales in Japan. In: Jones, M. L., Swarts, S. S. and Leatherwood, S. (eds). *The Gray Whale Eschrichtius robustus*. Academic Press, Orland. xxiv+600pp.
- Omura, H. and Fujino, K. 1954. Sei whales in the adjacent waters of Japan. II. Further studies on the external characters. *Sci. Rep. Whales Res. Inst.*, 9: 89-103.
- Risting, S. 1922. *Av Hvalfangsetens Historie*. J. W. Cappelen's Forlag, Kristiania. 625pp+5.
- Scammon, C. M. 1874. *The Marine Mammals of the Northwestern Coast of North America, Together with an Account of the American Whale-Fishery*. 319pp. (復刻版: Dover Publications, New York. 1968.)
- Sanger, C. W. and Dickinson, A. B. 2010. Interfamilial relationship in early 20th century—whaling: a Newfoundland-Norway case study. pp.149–160. Ringstad J. E (ed) *Whaling and History III: papers presented at a symposium in Sandefjord on the 18th and 19th of June 2009*. Kommandør Chr. Christensens Hvalfangstmuseum, Sandefjord. 208pp.
- Schlادitz, L. 2014. Whaling, Science, and Trans-Maritime Networks, 1910–1914. *Transcultural Studies*, 1(2014): 164–189.

- Smith, D. G. and Williams, J. T. 1999. The Great Albatross Philippine Expedition and Its Fishes. *Marine Fisheries Review*, 61(4): 31–41.
- Spence, B. *Harpooned: The Story of Whaling*. Conway Maritime Press, Greenwich. 192pp.
- Springer, V. G. 1999. Kumataro Ito, Japanese Artist on Board the U.S. Bureau of Fisheries Steamer Albatross During the Philippine Expedition, 1907- 1910. *Marine Fisheries Review*, 61(4): 42–57.
- Starbuck, A. 1878. *History of the American whale fishery from its earliest inception to the year 1876*. Report of the U. S. Commission on Fish and Fisheries, Washington. 768pp. (Rep: Castle Books, Secaucus. 1989)
- Terry, W. 1950. *Japanese whaling industry prior to 1946*: Natural Resources Section Report no. 126. 47pp. General Headquarters Supreme Commander for the Allied Powers Natural Resources Section, Tokyo.
- Tønnessen, J. 1967. *Verdensfangsten 1883–1924, Del 1 1883–1914*: Den Moderne Hvalfangsts Historie Bind 2. 618pp., Norges Hvalfangstforbund, Sandefjord.
- Tønnessen, J. and Johnsen, A. O. 1982. *The History of Modern Whaling*. C. Hurst & Co., London, and Australian National University Press, Canberra. 798pp.
- Webb, R. L. 1988. *On the Northwest: commercial whaling in the Pacific Northwest, 1790–1967*. University of British Columbia Press, Vancouver. 425pp.
- Yochelson, E. L. 1985. *The National Museum of Natural History: 75 years in the Natural History Building*. Smithsonian Institution Press, Washington D.C., 216pp.
- Уни Ё. 2017. КИТОБОЙНЫЙ ПРОМЫСЕЛ НА КУРИЛЬСКИХ ОСТРОВАХ В ПЕРВОЙ ПОЛОВИНЕ XX ВЕКА. *ВЕСТНИК САХАЛИНСКОГО МУЗЕЯ*. 24: 84–102
- 우니 요시카즈. 2015. 앤드류스의 헌반도 고래류 조사와 탐험 [안드류스의朝鮮半島での鯨類調査と探検. pp129–135. (和文原稿の翻訳)] . 박혜린 & 우니 요시카즈. 로이 채프만 앤드류스, 한국에서의 발자취. 장생포고래박물관, 울산. 199pp [朴へリン・宇仁義和編. 로이·챌프만·안드류스 朝鮮での足跡. 長生浦鯨博物館, 蔚山. 199pp.]
- 장생포고래박물관. 2015. 로이 채프만 앤드류스, 한국에서의 발자취. 장생포고래박물관, 울산. 199pp [長生浦鯨博物館. 2015. 로이·챌프만·안드류스 朝鮮での足跡. 長生浦鯨博物館, 蔚山. 199pp.]
- 장생포고래박물관즈. 2016. 로이채프만앤드류스 아시아 탐험 일본편. 장생포고래박물관, 울산. 183pp [長生浦鯨博物館. 2016. 로이·챌프만·안드류스 아시아探検日本編. 長生浦鯨博物館, 蔚山. 183pp.]

- 会田泰 (1929) . 鯨汁. 食道楽, 3(12)
- 青木恒三郎 (1918) 四季和洋新料理. 田村熙 [き] 春堂, 大阪. 212pp. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 青木文一郎 (1913) 邦産イルカの新属・新種. 動物学雑誌, 25 (291): 58-60.
- 明石喜一編 (1910) 本邦の諾威式捕鯨誌. 東洋捕鯨, 大阪. (復刻版 (1989) 「明治期日本捕鯨誌」マツノ書店, 徳山)
- 赤堀峰吉 (1917) 佳節儀式料理 赤堀料理全書第49編. 博文館, 東京. 324pp. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 赤堀峰吉・赤堀吉松・赤堀菊子・赤堀美知子 (1917) 四季の料理 附養生食物の拵方 赤堀料理全書第一編. 220+84pp., 大鏡閣, 東京・大阪. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 赤堀吉松・赤堀峰松・赤堀菊子 (1908) 総菜料理 家庭百科全書第10編. 263pp., 博文館, 東京. (国立国会図書館デジタルライブラリー)
- 赤松登美子編 (1905) お手軽料理 細君の腕前. 名倉昭文館, 大阪. 146. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 赤嶺淳 (2017) 鯨を生きる 鯨人の個人史・鯨食の同時代史. 283pp., 吉川弘文館, 東京.
- 網走市史編纂委員会編 (1971) 網走市史下巻開拓時代篇. 網走市役所, 網走. 1615pp.
- 天野雅男 (2008) 形態変異—イシイルカ. 加藤秀弘編. 日本の哺乳類学3水生哺乳類, pp.101-122. 東京大学出版会, 東京.
- 有川町郷土誌編纂委員会 (1972) 有川町郷土誌. 862pp., 有川町, 有川.
- 綾部策雄 (1910) 諾威式捕鯨に対する吾人の希望. 大日本水産会報, 335: 3-4.
- 安藤俊吉 (1912) 我が国に於ける鯨体の利用. 大日本水産会報, 355.
- 池村鶴吉編 (1901) 新撰和洋料理精通 全. 松陽堂/光世堂 (二書房蔵版), 東京. 80pp. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 石井敦・真田康弘 (2015) クジラコンプレックス: 捕鯨裁判の勝者はだれか. 東京書籍, 東京. 349pp.
- 石川創・後藤睦夫・茂越敏弘 (2013) 日本沿岸のストランディングレコード (1901~2012) . 下関鯨類研究室報告, 1: 1-314.
- 石田好数 (1978) 日本漁民史. 三一書房, 東京. 345pp.
- 伊豆川浅吉 (1943) 土佐捕鯨史 上・下. 日本常民文化研究所彙報, 53, 54. (三一書房. 1973. 日本常民生活資料叢書23に再録)
- 板橋守邦 (1989) 北の捕鯨記: 道新選書14. 北海道新聞社, 札幌. 245pp.
- 井上善兵衛述 (1902) 割烹料理教授用総菜三百種. 大日本図書, 東京. 180pp. (ケンシヨク「食」資料室蔵)

- 井原西鶴. 1655. 日本永代蔵. (復刻版: 井原西鶴. 1995. 日本永代蔵 (影印, 翻刻) 西鶴選集. おうふう, 東京. 277pp, 258pp.
- 伊吹皎三 (1977) 遙かなる鮎川. 私家版, 仙台. 73pp.
- 伊吹皎三 (1978) 遙かなる鮎川 PartII. 私家版, 仙台. 29pp.
- 宇田川勝・上原征彦監修 (2011) 日本水産百年史. 日本水産株式会社, 東京. 647pp.
- 宇仁義和 (2001) 北海道沿岸の近代海獣猟業の統計と関連資料. 知床博物館研究報告, 22: 81-92.
- 宇仁義和 (2007) 歴史的な自然としての知床の海. 秋道智彌編. 水と世界遺産, pp.64-78. 小学館, 東京. 223pp.
- 宇仁義和 (2012) アイヌの鯨類認識と捕獲鯨種. 北海道民族学, 8: 16-26.
- 宇仁義和 (2015a) ロイ・チャップマン・アンドリュースが撮影した1910年の土佐清水. 高知県立歴史民俗資料館研究紀要, 19: 1-17.
- 宇仁義和 (2015b) ロイ・チャップマン・アンドリュースの鯨類調査と下関一東洋捕鯨の蔚山事業場における捕鯨事業を中心として. 下関鯨類研究室報告, 3: 15-27.
- 宇仁義和 (2016a) 社内文書に見る東洋捕鯨の事業場. 下関鯨類研究室報告, 4: 12-35.
- 宇仁義和 (2016b) 日本の近代鯨類学草創期における東洋捕鯨とアンドリュースの影響. 日本セトロロジー研究, 26: 17-25.
- 宇仁義和 (2017a) ノルウェーに保存されていた20世紀初頭の朝鮮半島沿岸の捕鯨の写真. 日本セトロロジー研究, 27: 9-16.
- 宇仁義和 (2017b) 千島の近代捕鯨一択捉島と色丹島を中心に. 根室市歴史と自然の資料館紀要, 29: 1-44.
- 宇仁義和 (2018) 近世近代の鯨肉料理の使用部位と近代日本における鯨肉食の普及過程. 日本セトロロジー研究, 28: 1-25.
- 宇仁義和・加藤幸治編 (2017) ロイ・チャップマン・アンドリュースの鯨類調査—鮎川 1910年. 東北学院大学論集歴史と文化, 55: 43-179.
- 宇仁義和. ロイ・チャップマン・アンドリュースの鯨類調査と東洋捕鯨鮎川事業場. pp.55-67.
- 宇仁義和. ロイ・チャップマン・アンドリュース鮎川調査全写真. pp.121-179.
- 加藤幸治・宇仁義和. アンドリュース著『砲とカメラで鯨を追う』に掲載された鮎川撮影の写真とキャプション. pp.97-120.
- 加藤幸治・宇仁義和・成澤正博. 写真引き100年前の鮎川のすがた. pp.69-96.
- 宇仁義和・小山香菜・中郡翔太郎・前田光彦 (2014c) オホーツク海の網走沖で観察された鯨類と海鳥. 知床博物館研究報告, 36: 29-40.
- 宇仁義和・当山昌直・岸本弘人 (2014b) R.C.アンドリュースが1910年に撮影した那覇の写真. 沖縄史料編集紀要, 37: 69-84.

- 宇仁義和・谷田部明子・石川創. 2015. NHKアーカイブス保存映像の中の鯨類ストランディング. 日本セトロロジー研究, 25: 1-6.
- 宇仁義和・ロバート=ブラウネル・櫻井敬人 (2014a) ロイ・チャップマン・アンドリュースの日本と朝鮮での鯨類調査と1909-1910年の日本周辺での行程. 日本セトロロジー研究, 24: 33-61.
- 江見水蔭 (1907) 実地探検捕鯨船. 202pp., 博文館, 東京. (復刻版: ゆまに書房 1993) .
- 老川慶喜 (2008) 伝統捕鯨の近代化と産業化—山口県下関を中心に—. グローバリゼーションと反グローバリゼーションの相克—捕鯨を手がかりとして—平成16年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究 (A) (2) 研究成果報告書, pp.168-181.
- 大藏永常 (1826) 除蝗録 (復刻版: 大藏永常. 1977. 除蝗録 農具便利論 綿圃要務: 日本農書全集 15巻. 農山漁村文化協会, 東京. 423pp.)
- 大阪市役所商工課 (1924) 大阪市海産物市場調査. 大阪市役所商工課, 大阪 225p.
- 大隅清治 (1994) シロナガスクジラ. 水産庁編. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (I), pp.592-600. 日本水産資源保護協会, 東京. 696pp.
- 大村秀雄・松浦義雄・宮崎一 (1942) 鯨 その科学と捕鯨の実際. 水産社, 東京. 319pp.
- 大村秀雄 (1981) 第二鯨学事初め—思い出すまま. 鯨研通信, 337: 1-7. (大村秀雄 (1986) 第二鯨学事始. 講談社出版サービスセンター. に再録)
- 大村秀雄 (粕谷俊雄編) 2000. 南水洋捕鯨航海記: 1937/38年揺籃期捕鯨の記録. 鳥海書房, 東京. 204pp.
- 大阪料理会監修 (2017) 大阪料理 関西割烹を生み出した味と食文化. 211pp., 旭屋書店, 東京.
- 大阪市役所商工課 (1924) 大阪市海産物市場調査. 225pp., 大阪市役所商工課, 大阪.
- 大阪水産物流通史研究会編 (1971) 資料大阪水産物流通史. 1131+103pp., 三一書房, 東京.
- 大槻清準 (1976) 鯨史稿 江戸科学古典叢書 2. 恒和出版, 東京. 538+解説31pp.
- 大島小学校創立百周年記念誌編纂委員会編 (1976) 大島小学校創立百周年記念誌. 大島小学校創立百周年記念誌編纂委員会, 田辺. 315pp.
- 小川鼎三 (1950) 鯨の話. 中央公論社, 東京. 211pp. (新版 (1973) 中央公論社)
- 小川忠三 (1929) お手軽家庭料理. 293pp., 文武書院, 東京. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 牡鹿町誌編纂委員会編 (2005) 牡鹿町誌中巻. 牡鹿町, 牡鹿. 1277pp.
- 岡田三郎 (1930) 北海道風の食べ物. 食道楽, 4(2)
- 岡田藤兵衛 (1913) 樺太亜庭湾内に於ける捕鯨業. 親潮, 9: 41-55.
- 岡田信利編 (1891) 日本動物総目録 有脊椎部. 金港堂, 東京. 125pp.
- 岡林隆敏・林一馬・長崎市教育委員会編 (1995) 長崎古写真集 居留地篇. 153pp., 長崎市教育委員会, 長崎.
- 岡本信男 (1965) 近代漁業発達史. 水産社, 東京. 614pp.

- 越智キヨ (1922) 家庭日本料理. 474+20pp., 六盟館, 東京. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 海事水産博覧会. 1916. 海事水産博覧会報告. 242pp.
- 海上保安庁燈台部編 (1969) 日本燈台史. 燈光会, 東京. 674pp.
- 改造社編 (1930) 日本地理大系第11巻台湾篇. 改造社, 東京. 368pp.
- 改造社編 (1930) 日本地理大系第12巻朝鮮篇. 改造社, 東京. 416pp.
- 笠原昊 (1950) 日本近海の捕鯨業とその資源. 日本水産株式会社研究所報告4, 日本水産株式会社研究所, 東京. 103pp.
- 笠原昊 (1952) 戦後の近海捕鯨業について. 日本水産学会誌, 17(10): 313-320.
- 柏谷俊雄 (2011) イルカ: 小型鯨類の保全生物学. 東京大学出版会, 東京. 640pp.
- 柏谷俊雄・山田格 (1995) 日本鯨類目録: 鯨研叢書 No.7. 日本鯨類研究所, 東京. 90pp.
- 片岡千賀之・亀田和彦. 2012. 明治期における長崎県の捕鯨業—網捕り式からノルウェー式へ—.
長崎大学水産学部研究報告, 93: 79-106.
- 片倉佳史 (2015) 古写真が語る台湾 日本統治時代の50年 1895-1945. 祥伝社, 東京. 271pp.
- 勝山敏一 (2016) 北陸海に鯨が来た頃. 桂書房, 富山. 237pp.
- 割烹講習会 (1921) 西洋料理. 230pp., 立川文明堂, 大阪. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 割烹講習会編 (1913) 四季家庭料理. 300pp., 岡田文祥堂, 大阪. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 家庭割烹研究会編 (1925) 四季家庭お料理の拵へ方 完. 暁星社書店, 大阪. 230pp. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 亀井まき子 (1911) 洋食の調理 家庭百科全書第30編. 282pp., 博文館, 東京. (国立国会図書館デジタルライブラリー)
- 神長英輔 (2002) 北東アジアにおける近代捕鯨業の黎明. スラブ研究, 49: 51-79.
- 樺太庁編 (1936) 樺太写真帖. 樺太庁, 豊原. 198pp.
- ガレンキャンプ, C.・ノヴァチェック, M. J. (2006) ドラゴンハンター〜ロイ・チャップマン・アンドリュースの恐竜発掘記〜. 技術評論社, 東京. 413pp.
- 河井壽造 (1896) 古今料理大全. 148pp., 積善館, 大阪. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 川上健三 (1972) 戦後の国際漁業制度. 大日本水産会, 東京. 946pp.
- 川島秀一 (2009) 北海道・東北地方の捕鯨. pp.114-131. 小島孝夫編. クジラと日本人の物語—沿岸捕鯨再考—. 東京書店, 東京. 255pp.
- 菊地慶一 (2004) 街にクジラがいた風景: オホーツクの捕鯨文化と庶民の暮らし. 寿郎社, 札幌. 377pp.
- 北原武編 (1996) クジラに学ぶ 水産資源を巡る国際情勢. 成山堂書店, 東京. 233pp.
- 串本町編 (1924) 和歌山県串本町誌. 串本町, 串本. 848pp. (復刻版: 世界聖典刊行協会 1978)
- 鯨船会 (1999) 捕鯨船28号. 私家版, 横浜.
- 鯨船会 (1999) 捕鯨船30号. 私家版, 横浜.

- 釧路市総務部地域史料室編（2006）釧路捕鯨史. 釧路市役所, 釧路. 379pp.
- 熊野太地浦捕鯨史編纂委員会編（1969）熊野太地浦捕鯨史. 662pp., 平凡社, 東京.
- 黒田龍之介（1998）羊皮紙に眠る文字たち—スラヴ言語文化入門. 現代書館, 東京. 237pp.
- 高知県尋常中学校女子部卒業生編（1892）割烹授業日誌第一輯. 私家版, 高知. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 国立科学博物館編（1998）写真で見た国立科学博物館120年の歩み. 国立科学博物館, 東京. 129pp.
- 小島孝夫編（2009）クジラと日本人の物語—沿岸捕鯨再考—. 255pp., 東京書店, 東京.
- 小島孝夫（2012）千葉県和田浦の小型捕鯨業の現状と課題. pp.187-206. 岸上伸啓編. 捕鯨の文化人類学. 成山堂書店, 東京. 342pp.
- 小菅佳子（1997）近代日本食文化年表. 雄山閣出版, 東京. 259pp.
- 近藤勲（2001）日本沿岸捕鯨の興亡. 山羊社, 東京. 449pp.
- 斎藤多喜夫（1998）展示余話1 神奈川遊郭神風楼跡地一件. 横浜開港資料館館報 開港のひろば, 60:4-5.
- 佐賀県立名護屋城博物館編（2006）第26回全国豊かな海づくり大会開催記念展「くじらといきる—西海捕鯨の歴史と文化—」展示図録. 48pp., 佐賀県芸術文化育成基金, 佐賀.
- 佐賀県立名護屋城博物館編（2011）「鯨組主中尾家屋敷」公開記念企画展 海に生きる—江戸時代の唐津のくらしと玄界灘—. 62pp., 佐賀県立名護屋城博物館, 唐津.
- 崎浦浩之訳（1956）ソヴェート連邦の捕鯨業 鯨研叢書2. 鯨類研究所, 東京. 101pp. (原書: Клейненберга, С. И. и Макаровой, Т. И. (1955) Китобойный Промысел Советского Союзаю. Рыбное хозяйство, Москва.)
- 佐久間淳子・石井敦（2011）マスメディア報道が伝える「捕鯨物語」. 石井敦編著. 解体新書「捕鯨論争」, pp.147-200. 新評論, 東京. 321pp.
- 櫻井敬人編, 三重県立熊野古道センター企画, 石原義剛総合監修（2011）鯨者六鯨ト申候 熊野灘のクジラ図絵. 42pp.,
- 様似町史編さん委員会（1992）改訂 様似町史. 874pp., 様似町, 様似.
- サンガー. C・ディキンソン.A. 2010. ニューファンドランドと20世紀日本沿岸捕鯨の関わり. 太地町立くじらの博物館編. 最後の刃, pp.52-60.
- 柴達彦（1986）鯨一代: 聞書砲手泉井守一. 育英社, 東京. 453pp.
- 渋谷辰三郎（1967）捕鯨回顧. 私家版, 長崎. 139pp.
- 写真集懐かしの千島編纂委員会（1981）写真集懐かしの千島. 国書刊行会, 東京. 220pp.
- 食道楽漫談会（1929）近頃大阪評判記 第18回食道楽漫談会 日本橋「香蘭亭」にて. 食道楽, 3(12). (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 進藤直作（1968）瀬戸内海の鯨の研究. 135pp., 神戸市医師協同組合, 神戸.

- 新村出 (1925) 太平洋の捕鯨船と日本の開国. 続南蛮広記録, pp.264-280. 岩波書店, 東京.
510pp.
- 末田智樹 (2004) 藩際捕鯨業の展開 西海捕鯨と益富組. 御茶の水書房, 東京. 279pp.
- 杉野権右衛門 (1978) 名飯部類附録 影印版 江戸時代料理本集成46-2. 27丁., 臨川書店, 京都.
- 隅谷巳三郎 (1900) 古今料理大全. 309pp., 開拓社, 東京. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 関澤明清 (1887) 魯国捕鯨会社設立ノ挙ヲ聞テ感アリ. 大日本水産会報, 69: .
- 船舶部会「横浜」船舶史稿編纂チーム. n.d. 船舶史稿 資料編 輸入船船舶史第2巻 (明治後期編) .
- 太地町教育委員会 (2019) 豊漁と安全を祈る恵比寿神社. 太地町観光協会ウェブページ
<https://taiji-kanko.jp/visit-history/ebisu-jinja.html> 2019.7.27閲覧
- 高正晴子 (2013) 鯨料理の文化史. 287pp., エンタイトル出版, 大阪.
- 高松榮太郎 (1894) 紀州熊野浦之捕鯨. 動物学雑誌, 6 (67): 178-183.
- ダグラス, J. P (1991) 屋根裏の恐竜たち Dinosaurs in the Attic 地球物語双書1. 心交社, 東京. 386pp.
- 田子勝彌 (1907) クヂラ. 動物学雑誌, 19 (230): 345-353.
- 田中薫・大野笑三 (1940) 色丹島概説. 大野笑三編. 南千島色丹島誌 アチックミュージアム彙報, 47: 1-16. (復刻版: 三一書房. 1972. 日本常民生活資料叢書第7巻に収録)
- 多田穂波 (1978) 明治期山口県捕鯨史の研究. マツノ書店, 徳山. 256pp.
- 多藤省徳編著 (1985) 捕鯨の歴史と資料. 水産社, 東京. 202pp.
- 第二回関西九州府県聯合水産共進会事務所. 1909. 第二回関西九州府県聯合水産共進会事務報告.
430, 118pp.
- 大日本水産会編 (1896) 捕鯨志. 嵩山堂, 東京. 298+10pp. (復刻版 (1992) 「明治後期産業発達史資料第103巻」龍溪書舎, 東京)
- 大洋漁業八十年史編纂委員会 (1960) 大洋漁業八十年史. 301pp., 大洋漁業, 東京.
- 高橋順一 (1992) 鯨の日本文化誌—捕鯨文化の航跡をたどる—. 淡交社, 京都. 166pp.
- 高松榮太郎 (1894) 紀州熊野浦之捕鯨. 動物学雑誌, 6: 178-183.
- 田子勝彌 (1907) クヂラ. 動物学雑誌, 19(230): 345-354.
- 田子勝彌 (1922) 日本近海に産する鯨族に就きて. 動物学雑誌, 34(401): 446-354.
- 多田穂波 (1978) 明治期山口県捕鯨史の研究. マツノ書店, 徳山. 256pp.
- 谷口総一郎 (2008) 青空エクスプレス「国の避難港整備事業の遅延に、室戸市民が早期完工を陳情」 (個人ブログ)
- 竹堂王人 (1901) 和洋日用料理. 小川尚栄堂, 東京. 200pp. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 朝鮮漁業協会 (1900) 韓海捕鯨業之一斑. 大日本水産会報, 212: 4-19.
- 通信省管船局編 (1908, 1916) 日本船名録 明治41-43年, 大正5年, 昭和2,

- 鉄道省編 (1921a) 日本鉄道史 上篇. 鉄道省, 東京. 973pp. (復刻版: 清文堂出版 1972)
- 鉄道省編 (1921b) 日本鉄道史 下篇. 鉄道省, 東京. 785+索引181pp. (復刻版: 清文堂出版 1972)
- 鉄道省編 (1921c) 日本鉄道史 下篇. 785pp+跋文4+年表53+索引181., 鉄道省, 東京. (復刻版: 清文堂出版, 大阪 1972)
- 東生鉄五郎編 (1894) 日用素人料理. 169pp., 袋屋書店, 東京. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 東洋漁業 (1907) 鯨肉料理法. 4pp., 東洋漁業, 下関. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 東洋捕鯨 (1932) 鯨に関する展覧会出品目録. 東洋捕鯨, 大阪. 26pp.
- 徳山宣也編 (1992) 大洋漁業・捕鯨事業の歴史. 私家版, 福岡. 821pp+3.
- 徳山宣也編 (1995) 大洋漁業・長崎支社の歴史. 私家版, 福岡. 1037pp+4.
- 富田獣人 (1937) 鯨肉仕様口伝. 食通, 5(10): 22-23
- 豊シズエ (1988) わきやあ島久根津. 私家版, 瀬戸内. 75pp+2.
- 鳥巢京一 (1999) 西海捕鯨の史的研究. 九州大学出版会, 福岡. 414pp+xxviii.
- 中川愛水 (1916) 四季の料理. いろは書房, 東京. 182pp. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 中川愛水 (1920) 料理手引. 241pp., 求光閣書店, 東京. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 中里紀元 (2005) 肥前国唐津領産物図考の研究. 225pp., 松浦文化連盟, 唐津.
- 永澤六郎 (1913a) 日本産鯨類二種附赤坊鯨. 動物学雑誌, 25 (293): 178-182.
- 永澤六郎 (1913b) 本邦産逆戟とGrampusと. 動物学雑誌, 25 (293): 184-188.
- 永澤六郎 (1915) 日本近海産鯨類十四種の学名. 動物学雑誌, 27 (321): 404-410.
- 永澤六郎 (1916a) 日本産海豚類十一種の学名, 動物学雑誌, 28 (327): 35-39.
- 永澤六郎 (1916b) 日本近海産鯨類の学名 (再び), 動物学雑誌, 28 (327): 45-47.
- 中園成生・安永浩 (2009) 鯨取り絵物語. 弦書房, 福岡. 294pp.
- 中村羊一郎 (2017) イルカと日本人: 追い込み漁の歴史と民俗. 吉川弘文館, 東京. 264pp.
- 中谷正雄 (1932) 鯨に関する博覧会に就て. 大日本水産会報, 601: 30-35.
- 名取武光 (1940) 北海道噴火湾アイヌの捕鯨. 北方文化研究報告, 3: 137-161.
- 浪速料理会 (1914) 家庭料理法. 300pp., 精華堂書店, 大阪・東京. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 西野たつ・一圓とよ (1893) 割烹授業日誌第二輯. 私家版, 高知. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 西村三郎 (1999) 文明のなかの博物学 西欧と日本 (上・下). 紀伊國屋書店, 東京. 732pp.
- 西脇昌治 (1990) 南極行の記 1947/48 捕鯨船団での日々. 北泉社, 東京. 132pp.
- 二野瓶徳夫 (1981) 明治漁業開拓史: 平凡社選書70. 平凡社, 東京. 342pp.
- 日本海洋漁業協議会 (1951) 一九四〇年の漁業実績—特別委員会報告書一. 日本海洋漁業協議会, 東京. 234pp.
- 日本水産 (1981) 日本水産の70年. 日本水産, 東京. 464pp.
- 日本捕鯨業水産組合 (1940) 捕鯨資料 第八輯ノ (一) 日本沿岸捕鯨業.

- 日本捕鯨業水産組合（1943）捕鯨便覧第一編.
- 日本郵船株式会社（1916）日本郵船株式会社渡航案内. 日本郵船株式会社, 東京. 112pp.
- 農商務省水産試験所（1893）水産調査成績摘要報告 明治26年度上半期. 農商務省水産調査所, 東京. (鯨船会 1999「捕鯨船」30号を用いた)
- 農商務省水産調査所編（1895）抹香鯨調査 水産調査書事業報告明治27年度. 大日本水産会, 東京. 269pp. (鯨船会 1999「捕鯨船」30号を用いた)
- 朴九乗（1995）増補版韓半島沿海捕鯨史. 民族文化, 釜山. 593pp.
- バークガフニ, ブライアン（2010）国際貿易港長崎の多国籍社会：明治33年に撮影された一枚の写真を参考に 特集国際ワークショップ「日本在住外国人コミュニティの歴史の発見：研究・アーカイブス・特別コレクション」. 海港都市研究, 5: 119-132.
- 橋浦泰雄（1969）捕鯨絵巻（全6巻）解題.
- 土師清二ら8名（1929）近頃大阪評判記_第18回食道楽漫談会_日本橋「香蘭亭」にて. 食道楽, 3(12).
- 服部徹編（1887）日本捕鯨彙考前編. 大日本水産会, 東京. 109pp. (復刻版：鳥海書房 2000)
- 服部徹編（1888）日本捕鯨彙考後編. 大日本水産会, 東京. 210pp. (復刻版：鳥海書房 2000)
- 馬場駒雄（1942）捕鯨：海洋科学叢書4. 天然社, 東京. 326pp.
- 原剛（1990）ザ・クジラ 海に映った日本人 第4版. 文真堂, 東京, 375pp. (初版 1983)
- 伴源平編（1887）日本西洋支那三風料理滋味之饗奏. 72pp., 赤志忠雅堂出版, 大阪. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 福原康雄（1956）日本食肉史. 食肉文化社, 東京. 287pp.
- 福博綜合印刷（1995）FUKUOKA STYLE Vol.12特集「西海の捕鯨」. 152pp., 福博綜合印刷, 福岡.
- 福本和夫（1960）日本捕鯨史話. 法政大学出版局, 東京. 281pp. (改装版 法政大学出版局 1993)
- フリーマン, M. 編（1989）くじらの文化人類学 日本の小型沿岸捕鯨. 海鳴社, 東京. 216pp.
- 不破茂・花田芳裕（2011）「甑島の捕鯨」『鹿児島大学水産学部紀要』60: 13-23.
- ベルクマン, ステン（1961）千島紀行（加納一郎訳）. 時事通信社, 東京. 179pp.
- 細田徹（2000）本書の復刻に寄せて. 日本捕鯨彙考（復刻版）. 鳥海書房, 東京. 210pp.
- 北海道庁（1914）産業調査報告書第16巻 水産之部其二. 北海道庁, 札幌. 538pp.
- 本社（1937）鯨肉試食座談会_4月17日夜_於両国豊田屋. 食通, 5(11): 64-67
- 前田敬二郎・寺岡義雄（1952）捕鯨 附日本の遠洋漁業. いさな書房, 東京. 450pp.
- 松浦義雄（1944）鯨. 創元社, 東京. 108pp.
- 松浦義雄（1935a）日本近海に於ける長須鯨の分布及び習性に就て. 動物学雑誌, 47(560): 355-371.

- 松浦義雄 (1935b) 日本近海に於ける白長須鯨の分布及び習性に就て. 動物学雑誌, 47(565): 742-759.
- 松崎正広 (1910) 諾威式捕鯨業の非難を弁ず. 大日本水産会報, 337: 4-7.
- 松本由蔵 (1906) 捕獲鯨日誌 自明治39年. 私家版. (鯨船会 1991「捕鯨船」11号に全文掲載)
- の場銈之助編 (1889) 和洋料理 家庭全書第六篇. 尚文堂, 大阪. 210pp. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 三宅巨呂平 (1939) 国策の線に沿う鯨料理. 食通, 7(1): 92-95
- 三田村熊之介 (1895) 新撰料理独案内. 201pp., 鹿田書店, 大阪. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 森田勝昭 (1999) 韓半島沿海捕鯨と資料の問題 (1). 甲南女子大学研究紀要, 36: 53-71.
- 森田勝昭 (2000) 韓半島沿海捕鯨と資料の問題 (2). 甲南女子大学研究紀要, 37: 1-15.
- 三田村熊之介 (1895) 新撰料理独案内. 鹿田書店, 大阪. 201pp. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 美保関町誌編さん委員会編 (1986) 美保関町誌.
- 三代暢実 2011 美保関港の「みなと文化」. みなと総合研究財団, 東京. 30pp.
- 無署名 (1892) 鯨肉. 警察監獄学会雑誌, 3(15): 32.
- 無署名 (1905) 囚人菜代及献立表. 大日本監獄協会, 8(1): 34.
- 無署名 (1907) ニコライ丸. 大日本水産会報, 299. (鯨船会 1999「捕鯨船28号」を用いた)
- 無署名 (1910) 陸軍料理法. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 無署名 (1912) 日本捕鯨業水産組合報. 大日本水産会報, 359: 79, 361: 72, 363: 75..
- 無署名 (1929) 水産特設館出品目録. 朝鮮之水産, 86: 85-90.
- 無署名 (1930) 鯨料理の会 (第1回上方食道楽会). 上方食道楽, 1: 29-32. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 村上隆吉 (1919) 新食料としての鯨肉と其料理法. 婦人会, 3(10). (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 村田福次郎校閲 (1929) 最近検定市町村名鑑 昭和4年版. 福神出版部, 東京. 604pp.
- 室戸町誌編纂委員会 (1962) 室戸町誌. 室戸町史跡保存会, 室戸. 564pp.
- 谷津直秀 (1911) 日本よりの新イルカ. 動物学雑誌, 23 (274): 476.
- 柳原紀文・大隅清治 (2011) 土佐の鯨男: 柳原勝紀伝. 水産タイムズ, 東京. 223pp.
- 山口和雄監修 (1961) 日本水産50年史. 日本水産, 東京. 428pp.
- 山下涉登 (2004) 捕鯨 I, II: ものと人間の文化史120-1,2. 法政大学出版局, 東京. 187pp+5, 295pp+5.
- 山田致知 (1950) 南氷洋の捕鯨 岩波写真文庫3. 岩波書店, 東京. 63pp.
- 横山順述・大村忠二郎校閲 (1902) 料理の枝析. 144pp., 明昇堂, 大阪. (ケンシヨク「食」資料室蔵)
- 吉井始子編 (1980a) 翻刻江戸時代料理本集成第6巻 當流料理献立抄, 新撰献立部類集, 會席料理

帳, 料理早指南. 臨川書店, 京都. 322pp.

吉井始子編 (1980b) 翻刻江戸時代料理本集成第7巻 料理伊呂波庖丁, 卓子式, 素人庖丁, 名飯部類, 都鄙安逸傳. 臨川書店, 京都. 322pp.

吉井始子編 (1980c) 翻刻江戸時代料理本集成第8巻 新撰庖丁梯, 料理簡便集, 會席料理細工庖丁, 當世料理筌, 臨時客應接, 鯨肉調味方, 料理調菜四季獻立集. 臨川書店, 京都. 316pp.

渡邊洋之 (2006) 捕鯨問題の歴史社会学—近現代日本におけるクジラと人間. 東信堂, 東京. 222pp.

Summary

In today's Japan, whaling has become a special stimulus to nationalism. While discourses on whaling are conspicuous only in terms of anti-whaling and anti-anti-whaling opinions and political discourses, there is little research and there are difficulties due to scarce research resources on modern coastal whaling in Japan during and before WWII. Studies on American whaling in the 18th and 19th centuries had used a large number of logbooks and contract documents. The whaling companies for the net whaling off northern Kyushu in the early modern period also left a lot of private documents, and Antarctic whaling operations had been informing supervisors of the Fisheries Agency from the beginning so that led to many photographs and documents regarding them. At present, the description of coastal whaling before WWII is fully based on an old book on Norwegian Whaling in Japan (Akashi 1910). It is a commemorative text on founding the Toyo Hogeï (Oriental Whaling Co.), which monopolized 80% of all the whaling vessels in Japan. Furthermore, there are scarce studies on coastal whaling after 1910. The aim of this study was to clarify the development process of Japanese coastal whaling from the 1890s to the 1940s and its cultural impact in Japan and related regions, through scrutinizing previous papers, in-house documents and reports, and photographs preserved in foreign countries.

Chapter 1 described the theme of this paper, through which an unreasonable tale on Japanese whaling history was spread extensively. First, it presented an understanding of the present situation of whaling history. The official opinion on whaling and its history by the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries were published as a cover story of its public relations magazine in July 2016. That opinion was lacking in modern whaling and came from the experience of net whaling communities and a generation that had experienced starvation after WWII. Secondly, the importance of the in-house document "The Handbook for the Landing Station Masters of Toyo Hogeï" (hereinafter referred to as "The Handbook"), which is the main source of this paper, was explained. The beginning of modern whaling in Japan is generally considered to be 1899, the founding year of Japan Pelagic Fishery Co., which was the first successful whaling company, and Oriental Whaling was the successor, which was established in 1909. The company was swallowed up by the Nihon Sangyo Co. and is now

Nippon Suisan Kaisha, Ltd. "The Handbook," a convenient name for this paper and the description covered the period from 1910 to the end of WWII or thereafter. It is a reference document for important matters in the form of unified content comprised of 27 items. It was obtained from 40 landing stations, including overseas territories, and was not accessible to researchers before 2011. It is rich in concrete descriptions of operations, such as catch records by year, the name of gunners and whaling ships, and transitions of fishing ground, etc. As such, it showed important primary sources of modern coastal whaling operations in Japan.

Chapter 2 depicted the first modern whaling in the Far East by Russia, and its transition to Japan, the process of expanding the location of landing stations, and its equipment. Several historical photographs were used for explanation, of the coastal whaling off Korea taken by a Norwegian gunner in the early 1900s, which were revealed in 2016 by the well-known field researcher Roy Chapman Andrews. The former photographed both Russian and Japanese whaling off the Korean Peninsula and the latter covered Ayukawa, Kii-Oshima in Japan and Ulsan in Korea. These resources provided evidence of Russian whaling boats, multinational crews, and flensing scenes, which were previously only known in written records. Also, due to magazine articles and documents stored in Korea, the location of the current Russian company's landing station in Ulsan in South-Eastern Korea was identified, and it was known that after the Russo-Japanese War, the landing station was transferred to the Nagasaki Whaling Co. The photos showed a whaling ship chartered by a Japanese company had been operating with the Norwegian flag on. Next, the chronological changes of landing station locations in Japan and overseas territories were described by "The Handbook," and other prominent documents. The facilities and layout of the landing stations were depicted by the plans owned by Nippon Suisan and photos taken by Toyoji Hikita that were housed in the Fisheries Science Center of the Hokkaido University Museum. Until 1910, the location of the landing stations were set up in known whaling grounds off Korea and Western Japan operated by the Russian whaling companies and net whaling companies, whereas from 1915, one year before the second merger in 1916, it began setting its landing stations in unexplored ground, such as the Yellow Sea and the Kuril Islands. The second merger of Toyo Hogeï led the streamlined operations of coastal whaling, for instance abolishing duplicate landing stations nearby and relocating its facilities to other stations. One of the unique pieces of equipment in Japan was cooling duckboards for edible whale meat. Haul-up slips were built with wood and then changed to rock and concrete, which indicates that the landing stations gradually developed from using provisional

equipment to permanent arrangements.

Chapter 3 described gunners, whale catchers, and catch records of large baleen whales. It is well known that there were some Norwegian gunners in the early days of modern Japanese whaling, but the number and served location were unknown. The total number of Norwegian gunner names were 59 in Akashi (1910), according to "The Handbook" and other sources, and the ratio of Norwegian gunners was higher in Northern Korea and the Kuril Islands than mainland stations, in Honshu and Hokkaido. That indicated that Norwegians were employed as a remote area workforce in later years. The last records of Norwegian gunners in "The Handbook" detailed one person in 1933. Norwegians were dismissed in the period of the Great Depression in the early 1930s following the great financial panic. A total 48 coastal whaling catchers were counted, 46 ships appeared from the List of Merchant Vessels of Japan, which is the official register of larger ships in Japan, and two chartered ships with foreign flags. The whale catchers were divided into two different types: The early type of 110–130 gross tonnages, which were mainly built in Norway, and the latter type of mostly 200 tonnages were used for sperm whale fishing in the Central Kuril Islands from the late 1920s. Regarding the catch number of large baleen whales, it was newly pointed out that humpback whales (*Megaptera novaeangliae*) had been scarce since the beginning of modern whaling. The catch records of "The Handbook" showed a decline in the catch number of finback whales (*Balaenoptera physalus*) in the Yellow Sea and the Pacific coast of Northern Honshu, which also indicated a shift in the main harvesting species at a landing station from finback and blue whales to Bryde's, which was an unrecognized migration to Japanese waters in those days, of sei and sperm whales.

Chapter 4 showed the history of the spread of whale dishes in modern Japan, by examining cookery books that were published in early modern and modern times before WWII, and analyzed the transition of whale dishes in the modern era. "Whale" ingredients mostly meant blubber, and even "whale meat" often referred to blubber in the early modern and modern era until the 1920s, and sometimes, the words "white meat" were used for blubber. Cookery books mainly focused on traditional dishes. Besides, there was whale meat in the market from the early modern period, but it was considered a coarse foodstuff. In contrast, from the 1920s, whale meat dishes were regarded as fine food in Western-style cuisine, such as steaks and stew dishes, and "modern Japanese dishes," which were seasoned with sugar and soy sauce like sukiyaki, were introduced. Cold storage rail transportation was provided from northern landing stations to large market areas in the latter half of the 1910s, so that whale meat

harvested in the summer season could be used for food. Before that, whale meat was used as fertilizer in the summer. In 1919, the Ministry of Agriculture and Forestry promoted whale meat consumption for the general public, and Toyo Hogeï recorded its highest catch profit. Whale meat dishes spread in Western Japan, Tokyo, and outside landing stations in the 1920s. The above suggested that whale meat dishes spread widely in Japan from the 1920s, and it was the basis of the national acceptance of whale meat dishes through school lunches in the 1950s.

Chapter 5 analyzed the history of modern cetology in Japan. In the early modern era, several illustrated scrolls and folding books on whales and whaling were made in the net whaling communities in Kishu (Wakayama Prefecture) and Northern Kyushu. In that period, whales were referred to as product names, and those names differed depending on location. In the modern era, the naming of finback and blue whales was standardized, as today, by Toyo Gyogyo, the predecessor of Toyo Hogeï, by 1908. Toyo Gyogyo operated whaling off both the Japan Sea and the Pacific Coast, and then, standardized whale names were required throughout Japan, while the use of local names in early modern whaling companies and modern whaling companies before Toyo Gyogyo was not a problem, since they had operated in limited whaling grounds. A scientific paper that broadly identified scientific names for whales in Japanese waters was published in 1915 for large whales, and another was published for dolphins in 1916. The author, Nagasawa Rokuro, wrote a letter R.C. Andrews to request his ideas and published a revised paper for large whales in 1916. Regarding the spread of standardized whale names, Toyo Hogeï played an important role that included exhibiting whale skeletons in expositions, promoting whale exhibitions and publishing booklets. Meanwhile, Omura Hideo, who was a leader in whale science in Japan, stated that the founder of whale science in Japan was R. C. Andrews for baleen whales in 1910 and Ogawa Teizo for toothed whales in the 1930s. The fact was that Andrews was the founder of whale science for toothed whales, since he correctly identified several species of both Delphinidae and Phocoenidae families, Baird beaked whales, and brought back those specimens to the American Museum of Natural History, including a huge sperm whale.

Chapter 6 addressed official recognition of whaling as cultural property. Most of the designated cultural assets of the national and local governments of whaling in Japan were related to early modern net whaling. There were few modern cultural assets, coastal whaling was limited to small-scale whaling, and there were no designated cultural assets of large-scale modern coastal whaling. That situation indicated that modern whaling had not been thought of as culture or cultural property. In

addition, as an example of seeking the origin of culture in the early modern era, so-called "Whalebone torii," which consists of a pair of mandibles of a large baleen whale, were analyzed. The whalebone torii in Taiji of Wakayama Prefecture were set in 1985, inspired by the novel by Ihara Saikaku in the 17th century, but personal blogs on the Internet have spread the understanding that the whalebone torii were actually derived from the early modern era. However, whalebone torii existed in Sakhalin, Kuril and Shikotan, and Taiwan before WWII, and were not known from the mainland. In Norway and its overseas coastal whaling sites, there were "whalebone arches" made from pairs of mandibles. The first appearance of whalebone arches in Japan was at landing stations. Then so-called whale bone torii was Japanization of whalebone arches. That was an example of creating a new traditional culture in modern times. The remains of Japanese coastal whaling exist not only in mainland Japan but also in the former overseas territories, such as South Korea, Russia and Taiwan. Those were the cultural heritage of the Japanese industry before WWII, and after the war, the pieces of equipment used by locals and whaling became an important industry in some regions. Some descendants of Norwegian gunners visited Japan and followed the footprints of their ancestors in Japan, which was an example of a large national tale turned into a family history of expedition and friendship with Japan. The history of modern coastal whaling in Japan is still alive.

As described above, developing Japanese coastal whaling in the 1890s–1940s had relations with foreign countries, such as Norway, Russia, and Korea. It made standardized names of large baleen whales and spread whale meat dishes, which were established in Japanese culture. On the other hand, the depletion of large baleen whales had an effect up until the present day. Although coastal whaling in the pre-war period was not noticeable compared with the early modern net whaling that gained public recognition as traditional culture, and the Antarctic whaling that gained the spotlight after WWII, much knowledge of large whales and whale meat dishes were gained from pre-war coastal whaling, mainly by Toyo Hogeï. Most current knowledge of whales was established during that period.

Regarding the viewpoint of bio-industry, whaling is the consumption of wild whale populations. Japan resumed commercial whaling in international circumstances, under which the protection of whales is dominant. Therefore, the continuation of whaling requires extensive explanation to the opposition and a consensus for its supporters. This paper has clarified to some extent the actual situation and the cultural impact of modern coastal whaling before WWII, when there was a shortage of

facts to explain or convince. There is a perspective on current Japanese whaling as a unique tradition, which insists upon cultural legitimacy. In contrast, this paper provided concrete facts to re-evaluate modern whaling. It leads a deeper understanding of the realities of the whaling industry and its implications for the present, for both pro- and anti-whaling opinions.

Japanese Coastal Whaling Before WWII and its Cultural Legacies:
Modern Coastal Whaling Between the 1890s and 1940s

Abstract

This paper described the realities of modern coastal whaling in Japan in the 1890s–1940s and revealed its influence on Japanese culture. The major materials of this study were in-house documents and business reports of whaling companies, and photographs that were taken in the target period and housed in overseas collections. Also analyzed were papers, articles, flyers, brochures and other small handouts. In contrast to the current explanation by the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries, which advocates continuity from the early modern net whaling and cultural purity, modern Japanese coastal whaling pre-WWII had many international relations with regard to both human resources and equipment, or gunners and whaling catchers, not only with Norway but also Newfoundland. Modern Japanese whaling was the heir of the Russian whaling company in the whaling grounds, land stations in Korea, and gunners, and then used the fishing grounds and markets of early modern net whaling in Japan. From the latter half of the 1910s, modern coastal whaling expanded in the Okhotsk Sea, the Kuril Islands, and the Yellow Sea. Those new whaling grounds provided major harvests for the industry by the end of the Second World War. In whale dishes, whale blubber was the main whale-based foodstuff used in authentic cuisine before the 1910s, while after the 1920s, whale meat dishes became popular as Western foods and in modern Japanese cookery. This experience underpinned the national acceptance of whale meat-eating through school lunches in the 1950s. In the history of modern whale science, in the middle 1900s, whaling companies fixed the common names of fins and blue whales in today's usage, ahead of the research community. Whaling companies also provided research resources for the first modern cetologist in the Pacific Northwest, R. C. Andrews, who was the founder of cetology in modern Japan. The most designated cultural properties of whaling are the remains of early modern net whaling, while the remains of modern coastal whaling also exist overseas in the Kurils, Sakhalin, Korea and Taiwan, providing evidence of the expansion of Japanese modern history. As described above, modern coastal whaling in the 1890s–1940s was developed in relation to overseas, contrary to the closed whaling tale in Japan. It installed new customs and knowledge in the Japanese culture that lives in the present day.

